

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財調査報告書

もとおか

くわばら

元岡・桑原遺跡群31

— 第49次・第51次・第57次・第62次・第65次調査の報告 —

2 0 1 8

福岡市教育委員会

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財調査報告書

もとおか

くわばら

元岡・桑原遺跡群31

— 第49次・第51次・第57次・第62次・第65次調査の報告 —



調査番号 0611 (第49次)

0741 (第51次)

1103 (第57次)

1327 (第62次)

1413 (第65次)

2018

福岡市教育委員会

序

九州大学は、福岡市箱崎地区・六本松地区・筑紫地区のキャンパスを統合移転し、福岡市西区元岡・同桑原及び、糸島市にまたがる新キャンパスを建設する事業を進めています。本市は九州大学統合移転事業の円滑な促進のための協力支援を行うとともに、多角連携型都市構造の形成に向けて、箱崎・六本松地区の移転跡地や西部地域のまちづくりなど、長期的・広域的な視点から対応を行っております。

統合移転用地内における事前発掘調査もこの一環として平成7年度から福岡市が取り組んでおり、当初は土地の先行取得を行った福岡市土地開発公社からの受託、平成14年度からはあわせて九州大学からの受託による発掘調査を実施しました。発掘調査の報告書は、遺構・遺物の整理が終了した分から順次発行しており、九州大学を委託者とする報告書は10冊が既刊となっています。その他にも福岡市土地開発公社分の調査報告書が18冊、概要報告書が2冊、関連リーフレットが3部発行されています。いずれも地域の歴史を語る上で欠かすことができない成果と考えております。

本書で報告する各調査からは、先史時代から近世にかけての元岡・桑原地区における貴重な考古資料が出土しており、この地域の歴史を物語る上で欠かすことのできない調査になりました。本書が文化財の保護・活用の一助となり、学術研究の資料としてご利用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、九州大学をはじめとする関係各機関並びに地元の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。

平成30年3月26日

福岡市教育委員会
教育長 星子 明夫

例 言

- 1 本書は九州大学統合移転事業に伴い、福岡市教育委員会が九州大学の委託を受けて発掘調査を実施した元岡・桑原遺跡群の調査報告書である。本書では第49・51次、57次、62次、65次調査の報告を行っている。このうち、第49・51次調査、第57次調査はその2として報告する。
- 2 本書に使用した実測図の作成者は各執筆担当者の他、以下の通りである。
 - 49・51次調査
遺物実測図：吉留秀敏、山口譲治、山口朱美、濱石正子、境聡子、大庭友子、井上加代子
 - 57次調査
遺構実測図：長家伸、大森真衣子、名取さつき、坂口剛毅、阿部洪太郎、佐々木蘭貞
遺物実測図：山崎賀代子
 - 65次調査
遺構実測図：大塚紀宜、名取さつき
- 3 本書に使用した図面の整図は各担当者の他、山口朱美、萩原博文、井上加代子、大庭友子、山崎賀代子が行った。
- 4 第65次調査の空中写真は（有）空中写真企画により撮影されたものである。
- 5 本書に使用した座標は日本測地系で、国土調査方第Ⅱ座標系に依拠している。
- 6 挿図番号・写真番号・遺物番号は調査報告ごとの通し番号としている。
- 7 本書の執筆は各調査担当者により以下の通り分担した。
 - I・Ⅲ・Ⅳ：大塚 紀宜
 - Ⅱ：池田 祐司
 - Ⅱ-2-(7)：(株) 古環境研究所
 - V：清金 良太
- 8 本書に関わる記録・遺物等は福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
- 9 編集は、各担当者の協力を得て、大塚が行った。

遺跡名	元岡・桑原遺跡群		遺跡略号	MOT	遺跡登録番号	2782
調査回数	調査番号	所在地	分布地図	調査期間	調査面積	
第49次	0611	西区大字桑原字金屎	129 桑原	H18. 4. 1～H19. 3. 22	2, 723㎡	
第51次	0741	西区大字桑原字金屎	129 桑原	H19. 8. 29～H20. 10. 3	6, 887. 4㎡	
第57次	1103	西区大字元岡	140 元岡	H23. 4. 12～H25. 9. 6	6, 700㎡	
第62次	1327	西区大字元岡	140 元岡	H25. 9. 1～H25. 11. 1	1, 374. 4㎡	
第65次	1413	西区大字元岡	140 元岡	H26. 6. 2～H26. 12. 26	2451. 2㎡	

目次

I	はじめに	
	1. 元岡・桑原遺跡群の調査経過	1
	2. 調査組織	3
II	第49・51次調査の報告	5
	1. 調査の経緯と概要	5
	2. 遺構と遺物	9
	(1) 旧石器時代と縄文時代の遺構と包含層	9
	1) I、II、III区	9
	2) 1～6区出土の遺構と遺物	13
	(2) 石器・石製品	17
	1) 剥片石器	17
	2) 礫石器・石製品	30
	(3) 金属製品	42
	(4) ガラス製品	44
	(5) 木製品	45
	1) 柱穴出土の柱材	45
	2) 河川032出土の木製品	47
	(6) 土器・土製品	68
	(7) 自然科学分析 株式会社古環境研究所	79
	I. 樹種同定	79
	II. 放射性炭素年代測定	84
	3. おわりに	93
III	第57次調査の報告	107
	1. 調査の概要	107
	(1) 調査の経緯	107
	(2) 各区の概要	110
	2. I区の調査	111
	(1) I・II区の調査	111
	1) 土坑	111
	2) 土壇墓	115
	3) 焼土坑	116
	4) 土器埋置遺構	117
	5) 流路	118
	6) 製錬炉・鍛冶炉	121
	7) 巨石遺構	127
	8) 掘立柱建物	127
	9) その他の遺物	129
	(2) III区の調査	129
	1) 土坑・排滓坑	129
	2) 鍛冶炉	131

3) 竪穴住居	133
4) その他の遺構・遺物	133
(3) N区の調査	133
1) 土壙墓	133
2) 炉・焼土坑・排滓坑	136
3) 土器埋納遺構	137
4) 溝状遺構	139
5) 竪穴住居・住居関連遺構	142
6) 掘立柱建物	146
7) その他の遺物	147
(4) V区の調査	148
1) 鍛冶炉	148
2) 土坑	148
3) 溝状遺構	149
4) その他の遺物	149
3. 2区の調査	150
(1) 概要	150
(2) 出土遺構	150
1) 土壙墓	150
4. 3区の調査	151
(1) 概要	151
(2) 出土遺構	152
1) 堀切状遺構	152
5. 57次調査出土石器	154
6. 57次調査出土木器	168
7. 57次調査出土製鉄・鍛冶関連遺物	178
8. 57次調査出土鉄器	192
9. 57次調査出土木簡・刻書土器・墨書土器	192
10. まとめ	194
IV 第62次調査の報告	207
1. 調査の概要	207
2. 調査の報告	207
(1) 調査区西半部の調査	207
(2) 調査区東半部の調査	207
1) 概要	207
2) 出土遺構	208
3. まとめ	211
V 第65次調査の報告	213
1. 調査の概要と層序	213
2. 遺構と遺物	213
3. 小結	226

挿図目次

I はじめに

第1図 元岡・桑原遺跡群と周辺の遺跡(1/200,000)	1
第2図 元岡・桑原遺跡群調査地点位置図(1/15,000)	2

II 第49・51次調査の報告

第1図 49・51調査地点周辺地形図(昭和50年)(1/2500)	5
第2図 調査区位置図(1/1500)	6
第3図 土層略図	7
第4図 49・51次調査区全体図(1/600)	8
第5図 I区出土石器実測図(1/1)	9
第6図 SK106・SX168・包含層169実測図(1/60・40)	10
第7図 1・2・3区出土縄文土器実測図(1/3)	11
第8図 包含層169出土石器実測図(1/1)	12
第9図 SK635、出土土器実測図(1/40・3)	14
第10図 SX636、出土石器実測図(1/40・1)	15
第11図 1～6区出土土器遺物実測図(1/3)	16
第12図 剥片石器実測図1(1/1)	18
第13図 剥片石器実測図2(1/1)	19
第14図 剥片石器実測図3(1/1・3/4)	20
第15図 剥片石器実測図4(1/1)	21
第16図 剥片石器実測図5(1/1)	22
第17図 剥片石器実測図6(1/1)	23
第18図 剥片石器実測図7(1/1)	24
第19図 剥片石器実測図8(1/1)	25
第20図 剥片石器実測図9(1/1)	26
第21図 剥片石器実測図10(1/1)	27
第22図 剥片石器実測図11(1/1)	28
第23図 剥片石器実測図12(2/3)	29
第24図 礫石器・石製品実測図1(1/3、1/2)	31
第25図 礫石器・石製品実測図2(1/3、1/2)	32
第26図 礫石器・石製品実測図3(1/3)	33
第27図 礫石器・石製品実測図4(1/3)	34
第28図 礫石器・石製品実測図5(1/3)	35
第29図 礫石器・石製品実測図6(1/3、1/4)	36
第30図 鉄器実測図(1/2、1/1)	43
第31図 ガラス製品実測図1(1/1)	44
第32図 SB420・430、出土柱材実測図(1/60、1/10)	45
第33図 2・3区河川032実測図(1/200)	46
第34図 SX413実測図(1/40)	47
第35図 SX417実測図(1/40)	48
第36図 5・2区河川032実測図(1/200)	49

第37図	SX609実測図(1/40)	49
第38図	木器・木製品実測図1(1/10)	50
第39図	木器・木製品実測図2(1/10)	51
第40図	木器・木製品実測図3(1/6・8)	52
第41図	木器・木製品実測図4(1/10)	53
第42図	木器・木製品実測図5(1/10)	54
第43図	木器・木製品実測図6(1/10)	55
第44図	木器・木製品実測図7(1/6)	57
第45図	木器・木製品実測図8(1/6)	58
第46図	木器・木製品実測図9(1/4)	59
第47図	木器・木製品実測図10(1/4)	60
第48図	木器・木製品実測図11(1/6)	61
第49図	木器・木製品実測図12(1/4)	62
第50図	木器・木製品実測図13(1/4)	63
第51図	木器・木製品実測図14(1/6)	64
第52図	木器・木製品実測図15(1/4)	65
第53図	土器実測図1(1区)(1/3)	70
第54図	土器実測図2(1区)(1/3、1/4)	71
第55図	土器実測図3(2区)(1/3)	72
第56図	土器実測図4(2区)(1/3、1/4)	73
第57図	土器実測図5(3区)(1/3、1/4)	74
第58図	土器実測図6(3・2区)(1/4)	75
第59図	土器実測図7(5区包含層)(1/3、1/4)	76
第60図	土器実測図8(5区・土製品)(1/3、1/2)	77
第61図	土器実測図9(瓦)(1/4)	78
第62図	焼土坑実測図(1/40)	93
第63図	遺構変遷図	94

Ⅲ 第57次調査の報告

第1図	調査地点位置図(1/4000)	107
第2図	57次調査1区第1面全体図(1/500)	108
第3図	57次調査1区第2面全体図(1/500)	109
第4図	I・II区第1面遺構分布図(1/400)	110
第5図	I・II区第2面遺構分布図(1/400)	111
第6図	I・II区出土土坑実測図1(1/40)	112
第7図	I・II区出土土坑実測図2(1/40)	113
第8図	I・II区出土土壙墓・焼土坑実測図1(1/20・1/40)	114
第9図	I・II区土壙墓・焼土坑出土遺物実測図(1/3)	115
第10図	SX-011実測図(1/30)	115
第11図	SX-032実測図(1/50)	116
第12図	I・II区出土製錬炉・鍛冶炉実測図1(1/40)	117
第13図	I・II区出土鍛冶炉実測図2(1/30)	118
第14図	SK-027・SK-029出土遺物実測図(1/3)	119

第15图	SX-022 出土遗物实测图1 (1/3)	120
第16图	SX-022 出土遗物实测图2 (1/3)	121
第17图	SX-022 出土遗物实测图3 (1/3)	122
第18图	SX-022 出土遗物实测图4 (1/3)	124
第19图	I·II区巨石遗构实测图 (1/60)	125
第20图	I·II区掘立柱建物实测图 (1/50)	126
第21图	III区土坑·排滓沟实测图 (1/40)	127
第22图	III区遗构配置图 (1/200)	128
第23图	III区鍛冶炉实测图1 (1/30)	129
第24图	III区鍛冶炉实测图2 (1/30)	130
第25图	III区竪穴住居实测图 (1/50)	131
第26图	III区出土土器实测图 (1/3)	132
第27图	IV区出土土壙墓实测图 (1/40)	133
第28图	IV区遗构配置图 (1/400)	134
第29图	IV区土壙墓出土遗物实测图 (1/3)	135
第30图	IV区出土土炉·烧土坑实测图 (1/40)	135
第31图	IV区出土排滓坑111·112实测图 (1/50)	136
第32图	IV区出土土器埋置遗构实测图 (1/20)	136
第33图	SD-065 实测图 (1/200)	137
第34图	SD-065 出土遗物实测图1 (1/3)	138
第35图	SD-065 出土遗物实测图2 (1/3)	139
第36图	IV区出土竪穴住居实测图1 (1/50)	140
第37图	IV区出土竪穴住居实测图2 (1/50)	141
第38图	IV区竪穴住居·埋納遺構出土遺物实测图 (1/3)	142
第39图	IV区出土掘立柱建物实测图1 (1/60)	143
第40图	IV区出土掘立柱建物实测图2 (1/60)	144
第41图	IV区出土土器实测图1 (1/3)	145
第42图	IV区出土土器实测图2 (1/3·1/6)	146
第43图	V区第1面遺構配置图 (1/200)	147
第44图	V区第2面遺構配置图 (1/200)	147
第45图	V区出土鍛冶炉实测图 (1/30)	148
第46图	V区出土土坑实测图 (1/40)	148
第47图	V区出土溝状遺構实测图 (1/50)	149
第48图	V区出土土器实测图 (1/3)	149
第49图	2区全体图 (1/100)	150
第50图	2区遺構实测图 (1/40)	151
第51图	3区全体图 (1/150)	152
第52图	3区掘切状遺構实测图 (1/100)	153
第53图	I区谷部 (001) 包含層出土石器1 (1/3)	155
第54图	I区谷部 (001) 包含層出土石器2 (1/3)	156
第55图	II区遺構出土石器 (1/3)	157
第56图	III区谷部 (001) 包含層出土石器1 (1/3)	158
第57图	III区谷部 (001) 包含層出土石器2 (1/3)	159

第58図	Ⅲ区西側谷出土石器(1/3)	160
第59図	Ⅳ区谷部包含層出土石器1(1/3)	161
第60図	Ⅳ区谷部包含層出土石器2(1/3)	162
第61図	Ⅳ区谷部包含層出土石器3(1/3)	163
第62図	Ⅳ区谷部包含層出土石器4(1/3)	164
第63図	Ⅳ区遺構出土石器(1/3)	165
第64図	57次出土石器(1/3・1/1)	166
第65図	Ⅰ・Ⅱ区遺構出土木器(1/4)	169
第66図	Ⅰ・Ⅱ区谷部(001)出土木器1(1/12)	170
第67図	Ⅰ・Ⅱ区谷部(001)出土木器2(1/4)	171
第68図	Ⅰ・Ⅱ区谷部(001)出土木器3(1/4)	172
第69図	Ⅰ・Ⅱ区谷部(001)出土木器4(1/4)	173
第70図	Ⅰ・Ⅱ区谷部(001)出土木器5(1/4・1/8)	174
第71図	Ⅳ区出土木器・木製品(1/4・1/6)	175
第72図	調査区出土羽口1(1/3)	177
第73図	調査区出土羽口2(1/3)	178
第74図	調査区出土鉄滓1(1/4)	179
第75図	調査区出土鉄滓2(1/4)	180
第76図	調査区出土鉄滓3(1/4)	181
第77図	調査区出土鉄滓4(1/4)	182
第78図	調査区出土鉄滓5(1/4)	183
第79図	調査区出土鉄滓6(1/4)	184
第80図	調査区出土鉄滓7(1/4)	185
第81図	調査区出土鉄滓8(1/4)	186
第82図	調査区出土鉄滓9(1/4)	187
第83図	調査区出土鉄滓10(1/4)	188
第84図	調査区出土鉄器(1/2)	191
第85図	調査区出土木簡(1/3)	192
第86図	調査区出土墨書土器・刻書土器(1/3)	193

Ⅳ 第62次調査の報告

第1図	62次調査区位置図(1/4000)	207
第2図	62次調査区全体図(1/400)	208
第3図	62次東半部遺構配置図(1/200)	209
第4図	62次遺構実測図1(1/40)	210
第5図	62次遺構実測図2(1/40)	211

Ⅴ 第65次調査の報告

第1図	元岡・桑原遺跡群第65次調査位置図	214
第2図	元岡・桑原遺跡群第65次全体図1(1/200)	215
第3図	元岡・桑原遺跡群第65次全体図2(1/200)	219
第4図	元岡・桑原遺跡群第65次縦段土層図(1/80)	220
第5図	元岡・桑原遺跡群第65次調査横段土層図(1/80)	221

第6図	SK003・SK010・SK011 (1/40)	222
第7図	SK004実測図および出土遺物 (1/3)	223
第8図	SX001 出土遺物 1 (1/3・1/2)	223
第9図	SX001 出土遺物 2 (1/3・1/2)	225
第10図	SX001 出土遺物 3 (1/3)	226

図版目次

Ⅱ 第49・51次調査の報告	
図版1	95
1. SK106 (南東から)	
2. SK168 土器出土状況 (北から)	
3. SK168 (北から)	
4. 包含層169 遺物出土状況 (南西から)	
5. SX11823 土器出土状況	
6. SX636 (北西から)	
7. SK635 (南東から)	
8. SK635 遺物出土状況	
図版2 出土遺物 (土器)	96
図版3 出土遺物 (土器・石器)	97
図版4 出土遺物 (石器)	98
図版5 出土遺物 (石器・石製品)	99
図版6 出土遺物 (石製品・鉄器)	100
図版7	101
1. SX413 (南東から)	
2. SX413 杭 (南から)	
3. SX417 (南西から)	
図版8	102
図版9	103
図版10	104
図版11	105
図版12	106
Ⅲ 第57次調査の報告	
図版1	195
(1) SR-002 (西から)	
(2) SK-003 炉壁出土状況 (西から)	
(3) SK-004 (東から)	
(4) SK-006・007 (南から)	
(5) SK-012 (北東から)	
(6) SK-013 (南から)	
(7) SK-014 (北から)	
(8) SK-015～018 (北から)	
図版2	196
(1) SK-020 (北から)	
(2) SX-022・023 (東から)	
(3) SK-026 (北から)	
(4) SK-031 (南から)	
(5) SK-033 (北東から)	

(6) I区巨石遺構(北から)	
(7) SK-034(北から)	
(8) SK-047(東から)	
図版3	197
(1) SK-048(東から)	
(2) SK-049(南から)	
(3) SK-051 検出状況(南東から)	
(4) SK-051 完掘状況(西から)	
(5) SK-052(北から)	
(6) SK-054(南から)	
(7) III区谷部出土木株(東から)	
(8) SK-061(南から)	
図版4	198
(1) SR-062(東から)	
(2) SD-065(南から)	
(3) SC-066 炭化物出土状況(北から)	
(4) SK-068(南から)	
(5) SK-082(南から)	
(6) SK-095 下部(東から)	
(7) SX-095 土器出土状況(南から)	
(8) SK-111・112(南西から)	
図版5	199
(1) IV区全景(西から)	
(2) SB-1103(南から)	
(3) SB-1106(西から)	
(4) SB-1105(東から)	
(5) SX-1201・1202(北から)	
図版6	200
(1) SX-1201(南から)	
(2) V区2面全景(南から)	
(3) 2区全景(北から)	
(4) SK-01(東から)	
(5) SK-02(東から)	
(6) 3区全景(北から)	
(7) 堀切状遺構(北から)	
(8) 堀切状遺構底部(西から)	
図版7 出土遺物(土器)	201
図版8 出土遺物(土器)	202
図版9 出土遺物(刻書土器・墨書土器)	203
図版10 出土遺物(石器)	204
図版11 出土遺物(木器)	205
図版12 出土遺物(木器)	206

IV 第64次調査の報告	212
(1) 62次調査区現況(西から)	(5) SK-04(南から)
(2) 調査区東半部(西から)	(6) SK-05・06(南から)
(3) 調査区東半部(東から)	(7) SK-07(南から)
(4) SK-02(北から)	(8) SK-11(南から)
V 第65次調査の報告	
図版1	227
1. 元岡・桑原遺跡群第65次全体写真1(上空から)	
2. 元岡・桑原遺跡群第65次全体写真2(上空から)	
図版2	228
3. 元岡・桑原遺跡群第65次全体写真3(上空から)	
4. 元岡・桑原遺跡群第65次全体写真4(上空から)	
図版3	229
5. 4・5区全景(南東から)	
6. 1区縦断面下層(南から)	
7. 2区横断面下層(南東から)	
図版4	230
8. 2区横断面上層(南東から)	
9. 3区横断面(南東から)	
10. SK010完掘状況	
図版5	231
11. SK011完掘状況	
12. 小型丸底壺(13)出土状況	
13. 小型丸底壺(14)出土状況	
図版6	232
出土遺物	

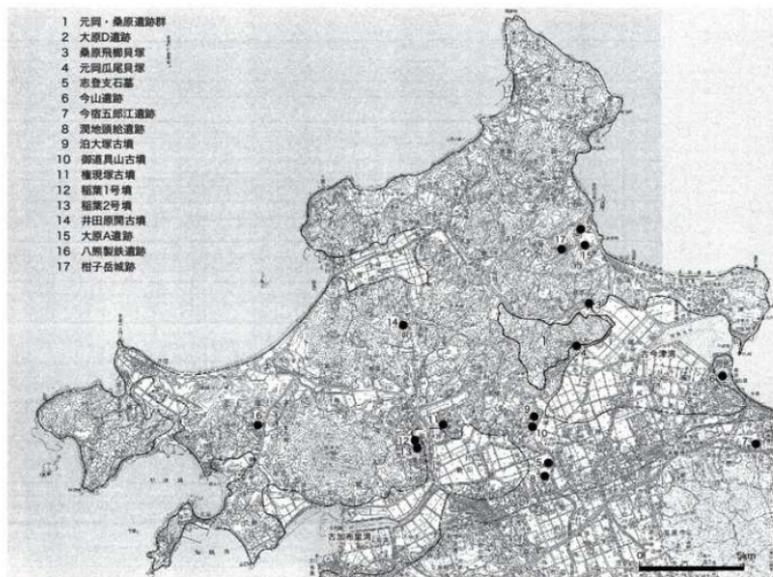
I はじめに

1. 元岡・桑原遺跡群の調査経過

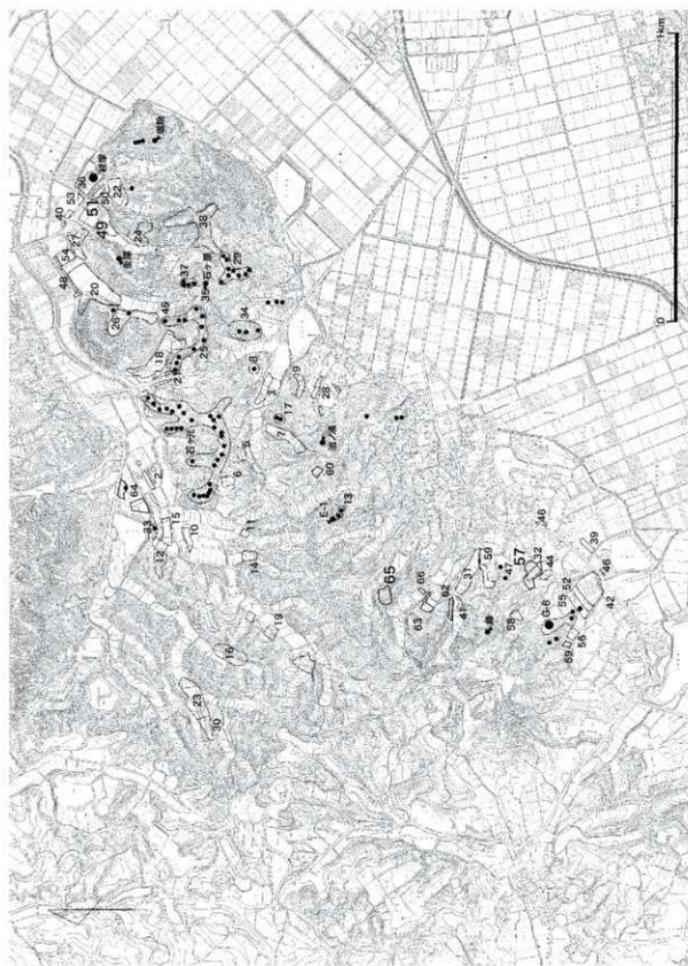
九州大学の福岡市西区元岡・桑原地区への統合移転が決定したことを受け、福岡市教育委員会は平成7(1995)年に対象地内の踏査を行い、平成8(1996)年にはこの事業を担当する大規模事業等担当課を設置した。造成予定地の詳細な試掘調査は平成8年3月から同年9月までに実施し、あわせて桑原金屎古墳や元岡石ヶ原古墳などの確認調査を実施した。

移転用地は福岡市土地開発公社が全城を先行取得した後に九州大学が再取得することとなったため、造成事に伴う発掘調査は福岡市教育委員会と福岡市土地開発公社が受託契約を結び、平成8年から平成20(2008)年まで実施された。しかし、造成工事計画が変更となり、未造成のまま九州大学が再取得した地区についても造成工事に先立つ埋蔵文化財の発掘調査が必要となった。その調査範囲は大規模な面積に及ぶことから、福岡市教育委員会が発掘調査を行うことで九州大学と協定書を締結した。これに基づき、平成15(2003)年から平成27(2015)年度まで九州大学との受託契約による発掘調査を実施した。

移転用地内の埋蔵文化財包蔵地は、古墳などを除いて「元岡・桑原遺跡群」と総称しており、同遺跡群内では平成27(2015)年度までに66次の調査が実施されている。



第1図 元岡・桑原遺跡群と周辺の遺跡 (1/200,000)



第2図 元岡・桑原遺跡群調査地点位置図 (1/15,000)

2. 調査組織

(第49次調査・第51次調査：平成18年度～平成19年度)

調査主体：福岡市教育委員会

教育長 植木 とみ子 (18年度) 山田裕嗣 (19年度)

文化財部長 山崎 純男 (18年度) 矢野三津夫 (19年度)

調査担当：埋蔵文化財第2課

課長 力武 卓治

調査担当 池田 祐司

庶務担当：文化財管理課

課長 榎本 芳治

管理係長 栗須ひろ子

管理係 鳥越由紀子

(第57次調査：平成23年度～平成25年度)

調査主体：福岡市教育委員会

教育長 山田 裕嗣 (23年度) 酒井 龍彦 (24・25年度)

文化財部長 藤尾 浩 (23・24年度) 西島 裕二 (25年度)

調査担当：福岡市教育委員会埋蔵文化財第2課 (～23年度)

福岡市経済観光文化局埋蔵文化財調査課 (24年度～)

課長 田中 壽夫 (23年度) 宮井 善朗 (24・25年度)

調査第2係長 菅波 正人 (～24年度) 榎本 義嗣 (25年度)

調査担当 長家 伸 (23年度 主任文化財主事)

大塚 紀宜 (24・25年度 主任文化財主事)

佐々木 蘭真 (25年度 嘱託)

庶務担当：福岡市教育委員会埋蔵文化財第1課 (～23年度)

福岡市経済観光文化局埋蔵文化財審査課 (24年度～)

課長 濱石 哲也 (23年度) 米倉 秀紀 (24・25年度)

管理係長 和田 安之

管理係 井上 幸江 (23年度) 川村 啓子 (24～25年度)

(第65次調査：平成26年度)

調査主体：福岡市教育委員会

教育長 酒井 龍彦

文化財部長 西島 裕二

調査担当：経済観光文化局埋蔵文化財調査課

課長 常松 幹雄

調査第2係長 榎本 義嗣

調査担当 大森 真衣子

庶務担当：埋蔵文化財審査課

課長 米倉 秀紀
管理係長 内山広司
管理係 川村 啓子

(報告書作成：平成29年度)

調査主体：福岡市経済観光文化局

文化財部長 高山 嘉樹

報告書作成担当：埋蔵文化財課

課長 常松 幹雄

報告書担当 池田 祐司・大塚 紀宜・清金 良太

事前審査担当 吉田 大輔

庶務担当：文化財保護課

課長 宮崎 誠二

管理調整係長 藤 克己

管理調整係 松原 加奈枝

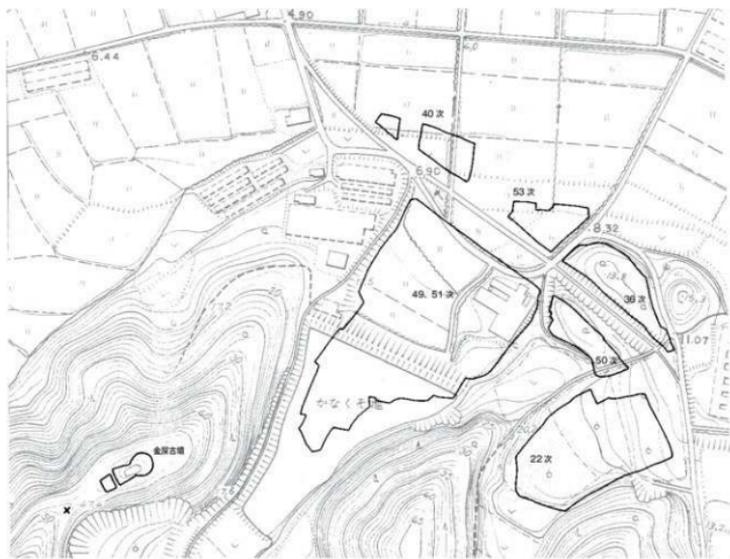
Ⅱ 第49・51次調査の報告

1. 調査の経緯と概要

第49・51次調査については、平成24年発行の「元岡・桑原遺跡群20」(福岡市第1173集)で報告を行っているが、旧石器・縄文時代、石器、木器などについては未報告であった。今回は未報告分を追加、補足するものである。報告にあたって、調査の経緯等と概要について簡単に振り返る。

調査の経緯 調査地点は元岡・桑原遺跡群の東端にあり、北東に開く谷の開口付近にあたる。谷とそれを囲む斜面の範囲が字金屎で、文政12(1829)に築かれたとされるかなくそ池がある。調査区はこの金屎池の下流と池の堤および池の一部におよぶ9610.4㎡である。平成18年4月1日に開始し、中断を挟んで20年10月3日に終了した。

調査着手時には、かなくそ池の堤より下の北西側に工事中調整池が築かれており、49次調査は南東側斜面を対象に実施した。調査が進むにつれて、堤の下および調整池内にも遺構が広がることが判明し、51次調査として調査を実施した。ふたつの調査地点は連続しており一連のものである。調査区内では谷の中央を河川032が蛇行し、その両側の緩斜面に遺構が広がる。ただし、工事中の調整池、耕地造成、建造物等による大きな造成、攪乱が遺構面に達しており、失われた遺構が多いことは明らかである。



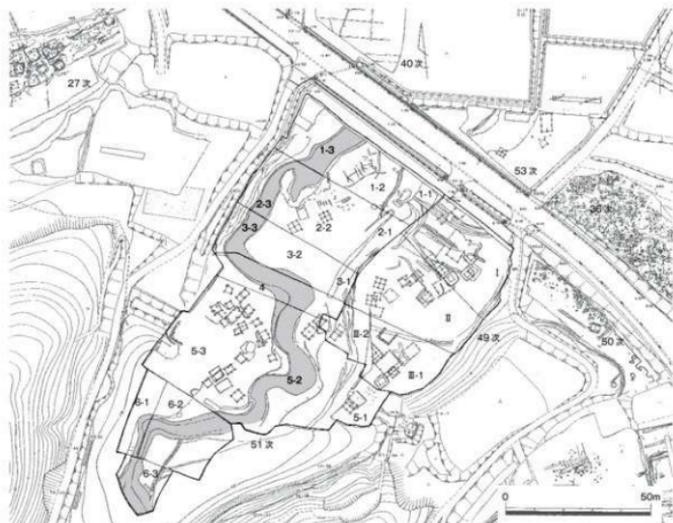
第1図 49・51調査地点周辺地形図(昭和50年)(1/2500)

調査区 調査は廃土繰り等の都合で49次を3区、51次を6区に分けて実施した（第2図）。49次地点の区名をⅠからⅢ区とローマ数字で表し、51次をⅠからⅥ区と区別した。51次では各区を3区に分けて-1のように示している。河川032とその上層にあたる23、3-3区はさらに3区に区分けしている（第33図）。また、調査区全体について10mメッシュのグリッドを設け（第4図）適宜もちいた。

調査区内は、両側の丘陵からの急斜面が、緩やかになった中央谷部への緩斜面に主な遺構が分布する。谷底には河川032が走り、谷の中央から北に蛇行して北側丘陵裾を沿い、調査区東端のやや北よりを抜けていく。調査区内は削平が大きく全く遺構が見られない範囲もある。削平は調整池があった2、3区、かなくそ池底の5-3区丘陵側で特に大きい。

層位 今回の報告に関連する土層を図3に略図で示した。南東側斜面のⅠ・Ⅱ区では、Ⅰ層：淡茶色粘質土は8世紀までの遺物を含み、その上面で鍛冶炉、谷へ向かう溝などを確認した。Ⅱ層黒褐色粘質土はほとんど遺物を含まず、この上面で古墳時代のほとんどの遺構を確認した。Ⅲ層は灰～黄灰褐色土でⅠ、Ⅱ層が広がらない範囲など、この面で遺構を確認した範囲も多い。またⅢ層上部で黒曜石が出土している。Ⅲ区ではⅠ層灰茶褐色粘質土の上面でピットや9世紀後半の土坑を確認し、Ⅲ層茶褐色粘質土上面で古墳時代の遺構を確認した。Ⅰ・Ⅱ区とⅢ区層位の関係は図のように考えられる。

北西斜面では調整池の削平を免れた部分で層位を確認し、遺物から時期を想定した。Ⅰ層は淡黄茶色土の水平堆積で近世以降。Ⅱ層はやや暗い茶褐色土を主とし8・9世紀から10世紀。Ⅲ層はやや淡い茶褐色土を主とし7世紀後半から8世紀。Ⅳ層は青灰色・暗褐色粘質土、粗砂からなる河川堆積で河



第2図 調査区位置図 (1/1500)

川032の埋土である。6世紀後半を主とし有機物を多く含む。V層は砂礫層で弥生土器が見られる。詳細は前報告書132頁に記載している。

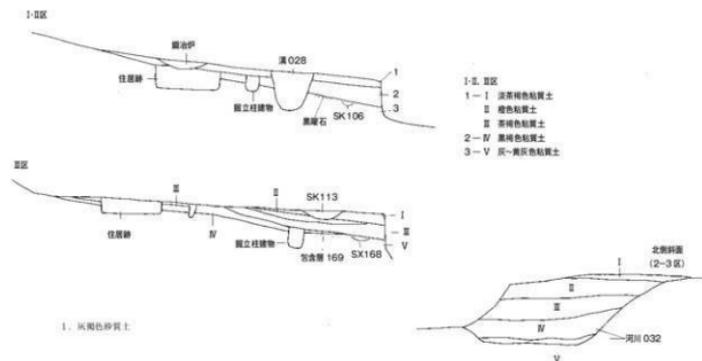
調査の概要 時代別の概要に触れる。旧石器時代、縄文時代は調査区全域から石器が出土するが、ほとんどが後世の遺構埋土などからの出土である。そのなかで、狭い範囲ではあるが旧石器、縄文時代の遺物が出土する地点、土坑を確認した。土坑の1つからは刻目突帯文土器が出土している。以上について今回報告する。

弥生時代は南東側斜面で後期前半と中頃の遺構2基を確認した。遺構は少ないが、河川032では特に下層のIV層、V層から後期前半～中頃を主体とする土器、三又鉄などの木製品が出土している。遺物量から失われた遺構は多いと思われる。

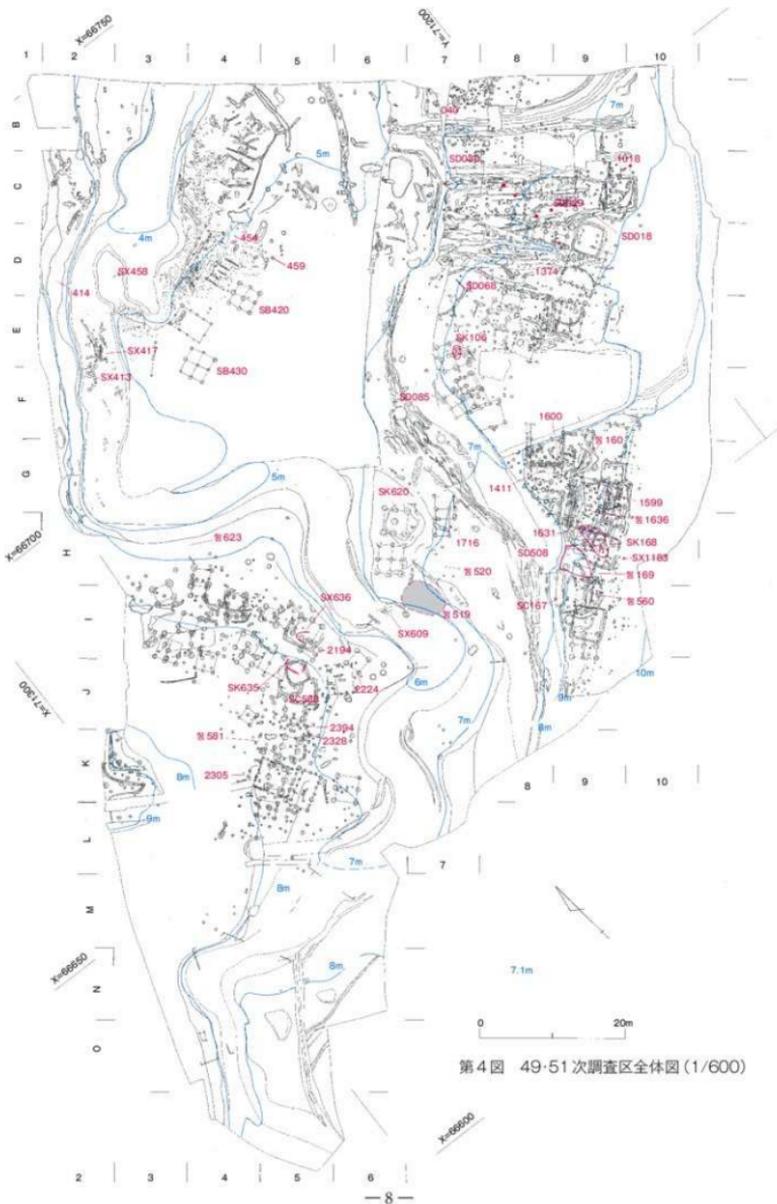
古墳時代は、前期に北西側の丘陵上に金屎古墳が築かれているが、調査区では河川の遺物に若干の土師器などが見られる程度である。6世紀後半になると急に遺構遺物が見られるようになり、6世紀後半から7世紀初めの堅穴住居14棟、7世紀代を中心とした掘立柱建物72棟など、この時期にもっとも多くの遺構が見られる。河川032もこの時期の遺物が中心で、土器、建築材・農具などの木製品などが出土している。

8世紀代になると、遺構は少なくなり、少数の掘立柱建物と、溝を中心とした遺構が見られる。河川も埋まり、南東斜面よりに谷に沿った溝が築かれ、谷の様子は変化したようである。調査地点の上流の枝谷では22次調査で8世紀後半の製鉄遺構が確認されており、この影響と思われる鉄滓が多く見られる。

古墳時代の遺構を覆う包含層上では9世紀後半から12世紀と考えられる鍛冶が、焼土坑、土坑、柱列を少量検出し、I～Ⅲ区北端を谷に沿って流れる溝が見られる。その後は13世紀以降の溝がI区で見られるが、建物等の遺構はみられず、遺物もわずかである。



第3図 土層略図



第4図 49-51次調査区全体図 (1/600)

2. 遺構と遺物

(1) 旧石器時代と縄文時代の遺構と包含層

49. 51次調査地点では剥片石器を中心とした縄文時代以前の遺物が全域で出土しているが、そのほとんどが古墳時代以降の遺構や包含層からのものである。その中でも一部、縄文時代のもと考えられる遺構、包含層を確認し、少量ながら石器、土器が出土した。

谷の南側斜面にあたるⅠ～Ⅲ、5-1区では、斜面の谷寄り（北側）で削平が比較的小さく、古墳時代以降の遺構面に黒褐色土（Ⅰ・Ⅱ区の2層、Ⅲ区のⅣ層）が残る。そうした部分を中心に、黒褐色土とその下層の黄灰褐色土（3・Ⅴ層）の上部を掘削し、遺構状のくぼみや遺物集中地点を確認した。黄灰褐色土は上部がやや暗く10cm前後の掘削でやや明るく締りのある土壌または礫混じりの層となり、遺物を含む堆積は厚くない。また谷の北側斜面の5-3区でも、河川に近い位置で遺物の集中と遺構を確認した。この項ではこれらの遺構等と包含層出土遺物と、各地点で出土した縄文土器について報告する。

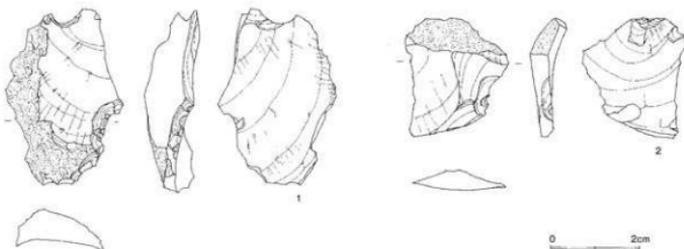
1) Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ区

Ⅰ区（第5図）CD8・9グリッドで遺構検出面灰褐色土（3層）の掘削を行い、6点の黒曜石が出土した。その分布を第4図にドットで示したが散漫で集中は見られない。2点を図示した。他の4点は風化が強く旧石器時代の遺物の可能性がある。自然面があるものは、いずれもあばた状を呈し、西北九州産と考えられる。1は側面の一部に2次調整を施すスクレーパー、2は剥片で先端は古い時期に折れる。

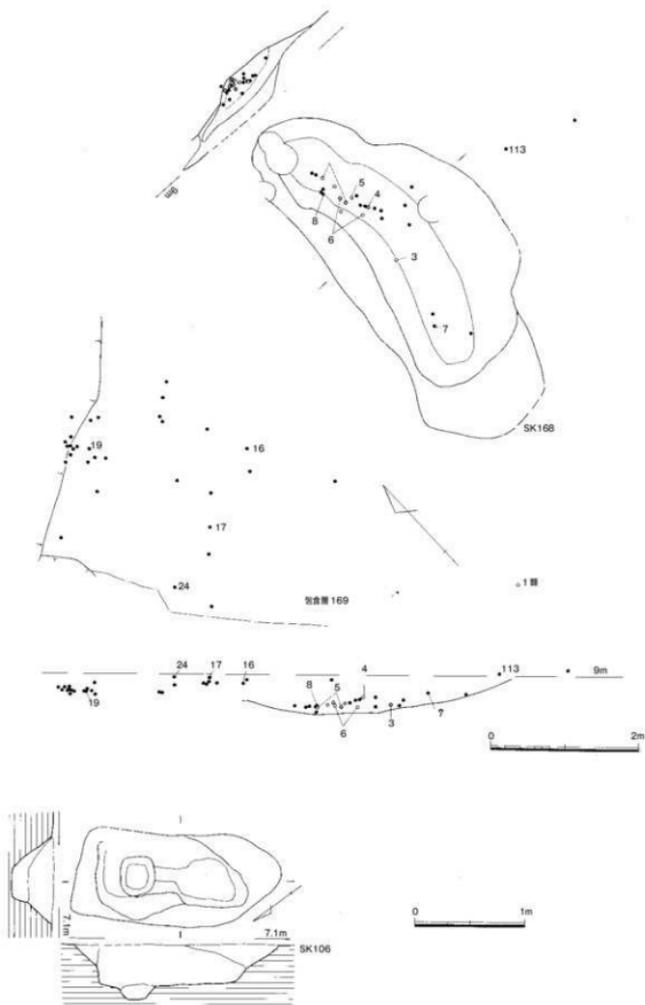
Ⅱ区 EF7・8グリッドで遺構面以下の淡茶色土の掘削を行い、遺物の出土はなかったがくぼみ状の遺構SK106を確認した。

SK106（第6図）E7 Ⅱ区の北西端で古墳時代の遺構と同じ面を確認したくぼみ状の遺構である。遺構面はやや砂質の灰褐色土であるが、やや粘質でにごった黄褐色土の不整長方形プランを確認し、掘削を行った。長さ180cm、幅100cm、深さ40cmほどの規模で、壁の立ち上がりは急で南西側は直に近い。遺物は出土していない。自然の営為による可能性もある。

Ⅲ・5-1区 北側は近年の段造成を受けているが、南側は古墳時代以降の包含層も残り、比較的削平が少なく、縄文土器、剥片石器の集中地点、くぼみ状の遺構を確認した。



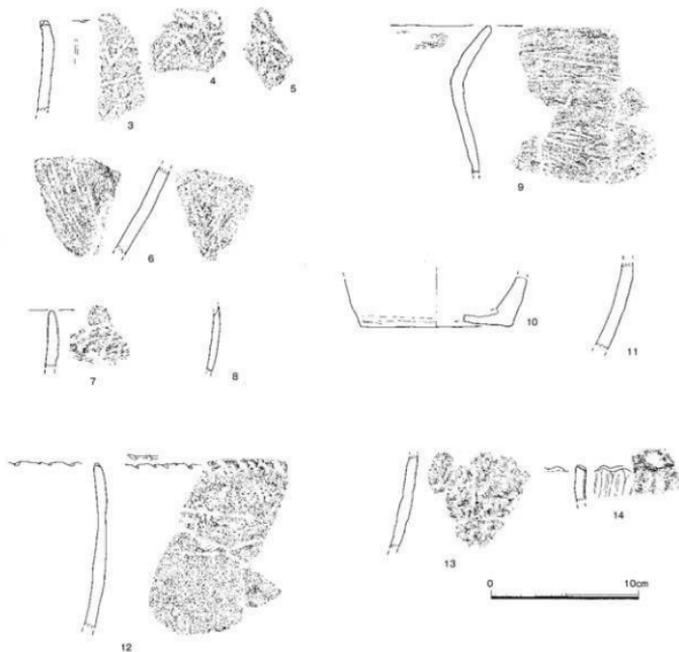
第5図 Ⅰ区出土石器実測図(1/1)



第6図 SK106・SX168・包含層169実測図(1/60・40)

SK168 (第6・7図) H9 Ⅲ区南側で古墳時代の遺構がある黒色粘質土Ⅳ層を除去した黄灰褐色土上で土器片が出土した。遺物を含む土壌が周囲より暗く粘質があることを確認し、その範囲を掘削して浅いくぼみ状の遺構の覆土から土器片が出土した。第6図に長さ4.5m、幅2.3mほどの溝状の平面形を示したが明確なものではない。包含層の一部の可能性もあるが、遺物の出土状況にまともにもあるため分けて示した(第6図)。

出土した遺物は土器小片で、番号を付して取り上げた数は28点である。土器は4種がある。まず、3～6は砂粒を非常に多く含む胎土で茶褐色を呈し同一個体と考えられる。他にも数点の破片がある。第6図では1類として出土位置を示した。3は口縁部が若干内傾気味で口唇部に斜めに刻目を施す。器面は荒れており不明瞭だが、外面口縁下に浅い沈線による連続した山形文がみられる。器面調整は条痕であろう。6は内外面に斜方向の浅い条痕がみられる。2mほど北東の黒褐色土の包含層1636(第4図)から出土の12は、器形、刻目が同様で胎土も近く同一個体の可能性がある。器面はさらに荒れて不明瞭だが、山形の沈線状のくぼみがわずかにみられる。さらに下には横走する沈線があら

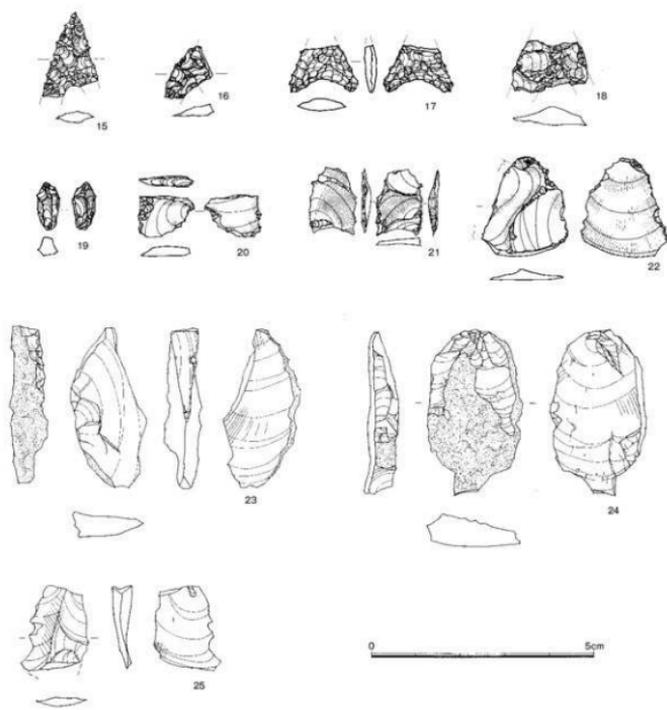


第7図 1・2・3区出土縄文土器実測図(1/3)

るが文様ははっきりしない。7は胎土がやや細かく赤茶色を呈す土器で、器面が荒れており不明確だが楕円押型文状の凹凸がわずかに見られる。8は器壁が薄く、黒褐色を呈し器面は荒れている。同一個体の小片が十数点ほどある。この他に器面が赤みのある淡茶色で薄手の小片2点がある。石器の出土は見られず凝灰岩の小剥片が1点出土している。

包含層169(第6・7・8図)H9 遺構面下の黄灰褐色土を掘削し、剥片石器と土器が比較的まとまって出土し、42点の出土位置を記録し取り上げた。土器は遺存状況が軟弱で土のまま取り上げ、乾燥、補強後に土を外した。この作業中に出土位置を失いドットとの照合ができない。

出土遺物のうち9から11に土器、15から25に石器を図示した。9は口縁部が外反し、外面に横方向の条痕、内面は器面が荒れるが一部に板目状の調整が残る。胎土に砂粒を多く含み淡灰茶色を呈す。



第8図 包含層169出土石器実測図(1/1)

10は平底の底部で1/4弱からの復元径11cmで、接合しない同破片から部体を復元した。器面は荒れており調整不明で暗灰褐色を呈し、胎土は細砂粒を多く含む。9と同一個体の可能性がある。後期の条痕文土器と考えられる。11は外面が淡黄褐色から黄白色を呈し荒れ、内面は灰褐色でナデ調整により平滑である。図示した石器はすべて黒曜石製で15～18のような石鎌や、旧石器時代の可能性があるものがある。石鎌のうち15、16は深い挟りが入り早期のものか、19は楔形石器、20は剥片で一辺に2次調整が見られる。22から25は剥片で器面の風化が進み旧石器時代の可能性がある。23は先端にブランディングを施すナイフ形石器、22、24、25には使用痕が見られる。23、24はあばた状の自然面が残る。その他に50点の剥片が出土し、そのうち2点が安山岩、他は黒曜石である。黒曜石の内8点ほどは器面の風化が強い。また、4cm大の黒曜石素材礫が1点ある。

SX1183 (H9) 大型の土器片を土のまま取り上げたが非常に脆く分離できていない。器面は茶色を呈し、器壁は厚いところで4mmと薄く痕跡が残った状態である。位置は第4図、出土状況は図版1-5に示した。

その他(第7図) 3区出土で遺構以外の縄文土器をここで触れておきたい。13は押型文土器で内外面ともに器面が荒れるが、外面に6×8mmほどの楕円押型文が辛うじて見られる。器壁に砂粒を多く含む明るい茶色を呈す。天地不明。14はⅢ区のピット出土で器壁に滑石を含み紫茶色を呈す。口唇部に凹点を施し、外面に浅い凹線状のくぼみが見られる。後期阿高式系。

2) 1～6区出土の遺構と遺物

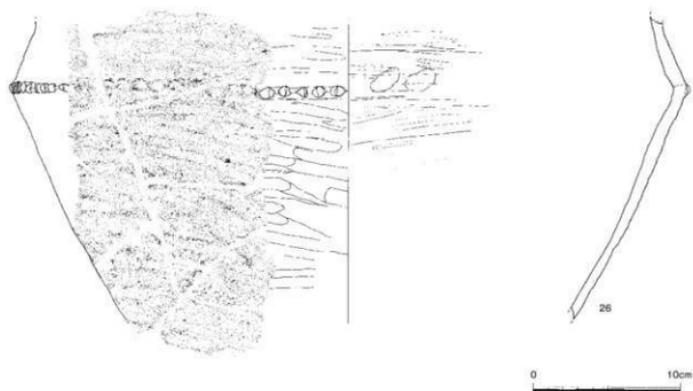
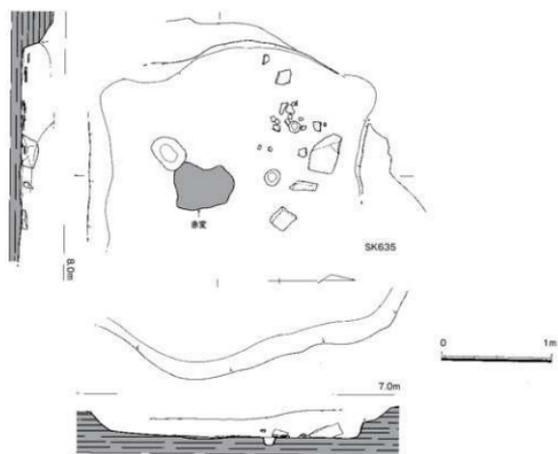
北側斜面と旧河川を中心とした51次調査地点は削平が大きく、遺構、遺物がまとまる範囲が5-3区南東部に限られる。遺物の出土は全城の河川、遺構覆土等に見られる。

SK635 (第9図) J5 5-3区南東部、古墳時代の堅穴住居SC587の柱穴の底に焼土が見られたため周囲を掘削し平面方形と考えられる堅穴を確認した。床面直上から土器が出土している。

覆土は茶褐色土で砂粒、一部炭を含むが、遺構面である礫を含む灰茶褐色土と黄褐色土上面では平面プランを十分確認できていない。床面は締りがある黄褐色土、灰茶褐色土でほぼ水平に確認し、3方で確認した立ち上がりから一辺220cmほどの方形または長方形の堅穴と考える。北東側は掘り過ぎで立ち上がりを確認できていない。深さは25cmほどである。中央やや南寄りには40×50cmの範囲に焼土が広がり、厚さは3cmほどで床よりくぼむ。焼土に接して径30cm、深さ15cmほどのピットがみられる。床の北西側には角礫と土器片がまとまって出土したが、ほかに覆土中などでは遺物を確認していない。

土器片の多くは接合した。26が接合した刻目突帯文土器である。頸部で顕著に屈曲し、頸部はわずかに外反するがほぼ直線的のび、口縁部を欠く。屈曲部には低い幅8mmほどの突帯に大振りの刻目を施す。1/6からの復元で屈曲部の径46cmを測る。器壁厚は6～9mmでやや厚手である。外面は屈曲部より上は横方向の浅い擦痕が一部に見られ、暗灰色を呈す。胴部は横方向でやや左に下がる幅5から7mm幅の調整痕が見られる。器面は淡黄褐色で一部は桃色を呈す。頸部は暗灰色から黒色を呈す。内面は横方向の条痕と擦痕が見られ黄白色から茶色を呈す。全体に明るい色調である。胎土は細砂粒を多く含む、器面に砂粒が露出し目立つ。

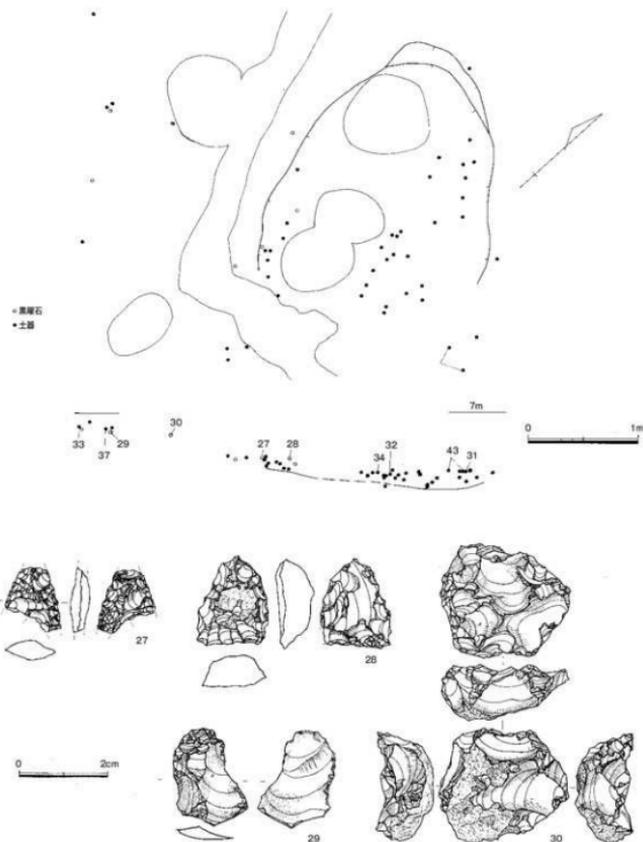
SX636 (第10-11図) SK634の南東に近接する古墳時代の遺構掘削中に縄文土器片の出土が目立ち、遺構調査後にその遺構面である灰茶褐色土を掘削し、石器、土器が出土した。この包含層となる灰茶褐色土層は周囲よりやや暗く締りがなく10cmほどでやや明るく締まる灰茶褐色土となり、明確ではないが第10図で示したような浅いくぼみ状をなす。このくぼみ状と周辺から縄文土器片と剥片石器が出土



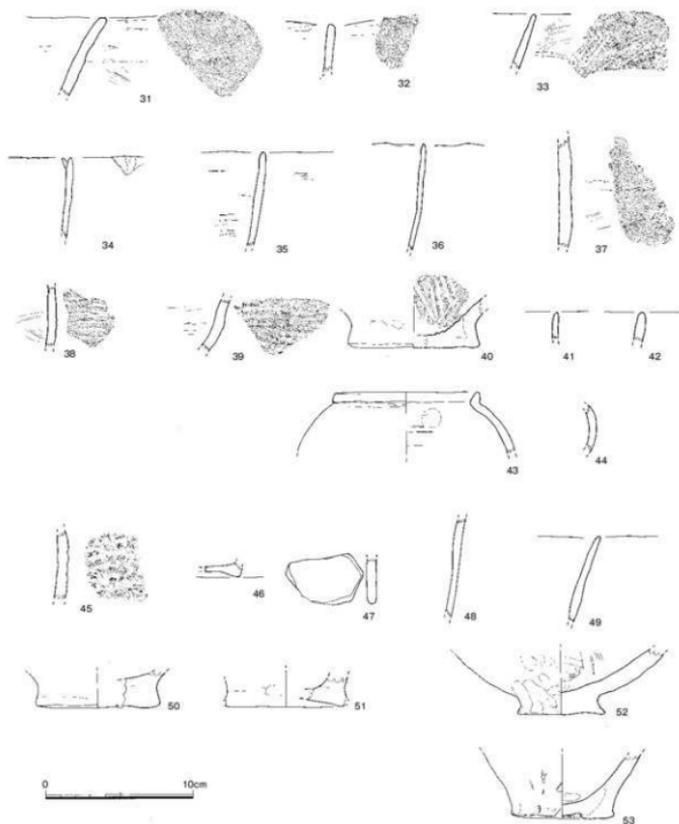
第9図 SK635、出土土器実測図(1/40・3)

し、50点の出土位置を記録して取り上げた。

剥片石器は黒曜石9点である。27、28は石鎌で28は厚く、自然面が残る。29は剥片で風化が強く旧石器時代の可能性もあろう。30は石核で自然面はあばた状である。他の5点は剥片で1点は風化が強い。土器はほとんどが粗製土器の小片で赤茶色または灰褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含み器面が荒れるものが多い。31から33は外面に擦過痕が残る。32は小片で不確実だが山形の突起をもつ可能性がある。34から36は器壁が薄手で器面は荒れる。34は口縁部に内面への押圧によるくぼみが見られる。



第10図 SX636、出土石器実測図(1/40・1)



第11図 1～6区出土土器遺物実測図(1/3)

37～39はやや厚手で38の外面には明瞭な条痕、37の外表面、39の内外面には擦過痕が見られる。40は1/6からの復元で内面に深い条痕が見られ、外面は荒れる。43は1/4弱から胴張りの浅鉢を復元した。器面は荒れ、胎土に砂粒が少ない。44は43と同様の器形を想定したが小片ではっきりしない。胎土に2、3mm大までの砂粒を含む。図化した以外は粗製土器の小片である。

1～5区出土の縄文土器(第11図)後世の遺構、包含層等で少量ではあるが縄文土器が出土しており、ここで報告する。45は器面が荒れ明瞭ではないが楕円押型文と思われる施文が見られる。胎土に

砂粒を多く含む橙茶色を呈す。46、47は胎土に滑石を多く含む。46は底部状に図示したが部位ははっきりしない。47は土器転用の土版の可能性もある。48、49は薄手の土器で器面は荒れ、胎土に4mm大までの砂粒を多く含む。50、51は1/4からの復元で胎土に砂粒を多く含む。52は外面に指頭痕を多く残し、内面は板目状の擦痕が見られる。53は粘土接合痕が明瞭に残り、器面はナデ調整で平滑で外面に擦痕が見られる。砂粒を含むが胎土が細かい。1/2から復元した。52、53は底の縁がいずれも不整形で、また縄文時代のものか不確かである。

(2) 石器・石製品

調査範囲各区、遺構等で出土した遺物をまとめて報告する。剥片石器は後世の遺構、包含層等から出土したものであるが、最初に旧石器時代から縄文時代草創期と考えられる石器について触れる。礫石器、石製品では、遺構に伴い本来は前報告で遺構出土遺物として報告すべきものもあり、これについてはそれぞれの冒頭でふれた。また、石材、出土位置、大きさ等については表に記載している。

1) 剥片石器 (第12～図23)

黒曜石と安山岩がそのほとんどを占め、他に珪質岩2点が出土している。黒曜石は砕片を含めて443点、安山岩70点、珪質岩2点、チャート1点総数516点である。黒曜石が86パーセントを占めるが、ごく細かい砕片まで含み、あくまで時期幅がある資料での値である。また黒曜石は主に腰岳産で、牟田・針尾鳥島系もみられ、姫島産と考えられる剥片が1点ある。

60から83までは旧石器時代から縄文時代草創期のものとその可能性がある遺物で、およそ器面の風化が強い。60は角錐状石器で基部にわずかに礫面を残す。61はナイフ形石器で先端にブランディングを施す。62、63は2次調整が見られる。64は両端に微細剥離が見られ刺突具とした。65は細石刃で側面に微細剥離が見られる。66から69は縦長剥片で66の背面、69の側面に礫面を残す。70は不定形剥片で背面には礫面が多く残る。71から76は石核で71、72は細石核のそれぞれ母核と核片である。77は搔器で片面に2次剥離を施す。78はハリ質安山岩の剥片で側面に礫面を残す。79は翼状剥片を剥出し放棄した石核で安山岩の剥片剥離技術を典型的に示す。裏面の礫面に打面調整が見られる。80は同様の剥離技術による剥片。81、82は黒曜石、ハリ質安山岩の石核で、82は不整形な横長剥片を2回連続して剥離している。83は古銅輝石安山岩製のスクレーパーで片面に自然面を大きく残し、1辺に2次剥離を施し刃部とする。

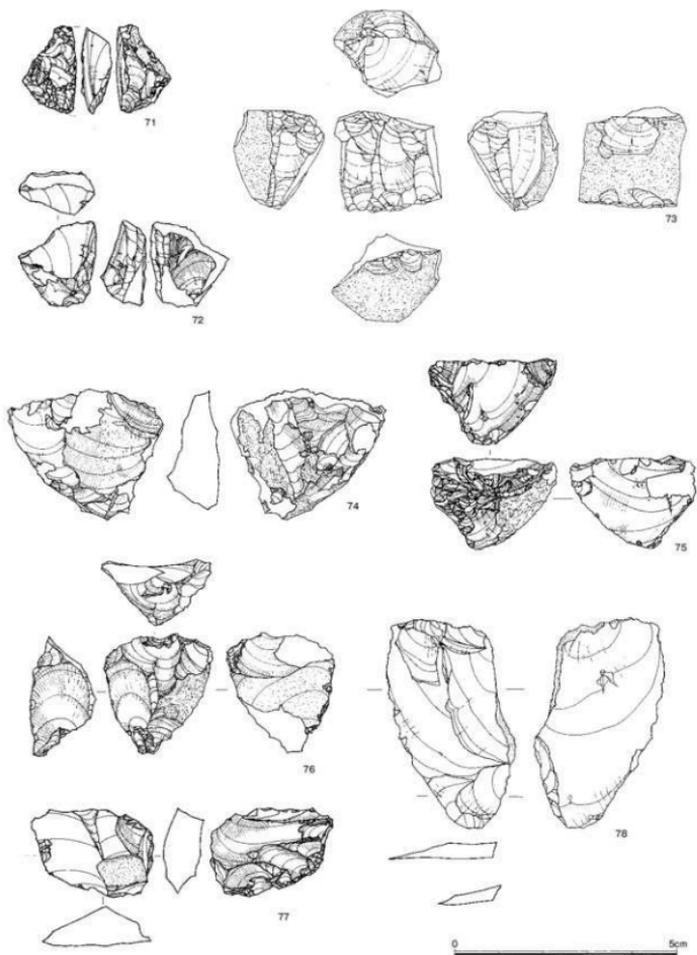
84から120は縄文時代以降と考えられる剥片石器である。84から86は石槍で84は両面に丁寧な調整を施す。87は丁寧な剥離で仕上げた安山岩製の石鏃で基部は舌の可能性もある。88は基部側が欠損するが大型の鏃を想定している。89は黒曜石の大型の石鏃である。

90から119は石鏃で、先の3点を加えた33点のうち、黒曜石29点、古銅輝石安山岩製5点、チャート1点と、黒曜石が82%を占める。器形は各種見られるが、三角鏃、楕形鏃など草創期、早期にみられるものが目立つ。91、92、100には局部磨製が見られる。120は破損部が大きい、黒曜石の石匙と考えられる。丁寧な剥離を施すが主剥離面が残る。121は全体に荒めの剥離を施し、石鏃または搔器と考えられる。122から126は細かな剥離を一、二辺に施しており石鏃の未製品とした。127は石鏃または石鏃の可能性もある。128はつまみ型石器、129は彫器、130は楔形石器である。

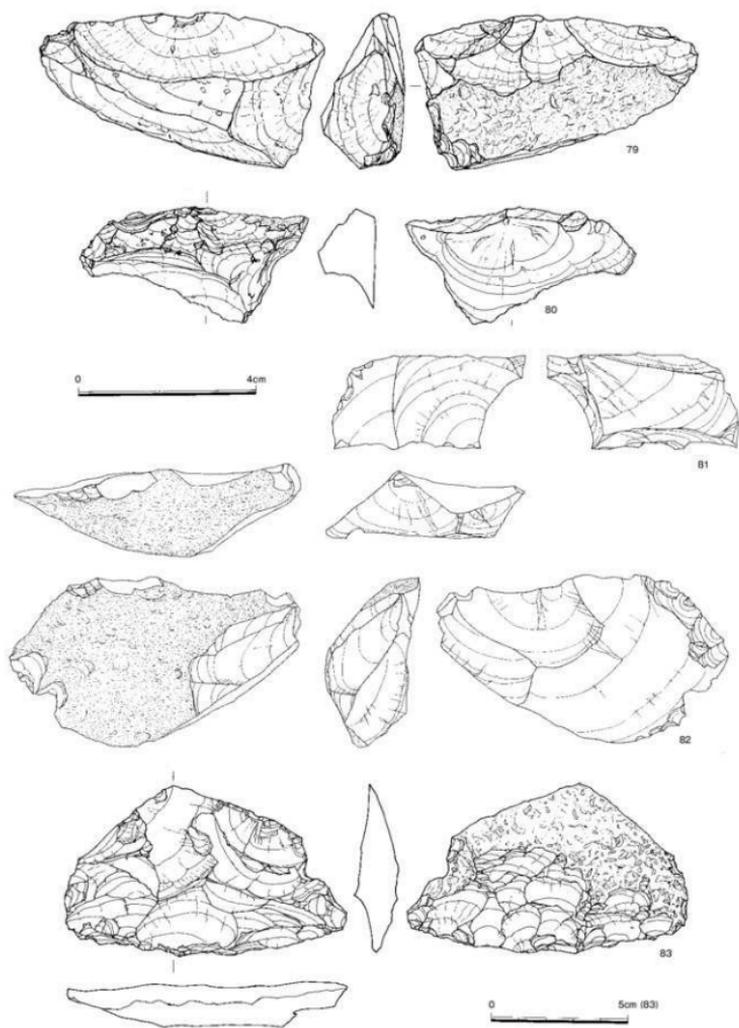
131から149は黒曜石製のスクレーパー類である。131～133は2次加工で抉りを作り出す。134～138は角度が大きな刃部を持ち搔器とした。139から149は刃部に2次調整が見られる。149は剥片鏃の可能性もある。150～155は刃部に微細な剥離があるもので使用痕のある剥片としてまとめた。形態



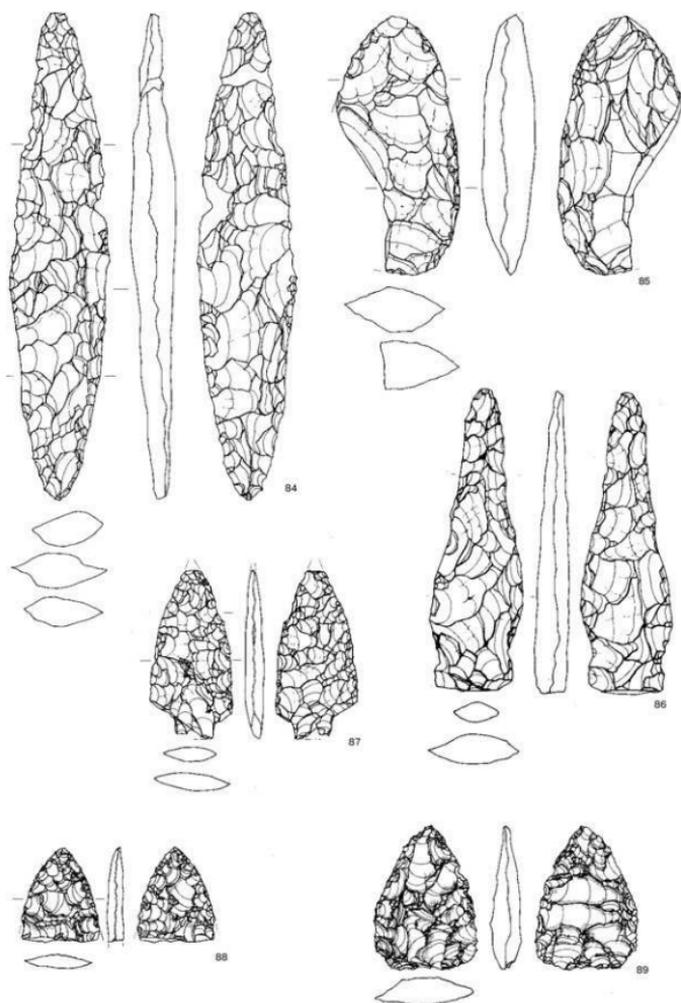
第12图 剥片石器类图1 (1/1)



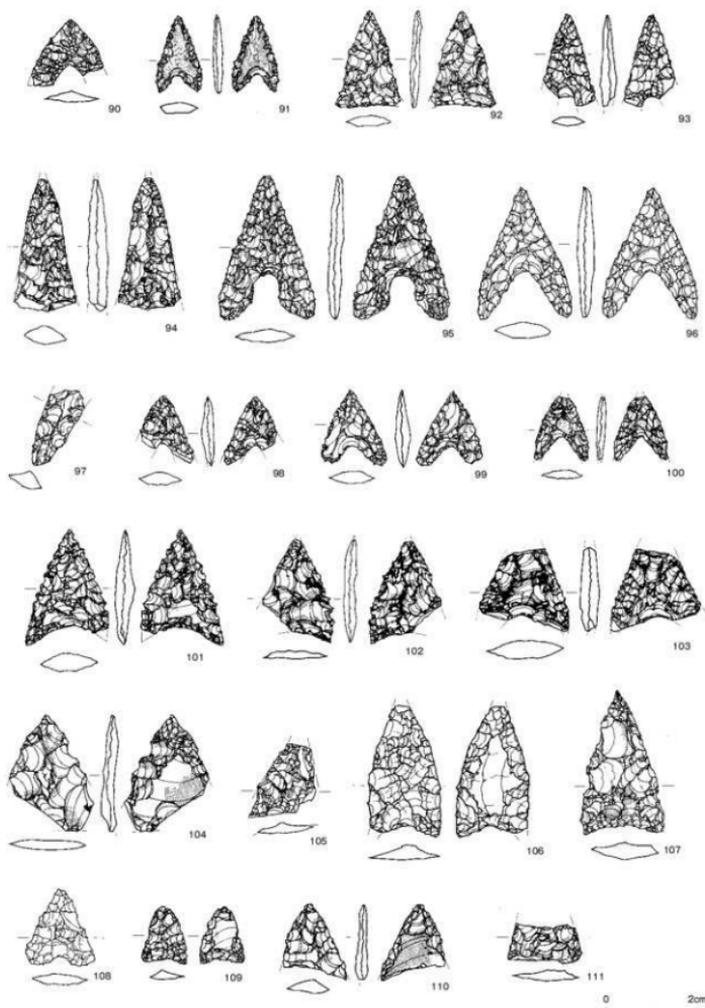
第13图 剥片石器实测图2 (1/1)



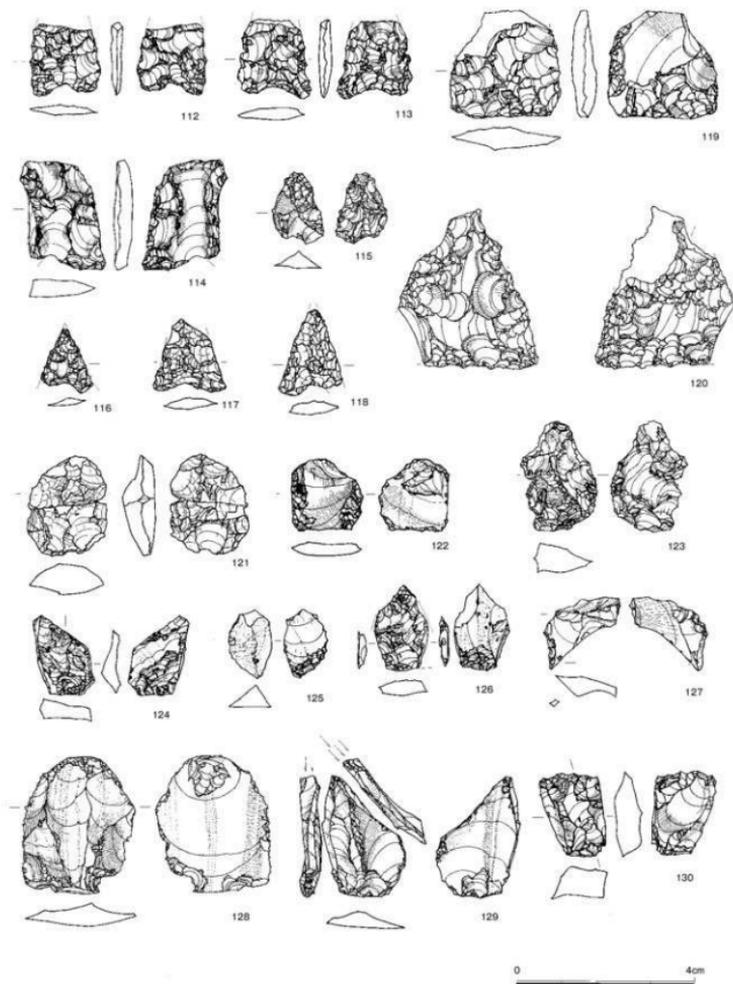
第14图 剥片石器夹测图3 (1/1·3/4)



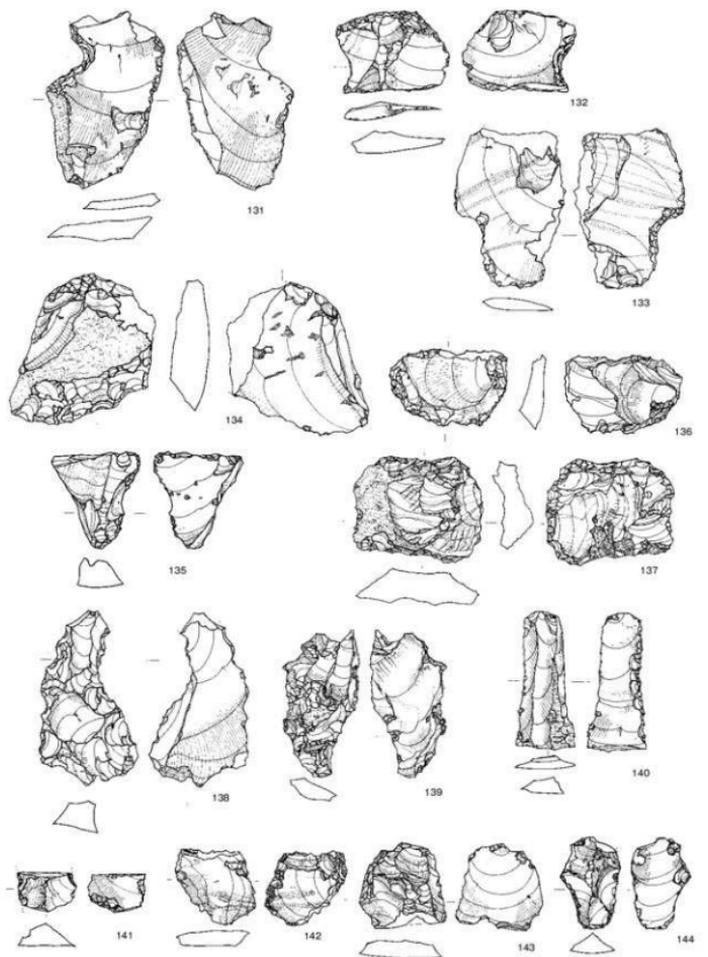
第15图 剥片石器实测图4 (1/1)



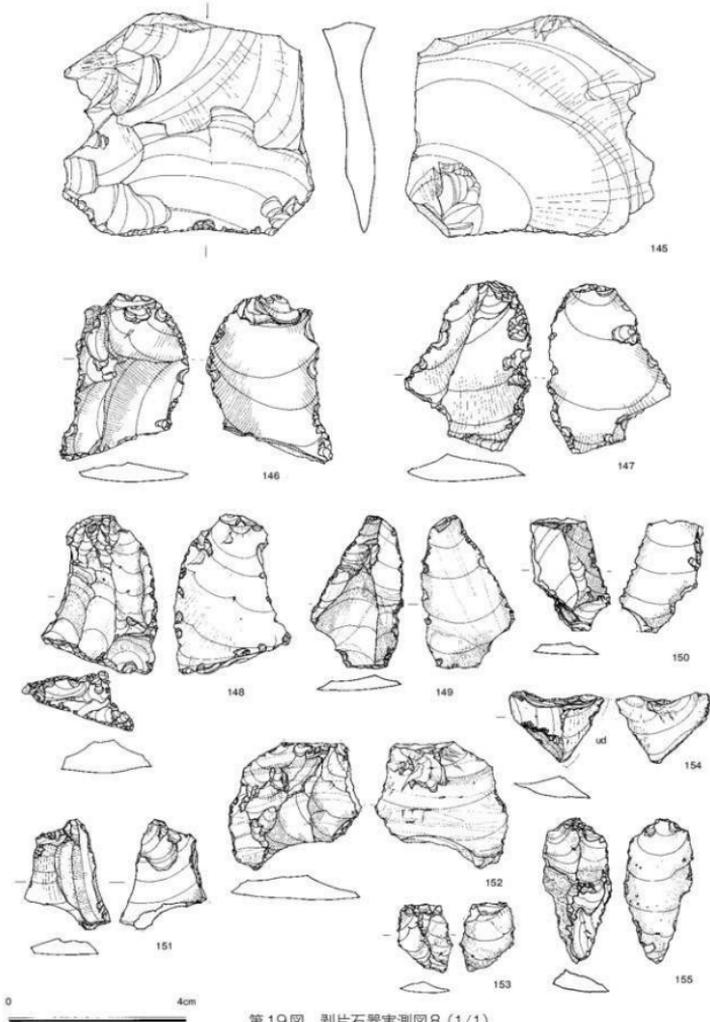
第16图 剥片石器实测图5 (1/1)



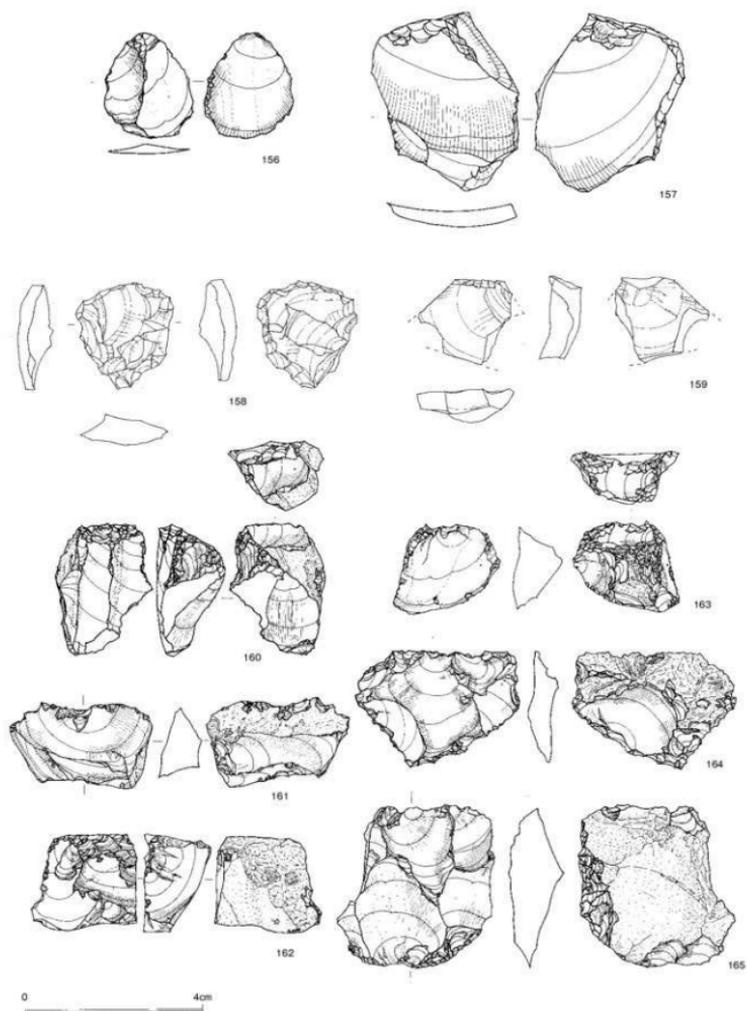
第17图 剥片石器实测图6(1/1)



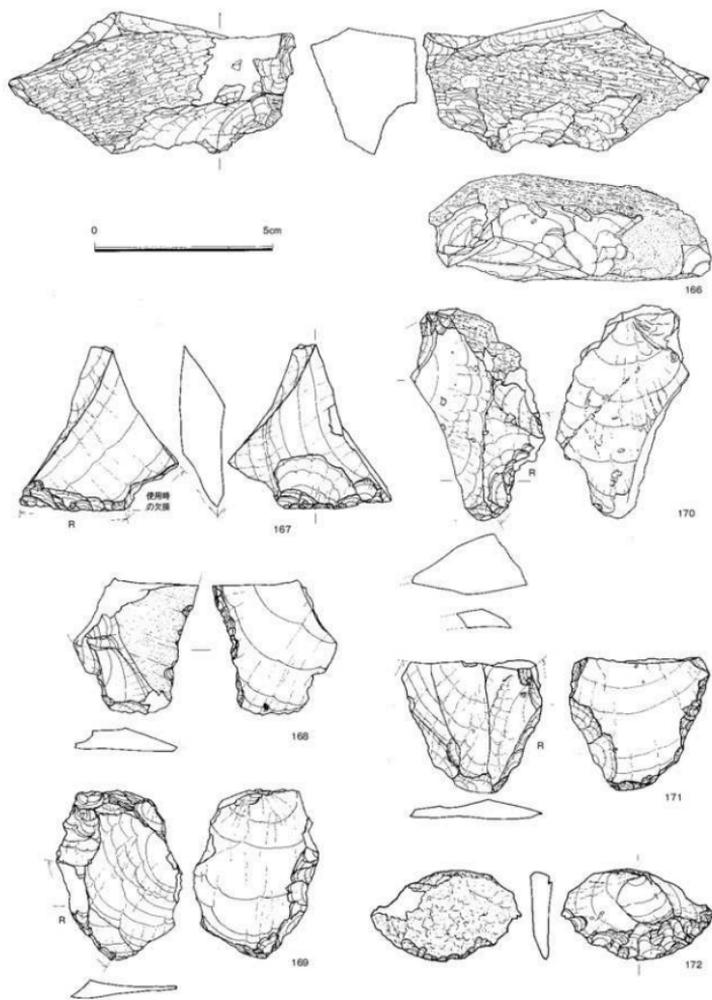
第18图 剥片石器实测图7(1/1)



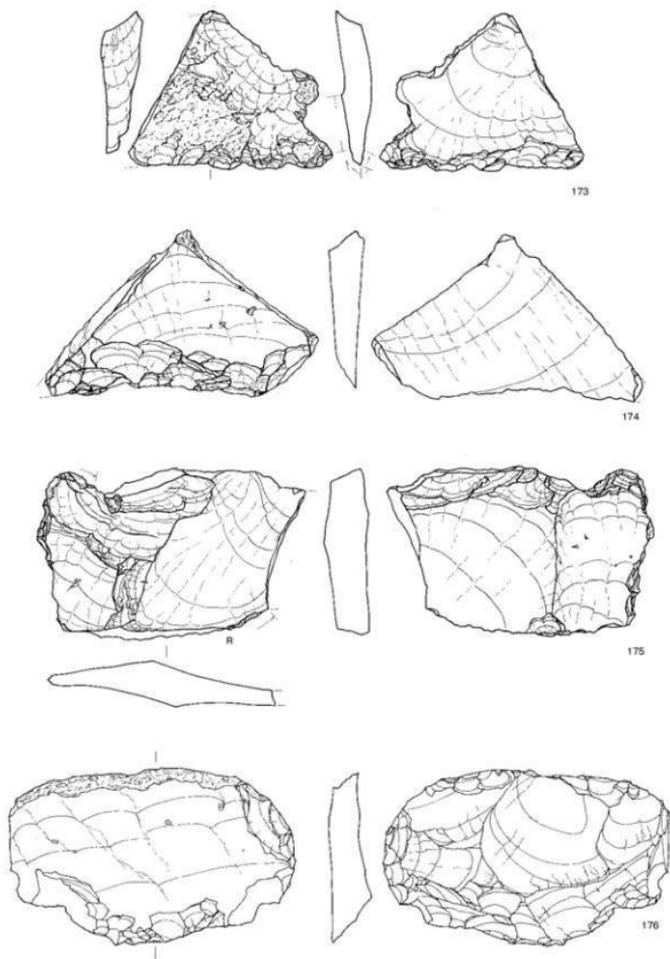
第19图 剥片石器实测图8 (1/1)



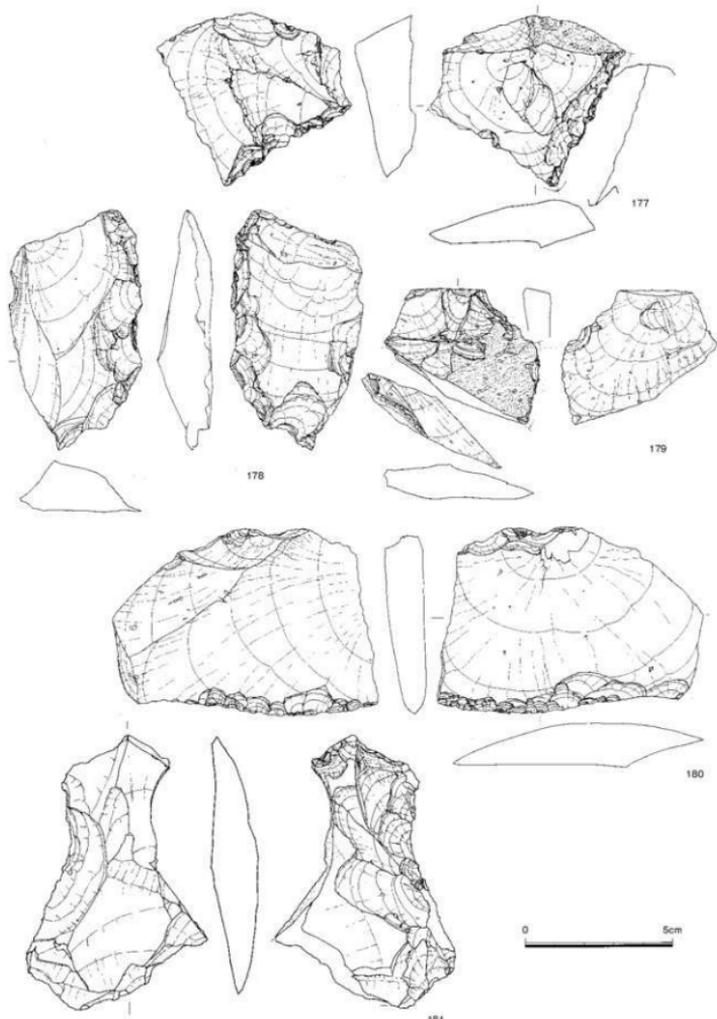
第20图 剥片石器实测图9 (1/1)



第21图 剥片石器实测图10(1/1)



第22图 剥片石器实测图11(1/1)



第23图 剥片石器实测图12(2/3)

は様々である。156、157は黒曜石の剥片で、156は半透明でやや淡い色調を呈し、157は姫島産である。158、159は珪質岩の剥片で赤茶色を呈し一部灰白色である。158は全面に2次調整を施しスクレーパーまたは石鏃未成品の可能性がある。160から165は黒曜石の石核で、小型で形態は多様である。

166は安山岩の石核。167から180は安山岩製のスクレーパー類で2次加工による刃部の成形が見られる。170は抉り状の作り出しが見られる。177から180はやや大型品。177、178は角度が大きな刃部を成形した搔器である。181は安山岩の剥片を撮形に成形しており打製石斧と考えられる。

このほかに黒曜石および安山岩の剥片、碎片、石核、素材礫が出土している。黒曜石は腰岳系のものが主体で卒田系、針尾系のもが少量入るが、後者はⅠ、Ⅲの包含層出土のものに目立つ。黒曜石の素材礫には6×4cm大ほどの原石があり、腰岳産と考えられる。

2) 礫石器・石製品

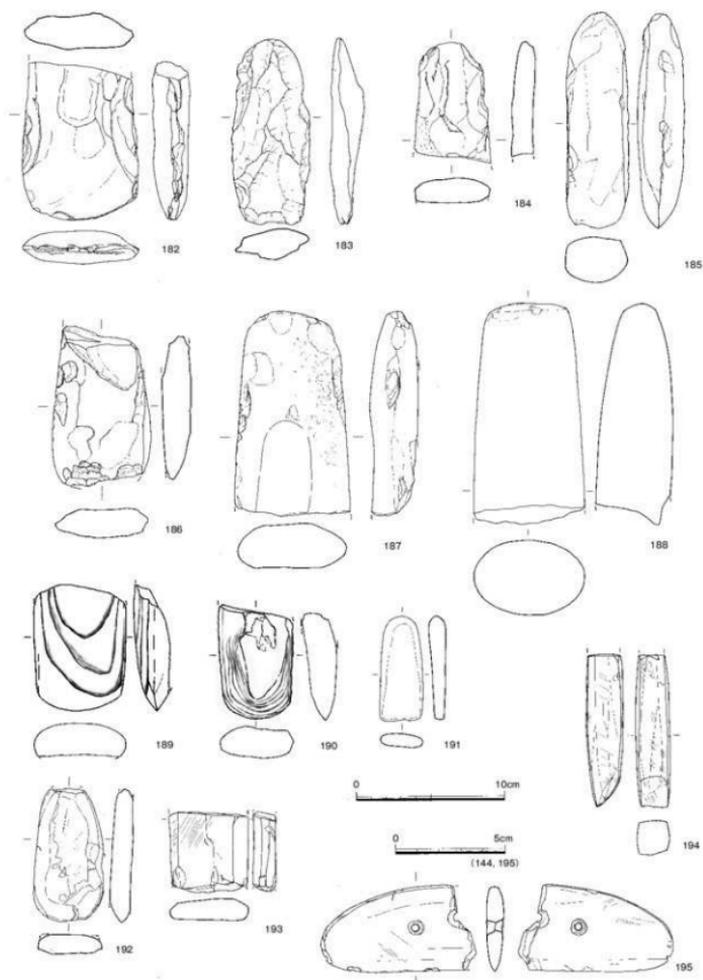
剥片石器と同様に各遺構、包含層から礫石器・石製品が出土した。特に河川032およびその上層からの出土が多い。取り上げた遺物はコンテナケース15箱ほどで、わずかに使用の痕跡が想定されるものを含む。そのなかで、加工、使用痕跡が顕著なものを中心に図示した。出土遺構は表3に示し、河川以外の遺構は第4図にその位置を示した。ただし遺構に伴う遺物であるかは確かではない。河川032とその上層出土遺物は層序で触れた時期が下限と考えられるが、叩石、砥石等の礫石器の時期は決め難い。

182は両側に大きな剝離が残り、先端部は刃をつぶしたような形跡がある。形態から石斧の転用品と考えられる。器面は荒れ研磨痕は見られない。183から190は石斧およびその可能性があるもので、いずれも器面が風化し研磨、擦痕はみられない。183は玄武岩製の打製石斧。184は両側面に幅6mmほどの面が見られる。185は両側面に1.5cm幅ほどの平滑な面が見られる。器面は風化により表皮が剥げる。186は川原石の端部を成形したものか。刃部を欠く。187、188は玄武岩製の石斧で器面に敲打痕が残る。189、190は砂岩製で業理が見られる。191は砂岩の薄い礫で器面の加工痕等は見られないが成形を受けている可能性があり取り上げた。192は幅9mmほどの側面に擦痕が見られる。表面は平滑で裏は破面である。同様のものが他に1点ある。193は器面平滑で側面は面をなし、全体に擦痕が見られる。194は柱状片刃石斧で良質の粘板岩に研磨の面、擦痕が見られる。195は輝緑凝灰岩製の石砲丁で、直線刃で穿孔の中心間は1.9cmを測る。

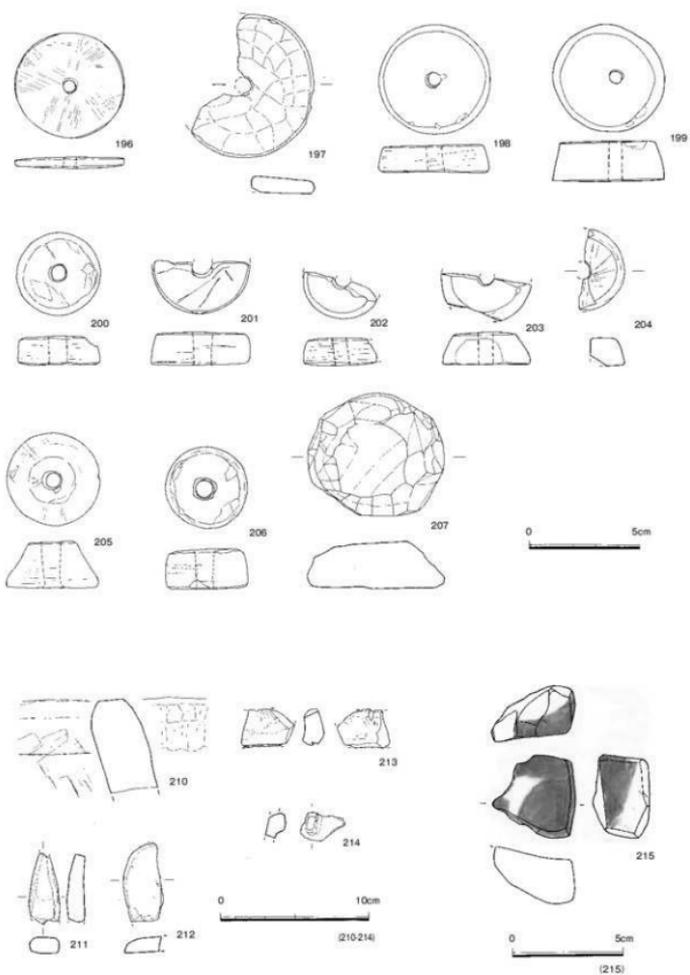
196から206は紡錘車で196が砂岩製であるほかは滑石製である。207は木製品と考えられる。210～212は滑石製品で、石鍋については前回は報告しており追加分である。210は厚手の器壁を持つ石鍋片。他は転用または加工品である。215は砂岩片で平滑な面が熱を受けたため黒色に変色しその厚さは1cmにおよぶ。砥石か。側面は破面と成形面の区別がつかない。

216から226は石錘である。216から219、221は滑石製でまたは2つの穿孔と縦方向の溝を施す。216は貫通しない深さ7mmほどの穴があり、図の裏にもさらに浅い穴が見られる。220は緑色の変成岩製。222から224は両端部に抉りを入れるタイプである。225と226は大型の環状の石錘で滑石製である。225は断面台形で、中央の他に小形の穿孔を施す。226は2つの径1cmほどの穴が見られるが深さ5mmほどで止まり貫通しない。

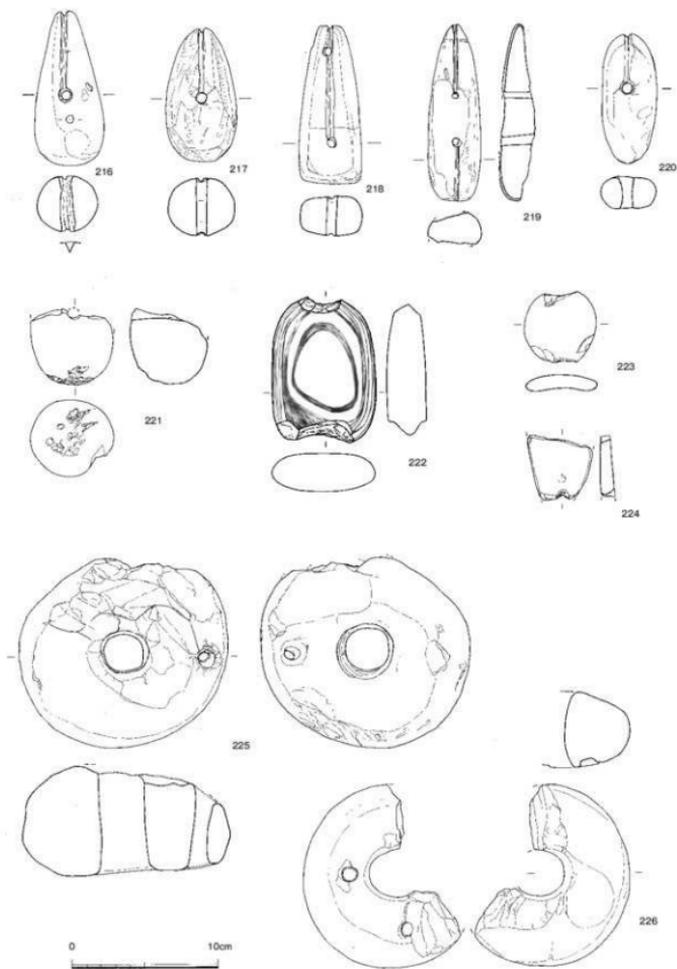
227から238は銅辺、表裏面を叩きに使用した石器で川原石を使用したものと考えられる。227、228、230、231は緑色の変成岩製で両長側面に抉りを施し、表裏中央が叩きでくぼむ。長軸端部も使用した痕跡がある。石錘の可能性もあろう。229は4側面に叩き痕が残り、表裏面は砥石として使用したのか平滑で擦痕が見られ、中央にわずかに打痕が見られる。232は両側面中央がくぼみ、端部に使用の



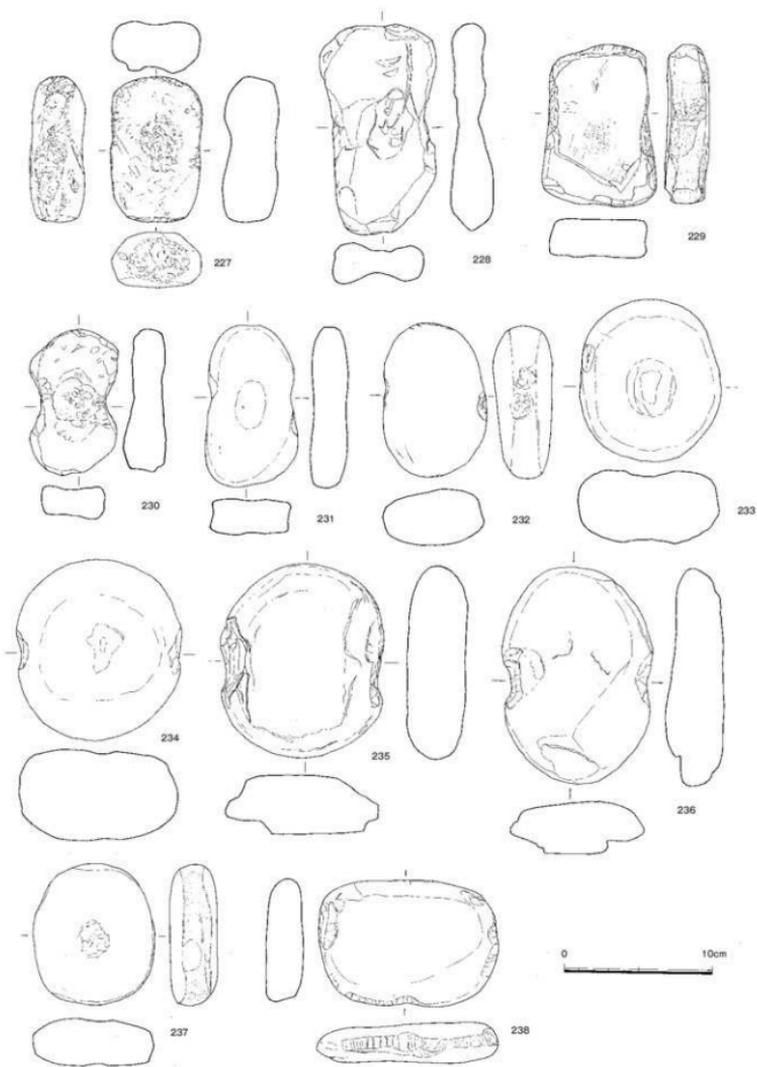
第24図 礫石器・石製品実測図1 (1/3、1/2)



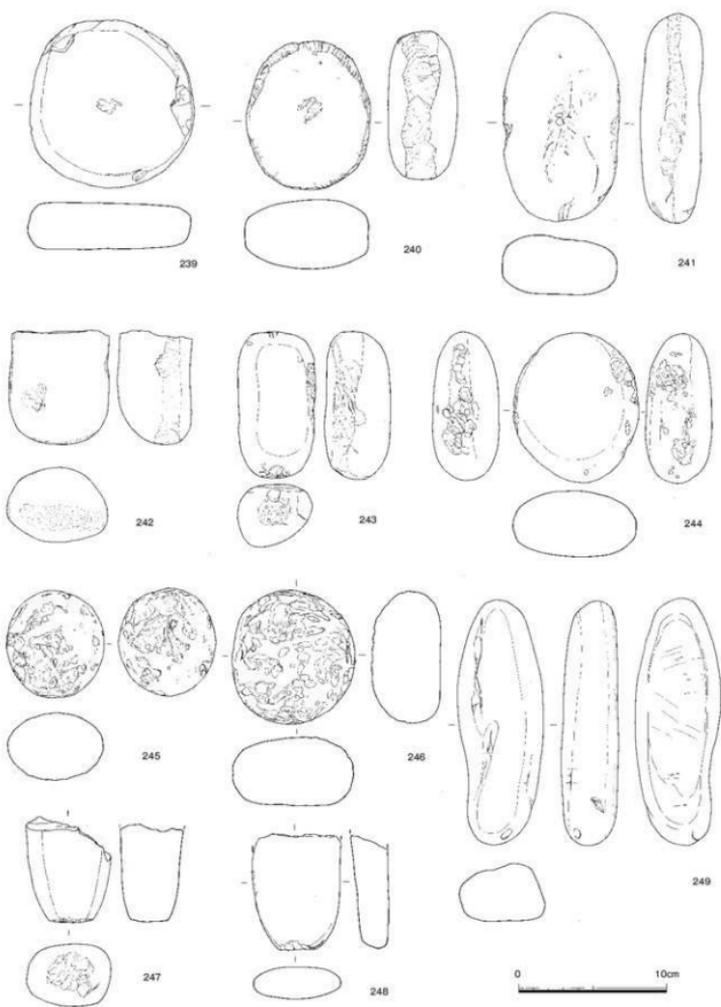
第25図 礫石器・石製品実測図2 (1/3、1/2)



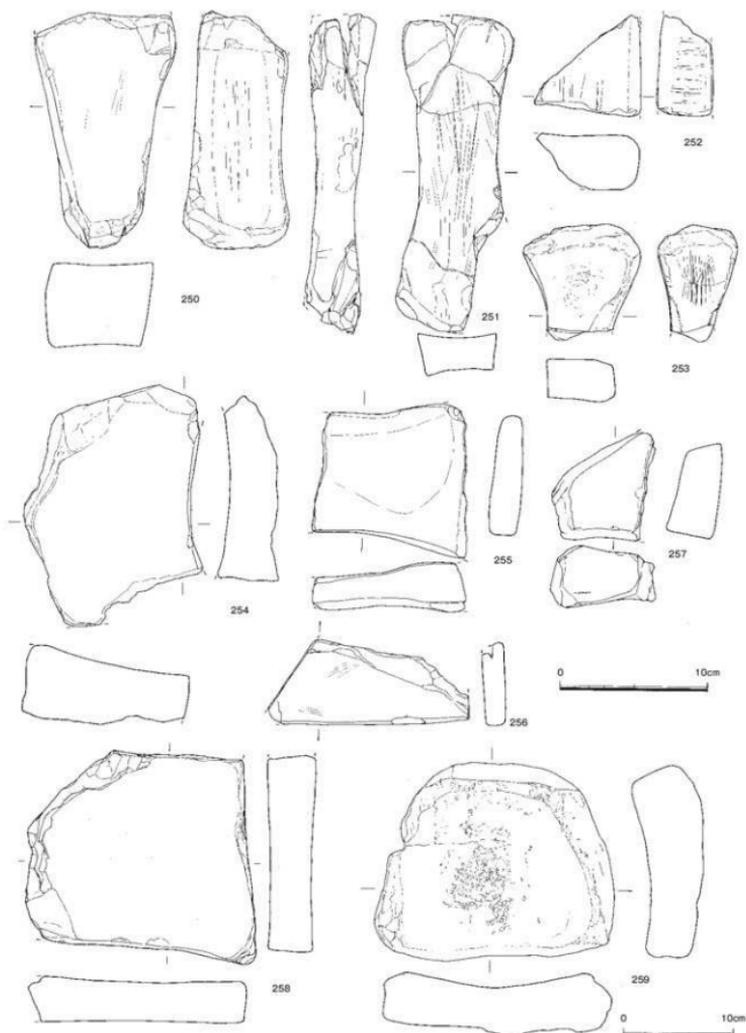
第26図 礫石器・石製品実測図3 (1/3)



第27図 礫石器・石製品実測図4 (1/3)



第28図 礫石器・石製品実測図5 (1/3)



第29図 礫石器・石製品実測図6 (1/3、1/4)

痕跡が見られる。233、234は両側面中央と表裏面中央が叩きでくぼむ。235、236は両側面中央を剥離し抉りを入れる。石錘か。237は平滑な川原石の側面全周に叩き痕を明瞭に残し、表裏中央がくぼむ。238は片側の長短側面に叩き痕、線状のキズが多く残る。

239から244は側面に叩きの痕跡が残る。240は238と同様に線状のキズが見られ、表裏中央にわずかに叩き痕がある。241は側面中央がくぼみ、端部面も使用する。242は固い石材の端部と側面を叩き、側面はわずかにくぼむ。244は両側面の対称の位置に叩き痕が見られる。245は全面、246は片面に深い叩き痕であばた状をなす。247、248は端部が叩きにより平坦になる。249は表面が自然面で平滑だが側面と裏面に使用が認められ、裏面は横方向の擦痕が見られる。磨石としての使用か。

250から258は砥石である。251は2区SK458(第4図 前報告1173集Fig.111)の弥生後期前半の土器集中地点で出土したもので白色の泥岩の4面を使用し大きく変形している。他は砂岩製で255、256以外は表裏、側面を使用している。254は裏面が未使用で、正置して安定しない。固定して使用した石皿とすべきものか。259は表面が平滑でくぼみ、中央に叩き痕が見られる。裏面は自然面で安定しない。固定して使用したものであろう。石皿とした。Ⅲ-1区の7世紀以降の大型のピットSP1631(第4図)からの出土である。

以上、成形や使用による特徴が顕著なものはほぼ取り上げたが、他に川原石の一部を使用したものや破片などがある。特に叩石として使用したと考えられる跡が多く、側面や長端部に使用の痕跡があるものが目立つ。磨石、石皿などに川原石をそのまま使用したものが主体である。また加工はないが、19点の軽石が河川から出土しており、浮き等の利用が考えられよう。大きなもので10cm大ほどである。石材は砂岩、花崗岩系、玄武石、緑色の変成岩などがみられる。

表1. 剥片石器 1-3, 2-3, 3-3, 5-2区は河川中および斜面の出土

次	区	グリッド	遺構	器種	材質	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	備考
1	49	I	C10	R1	スクレーパー	404	260	0.80	5.50	風化強 サジリ多い 礫面あばた状
2	49	I	C8	R6	刮片	274	232	0.51	2.60	風化強 礫面残る
15	49	II	H9	包含層169	石鏃	1.98	1.31	0.30	0.52	
16	49	II	H9	包含層169 R6	石鏃	1.23	1.10	0.29	0.28	
17	49	II	H9	包含層169 R10	石鏃	1.10	1.60	0.28	0.36	
18	49	II	H9	包含層169	石鏃	1.22	1.75	0.55	1.04	
19	49	II	H9	包含層169 R3	機型石器?	1.10	0.54	0.42	0.26	
20	49	II	H9	包含層169	刮片	1.00	1.30	0.25	0.37	
21	49	II	H9	包含層169	刮片	1.53	1.09	0.14	0.33	
22	49	II	H9	包含層169	使用痕のある刮片	1.80	2.00	0.34	1.27	一辺に微細割線
23	49	II	H9	包含層169	ナイフ形石器	3.67	1.67	0.67	3.84	風化強 先端にプランティンダ 礫面に礫面残る
24	49	II	H9	包含層169 R14	使用痕のある刮片	3.82	2.18	0.62	7.63	風化強 礫面残る
25	49	II	H9	包含層169	刮片	1.96	1.66	0.41	0.75	風化強
27	51	5	I5	SX636 R8	石鏃	1.49	1.30	0.43	0.65	
28	51	5	I5	SX636 R7	石鏃	2.10	1.60	0.71	2.20	礫面残る
29	51	5	I5	SX636 R3	使用痕のある刮片	2.22	1.72	0.31	1.07	
30	51	5	I5	SX636 R5	石鏃	2.68	2.98	1.70	9.26	礫面残る
60	49	II			角鎌状石器	4.90	1.96	1.18	9.38	風化強 サジリ多い 基部に礫面
61	49	I	R7	S0040上層	ナイフ形石器	1.44	0.88	0.20	0.22	先端にプランティンダ
62	51	5-3			刮器	1.50	1.28	0.50	0.87	小破片 わずかに2次加工
63	51	5-3			刮器	1.03	1.02	0.25	0.23	2次加工
64	49	I	B 6		研突具	1.30	0.68	1.15	0.12	両側に微細割線
65	49	II	G9	包含層1632	細石刃	1.32	0.90	0.15	0.27	微細割線
66	49				機長刮片 (RF)	4.51	1.57	0.68	4.11	風化強 背面に礫面 研突具の磨痕あり サジリ多い
67	49	I	C9	S0008	刮片	2.48	1.92	0.42	1.23	風化
68	49	II-2	C7	段落ち218	刮片 (RF?)	2.67	1.66	0.48	1.97	風化強 磨減著しい
69	49	II-2			刮器	3.80	2.13	0.60	4.86	礫面に礫面 先端を欠く
70	51	4	HG5	3ヶ所磨くらしい	刮片	5.61	4.58	1.58	30.47	背面に礫面多く残す
71	51	5-3			細石刃性母核	2.08	1.20	0.07	1.43	礫面残る
72	51	3-3-2	F2-3	II下層	細石刃性母核	2.00	1.78	1.00	2.48	礫面
73	49	II			石核	2.35	2.27	2.31	9.72	風化強 礫面あり
74	51	3-3-1	G2	II上層	石核	3.03	3.54	1.15	11.65	礫面あり
75	51	1-3	C2	S0329	石核	2.13	2.90	1.90	10.31	礫面あり
76	51	3-3-1	G2	9層中	石核	2.80	2.50	1.50	7.77	礫面あり
77	51	1-2		包含層	刮器	2.08	2.82	0.92	4.40	片面からの2次加工
78	51	5-1	I9	SI504	刮片	4.88	2.98	0.50	5.99	礫面に礫面 灰白色一辺灰色
79	49	II	F7	SP1704	石核	3.55	6.45	1.75	39.78	裏面刮片を剥出して接着 裏の自然面に打痕調整
80	49	II	E7	SP1774	機長刮片	2.65	5.25	1.35	13.44	連続割線による機長刮片
81	49				石核	4.43	2.18	1.34	14.27	多打面を有する石核か
82	51	5-1	I9	包含層500下層	石核	6.61	3.39	2.00	38.97	スクレーパーとして再利用か。礫面あばた状。
83	51				刮器	5.30	9.50	1.33	53.61	礫面残る。
84	51	5-3	L4	包含層384	石鏃	11.15	2.28	0.94	20.84	
85	51	4-1			石鏃	6.00	2.82	1.19	18.82	
86	51	6	I7	溝602	石鏃	7.00	2.13	0.75	10.52	
87	51	3-3-2		45層	石鏃	3.90	1.88	0.42	2.95	風化進む 基部両端部欠損
88	51	5-3	I4	SP2203	石鏃	2.20	1.80	0.38	1.48	基部断欠傷 石核の可能性 主割線面残る
89	49	I	C8	SP1044	石鏃	2.30	2.32	0.61	4.09	
90	49	II-2	H6	SX620 6層	石鏃	1.57	1.68	0.30	0.61	
91	49	I			石鏃	1.78	1.05	0.21	0.35	局部磨製 (両面)
92	51	6-2		4層上	石鏃	2.24	1.45	0.21	0.55	局部磨製 (両面)
93	49	II			石鏃	2.11	1.22	0.26	0.61	

次	区	グリッド	遺構	器種	材質	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	備考
94	49	Ⅱ	G9	包含層1636	石鏡	黒曜石	305	143	0.47	1.76
95	51	5-3	J4	SC612	石鏡	黒曜石	334	215	0.30	1.54
96	51	5-2	I4	包含層592	石鏡	チャート	303	216	0.36	1.60 灰白色
97	51	5-3			石鏡	黒曜石	178	120	0.41	0.67
98	51	3		河川	石鏡	黒曜石	156	122	0.29	0.39 片面に礫面残る
99	51	5-3	I4	SP2163	石鏡	黒曜石	176	150	0.32	0.52
100	51	5-1	I9	SP2087	石鏡	黒曜石	200	123	0.23	0.31 局部磨製(両面)
101	51	5-1	I9	SP2053	石鏡	黒曜石	278	190	0.42	1.39
102	49	Ⅱ			石鏡	黒曜石	236	162	0.28	1.01
103	49	Ⅱ			石鏡	黒曜石	192	203	0.44	1.61
104	51	6-1		4層	石鏡	黒曜石	270	191	0.35	1.20 主面礫面残る
105	49	Ⅱ	G9	SP1571	石鏡	黒曜石	171	132	0.25	0.56
106	49	Ⅱ			石鏡	安山岩	307	170	0.33	1.69
107	51	5-3	K5	SP2272	石鏡	黒曜石	338	192	0.45	2.16
108	49	Ⅱ-2	H6	SK620 7層	石鏡	黒曜石	175	158	0.33	0.67
109	49	Ⅱ	G9	SP1629	石鏡	黒曜石	136	103	0.20	0.27
110	51	5-1	H9	SP663	石鏡	黒曜石	178	147	2.24	0.48 基部側を欠く 主面礫面残る
111	49	I	C7	SD028	石鏡	黒曜石	050	170	0.28	0.43
112	49				石鏡	黒曜石	166	162	0.26	0.75
113	49	Ⅱ	H9	R2	石鏡	黒曜石	182	170	0.29	1.04
114	49	Ⅱ			石鏡	黒曜石	250	193	0.44	2.13
115	51	5-1	I9	SC528	石鏡	黒曜石	168	120	0.41	0.67
116	49	Ⅱ	G9	包含層1636	石鏡	黒曜石	152	120	0.17	0.24
117	49	Ⅱ			石鏡	安山岩	172	168	0.28	0.72
118	49	Ⅱ	G9	SC120	石鏡	安山岩	200	146	0.36	0.72
119	51	1-2	B5	包含層310	石鏡	黒曜石	250	255	0.55	3.68
120	51	3-1	G2	9層	石鏡	黒曜石	370	384	0.70	7.69
121	49	I	B9	SD002	石鏡	安山岩	230	182	0.68	3.03 縁部の可能性
122	49	Ⅱ	ED8	SD054	石鏡未成品?	黒曜石	170	162	0.31	0.98
123	49	Ⅱ			石鏡未成品	黒曜石	258	180	0.90	2.90
124	49	Ⅱ			石鏡未成品	黒曜石	188	142	0.41	1.09
125	49	Ⅱ	G9	包含層1637	石鏡未成品	黒曜石	160	100	0.50	0.67
126	51	6-3			石鏡未成品	黒曜石	202	123	0.33	0.90
127	49	Ⅱ	G9	包含層1639	石鏡	黒曜石	170	177	0.40	0.65 石鏡の可能性あり
128	51	6-2		4層	つまみ型石器	黒曜石	320	260	0.56	4.47
129	51				削器	黒曜石	282	194	0.40	2.24
130	51	5-3-1			クサビ型石器	黒曜石	200	151	0.74	2.20 風化
131	49	Ⅱ	E7	SP1329	スクレーパー類	黒曜石	412	270	0.62	5.28 挟り石器
132	51	1-2	B4	SD011	スクレーパー類	黒曜石	194	262	0.53	2.73 挟り石器
133	51	2-3	E2	2層 6層	スクレーパー類	黒曜石	370	270	0.41	3.70 挟り石器
134	51	1-2	C6	掘込342	スクレーパー類	黒曜石	330	352	0.86	9.75 挟器
135	49	Ⅱ	F7	SP1345	スクレーパー類	黒曜石	222	203	0.68	2.89 挟器
136	49	Ⅱ			スクレーパー類	黒曜石	270	183	0.57	3.15 鉋形状挟器
137	49	Ⅱ-2	H6	SK620 7層	スクレーパー類	黒曜石	250	296	0.98	7.06 挟器
138	51	2-3	E2	255 6層	スクレーパー類	黒曜石(針死表)	408	238	1.70	6.27 挟器
139	49	Ⅱ-2	H6	SK620 6層	スクレーパー類	黒曜石	345	173	0.65	3.30 削器
140	51	5-4	K3	SC613	スクレーパー類	黒曜石	320	137	0.39	1.86 削器
141	49	Ⅱ	H9	包含層1635	スクレーパー類	黒曜石	094	123	0.51	0.57 削器
142	51	3-3			スクレーパー類	黒曜石	175	188	0.34	1.18 削器
143	51	5-1	H9	SK563	スクレーパー類	黒曜石	201	200	0.44	1.62 削器
144	51	3-3-2	F2-3	皿C層	スクレーパー類	黒曜石	214	140	0.47	1.07 削器
145	51	5-4		赤茶褐色粘質土	スクレーパー類	黒曜石	565	510	1.23	27.96 削器
146	51				スクレーパー類	黒曜石	388	296	0.45	5.43 削器
147	51				スクレーパー類	黒曜石	398	284	0.64	5.61 削器

次数	区	グリッド	遺構	器種	材質	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	備考
148	51	1	B5	包含層310	スクレーパー類	3.70	2.68	1.16	8.72	削形
149	51				スクレーパー類	3.52	2.10	0.38	2.19	削形 剥片痕の可能性
150	49	Ⅲ	G9	SP1554	使用痕のある剥片	2.60	1.88	0.38	1.55	
151	49	Ⅲ	G9	SD139	使用痕のある剥片	2.54	2.00	0.41	1.75	
152	49	Ⅲ			使用痕のある剥片	3.00	3.02	0.64	5.00	
153	49	Ⅱ	D5	SD077	使用痕のある剥片	1.60	1.38	0.30	0.48	
154	49	Ⅲ	G9	包含層1609	使用痕のある剥片	1.70	2.20	0.50	1.08	
155	51			溝032	使用痕のある剥片	3.40	1.60	0.48	1.86	
156	49	Ⅱ			剥片	2.48	2.02	0.28	1.22	
157	49	Ⅱ			剥片	4.10	3.40	1.63	10.54	
158	49	Ⅲ	H9	SC167	スクレーパー類	2.52	2.24	0.71	3.98	石継未成品の可能性
159	49	Ⅲ	E8	包含層071	剥片	1.91	2.20	0.57	3.05	両端を欠く
160	51	1-2	B5	SK341	石核	3.10	2.20	1.56	8.13	
161	49	Ⅱ			石核	2.03	3.23	0.90	6.32	
162	51	3-1	D7	SD491	石核	2.26	2.41	1.45	7.59	
163	51	1	B5	結核田 赤瀬川上	石核	2.11	2.44	1.10	4.98	
164	51	5-1	B9	SD594	石核	2.70	3.78	0.90	7.41	
165	51	1	B5	包含層310	石核	3.80	3.57	1.30	16.13	
166	49	1	C3	SP1136	石核	6.60	3.43	2.30		
167	49	Ⅲ	G8	SP1536	スクレーパー類	3.80	3.65	1.00	12.95	削形
168	51	3-1			スクレーパー類	3.10	2.85	0.85	5.68	削形
169	49	Ⅱ	E7	SP1330	スクレーパー類	3.90	2.90	0.60	6.81	削形
170	49	1	C7	SD028	スクレーパー類	4.95	2.85	1.45	16.68	削形
171	51	6-1		遺構	スクレーパー類	3.05	3.25	0.55	5.27	削形
172	49	Ⅲ	G9	包含層1636	スクレーパー類	2.05	3.45	0.50	3.97	削形
173	49	1	C9	SC010	スクレーパー類	3.60	4.75	10.70	10.60	削形
174	51	5-3	I5	包含層543	スクレーパー類	3.85	6.40	0.80	17.80	削形
175	51	3-3		土層5 Ⅲb層	スクレーパー類	3.90	6.10	1.10	30.45	削形
176	51	2		河川	スクレーパー類	4.10	6.50	0.97	33.75	
177	51	5-1	H9	包含層392	スクレーパー類	5.80	6.60	2.00	37.59	挿形
178	49	Ⅲ-2	H6	SK020 6層	スクレーパー類	8.25	4.50	1.80	59.24	挿形
179	51	5-3			スクレーパー類	6.40	8.95	1.60	90.50	削形
180	49	Ⅲ		3層	スクレーパー類	4.70	5.30	1.25	27.47	削形
181	49	Ⅲ-2	G7	包含層209	石斧	97.0	61.0	16.0	69.0	打製石斧

表2. 剥片石器数

	角鎌状石器	ナイフ	縦石核	縦石房	槍	刺突具	石鏃	彫器	鏃	つまみ型石器
黒曜石	1	2	2	1		1	38	1	1	1
安山岩					3		6			
柱状岩							1			
チャート							1			
合計	1	2	2	1	3	1	46	1	1	1

	石匙	くさび型石器	スクレーパー類	斧	UF	剥片	砕片	核	素材鏃	合計
黒曜石	1	2	24		9	159	147	38	15	443
安山岩			15	1		22	16	5	2	70
柱状岩						1				2
チャート										1
合計	1	2	39	1	9	182	163	43	17	516

表3. 礎石器・石製品 1-3, 2-3, 3-3, 5-2区は河川中および河川の出土

次表	区	グリップ	遺構	器種	材質	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	備考	
182	51	3-3-2		上層	石斧再利用?	砂岩	108	7.9	26	349	石刃が欠け、刃部が剥離。表面に磨痕はなし。表面が
183	49	I	C8-9	003下層	打製石斧	玄武岩	12.35	5.3	2.1	178	
184	51	3-3-1		IV c層	石斧か	頁岩か	8.3	5.2	1.65	107	側面に打痕あり
185	51	5-2	K7	包含層594	石斧	安山岩か	14.7	4.2	3.1	319	刃部を研削加工。側面に打痕あり
186	49	I	C7	028-1	石斧	頁岩か	11.00	6.70	2.00	212	器面風化。古代遺
187	49	Ⅱ-2	H6	SSR2005	石斧	玄武岩	14.1	7.85	3.1	598	打痕が残る。一部研削痕。赤土土塊
188	51	6-2		5c 粘土層	石斧	玄武岩	15.1	7.6	5.15	1008	器面風化。全面に打痕あり
189	51	5	19	500	石斧	砂岩	8.1	6.3	2.3	203	器面風化。研削等見え
190	51	4	H4	1tr. II・Ⅲ層	石斧	砂岩	7.3	5.0	2.0	127	器面風化
191	51					砂岩	7.1	2.95	1.2	35	下層は削れか不明
192	51	3-3-2		IV c層		泥岩	9.05	4.7	1.35	105	側面磨き面なし。表面磨き。裏破痕
193	51	6-1	4d		泥岩	暗灰色	5.4	5.4	1.6	77	粒細かい。器面平滑。表面に擦過痕
194	51	6		中央トレンチ北端部	柱状片 打石斧	粘板岩	7	1.63	1.54	33	青白色
195	51	5-3	L5	包含層585	石瓦丁	輝緑凝灰岩	7.05	3.95	0.78	33	7世紀包含層
196	51	3-3-1		12層粗砂	粘板岩	砂岩	径4.95	孔R035	0.48	23	
197	51	6-3		Ⅱ層N	粘板岩	滑石	6.66	孔R08	0.75	34	
198	51	3-3-2		古代包含層	粘板岩	滑石	径5.02	孔R07	1.23	63	背面一部欠ける
199	51	6-2		3層から5層に彩色	粘板岩	滑石	径5.05	孔R08	1.84	87	端部シャープに成形。
200	51	6-2		4層上層	粘板岩	滑石	径3.83	孔R08	1.32	37	
201	51	5-3	14	包含層592	粘板岩	滑石	径4.45	孔R07	1.5	28	
202	49	I	C9	500Z9	粘板岩	滑石	径3.48	孔R06	1.27	13	古代遺出土
203	51	5-3	K5	SP228	粘板岩	滑石	径4.0	孔R07	1.5	19	上層3・0。古墳期以降以降出土
204	51	3		2a層	粘板岩	滑石	径3.7	孔R07	1.3	13	
205	51	5-3	K5	包含層581	粘板岩	滑石	径2.18	孔R09	2.14	54	上層218。古代包含層
206	51	6-3		3層上部	粘板岩	滑石	径3.75	孔R06	1.8	45	
207	51	6-1		4層	粘板岩未製品	滑石	6.2	5.6	2.16	118	
210	51	3-3-1		Ⅱ下層	石鏃	滑石				746	
211	51	3-3-3		Ⅱ上層	石製品	滑石	4.77	2.1	1.21	19	
212	51	3-3-3		Ⅱ上層	石製品	滑石	5.35	2.5	1.05	24	
213	51	3-3-1		Ⅱ上層	石製品	滑石	2.56	3.43	2.41	21	
214	51	4	H3	1tr. II・Ⅲ層	小形斧頭片	滑石	1.82	3.02	7.9	8.1	
215	51	6-3		3層上部	砥石?	砂岩	4.1	3.6	2.13	29.7	
216	51	5			石鏃	滑石	10.65	4.7	3.85	302	表面に深さ7mmの穴、穴に浅い穴あり。
217	51	3-3-1		IV c層N	石鏃	滑石	9.2	4.75	3.9	285	
218	51	3-3-1		IV c層N	石鏃	滑石	10.9	4.2	2.2	234	
219	51				石鏃	滑石	12.1	3.55	2.3	138	孔R06, 0.35cm
220	51	2-3-1	E2	土層4 II a層	石鏃	変成岩?	9	3.7	2.17	112	
221	51	3-3		Ⅱ下層	石鏃	滑石	5.2	5.65	5.25	199	
222	51	5-2	18	SG0803	石鏃	砂岩	9.9	6.9	2.7	314	両端にえぐり。古代遺
223	51	5-3	J5	SG0802	石鏃か	玄武岩	4.8	4.9	1.0	42	両端にえぐり。6世紀後半型。住居
224	51	3-3-1	G2	土層6 II b層	石鏃	砂岩	4.3	4.3	0.95	27	端部にえぐり。浅い凹形のくぼみ。磨治痕あり
225	51	2		V層青灰砂礫	石鏃	滑石	径14.2	7.6	3.865		孔R39-30, L5-10。上部が断面台形
226	51	5-2	16	1tr. IV層 a	石鏃	滑石	径12.6	5.2	7.0	260	孔R35-30
227	49	I	D7	包含層040上層	滑石	変成岩 緑色	10	6.1	3.6	426	4層面に打痕。中央はくぼみ。磨き。古代包含層
228	51	6-2		4層上部	滑石 石鏃	変成岩 滑石に近い	14.3	7.95	2.85	599	両面にえぐり。表面中央くぼみ。磨き
229	51	2			滑石 石鏃	砂岩	11.10	7.75	2.60	429	表面に浅く磨き。裏面に凹み。凹み部分に磨き
230	51	3-3-2		Ⅲc層	滑石 石鏃	変成岩 緑色	9.8	6.0	2.9	272	両面にえぐり。表面中央くぼみ。磨き
231	51	6-3		Ⅱ層N	滑石 石鏃	変成岩 緑色	11.0	6.3	2.5	284	2層面に浅くえぐり。中央に打痕によるくぼみ。磨き
232	51	3-3-2		IV b層	滑石	花崗岩? 緑色凝灰岩?	10.5	7.1	4.0	473	両面に中央打てくぼみ。両端とも2か所のくぼみ
233	51	6-1		3層下部	くぼみ石	花崗岩?	11.2	9.5	5.0	966	表面中央にくぼみ。有色凝灰岩多い
234	51	3-3-3		Ⅲc層	滑石	砂岩	12.4	11.2	6.2	1219	両面にえぐり。表面中央におぼろげに凹み。磨き
235	51	3-3-1		IV c層	石鏃	玄武岩? 灰色	13.35	11.0	4.1	1002	両面にえぐり。他に加工なし。磨き
236	51	5-2-3			石鏃	砂岩	14.8	10.3	3.9	823	扁平な礎の両面にえぐり

次	区	グリッド	遺構	器種	材質	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	備考	
237	51	6-2	5a	埴石	花崗岩質	9.7	8.25	3.3	430	断面は丸く、中央は凹み、表面中央の凹みは細く、白色	
238	49	Ⅱ区	D7	SX068F層	埴石	12.2	8.7	2.7	496	断面は丸く、中央は凹み、表面中央の凹みは細く、白色	
239	51	5-2	河川側	埴石	砂岩	11.6	11.2	3.3	492	断面を叩き等で成形	
240	51	2-31	Ⅱe層	埴石	火成岩 灰白色	10.2	8.4	4.75	636	断面を叩き等で成形 中央にはわずかに凹み 磁着	
241	49	Ⅱ区	E8	071側溝	埴石	花崗岩	14.5	7.85	4.1	750	断面と端面、中央に叩き痕
242	49	I	C8	SX030L層	埴石	7.5	6.6	4.9	403	断面は丸く、中央は凹み、表面中央の凹みは細く、白色	
243	51	3-31	Ⅱc層	埴石	火成岩 緑灰色 灰石	10.05	5.3	4.3	403	両端、一側面に叩き痕	
244	51	3-31	Ⅱ下層 s	埴石	火成岩 緑灰色	10.2	8.5	4.5	593	断面の長軸の対称位置に叩き痕 磁着	
245	51	3-33	Ⅱe層	埴石か	火成岩 緑灰色	7.35	6.65	4.6	318	表面の対称部に叩き痕多い	
246	51	3-32	Ⅱc層	埴石	火成岩より黄褐色	9.2	8.4	4.8	617	断面には1/4は凹み、断面は丸く、中央は凹み、表面は丸く、白色	
247	51	5-3	J4	SX1包含層	埴石	7.15	5.7	4.3	272	断面は叩きで平らにつぶらぬ 表側、中央は凹み、磁着	
248	51	3-32	Ⅱ層	埴石	火成岩?	7.9	6.0	2.4	197	断面が叩きでつぶれる 断面に一部叩き痕	
249	49	Ⅲ-1	H9	SC167	砥石	16.85	5.85	3.95	644	一面のみ使用で平滑 6世紀後半至7世紀初葉	
250	51	3-31	土層S Ⅱe1層	砥石	砂岩 細かい	16.2	9.7	5.7	1403	4面を使用	
251	51	3-2	D2	SX458R2	砥石	21.8	7.5	2.9	567	断面は丸く、中央は凹み、表面中央の凹みは細く、白色	
252	51	6-3	S層上部	砥石	砂岩 褐色	6.9	6.9	3.7	183	表面、側面に鋭状のキズ	
253	51	6-1	2b	砥石 緑石	砂岩 緑灰色	7.4	8.0	5.3	394	表面は丸く、中央は凹み、表面中央の凹みは細く、白色	
254	51	6-1	2b	砥石	砂岩	16.5	11.2	4.9	1253	表面と側面を使用 表面は未使用	
255	51	3-31	Ⅱd層	砥石	砂岩 灰褐色	10.5	10.4	2.7	439	表面は丸く、中央は凹み、表面中央の凹みは細く、白色	
256	51	1-31	Ⅱ下層	砥石	堆積岩細かい	13.7	5.8	1.5	177	断面、表面を使用 表面は未使用	
257	51	3-31	Ⅱe層	砥石	砂岩 灰色	7.4	6.4	3.8	229	4面を使用	
258	51	1-33	Ⅱa層	砥石	砂岩	20.4	18.8	4.3	3000	表面は丸く、中央は凹み、表面中央の凹みは細く、白色	
259	49	Ⅲ-1	H9	SP1631	石鏝	21.6	18.2	5.5	3300	断面は丸く、中央は凹み、表面中央の凹みは細く、白色	

(3) 金属製品

遺構や包含層等から少量ながら金属器が出土した。前回の報告では鉄器集中遺構としてSX089について報告しているが、今回はそれに追加するものである。前回到遺構出土遺物として報告すべきであったものを含む。表とともに補いたい。出土位置は第4圖に示した。また1点ずつであるが銅と鉛の製品が出土している。また、調査区では多くの鉄滓が出土している。

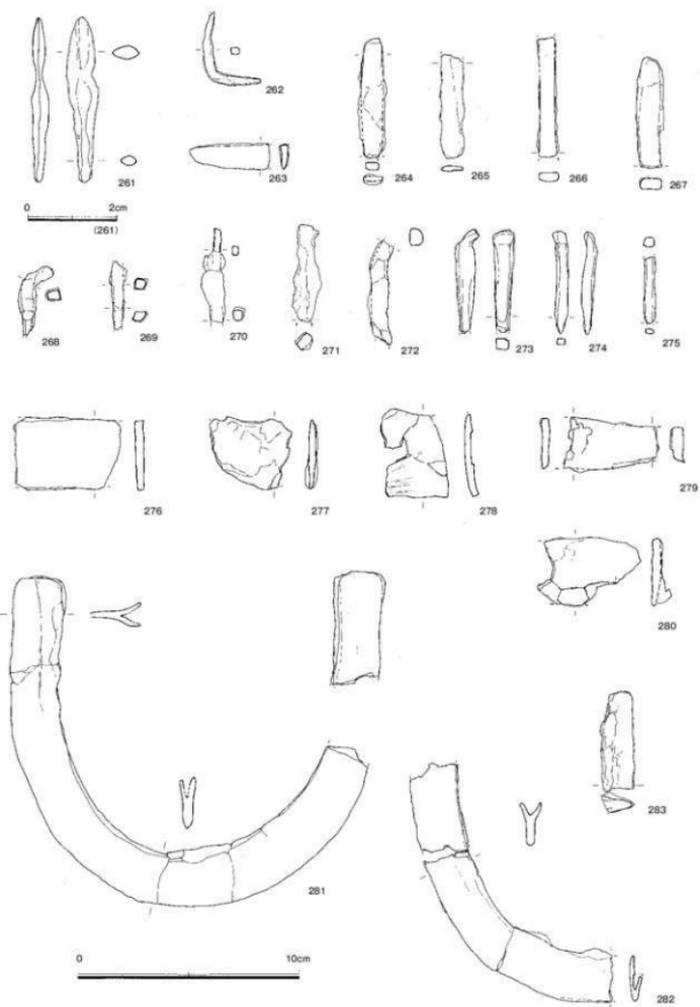
銅製品 261は鎌状の形態をもち、明瞭ではないが鎗状の稜が見られる。厚い箇所では3.3mmほどを測るが中央部で1.4mmと薄い箇所がある。器面には細かな気泡が見られる。弥生後期のものか。河川032出土である。

鉛製品 262は断面四角形の棒状をL字状に曲げている。若干くびれた部分にキズが見られるが、用途を意識したものかは判然としない。河川3-3区Ⅲ層上部の出土である。

鉄製品 263は刀子の刃部で6世紀後半以降の掘立柱建物SB191の柱穴SP1716出土である。264から267は幅1cm前後の棒状を呈す。264、265は薄手で判然としなが刀子の可能性がある。他は鉄鏝などが考えられる。268から275は釘と考えられる。いずれも断面四角形である。268は古代の掘立柱建物柱穴、270は古代溝出土である。276から278は板状で276は厚さ4mmと厚みがある、279と280は刃部を持つようではあるが判然としない。276は6世紀以降の柱穴、277は6世紀後半の竅穴住居跡土からの出土である。281、282はU字形鉄鏝先で全体が3cmほどとほぼ同じ幅である。281の未接合破片は同一個体か不明。出土位置の記録を失い時期も不明である。283もU字形鉄鏝先で6区の河川032の3層出土で8、9世紀までにおさまるものと考えられる。

鉄滓

調査区内では各地点で鉄滓が出土している。調査区北側の河川032上で確認した層序(第3図)では、Ⅱ、Ⅲ層にやや多く、Ⅳ層にも少量見られる。Ⅰ層は掘削した範囲に限られるため比較できない。鉄滓の分析等を行っておらず、各層による性質については明らかにできていない。



第30图 鉄器実測図(1/2、1/1)

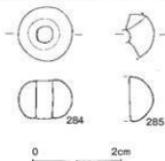
そのなかで、谷中央部の谷堆積が残っていた4区において、H15・6グリッド付近でⅡ層上部の標高6.6m付近で鉄滓が多く出土した。遺構検出、包含層の掘削を行ったが遺構の確認はできなかった。鉄滓と一緒に土師器の碗、黒色土器が出土しており、9世紀以降の堆積と考えられる。

検出遺構では6世紀後半の複数の竪穴住居跡の覆土からも数十g程度、少量ながら出土している。混ざり込みの可能性もあろう。ピット、溝等からも各時期の遺構から出土がある。量的に多くなるのは古代末～中世以降の溝等の遺構で、掘削土量が異なるが20kgを越えるものもある。

調査区内で確認した製鉄関連の遺構は鍛冶炉と考えられるⅡ区のSX056くらいであるが、失われたものも予想できる。また、上流の24次調査で確認した8世紀後半の製鉄炉からの流れ込みもあろう。

(4) ガラス製品

河川032から2点のガラス製品が出土した。284はガラス丸玉で、平面形は径1.26cmの正円をなす。厚さは最大で0・90cm、最小で0.85cm、孔径0.39cmを測る。器面は風化し淡橙色を呈す。気泡は観察できないが、器面に孔に直交する方向の筋が見られる。巻き付け法による製作か。端部は平坦部があり回転擦過が見られる。孔内面は平滑である。285は小玉の1/4ほどの破片で径1.2～1.3cmほどに復元でき、高さ0.83を測る。緑色半透明だが透明度は低く気泡の観察はできない。器面には孔に直交する横方向の筋が見られる。孔の表面には横につぶれた気泡が密に連なる。端部の調整は見られない。



第31図 ガラス製品実測図1(1/1)

表4. 金属器・ガラス製品 1-3, 2-3, 3-3, 5-2区は河川中および斜面の出土

発掘回	次数	区	グリッド	遺構	器種	材質	長さ×幅 cm	厚さ cm	重量 g	備考
261	2022	51	6	河川032	銅鏡	銅	3.8 0.7	0.3	2.3	
262	2021	51	3-3-1	Ⅱ層上層	銅?	鉄	3.4 0.45	0.35	6.0	
263	2015	49	Ⅱ-2	G7	SP1716 (SR091)	刀子	3.65	1.2 0.35	3.3	古代瀬立柱建物柱穴 (1173集F85)
264	2009	51	6-1	4層 暗青灰色土	刀子か	鉄	6.05	1.0 0.35	6.6	
265	2004	51	3-1-1	Ⅱ層	刀子か	鉄	4.8	1.1 0.3	3.6	
266	2003	-	-	-	-	鉄	5.5	1.0 0.45	6.7	
267	2005	49	5-3	K4	SX2005 (くぼみ状)	鉄	5.1	1.05 0.5	9.8	
268	2018	49	Ⅱ	D8	SP1374 (SR080)	釘	3.2	0.55 0.5	3.1	古代瀬立柱建物柱穴 (1173集F79)
269	2016	49	I	C8	小環状102	釘	3.2	0.5 0.45	1.8	
270	2017	49	I	C9	SK0183	釘	4.3	0.5 0.5	5.0	古代溝
271	2010	51	6	3層	釘	鉄	4.5	0.75 0.5	7.9	
272	2006	51	1-2	包含層	釘	鉄	4.8	0.8 0.6	9.2	
273	2007	51	6-1	釘	鉄	4.7	0.95 0.8	6.2		
274	2008	51	3-3	F2	包含層414 Ⅱ層	釘	4.7	0.60 0.4	3.0	古代包含層
275	2005	51	3-1-1	Ⅱ層	釘	鉄	3.1	0.55 0.42	1.8	
276	2020	49	Ⅲ	G9	SP1411	釘	4.85	2.2 0.45	24.2	古代か
277	2014	49	Ⅲ	H9	SK167	釘	3.7	3.3 0.3	13.9	6世紀後半竪穴住居 (1173集F63)
278	2011	51	6-2	3層	釘	鉄	4.0	2.85 0.35	8.3	
279	2012	51	6-2	3層	釘	鉄	4.3	2.45 0.55	11.6	
280	2013	51	6-2	3層	釘	鉄	4.5	3.2 0.5	12.3	
281	2001	-	-	-	鋤・鋤先	鉄	15.2	2.5 0.8-1.2	126.3	
282	2002	-	-	-	鋤・鋤先	鉄	13.7	2.2 1.00	46.0	
283	2014	51	6-2	-	鋤・鋤先	鉄	4.5	1.45 0.8	10.3	
284	1015	51	5-2-3	河川 (032層)	小玉	ガラス	径1.26	0.8509	3.5	孔径0.29cm 器面風化 淡橙色
285	6144	51	3-3-2	4, 5層 (Ⅱ層)	小玉	ガラス	径1.13	0.83	1.2	緑色半透明

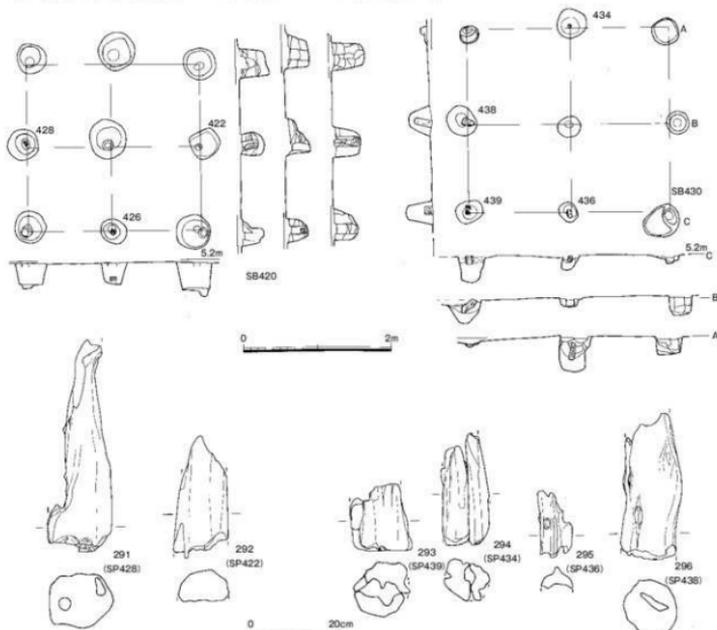
(5) 木製品

河川032からは建築材、農具などの多様な木製品が出土し、河川に近い柱穴のいくつかには柱痕が残っていた。未報告であったこれらの木製品について報告する。

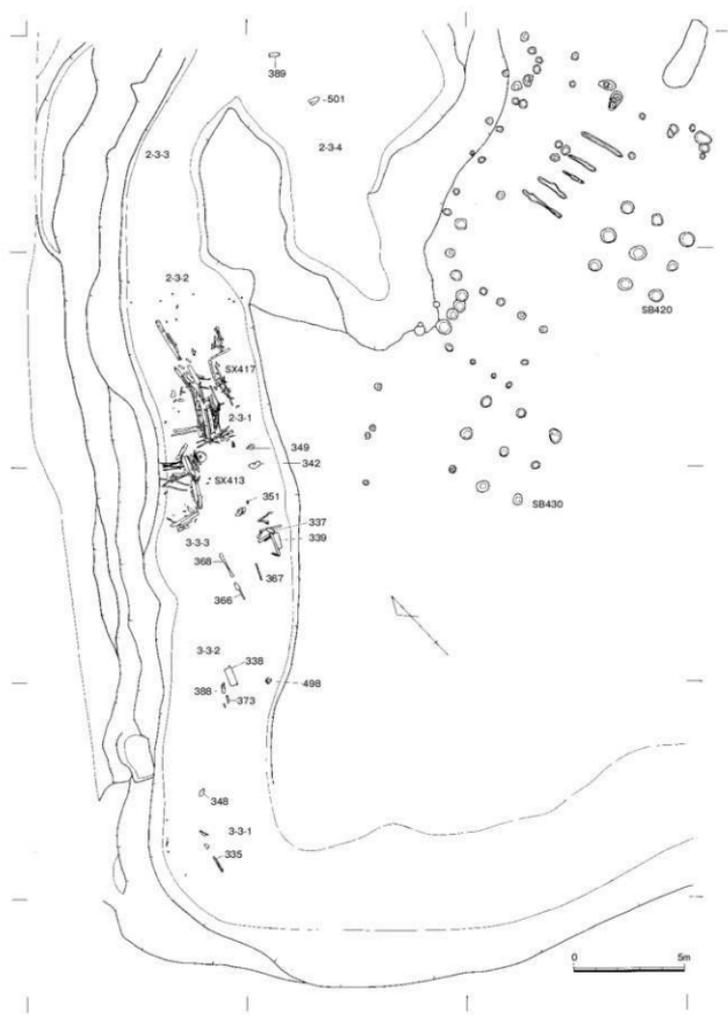
1) 柱穴出土の柱材

2、3区のSB420、430、SP459、5-3区のSB577 (SP2194)、SB615 (SP2224)、SP2394で柱材を確認した(第4、32図)。残りが良いもので径20cmほどの大きさである。そのうちSB420と430出土の6例を图示した。

SB420、430は谷底に近い2区に7mほど離れてほぼ同じ方向を向いて並ぶ2×2間の総柱建物である。遺物は少なくSB420から土師器の甕片1点が出土したのみで時期は決め難いが、周囲の遺構から6世紀後半を想定している。柱材はSB420の3基、SB430の4基に残っていた。そのうち5基の柱痕の樹種同定を行い、SB420の2例は291 (SP428) がクス、292 (SP422) はアワブキ属、SB430の4例はいずれもスタジイという結果を得ている。また、5-3区のSP2394の柱材はスタジイであった。さらに、291、293の放射性炭素年代測定を行いそれぞれ1585±20、1545±20 (年BP) というC14年代を得た。分析の報告は巻末に掲載している。結果については後に触れる。



第32図 SB420-430、出土柱材実測図 (1/60、1/10)



第33图 2・3区河川032実測図(1/200)

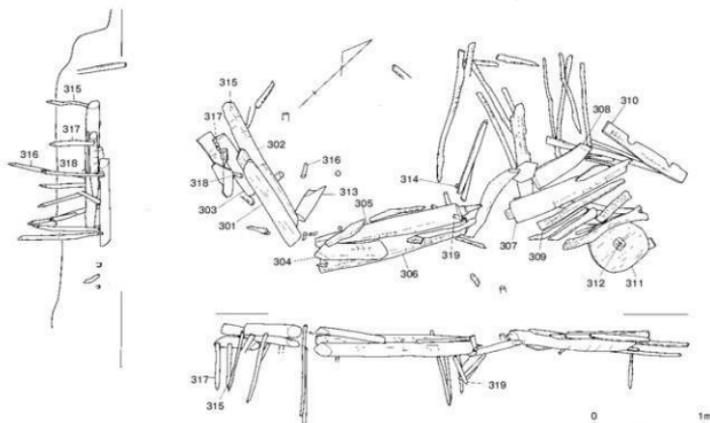
2) 河川032出土の木製品

河川032には前報告Fig.113のIV層以下の水気を多く含んだ粘土、粗砂、砂質シルトが堆積し、7世紀初頭までの遺物を含む。特に木質が残るIV層は主に6世紀後半の遺物が出土し、弥生時代後期のもも目立つ。木質は各所に見られるが、まとまって出土する場所は3-3、2-3区、5-2区に限られる。特に2-3、3-3区では杭で抑えたような状態がありSX413、417として前回報告した。これらの、まとまって出土した木製品に触れたのち、その他の河川中から出土した木製品について触れたい。出土位置等は表に記載している。出土位置がないものはおおむね2-3、3-3区出土である。出土位置を図化したものは第33～37図に示した。

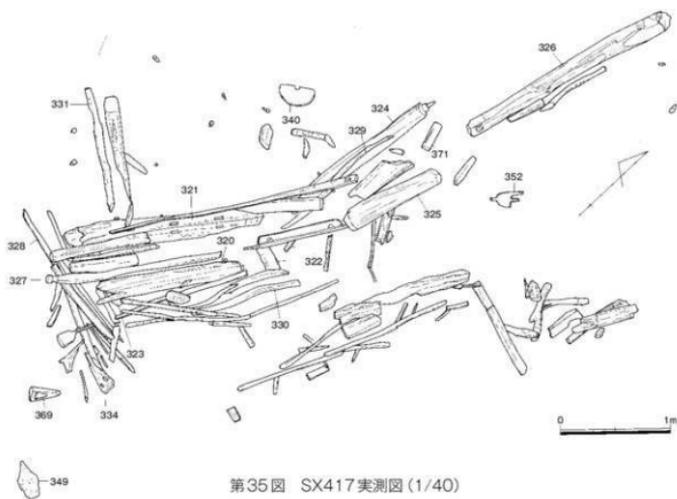
木製品の樹種については45点の同定を委託し、その結果を表に記載し、巻末に同定の報告を掲載した。それ以外に記載した樹種は目視による。また柱材321については放射性炭素年代測定を行っている。遺物は図、写真、表で遺物を示すが、出土後の劣化により当初の器形、加工痕等の情報が失われたものが多い。木取なども不確実なものが多い。

河川032内の遺構については前報告でもふれたが、遺物の報告の前に木製品に関わる遺構について触れておく。

SX413・417 (第34、35図) 2、3区で確認した建築材を中心とした木材のまとまりである。近接した位置にある。SX413がやや北側の斜面寄りに位置し、ややレベルが高いものが多い。出土した材が必ずしも同時期とは限らないが、特にSX413では河川の方向に直交して意識的に重ねたような状況があり、同時期に近いものであろう。また杭が建築材に接して固定するように打たれたものがある。SX417は河川の方向に木材が出土した。やはり材に接して打たれた杭がある。また材のまとまりより北側の空地に杭の分布が見られ、木材を固定していた痕跡とも考えられる。SX417の下流側には径4cm前後の杭が間隔をおいてではあるが河川を横断しており(前報告Fig.114 SX417)、このあたり一帯



第34図 SX413実測図(1/40)



第35図 SX417実測図(1/40)

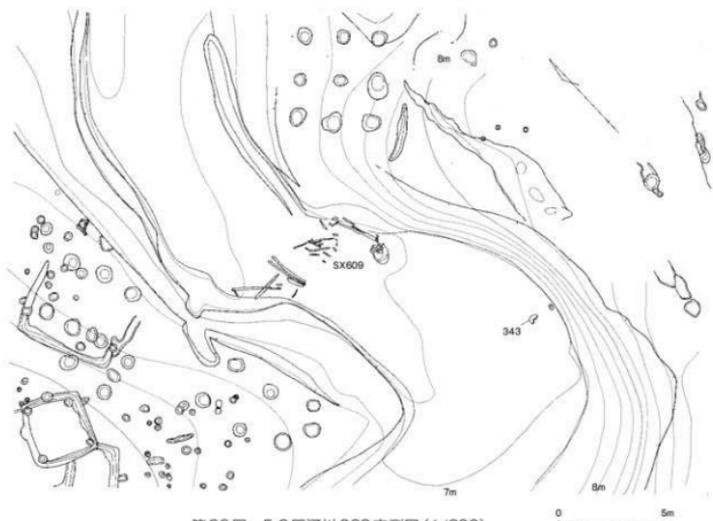
で流れを止めていたと考えられる。

SX609 (第36・37図) 5区で河川が大きく曲がった個所で材がややまとまって出土した。長さ2mほどの木材もあるが、特に加工は見られなかった。その中に槌、垂錘が出土した。近接して6世紀後半の須恵器坏身がまとまって出土したSX610があり、近い時期が想定されよう。

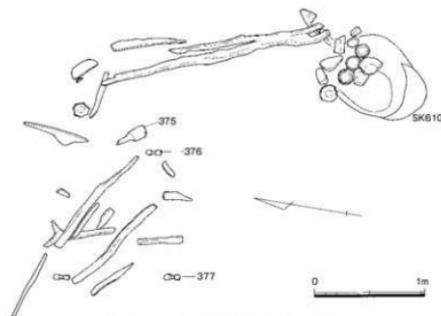
杭列(第4図)河川032には数か所に杭列が見られる。前報告でSX343、SX417下流の河川に直交して築かれた杭列に触れていた。今回3-3区西側の丘陵に沿った3本(第33図)、4区の5mコンタ付近で河川に直交する4本(第4図)を追加しておきたい。3-3区ではⅢ層から確認でき、杭先はⅣ層途中までに収まる。4区のはⅣ層で確認し、杭先は礫層に打ち込まれている。

出土遺物

301、302、303はSX413の上流側端に河川に直交して上からこの順に重なった状態で出土した。いずれも柱材で302は軸が造り出されている。これらの脇には杭が打たれ、固定した状態であった。304、305、306は河川の方にこの順に重なった状態で出土した柱材である。301等のすぐ東に接して位置し、斜面側との間を囲むかのように配されている。やはり材に接して杭が打たれ、固定した状態である。305、306には2段の軸が作りだされている。307、308、309は306の東に40cmほどの間をおいて流れの方に並んで出土した。307は軸が作り出され柱材で上部に4cm角、深さ3cmほどの穴を穿つ。一部の表面が黒変し、表面に傷が見られる。下端は裂けるように割れる。308は両側を刃のように成形した板材で器面に工具痕がみられる。309は角材の一部である。310は東側で出土した板材で、SX413のまともりからはやや外れる。挟り部分は木の節が外れた部分と思われる。306等の斜面側には河川に直交する方向に杭材などが出土している。311は南東端で出土したネズミ返しで、孔には312の槌が打ちこまれた状態で出土した(図版8)。313はSX413に囲まれた中で出土した白片で、破面でない箇所は白内面のみである。314から319はSX413に打たれた杭で径4~7cmほどの材の先端のみに加工が見



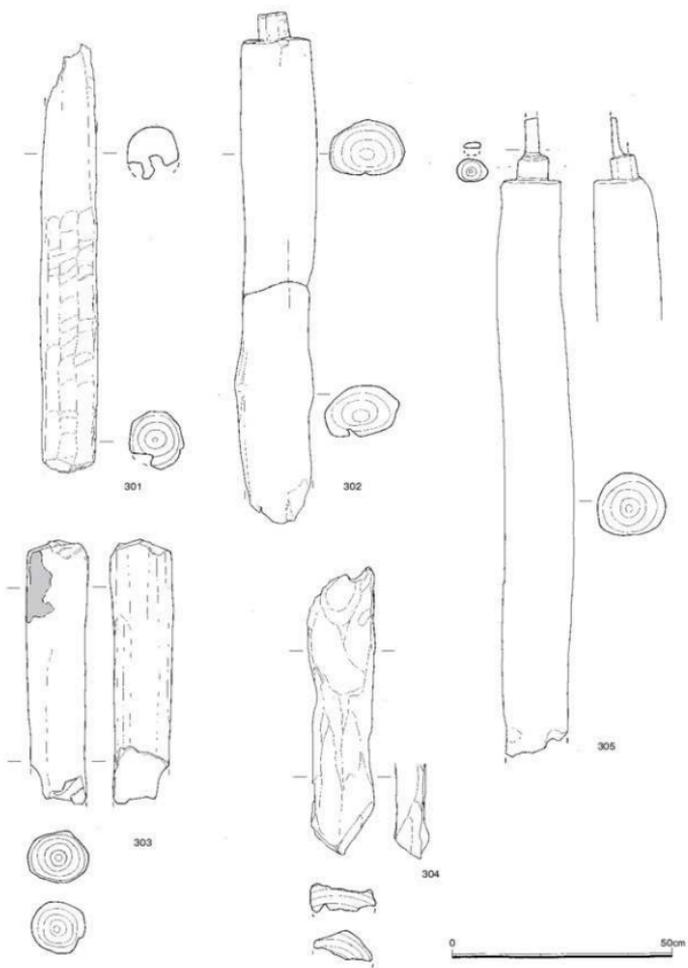
第36図 5-2区河川032実測図(1/200)



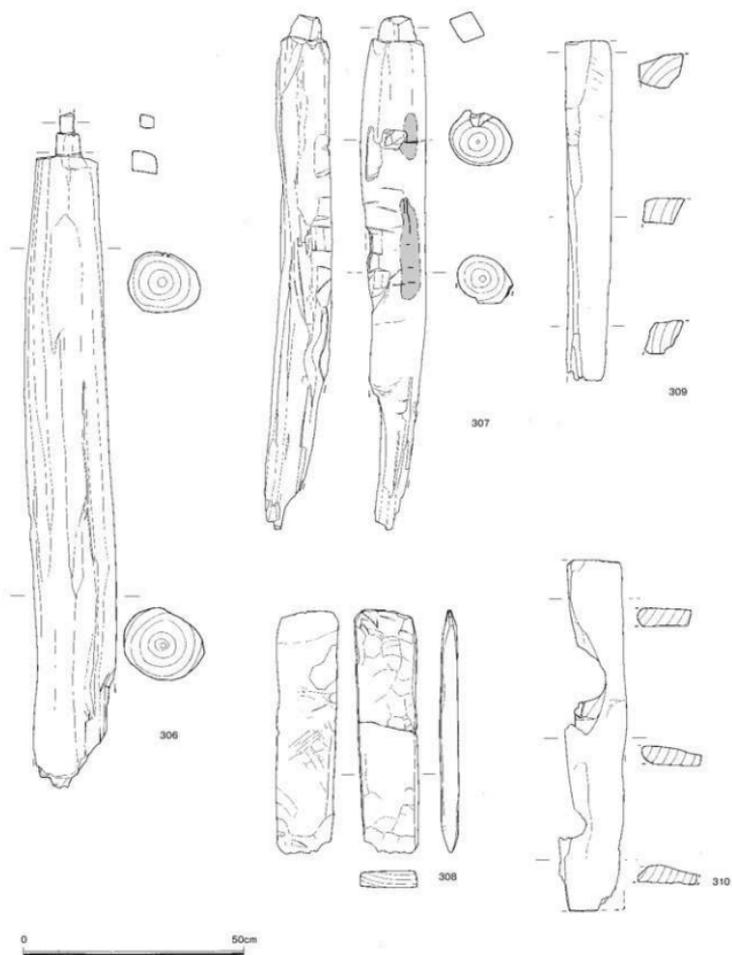
第37図 SX609実測図(1/40)

られる。樹種はクスノキ、タブノキ、サカキなどである。

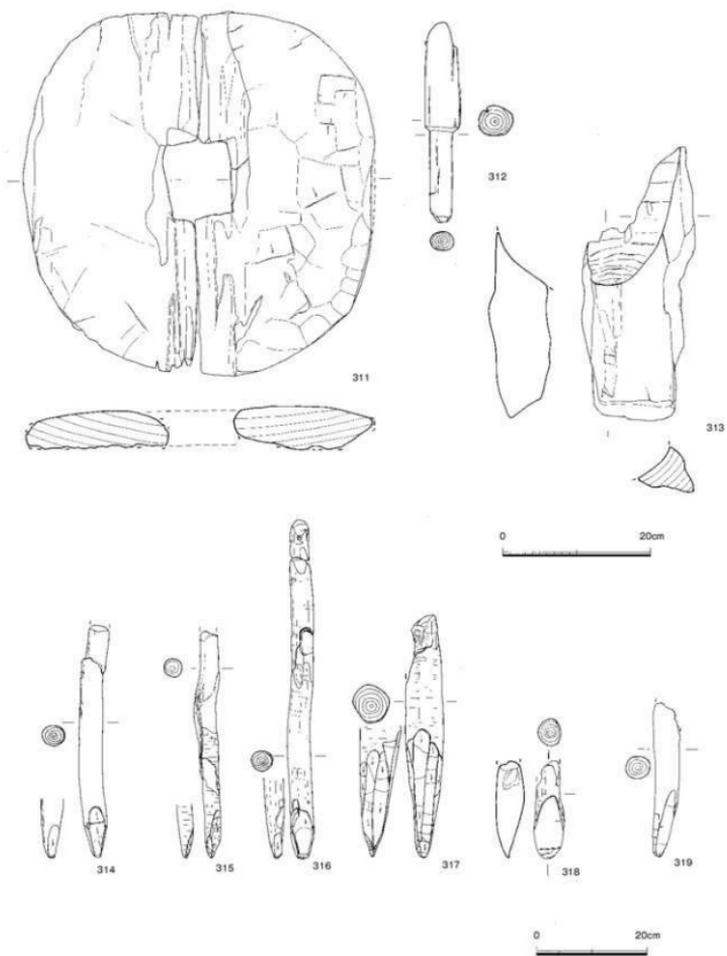
320から334はSX147とした河川の方向に連なって出土した木材である。327が西端に河川に直交して出土しその東に320、321、327、350などが河川の方向に並ぶ。320、321には接した位置に杭が打たれていた。322、324、325、326はそのさら東に連なる。320は軸を作り出した柱材で上部の表面を削る以外は加工が見られない。321は19×15cmほどの角材で、接する2側面にほぞ穴が見られる。腐食のため一側面の穴は不明確。残りが良い面で5×11cm、深さ7cmほどの穴を30cmの間隔を置いて3か所に穿つ。放射性年代測定を行い測定値1555±20(暦年代A.D.427-554)を得ている。322は断面鋭角のL字状に成形された木製品で建築材であろうか。一面は両端をやや薄く三角に成形するが片側は腐食し失った。他側面には径5.5cmほどの孔を穿つ。323は川の流れに連なる材中に直交する方向で出土した柱材の破片である。324は柱材で2段の軸を作り出す。表面全体に加工痕がみられ下端は破面。325は324と並んで出土した柱材で図の上端は片刃状に切断し、下端は成形痕が残る。表面には加工は見られず、一部は焼けて黒変し、樹皮



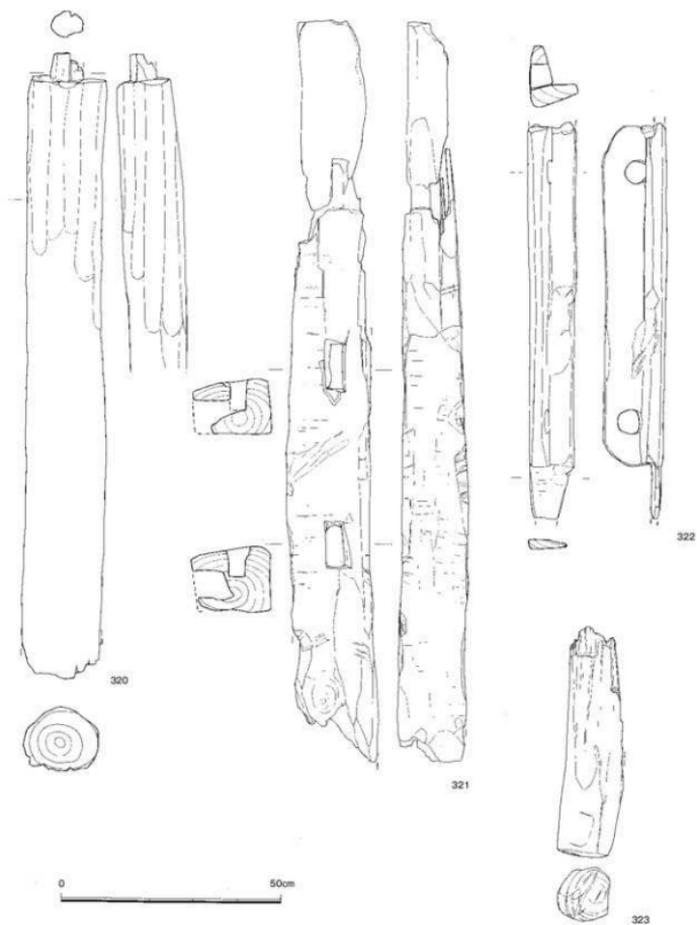
第38図 木器・木製品実測図1 (1/10)



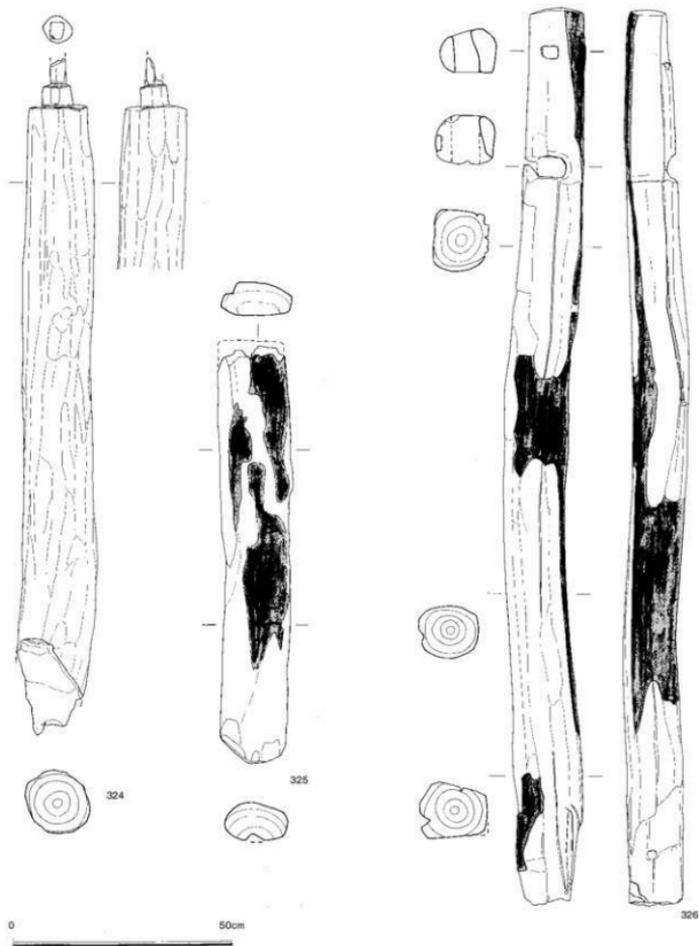
第39図 木器・木製品実測図2 (1/10)



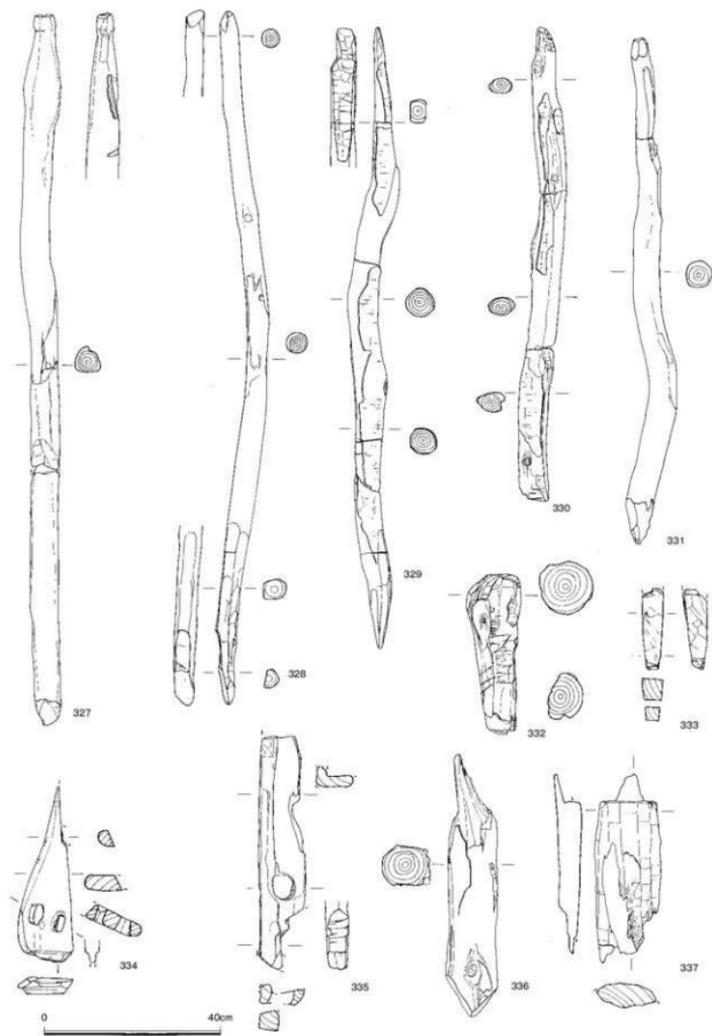
第40図 木器・木製品実測図3 (1/6・8)



第41図 木器・木製品実測図4 (1/10)



第42図 木器・木製品実測図5 (1/10)



第43図 木器・木製品実測図6 (1/10)

が一部に残る。326はさらに東で出土した柱材で、端部を成形し8cmの位置に4×3、34cmに7×5cmの孔を穿つ。上半は3面を加工し断面方形に近いが一面には樹皮が残る。下半も樹皮を残す面と表面を削る面があり、下端は方形に近い。327は頭部の作り出しと端部の杭状の切断する垂木で、他に加工は見られない。328から331は杭状に端部を加工し他に加工は少ない。333は杭として打ち込まれていた。断面四角形で全面に加工痕が残る。334は西端で出土した板材で2孔を穿つ。図の下端は割れ、上端は段を付けて薄く加工する。

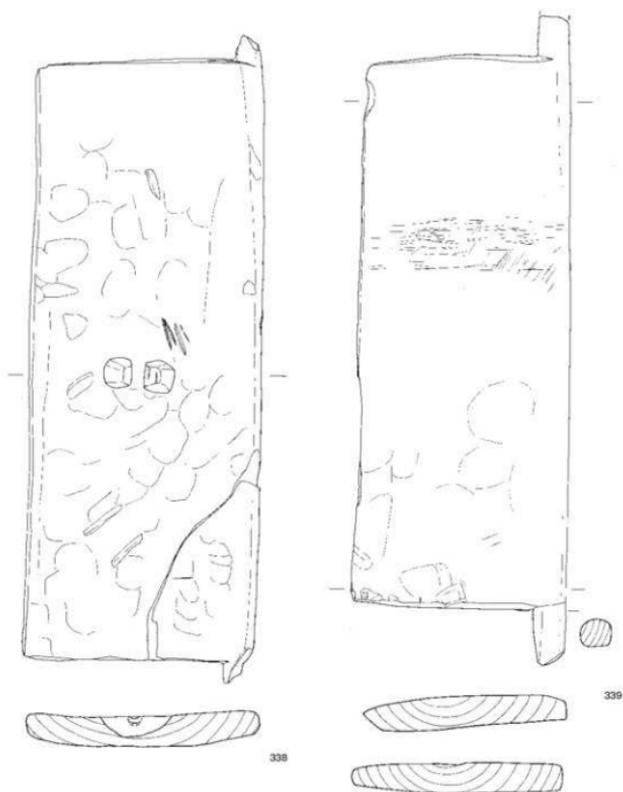
以下は河川内の各地点で出土した木製品である。335は断面L字状の部材で322と同様の形になると考えられるが、短辺の一部を除いて端部は破損している。径6cmほどの孔を空け、図の下端は段状に切る。336は柱材下端の2面から成形。337は柱材が縦に割られ、上端には軸を作り出し、表面には加工痕が見られる。338、339は扉で長さ89cmほどを測り両端に軸を作り出す。樹種はいずれもムクロジである。338には組受けの孔が通る。338の表面にはチョウナ状の加工痕が見られ、339には7cm幅の帯状の範囲に縦横方向の細い傷が多数見られる。338は砂礫層を一部掘り込んだ状態で出土した。340から347はネズミ返しおよびその可能性がある板材である。340は孔が小さく、軸受のタタリの可能性がある。343、344は5区で出土した。

348から359は鋏、鋏とその一部である。348から354は鋏で破損が激しい。348は出土時には頭部、鋏先装着部の段が明瞭に観察できた(図版10)。348、349、351は鋏先装着部を持つ。352は三又鋏で頭部にも1×2cmの孔を設ける。泥除け具との組み合わせに使用したものか。359はなすび型の鋏の頭部を想定している。360は柄鋏部を作り出した鋏の柄、361は端部に装着部を設けた鎌等の柄と考えられる。362は薄い板材辺で上下に2孔を施し、未貫通のくぼみが2箇所ずつ見られる。363から365は板材に柄状部を成形する。366は一本作りの鋏で不確定だが鋏先を装着したものと考えられる。367は長さ91cmの角材で、3～6cm間隔に配した方2cmほどのほぞ穴に、はめ込んだ材が残る。窓枠状の製品で両端部は面を成形する。368は枠で器面は荒れる。片端部は丸みをおびた成形で仕上げ、他の端部は直に仕上げられる。芯去材とみられる。366から368は砂層を5層砂層直上またはやや掘り込んだ位置で出土した。

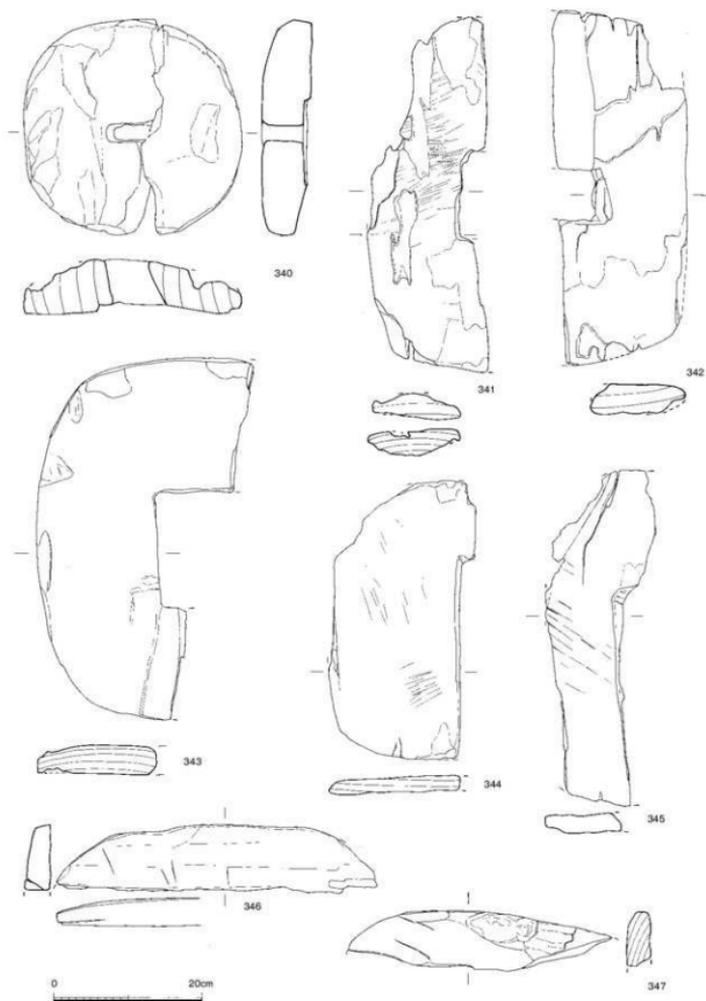
369は童燈で器面は丁寧な仕上げで背面の成形痕が残る。370は厚さ4cmほどの材を成形し軸部に5mmから1cmの孔を設ける。机等の脚を想定している。371は小型の容器で丁寧な仕上げで器面に成形痕が見られる。372は破片で不確かだが容器片と考えられる。373は机等の脚で組み合わせ部を3×4cmほどの孔をもつ。上部と端部以外は加工がない。374は横槌と考えられる。

375から377は5-2区南岸屈曲部で木材があつまるSX609(第37図)で出土した。375から377は取り上げ後の乾燥で収縮させてしまった。374、375は槌、376、377は網錘である。

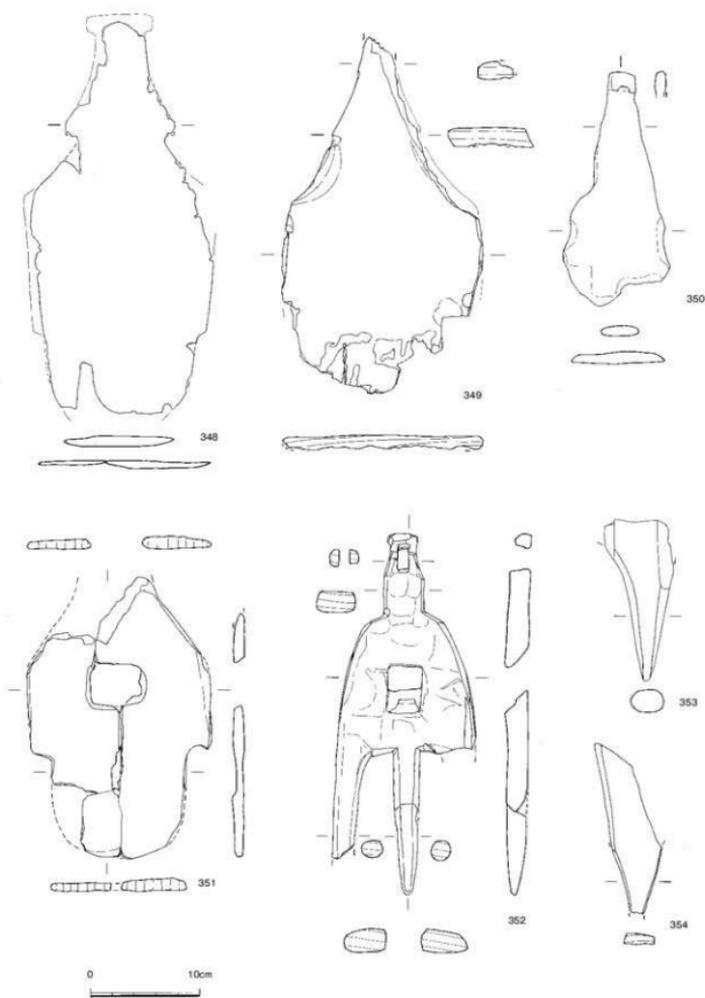
380から384は棒状の材の側面、端部に加工痕が見られる。網錘の一部か。378、379は頭部を作り出す。385から387は細く成形しておりヤスとした。388は薄く弧状に成形した材で容器の一部か。389は角材の一部に突起を作り出す。表裏面に刃物痕がみられ、作業台とした。樽未製品の可能性もあろう。2-3-4区での出土である。390は軸受(たたり)と考えられる。孔は不確かだが一辺5cmほどの方形になると考えられる。底面からの方形の掘り込みが見られる。391、392は各面に加工面が残る。393は板材の端部に突起が見られ先は折れる。1/3ほどが焼けて黒変する。394は棒状の材で下端は焼けて黒変し、上端は細くなるが加工によるものか明確ではない。他に加工痕は見られない。395から404は棒状の木製品で端部や側面の一部に加工が見られる。395は頭部を作り出す。接合しなないが同一個体と考えられる。以上触れた以外にも加工痕を持つもの杭、板材が出土している。



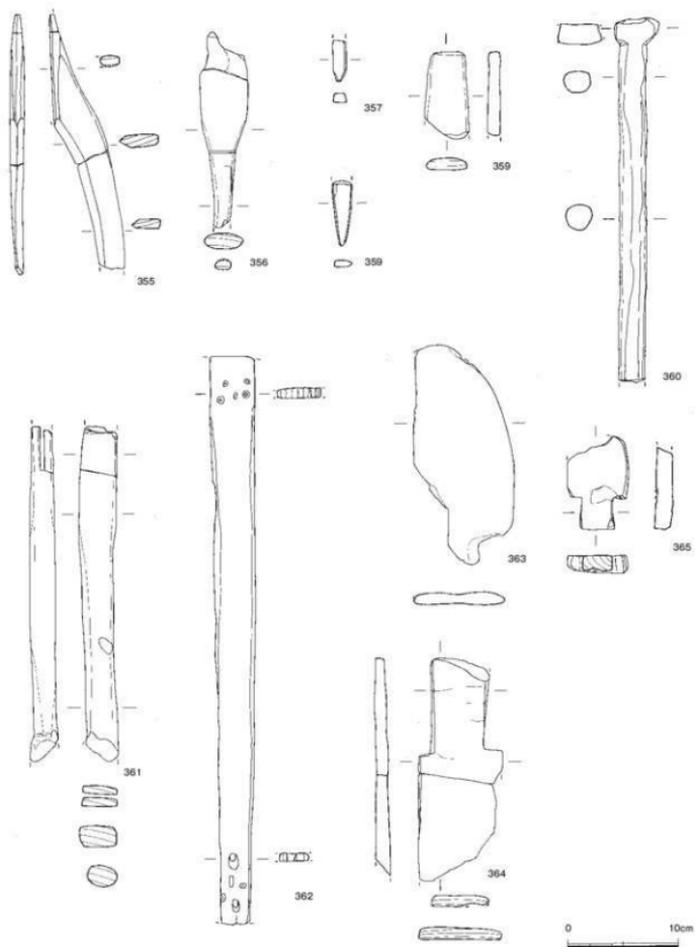
第44图 木器・木製品実測図7(1/6)



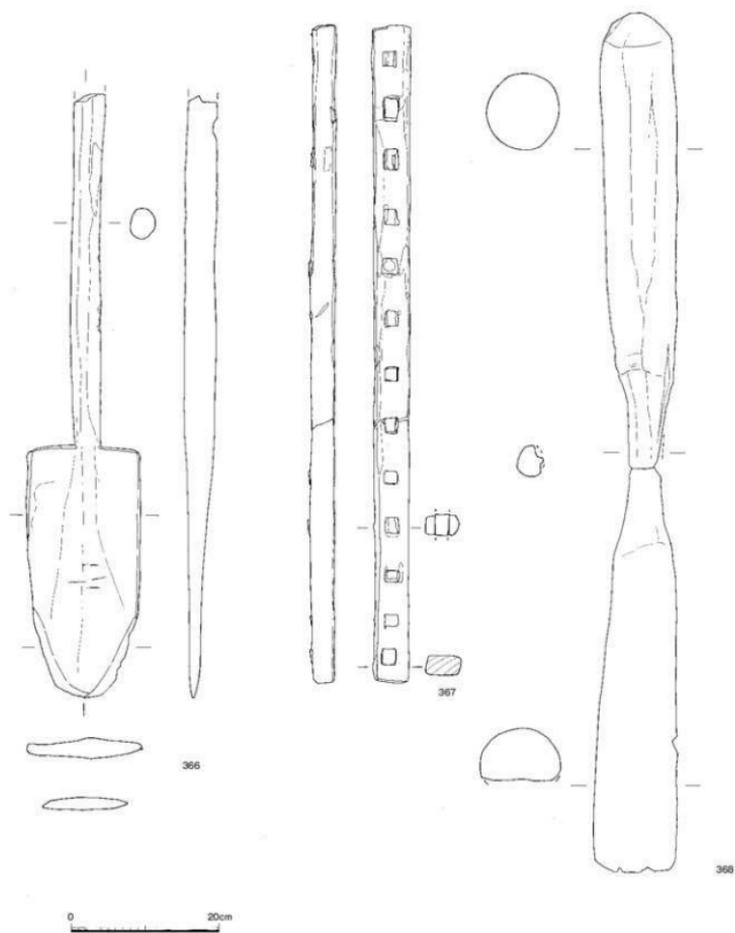
第45図 木器・木製品実測図8 (1/6)



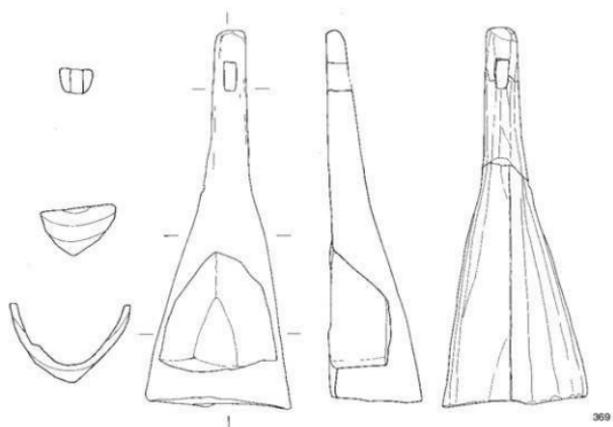
第46図 木器・木製品実測図9 (1/4)



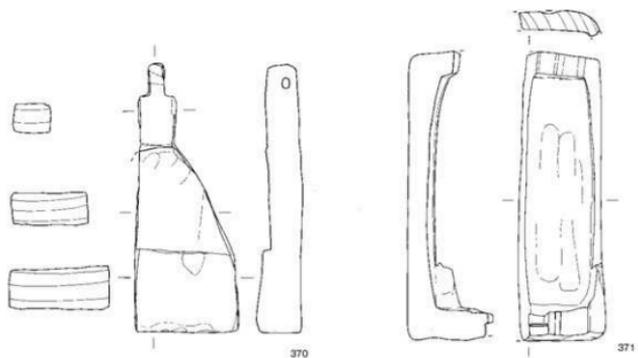
第47図 木器・木製品実測図10(1/4)



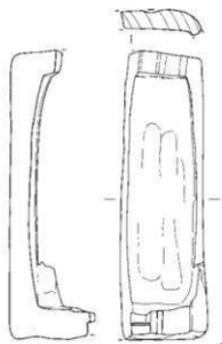
第48図 木器・木製品実測図11(1/6)



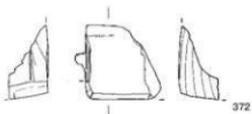
369



370



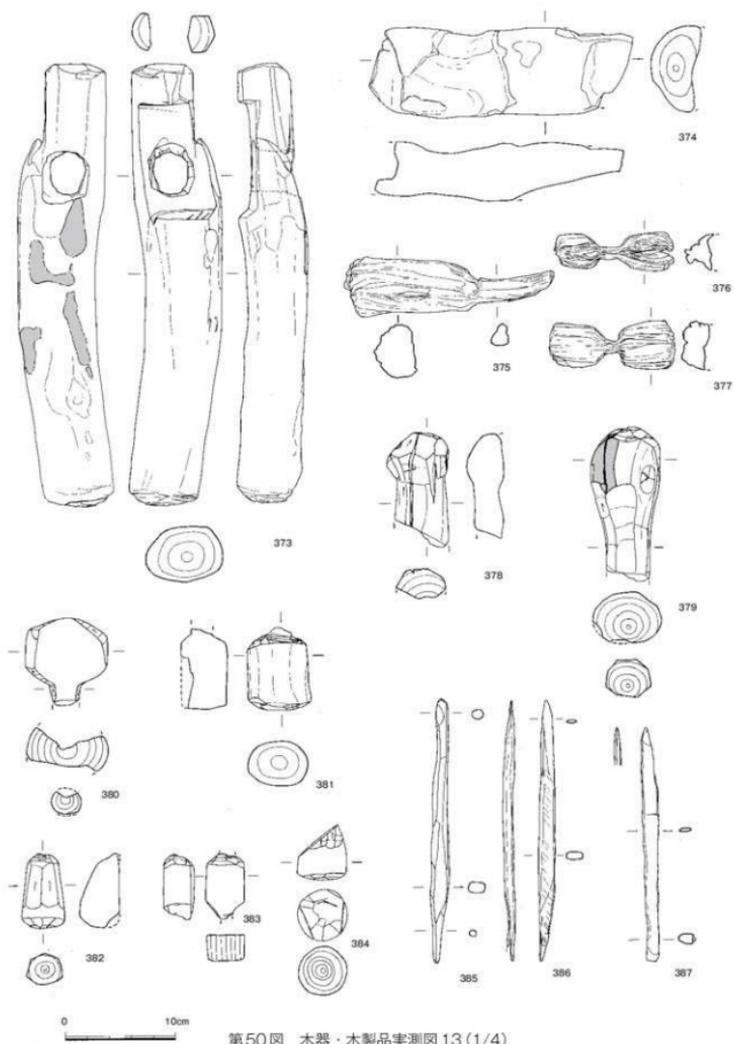
371



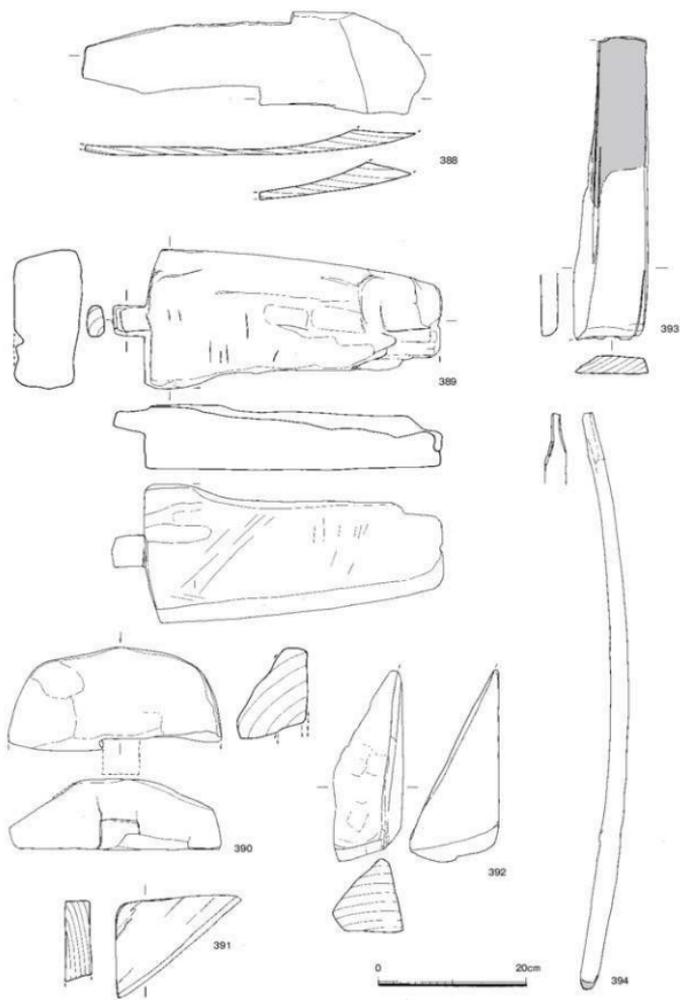
372

0 10cm

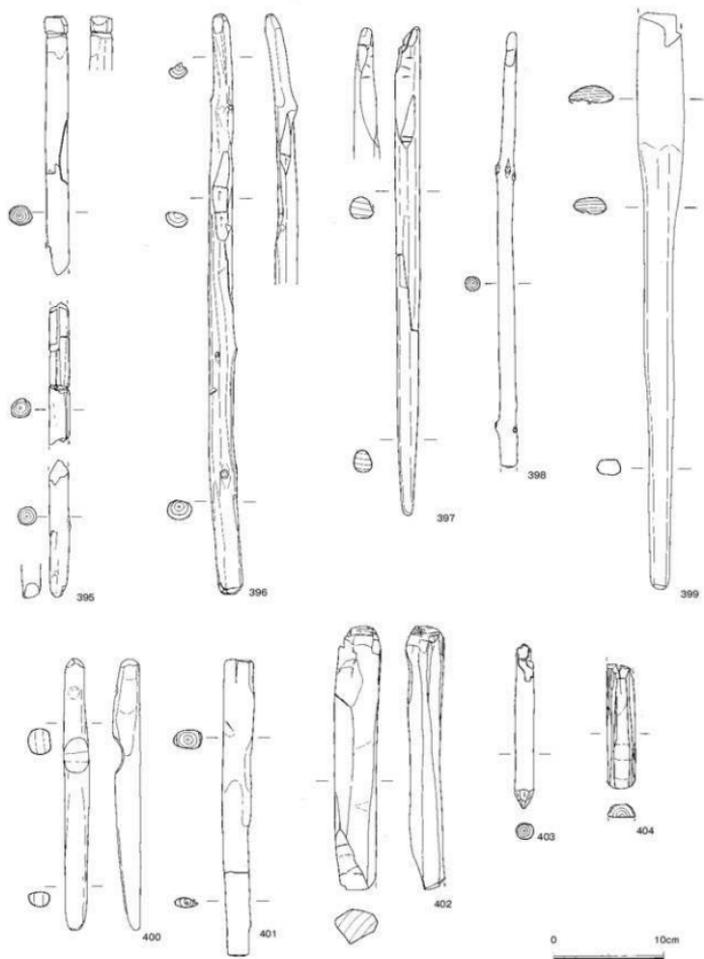
第49図 木器・木製品実測図12(1/4)



第50図 木器・木製品実測図13(1/4)



第51図 木器・木製品実測図14(1/6)



第52図 木器・木製品実測図15(1/4)

表5. 木製品

報告書 番号	取上 番号	建物 実測		遺構	層	分析 番号	素材	木取	器種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	備考	
291		W160	2-2	E4	SB420 - SP428	16	クスノキ	芯材	柱	487	14.5	12.5	火事受ける。C14年代1957±18 cal AD±0.37	
292		W163	2-2	E4	SB420 - SP422	12	アワブキ属	芯材	柱	28	12.5	7.2		
293		w162	2-2	E4	SB430 - SP439	18	スズジイ	芯材	柱	153	13	12	C14年代1545±20 cal AD±2.064	
294		W164	2-2	E4	SB430 - SP434	13	スズジイ	芯材	柱	26	11			
295		W165	2-2	E4	SB430 - SP436	14	スズジイ	芯材	柱	153	7.8	3.7		
296		w161	2-2	E4	SB430 - SP438	15	スズジイ	芯材	柱	336	13.3	12.2		
301	85	w031	3-3-3	F2	ss113 南西	B b 扁	30	ヤナ属	芯材	柱	98	13	13	端部を加工。下手は表面を削取りし断面多角形。上手は未加工。
302	87	w034	3-3-3	F2	ss113 南西	B b 扁	41	アワブキ属	芯材	柱	117	18	12.5	一段輪(断面多角形)。端に加工痕跡がみえる。全周に溝加工。
303	86	w029	3-3-3	F2	ss113 北西	B b 扁	40	ヤナ属	芯材	柱	61	13.8	12	一部欠け。断面削り。上端加工痕。
304	87	w030	3-3-3	F2	ss113 南西	B b 扁			柱	66	15	6	芯材材を半切か。先端を四角から八角状に成形。端面の加工は見られない。	
305	88	w029	3-3-3	F2	ss113 南東	B b 扁	42	アワブキ属	芯材	柱	148	15	14.5	二段輪(断面多角形)。表面の加工は見られない。
306	89	w023	3-3-3	F2	ss113 南東	B b 扁	43	アワブキ属	芯材	柱	156	16	16	二段輪(柱材受付)。断面多角形。本体全面削り加工する彫削と加工がない部分がある。
307	91	w035	2-3-1	F2	ss113 北東	B b 扁	44	スズジイ	芯材	柱	118	15	12	輪(断面四角形) 上部に4cm角ほどの穴。表面一段削取。中には部分的に削り加工がみえる。
308	94	w028	2-3-1	F2	ss113 北東	B b 扁		板目	板材	36	14	4	両端を角状に成形。表面に削り痕。表面には細かな凹傷。	
309	92	w018	2-3-1	F2	ss113 北東	B b 扁		芯材	角材	76.2	10.5	7.5	角材の一部。2辺が生える。角材の材か。	
310	95	w019	2-3-1	E2	ss113 北東	B b 扁			柱	808	13.8	13.4	持ち手は断面が欠けたものと割れによる。一部削りて差支。	
311	96	w135	2-3-1	E2	ss113 北東	B b 扁		クス(目視)	板目	ネズミ返し	50	48	6	2辺削合
312	96	w103	2-3-1	E2	ss113	B b 扁	11	タモミシテツバ	柱	横輪	27.4	4.9	4.2	輪部は既述の少明器部表面は横長。朝輪33×26cm
313	119	w102	3-3-3	F2	ss113 南西	B b 扁	9	コナラ属アサギザン属	芯材?	白	37.3	15.5	8.3	全周はすべて断面。
314	113	w166	3-3-3	F2	ss113 南東	B b 扁	29	ヒサヤナ属	芯材	柱	43	4.3	4	下端3面の加工。磨殺残存。
315	104	w167	3-3-3	F2	ss113 南西	B b 扁	26	ササキ	芯材	柱	41.7	3.5	3.3	下端1面の加工。磨殺残存。
316	117	w168	3-3-3	F2	ss113 南西	B b 扁	31	アワブキ	芯材	柱	62.5	4.2	3.2	下端1面の加工。磨殺残存。
317	106	W169	3-3-3	F2	ss113 南西	B b 扁	27	クスノキ	芯材	柱	45	7.1	6.7	下端6面の加工。磨殺残存。
318	116	w171	3-3-3	F2	ss113 南西	B b 扁	30	クスノキ	芯材	柱	18	5.3	4.3	下端6面の加工。
319	111	w170	3-3-3	F2	ss113 南東	B b 扁	28	クスノキ	芯材	柱	28.5	4.5	4	下端5面の加工。
320	53	w021	2-3-1	E2	SX417 中	B b 扁	37	アワブキ属	芯材	柱	144	18	14.6	一段輪(横断面円形) 上部は削り加工。中位以下は加工なし。下端は断面。
321	52	w024	2-3-1	E2	SX417 中	B b 扁	36	ヤナ属	芯材	柱	170	19	15	断面方形。裏面削し。 朝輪(2面削合)木欠取部(5×11cm)に裏面削し(削合しない)。頭は断面を含む。一部に輪5cmほどの加工痕。C14年代1555±20 cal BP年代AD.427-354)
322	34	w033	2-3-1	E2	SX417 中	B b 扁	35	クスノキ	芯材	柱	91	14.5	4.5	断面1次形。丹波の断面は削り取りはみえるが欠け。2辺(厚5cm)
323	58	w036	2-3-1	E2	SX417 南	B b 扁			芯材	柱	53	12	12	下端面を成形。頂の表面は削り取る。
324	54	w025	2-3-1	E2	SX417 中	B b 扁	38	スズジイ	芯材	柱	154	17	16	二段輪(柱材受付)下部多角形。上端四角形。表面全体にヤリザン技法。下端は削れる。
325	31	w032	2-3-1	E2	SX417 中	B b 扁	33	ヒサヤナ属	芯材	柱	95.2	16.4	9	上端1/4位の切削。下端面を成形。表面削り出した部分のみ。一部に磨殺残存。
326	33	w022	2-3-2	E2	ss117 北	B b 扁	8	ササキ属	芯材	柱	205	15.3	12.5	2か所に孔(4×3, 4.6×5)。断面を削り。断面削り加工。上部、下部は断面方形断面に加工。
327	38	w027	2-3-1	E2	SX417 中	B b 扁	34	ヒサヤナ属	芯材	重木	163	8	7	上端成形。有銅板加工。欠き込み。一部磨殺残存。下端柱先状。3片接合。
328	46	w026	2-3-1	E2	ss117 南西	B b 扁			芯材	558	5.4	5.4	上部削りに関する。下端1面に加工。	
329	45	w156	2-3-1	E2	SX417 中	B b 扁		クスギ? (目視)		1424	7	6	柱材? 両面削合。磨殺残存。	
330	37	w157	2-3-1	E2	SX417 中	B b 扁			芯材	1078	7	4.5	下端面削り。上端切削。端部以外未加工。磨殺残存。	
331	35	w038	2-3-1	E2	ss117 北西	B b 扁			芯材	116	6	6	上部円筒を削り。上端4方から削り。下端面削り。	
332	47	w137	2-3-1	E2	SX417 中	B b 扁			芯材	37.1	12	12.5	多面体多角。磨殺残存。裏面削れる。丸れる。	
333	42	w136	2-3-1	E2	SX417 中	B b 扁			芯材	187	4.6	5	断面方形。加工痕。	

報告書 №	収上 番号	遺物 写真		遺構	層	分析 番号	種類	本取	器種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	備考	
334	25	w132	3-3-1	E2	ss417 南西	第b層	スズ (日規)			405	125	3.6	小穴 穿孔?	
335	15	w014	2-3-1	G2		11層 (B)		志志		333	106	3.4	細線字跡に施し透した材 穿孔 (6×5.2) 全体に穿孔欠陥	
336		w154	2-3-3	D2				志持	柱?	403	11.8	10.5	下縁面から取付痕跡	
337	16	w013	3-3-3	F3			32	サキ属	柱	47	15	5.6	縦溝 先がゆるはず 表面を幅4.5cmで 面取り	
338	11	w011	3-3-2	F2		11層 (B)	47	ムナロジ	板	892	31.5	4.4	2片接合 扉中央に接受け穴 表面の みずり面を削り加工痕が見られる	
339	17	w012	3-3-3	F3		11層 (B)	45	ムナロジ	板	896	29	4	2片接合 扉力部に接受け痕が幅7cmの 痕跡に重なりて見られる	
340	20	w015	2-3-1	E2				クヌカ (日規)	板	305	29.5	7	半分 2片接合 表面を削るが丁寧な 成形が見受けられ、裏に異い加工で 段が残る 柱の端部分	
341		w138	2-3-1	EF2-3		第1層-船舳	クヌカ (日規)	板	木ズミ返し	49	16.4	3	半分 方形孔一辺5cm	
342	18	w133	2-3-1	F3	上層ハルト	11b (B)	クヌカ (日規)	板	木ズミ返し	50	47.2	6	半分 方形孔一辺5cm	
343	w03	w125	5-2	H6	ss622遺物集中			クヌカ (日規)	板	木ズミ返し	50	29	4	孔一辺10cm以上
344		w131	5-2-1	H5		黄色粘土 (灰)	カン (日規)	板	木ズミ返し・ 蓋?	37.5	20	2	上面に万物痕跡多し	
345		w123				クベカなし	クヌカ (日規)	板	木ズミ返し?	46	15	2.5	扉面にクヌカ 方形の孔。両端は平まて いる?	
346		w122	3-3-2-3	F2-3		11層粘土砂 混じり (B)	クヌカ (日規)	板	木ズミ返し?	43.5	(9)	3.6		
347		w121	3-3-2-3	F2-3		11層粘土砂 混じり (B)	クヌカ (日規)	板	木ズミ返し?	35.8	(8.2)	3.3	破片 一部剥離片	
348	4	w002	3-3-1	G2		11層積下 (灰)	カン (日規)	板	平織	36	15.7	1	高による縦溝 反り割 継ぎ接合部	
349	82	w004	2-3-1	E3			カン (日規)	板	平織	32.7	18.3	1.8	変形大 継ぎ接合部	
350		w129-1	5-3-3			黄色粘土 (灰)			網	21.6	14.8	1.2	全平び割か 裏り悪い 鳥害含む	
351	9	w003	3-3-3	F3			カン (日規)	板	平織	25.9	16.8	1.2	継ぎ接合部	
352	19	w001	2-3-2	E2			カン (日規)	板	三又織	33.2	13	2.2	継ぎ接合部	
353		w142				クベカなし	カン? (日規)		継ぎ接合部?	14.8	7.3	2		
354		w147	2-3	D2-2-3		灰白-一般砂 層	セイ (日規)	板	網	15.6		1.1		
355		w148	2-3	D2-2-3		灰白-一般砂 層			網先	24		1.2		
356		w146	2-3	D2-2-3		灰白-一般砂 層	カン (日規)		三又織? 網?	18	4.5	1.5		
357		w130	2-3	D2-2-3		灰白-一般砂 層			網	3.8	1.2	0.9	断面方形	
358		w149	2-3	D2-2-3		灰白-一般砂 層			網・網先?	6	1.8	0.7		
359		w145	2-3	D2-2-3		灰白-一般砂 層	カンカ (日規)	板	全平び割?	8	4	1.2		
360		w006	1-3-3	H3		最層下-灰 層上	カン? (日規)	志志	網	33.4	4	2.3		
361		w126	3-3-2	F2-3		11b下層 (灰)	カン (日規)		網?	31.1	3.4	2.3		
362		w134	2-3-1	EF2-3		第1層-船舳	スズ (日規)	板	加工板材	32	4	0.9	穿孔は貫通 (上：縦に2孔、下：縦に 2孔) と本取溝 (上下各2つ) あり	
363		w115	2-3-1	C3		第b層から 船舳粘土	5	ムナロジ	板	加工板材	20.3	9.3	1.2	
364		w118	3-3-2-3	F2-3		11層粘土砂 混じり (B)	カン (日規)	板	加工板材	20.3	7.7	1.3		
365		w106	3-3-2	F2-3		11b下層 (灰)	22	サキキ	板	継ぎ接合部 材	8.5	5.6	1.7	継ぎ接合部材
366	6	w009	3-3	F2		砂層 (B)	カン? (日規)		網	82.7	15.4	4.4		
367	10	w005	3-3-2	F3		11層 (B)	スズ (日規)	志志	窓枠状	91	4.5	3.3	1.7×1.9 - 2.8×2.23との有数の孔に差 し込んだ材が見える。孔の間隔は3.3 - 5.6とよばれる	
368	5	w010	3-3-2	F2		船舳砂層	46	コナラ属アキ ダシ属風	柱	11.9	11	10		
369	18	w008	2-3-1	E2			4	クヌカ	志志	網	35	13.3	8.3	直径 2.6×1.3の孔
370		w007		C3		第b層	1	スズ	板	24.6	9.4	4.1	扉部の本製品か	
371	27	w114	2-3-1	E2	ss417 北	第b層	6	スズ	志志	26.8	8	7.8	器物 扉面に加工痕	

報告書 番号	出土 番号	遺物 写真		遺構	層	分析 番号	素材	本取	器種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	備考
572		W143		ツバなし			志志	志志	弥生3片	7.7	6.8	3.6	断面平直
573	130	W107	3-2	G2			ヤブツナキ	志志	瓦葺材 舞	40	7.6	5	穿孔(4×32)、段あり 表より上は崩 落りし下は表面加工なし 下部は印入 転るようには切削 磨殺残存
574		W132	2-3	D12-3			瓦葺	志志	焼物?	23	8	5.5	一部が破片内にくぼむ
575		w174	2-2	66	S3009 w3				網紐	19.2	5.5	3.7	乾無状態
576		w173	2-2	66	S3009 w2				網紐	11	3.6	2.3	平切 乾無状態
577		W172	2-2	66	S3009 w1				網紐	11.4	4.4	2.5	平切 乾無状態
578		W140						志志か	有線状 瓦?	10.5	5.6		断面凹取
579		w119	3-2-3	F2-3			広葉樹(日規)	志志	有線状木製品	14.1	6.4	5	全面丁寧加工 面取り 一部磨ける
580		w107	3-2	F2-3		24	ヤブツナキ	志志	網紐	8	7.5	2.7	
581		w116					広葉樹(日規)	志志	網紐か	7.6	5.7	4.2	両側に加工痕
582		w158	3-2-3	F2-3			広葉樹(日規)	志志	網紐か	6.9	3	3.6	上部加工と破断面、断面下部は丁寧な 成形
583		w129	3-2	F2-3		10下層(日)	スギ(日規)	志志	網紐?	7	3.5	2.4	施設部材
584		w159					ヤブツナキ	志志	網紐?	5	4.7	4.5	断面下部は丁寧な成形
585		w124	2-2				イヌ(日規)	志志	ヤス	24.3	1.7	1.1	
586		w109	3-2	F2-3		10下層(日)	スギ	志志	ヤス	24.8	1.6	0.8	先端で? 断面にキズ 基部断面から崩る
587		w112	1-3-3	B3		3層下~4 層上	イヌノキ(日 規)	志志	ヤス	21.5	1.4	1	
588	12	w016	3-2	G2		11層(日)	スチコロジ	器器	器器	46.5	13.8	11	*物付 軌跡
589	81	w101	2-4	E13		10	ツナキ	志志	作業台	45.5	19.5	9.5	表面に瓦葺残あり 標本製品の可能 性
590		w108				25	クスノキ	志志	輪受(ワラ)	19.9.5	9.8	1/2	5cm方孔
591		w128	3-2	F2-3		10下層(日)	スギ(日規)	志志	板目	17	14	3.5	
592		w155	3-3	F2		土層4-414付近	瓦葺	志志	瓦材	26.5	12.4	9.5	木目調
593		W151	2-3	D12-3			瓦葺	志志	板目	47	10.3	2.8	尖を削り差込 土層は磨殺で加工の有 無不明
594		w027						志志	標本木製品	79	2.5	2.5	片側断面凹凸 土層は磨殺で加工の有 無不明
595		W141					広葉樹(日規)	志志	有線状		2.2		同一個体と考えられる破片あり
596		w127	3-2	F2-3		10下層	広葉樹(日規)	志志	標本木製品	53.6	2.5	2.2	両端を加工 組み合わせた網紐の可能性
597		w111	3-2	F2-3		10下層	スギ(日規)	志志	標本木製品	45.1	2.3	2	両端を加工
598		w110	3-2	F2-3		10下層	マツ(日規)	志志	標本木製品	40.2			(B1.3 枝をそのまま使用 端部を片側から崩る
599		W130						志志	標本木製品	32.9	4.2	1.6	面取り
600		w120	3-2-3	F2-3			広葉樹(日規)	志志	標本木製品	35	2.3	2.3	折り
601		w113	1-3-3	B3		2層下~4層1.2	クスノキ	志志	標本木製品	27.2	2.8	1.9	
602		W144						志志	標本木製品	24.2	4.2	3.5	両端加工 断面面取り
603		w130	2-2	66	w609		広葉樹(日規)	志志	標本木製品	15.3	1.7	1.7	両端を加工
604		w117	3-2	F2-3		11層1112区	ヒノキ(日規)	志志	標本木製品	11.4	2.6	1.2	全面丁寧加工

(6) 土器・土製品

各遺構、包含層等出土の土器類は前回報告しているが、未報告であった河川032の1、2区の遺物、前報告の遺構などで漏れていたものを掲載する。

1区 1区はⅢ層以上が工事用調整池の掘削で失われており、Ⅲ層下部からⅣ層の掘削を行ったが、Ⅳ層の層厚が薄く遺物は少ない。また古墳時代以降の遺物より弥生土器の割合が多い。411から414は土師器の甕で、413の外面には回転掻目、平行叩き痕が見られる。415から420は弥生土器の甕、421から430は壺である。431は長頸の壺で器壁が薄い。432、433は壺、鉢等の脚、434、435は高杯の脚部、436、437は器台である。436から445は壺、甕の底部で平底からレンズ底が目立つ。弥生土器は後期前半から中頃を主体とする。

2区 北側の斜面部の一部が削平を免れており、一部1層からの掘削を行った。446~448がⅠ層出土で446は龍泉窯系の青磁碗片、447は瓦質足鍋の口縁部、448は瓦質の捏鉢である。449~452はⅡ層出土で、449は白磁碗Ⅳ類、450は白磁碗、451は須恵器の坏で内外面に灰赤または緑釉を施し、内面に重ね焼きの痕跡が残る。452は白磁の壺で淡い緑灰黄色釉を施す。器面は風化する。453~456はⅢ

層出土で453、454は須恵器、455と456は土師器の坏と甕で、456外面には叩き痕が残る。457から483は470、471、474、479がV層出土でそれ以外はIV層出土である。457から462は須恵器の坏身、463から465は土師器の甕、466～469は高坏である。470から472、478、479は弥生後期の壺、473から476は支脚、477は器台。480から484は壺、甕の底部でレンズ状底が目立つ。484はⅢ層の出土。

3区 3区の遺物は前回報告しているがIV層出土遺物を追加する。485は土師質の脚部で外面にわずかに叩き痕が残る、挿目と部分的にナデが見られる。内面は回転ナデ痕が明瞭である。486は須恵器の坏部で脚がつく。487から489は支脚で488は体部、上面に叩き痕が見られる。487、489は器面が荒れるが刷毛目調整が見られる。491～493、496は弥生後期の壺、甕の底部で、平底でややレンズ状を呈す。494は弥生後期の複合口縁壺、495は甕である。497は土師器の取手付の甕または瓶で内面の削り目が目立つ。498は須恵器の甕で器面は淡橙色だが固い。外面は平行叩きののちに挿目を施し軽く、全体に煤が付着する。内面の当て具痕は深い。SX413の木材に近接してつぶれた状態で出土した。499は弥生後期の甕で1/3からの復元。500は弥生後期の壺で胴部径は1/6弱からの復元で不確かである。

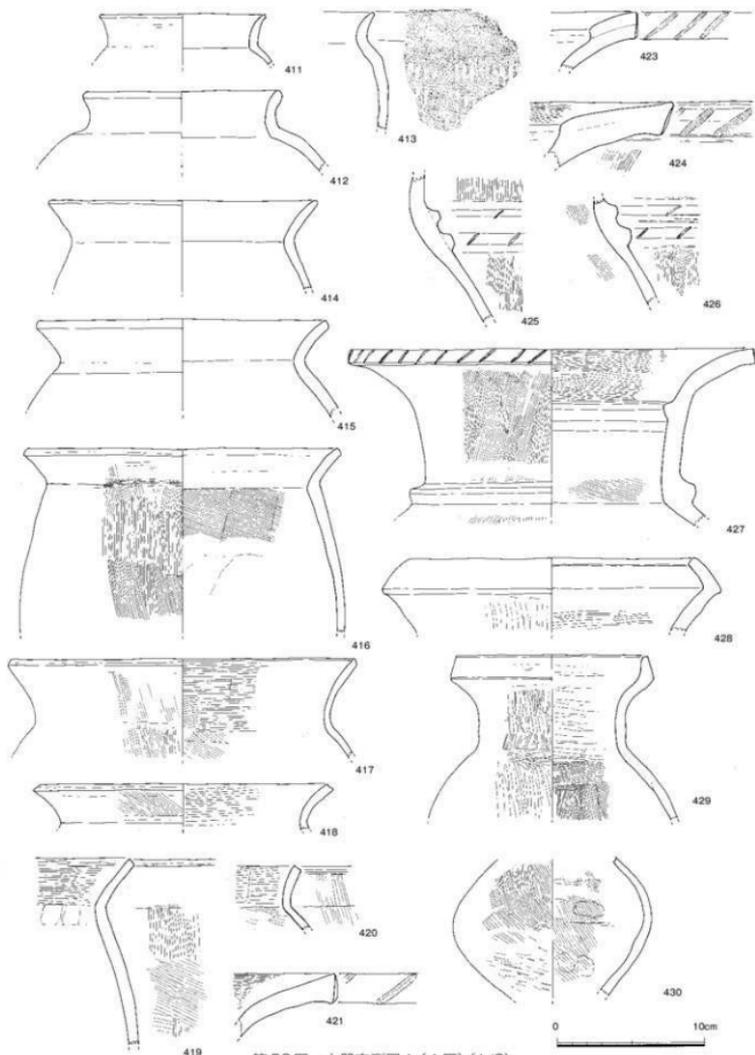
501は2-3-4区でつぶれた状態で出土した弥生後期の甕で胴下部から底の一部を欠く（第33図）。

5区 502から525はI7グリッドの河川南岸斜面の包含層（第4図）出土遺物で上、中、下層に分けて取り上げた資料である。順に包含層519、601、602の注記を行っている。下層は河川のIV層に相当する。502から506は上層出土で、502は緑釉陶器碗の小片で深い緑色の釉を施す。503は黒色土器Aの碗、504は土師器碗、505は須恵器の皿である。506から514は中層の出土の須恵器でⅢ層に対応すると考えられる。515から524は下層出土で515から518は須恵器、523までは土師器である。517は外面にヘラ記号が見られる。520は鉢で研磨調整が残る。521は鉢で内面に暗文風の研磨を施す。524は土師質の甕で外面に平行叩きの後に挿目を施し、内面下部は当具痕が残る。

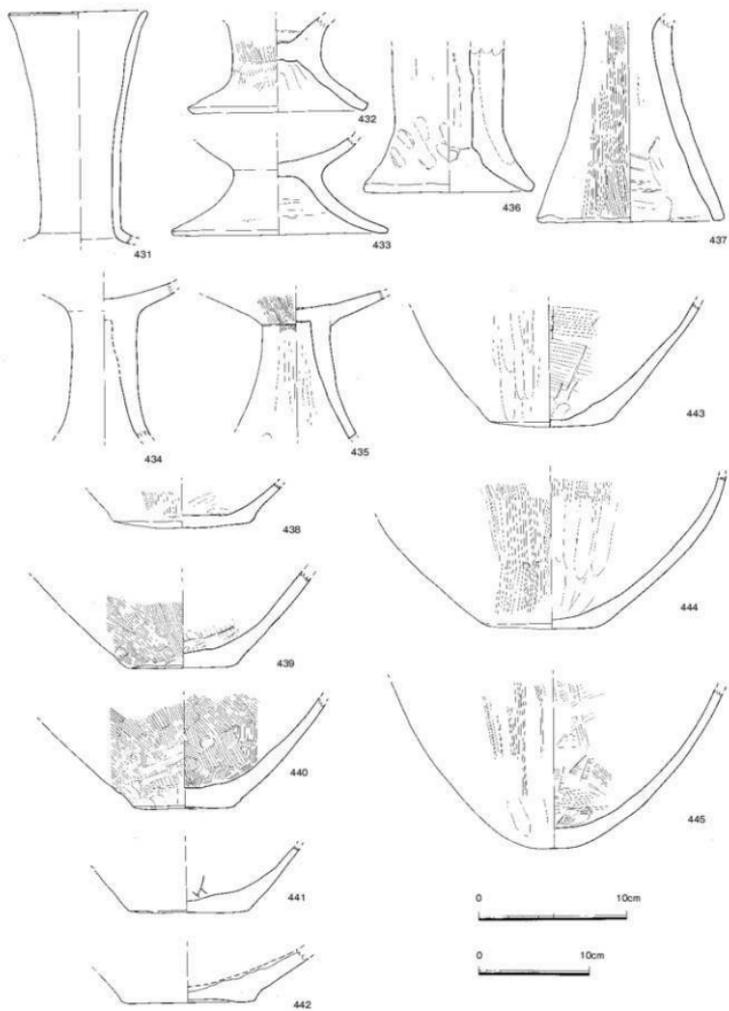
525は5-3区のH3グリッド河川からの出土で弥生後期の壺の底部、526は弥生土器の鉢で小片からの復元で5-1区出土である。527は河川IV層出土の須恵器で内面にヘラ記号を施す。258は厚い土師質の底部で内面に横方向の刷毛目のうち縦方向の棒状工具痕が見られる。中世の土師器か。出土層位不明。529はⅢ層出土の小型丸底壺で1/4からの復元。530はIV層出土の土師質の甕底部で外面平行叩き、内面当て具痕が明瞭に残る。531は土師質の壺で川出土だが区は不明である。

532から535は南側の丘陵斜面の遺構等出土で、前回報告に追加する。532は土師器のヘラ切底の坏でⅢ-1区のビットSP1599（第4図参照 以下同様）出土で、近接する土坑SK113（前報告）に時期は近い。533は土師器のミニチュア土器で窪穴住居を切るSP1018出土。534は羽口でⅡ区の近代暗渠出土。535は弥生土器の甕で底はあまい後があるが丸底に近い。内外面に刷毛目が残る。Ⅲ-1区の6世紀以降のSB178のビットSP1600覆土上部出土で混入品である。536は土師器の甕で5-2区河川IV層出土。

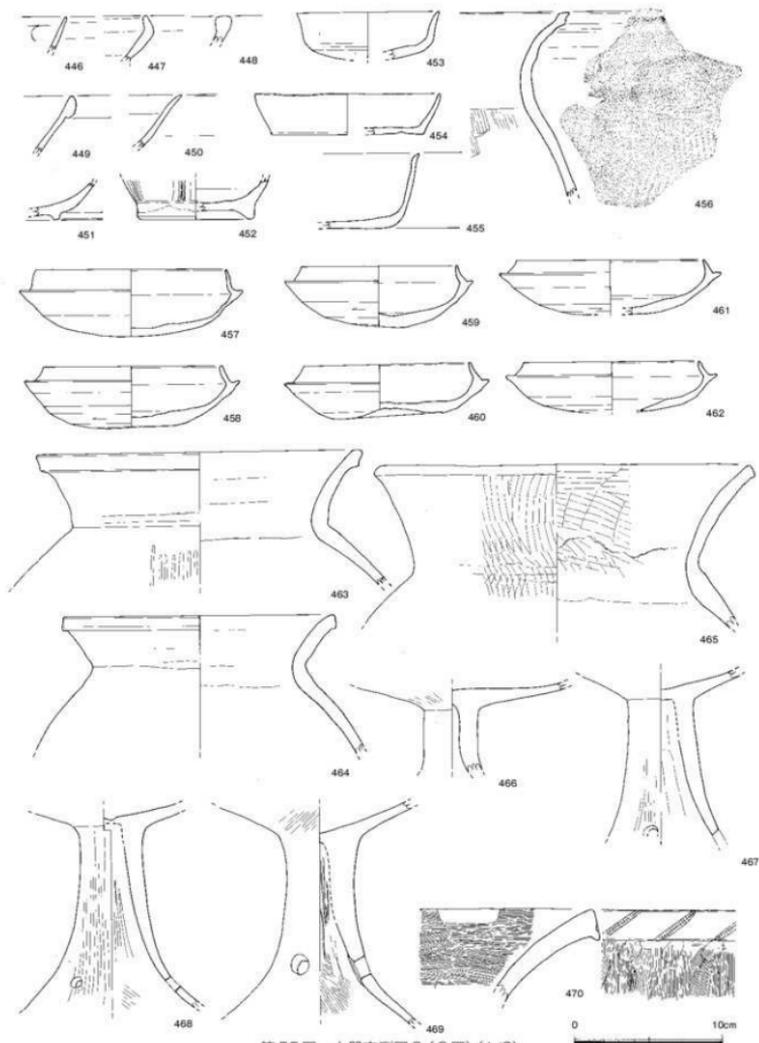
537から539は土鉢で537、538は河川032出土、539はⅢ区包含層の出土である。順に21.7g、10.8g、16.9gを測る。540、541は径1、1.3cmほどの土製品で孔は見られない。胎土に砂粒は少ない。出土位置不明。542は土製品片で厚さ2.5cmを測る。胎土は砂粒が非常に多く粗い。3-2区のビットSP454出土である。



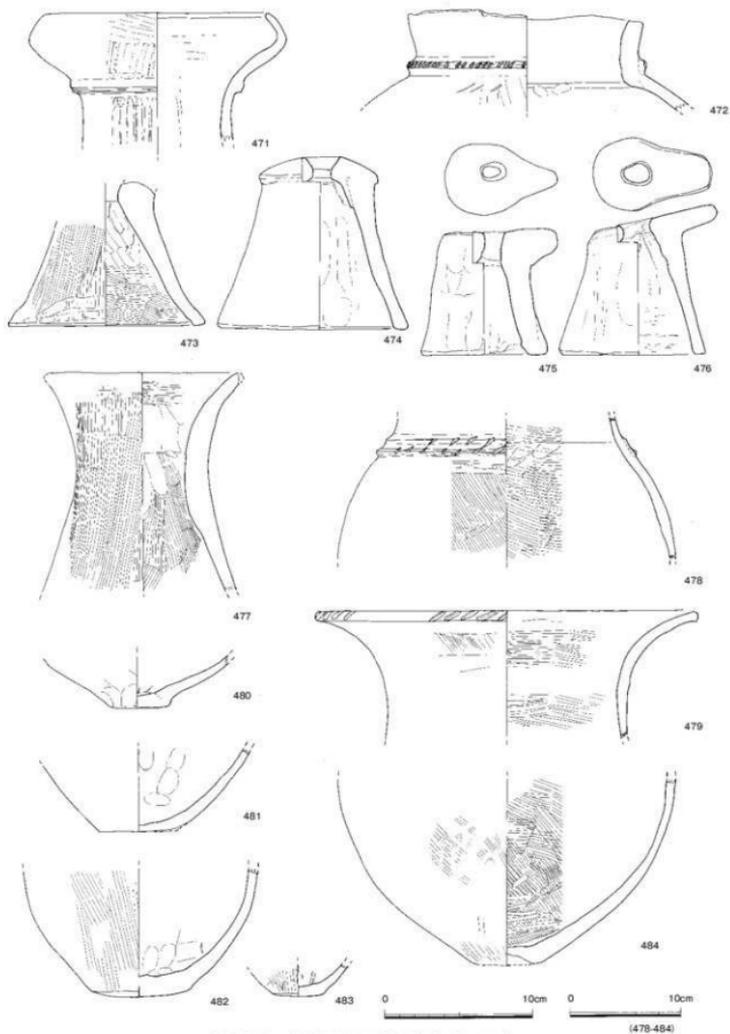
第53图 土器実測図1(1区)(1/3)



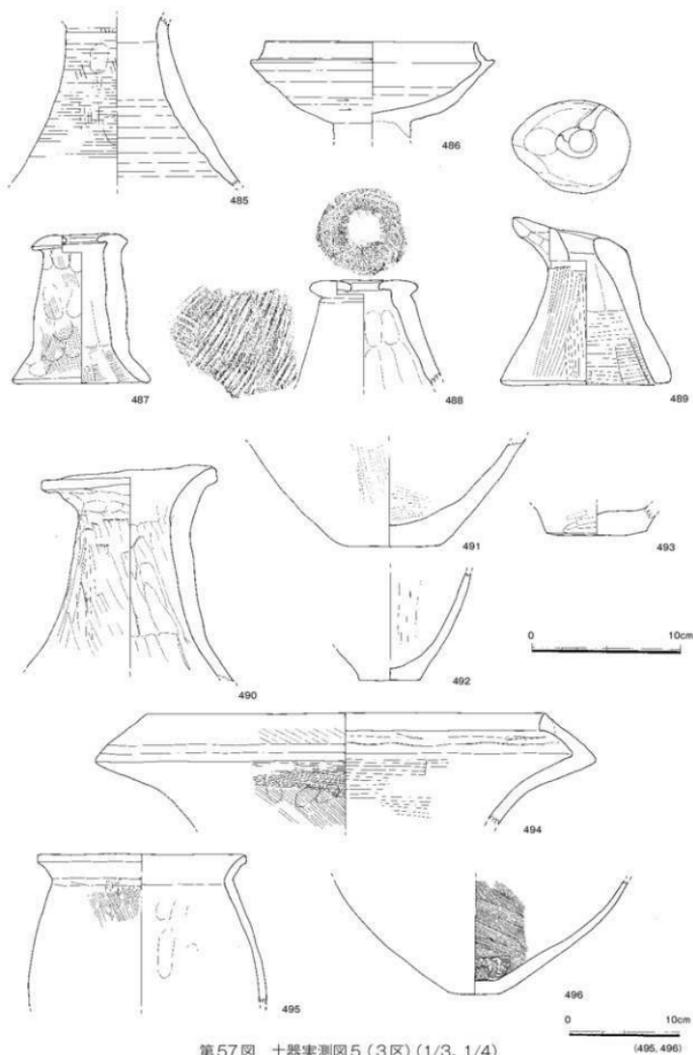
第54图 土器实测图2(1区)(1/3、1/4)



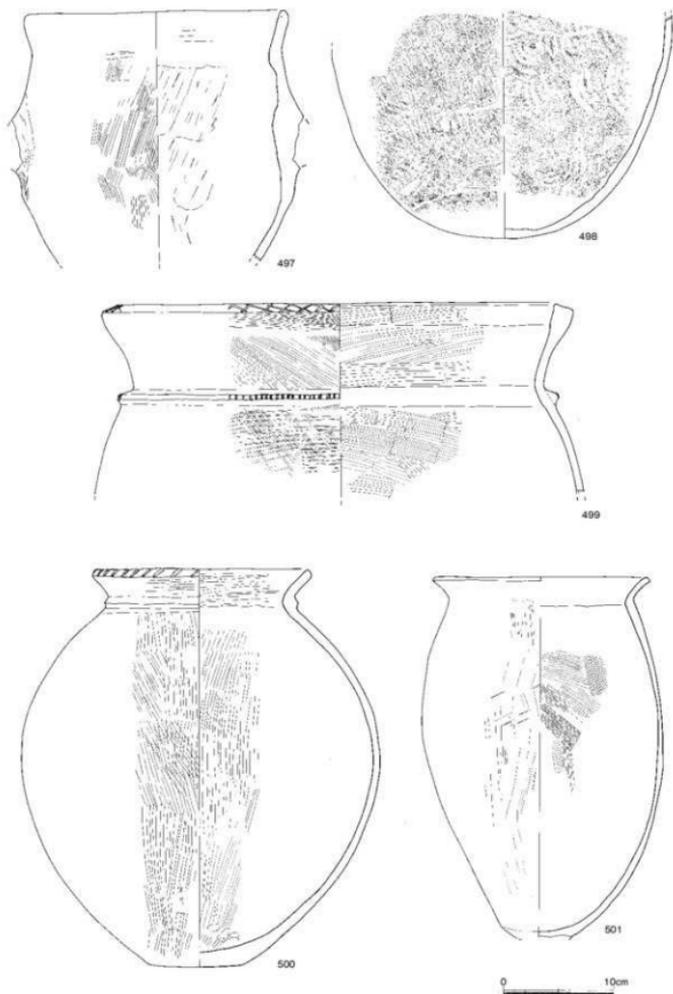
第55图 土器実測图3(2区)(1/3)



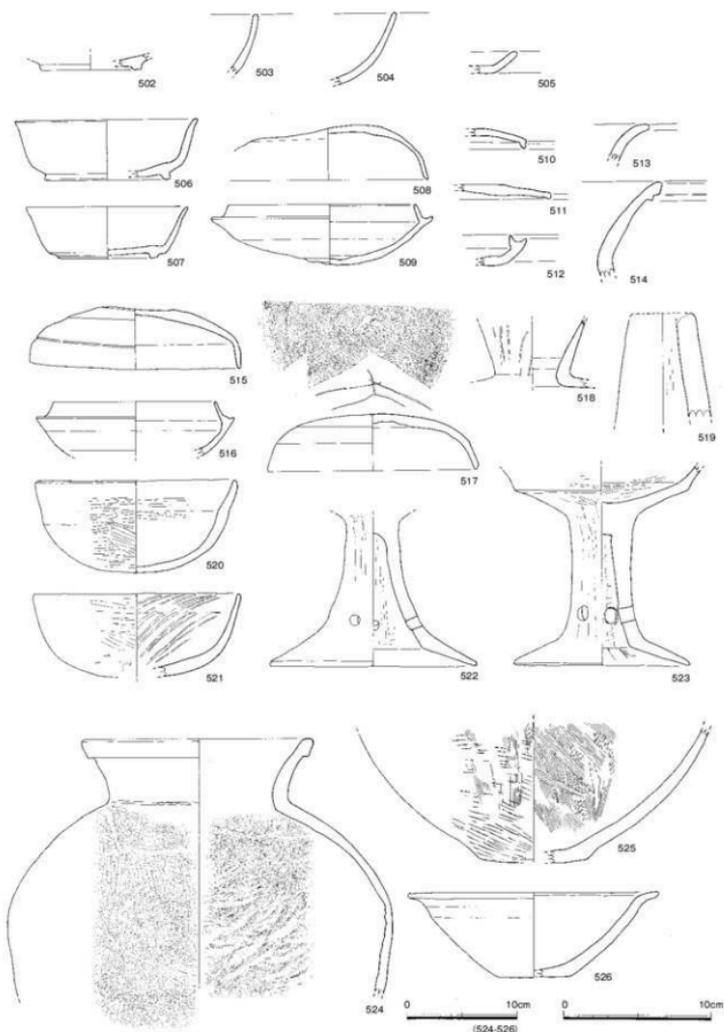
第56图 土器实测图4(2区)(1/3、1/4)



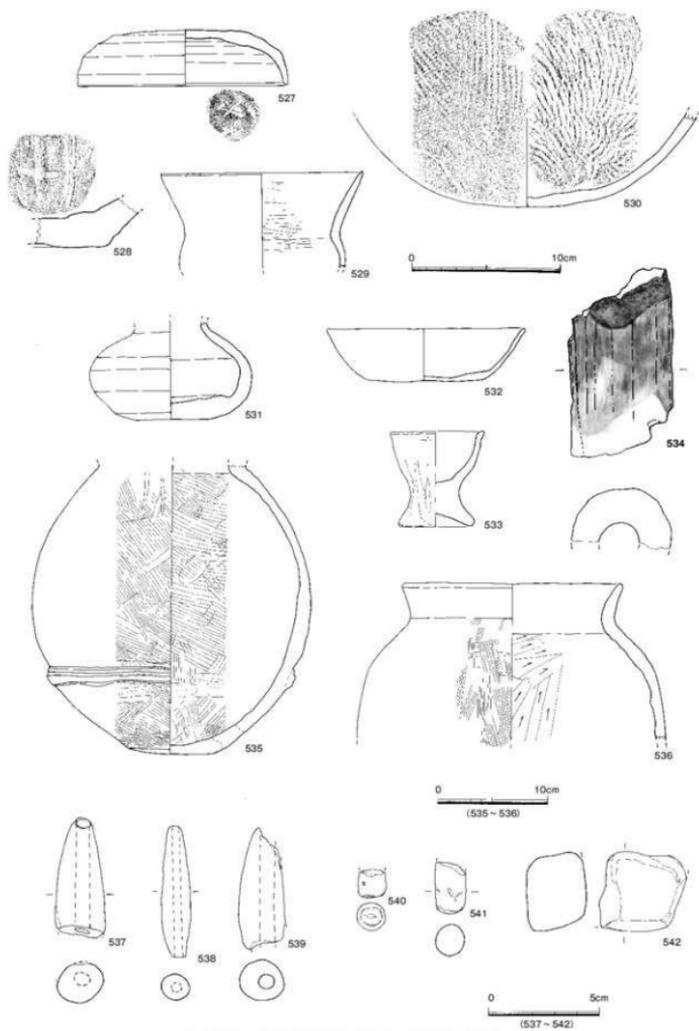
第57图 土器实测图5(3区)(1/3、1/4)



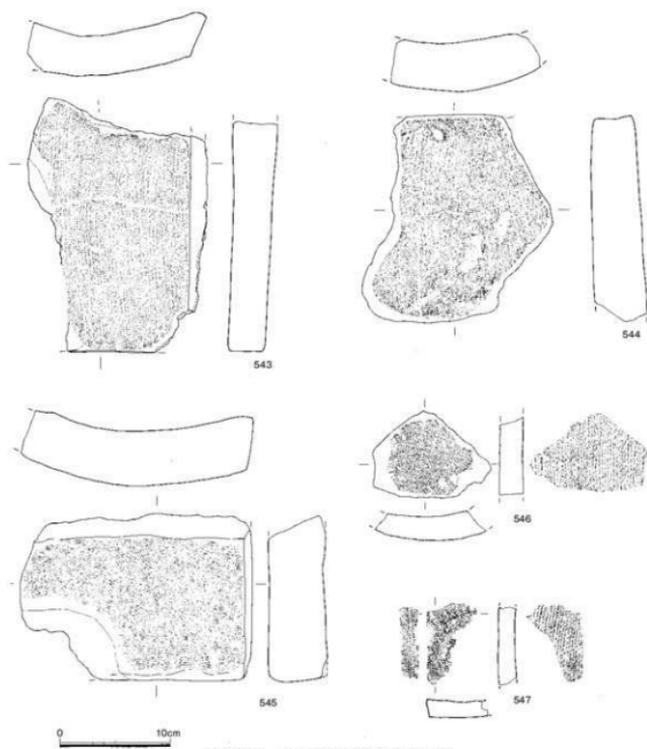
第58図 土器実測図6(3・2区)(1/4)



第59图 土器实测图7(5区包含层)(1/3、1/4)



第60图 土器実測図8(5区・土製品)(1/3、1/2)



第61図 土器実測図9(瓦)(1/4)

543から545は土師質の厚手の平瓦で胎土に3、4mm大までの砂粒を多く含む。外面には縄目叩きを施し、内面はナデ状の撫痕が見られる。545は器面が荒れて叩き痕の残りが悪い。543は5-3区出土、544、545は表採品である。456は須恵質で外面に平行叩き、内面には布目圧痕が見られる。1区出土。547は2区河川出土である。

(7) 自然科学分析

株式会社古環境研究所

1. 樹種同定

1. はじめに

木製品の材料となる木材は、セルロースを骨格とする木細胞の集合体であり、解剖学的形質から、概ね属レベルの同定が可能である。木材は、花粉などの微化石と比較して移動性が少ないことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であるが、木製品では樹種による利用状況や流通を探る手がかりにもなる。

本報告では、元岡・桑原遺跡51次調査より出土した木製品について、木材組織の特徴から樹種同定を行う。

2. 試料と方法

試料は、元岡・桑原遺跡51次調査の河川より出土した木製品、柱材、杭などの木製品計45点である。試料の詳細は、結果とともに表1に記す。

樹種同定の方法は、次のとおりである。まず、試料からカミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義）、放射断面（柾目と同義）、接線断面（板目と同義）の基本三断面の切片を作製した。同定は、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察し、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

3. 結果

表1に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

1) マキ属 *Podocarpus* マキ科 №10、17、32、36、39、40

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はゆるやかで、樹脂細胞が散在し多くみられる。放射柔細胞の分野壁孔は、ヒノキ型で1分野に1～2個存在する。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～20細胞高である。

以上の特徴からマキ属に同定される。マキ属には、イスマキ、ナギがあり、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布し、暖地に分布する針葉樹である。常緑高木で、通常高さ20m、径50～80cmである。材は、耐朽性が強く、耐水性も高い。建築、器具、桶、箱、水槽などに用いられる。

2) スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科 №1、6、23

仮道管、樹脂細胞および放射柔細胞から構成される針葉樹材である。早材から晩材への移行はやや急で、晩材部の幅が比較的広い。放射柔細胞の分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に2個存在するものがほとんどである。放射組織は単列の同性放射組織型で、1～14細胞高ぐらいである。樹脂細胞が存在する。

以上の特徴からスギに同定される。スギは本州、四国、九州、屋久島に分布する。日本特産の常緑高木で高さ40m、径2mに達する。材は軽軟であるが強靱で、広く用いられる。

3) スタジイ *Castanopsis sieboldii* Hatusima ブナ科 №13、14、15、18、19、38、44

年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火災状に配列する。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。放射組織は単列の同性放射組織型を示す。

以上の特徴からスタジイに同定される。スタジイは本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は、耐朽性と保存性はやや低く、建築、器具などに用いられる。

表1 元岡・桑原遺跡51次調査における樹種同定結果

No.	報告番号	遺構名	器種	結果(学名/和名)
1	370	IV b層	机脚?	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
2	401		棒状	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl クスノキ
3	388	R12	容器	<i>Sapindus mukorossi</i> Gaertn. ムクロジ
4	369	R18	鏡	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl クスノキ
5	363	IVb層	加工板材	<i>Sapindus mukorossi</i> Gaertn. ムクロジ
6	371	R27	容器	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
7	373	11c層	机脚	<i>Camellia japonica</i> Linn. ヤブツバキ
8	326	R33	柱材(ほぞ)	<i>Prunus</i> サクラ属
9	313	R119	臼	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i> コナラ属アカガシ亜属
10	389	R81	作業台	<i>Podocarpus</i> マキ属
11	312		槌	<i>Myrsine segruinii</i> Lev. タイミンタチバナ
12	292	SP422	柱痕	<i>Meliosma</i> アワブキ属
13	294	SP434	柱痕	<i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima スダジイ
14	295	SP436	柱痕	<i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima スダジイ
15	296	SP438	柱痕	<i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima スダジイ
16	291	SP428	柱痕	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl クスノキ
17		SP459	柱痕	<i>Podocarpus</i> マキ属
18	293	SP439	柱痕	<i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima スダジイ
19		SP2394	柱痕	<i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima スダジイ
22	365		組み合わせ具	<i>Cleyera japonica</i> Thunb. サカキ
23	386		ヤス	<i>Cryptomeria japonica</i> D.Don スギ
24	380		網錘	<i>Camellia japonica</i> Linn. ヤブツバキ
25	390		たたり	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl クスノキ
26	315	SX413 R104	杭	<i>Cleyera japonica</i> Thunb. サカキ
27	317	SX413 R105	杭	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl クスノキ
28	319	SX413 R111	杭	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl クスノキ
29	314	SX413 R113	杭	<i>Eurya</i> ヒサカキ属
30	318	SX413 R116	杭	<i>Cinnamomum camphora</i> Presl クスノキ
31	316	SX413 R117	杭	<i>Machilus thunbergii</i> Sieb.et Zucc. タブノキ
32	337	R16	柱材	<i>Podocarpus</i> マキ属
33	325	R31	柱材	<i>Eurya</i> ヒサカキ属
34	327	R38	建築材	<i>Eurya</i> ヒサカキ属
35	322	R34		<i>Cinnamomum camphora</i> Presl クスノキ
36	321	R52	柱材	<i>Podocarpus</i> マキ属
37	320	R53	柱材	<i>Meliosma</i> アワブキ属
38	324	R54	柱材	<i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima スダジイ
39	301	R85	柱材	<i>Podocarpus</i> マキ属
40	303	R86	柱材	<i>Podocarpus</i> マキ属
41	302	R87	柱材	<i>Meliosma</i> アワブキ属
42	305	R88	柱材	<i>Meliosma</i> アワブキ属
43	306	R89	柱材	<i>Meliosma</i> アワブキ属
44	307	R91	柱材	<i>Castanopsis sieboldii</i> Hatusima スダジイ
45	339	R17	扉	<i>Sapindus mukorossi</i> Gaertn. ムクロジ
46	368	R5	杵	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i> コナラ属アカガシ亜属
47	338	R11	扉	<i>Sapindus mukorossi</i> Gaertn. ムクロジ

4) コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 №9、46

横断面では、中型から大型の道管が、1～数列幅で年輪界に関係なく放射方向に配列する放射孔材である。道管は単独で複合しない。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は同性放射組織型で、単列のものど大型の広放射組織からなる複合放射組織である。

以上の特徴からコナラ属アカガシ亜属に同定される。コナラ属アカガシ亜属にはアカガシ、イチイガシ、アラカシ、シラカシなどがあり、本州、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ30m、径1.5m以上に達する。材は、堅硬で強靱、弾力性が強く耐湿性も高い。特に農耕具に用いられる。

5) クスノキ *Cinnamomum camphora* Presl クスノキ科 №2、4、16、25、27、28、30、35

中型から大型の道管が、単独および2～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を精状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ上がったものも存在する。道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。放射組織は異性放射組織型で1～2細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞の中には、しばしば大きく膨れ上がったものがみられる。

以上の特徴よりクスノキに同定される。クスノキは、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、通常高さ25m、径80cmぐらいであるが、高さ50m、径5mに達するものもある。材は、堅硬で耐朽性が強い。保存性が高く芳香がある。建築、器具、楽器、船、彫刻、ろくろ細工などに用いられる。

6) タブノキ *Machilus thunbergii* Siebet Zucc. クスノキ科 №31

やや小型から中型の道管が、単独および2～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を精状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には、油を含み大きく膨れ上がったものも存在する。道管の穿孔は単穿孔または少数ではあるが、数の少ない階段穿孔が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。放射組織は異性放射組織型で1～2細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば大きく膨れ上がったものがみられる。

以上の特徴よりタブノキに同定される。タブノキは、本州（暖地）、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ15m、径1mに達する。材は耐朽性、保存性ともに中庸で、建築、家具、土木、器具、楽器、船、彫刻、薪炭などに用いられる。

7) サクラ属 *Prunus*バラ科 №8

丸い道管が単独あるいは2～3個放射方向および斜め方向に複合して散在する散孔材である。道管の径は、早材部から晩材部にかけてゆるやかに減少する。道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。放射組織は同性に近い異性である。放射組織は同性に近い異性放射組織型を示す。

以上の特徴からサクラ属に同定される。サクラ属には、ヤマザクラ、ウワミズザクラ、シウリザクラ、ウメ、モモなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木または低木である。

8) ムクロジ *Sapindus mukorossi* Gaertn. ムクロジ科 №3、5、45、47

大型でやや厚壁の道管が単独ときに2個複合して年輪のはじめに1～2列疎に配列する環孔材である。晩材部では小型で薄壁の角張った道管が数個おもに放射方向に複合して散在する。軸方向柔細胞は早材部で周囲状、晩材部では数列幅で帯状となって接線方向に配列する。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は同性である。小道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織は、同性放射組織型で1～3細胞幅である。放射組織の外形はいびつである。

以上の特徴よりムクロジに同定される。ムクロジは本州（茨城県、新潟県以南）、四国、九州、沖縄に分布する。落葉の高木で、高さ25m、径1mに達する。材は、やや軽軟で脆弱で、器具、家具などに用いられる。

9) アワブキ属 *Meliosma* アワブキ科 №12, 37, 41, 42, 43

小型の道管が、単独ないし2～4個放射方向にむかって複合して散在する散孔材であるが、その複合部に1～2個の柔細胞をはさんでいるものが見られる。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は少なく10本前後である。放射組織は、異性放射組織型で1～4細胞幅である。

以上の特徴よりアワブキ属に同定される。アワブキ属は本州、四国、九州に分布する。アワブキ、ヤマビワ、ミヤマホウツなどがあり、落葉または常緑の低木から高木である。

10) ヤブツバキ *Camellia japonica* Linn. ツバキ科 №7, 24

小型でやや角張った道管が、単独ないし2～3個複合して散在する散孔材である。道管の径はゆるやかに減少する。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は8～30本ぐらいである。放射組織は、異性放射組織型で、1～3細胞幅である。直立細胞には大きく膨れているものが存在する。

以上の特徴からヤブツバキに同定される。ヤブツバキは本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、通常高さ5～10m、径20～30cmである。材は、強韌で、耐朽性が強く、建築、器具、楽器、船、彫刻などに用いられる。

11) サカキ *Cleyera japonica* Thunb. ツバキ科 №22, №26

横断面では小型の道管が、単独ないし2個複合して密に散在する散孔材である。放射断面では道管の穿孔が階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60を越えるものも観察される。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる異性である。接線断面では、放射組織が異性放射組織型で単列を示す。

以上の特徴よりサカキに同定される。サカキは関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑高木で、通常高さ8～10m、径20～30cmである。材は、強韌かつ堅硬で、建築、器具などに用いられる。

12) ヒサカキ属 *Eurya* ツバキ科 №29, 33, 34

小型で角張った道管が、ほぼ単独で密に散在する散孔材を示す。道管の穿孔は階段穿孔板からなる多孔穿孔で、階段の数は多く60を越えて観察される。放射組織は平伏細胞、方形細胞、直立細胞からなる。放射組織は異性放射組織型で1～3細胞幅で多列部と比べて単列部が長い。

以上の特徴からヒサカキ属に同定される。ヒサカキ属にはヒサカキ、ハマヒサカキなどがあり、本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の小高木で、通常高さ10m、径30cmである。材は強さ中庸で、器具などに用いられる。

13) タイミンタチバナ *Myrsine seguinii* Lev. ヤブコウジ科 №11

小型で角張った道管が、単独あるいは2～3個放射方向および不規則方向に複合して散在し、全体に放射方向に配列する傾向を示す散孔材である。道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は異性である。放射組織は、異性放射組織型で極めて高く、鞘細胞を有し、3～6細胞幅である。

以上の特徴によりタイミンタチバナに同定される。タイミンタチバナは、近畿以西の本州（千葉県以西）、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の大低木または高木である。

4. 所見

同定の結果、元岡・桑原遺跡51次調査の河川より出土した木製品は、クスノキ8点、スタジイ7点、マキ属6点、アワブキ属5点、スギ3点、ムクロジ4点、ヒサカキ属3点、コナラ属アカガシ亜属2点、ヤブツバキ2点、サカキ2点、タブノキ1点、サクラ属1点、タイミンチバナ1点であった。

クスノキは、柱材、木樋、鐘、たたりなどに利用されている。木材は堅硬で耐朽性が高い材である。クスノキは柱材、木樋、鐘、たたりなどにはあまり選材される材ではないが、西南日本の沿岸平野に多く、九州や瀬戸内の沿岸の遺跡に特有に多い選材であるため、本遺跡でも特有に同定されたと考えられる。スタジイは、柱材に利用されている。スタジイはやや重硬で耐朽性・保存性は低い材で、細工物などにはあまり利用されない。利用例としては杭が多く、次いで建築部材が見られるが、他の樹木と比べると利用率は低い。しかし九州では古くからスタジイを含むシイ属を多く利用する傾向にあり、建築部材など広く利用されている。スタジイは温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林の主要構成要素あるいは二次林要素である。マキ属は、柱材、作業台に利用されている。マキ属は耐朽性・保存性が高く水湿に強く、やや重硬で強靱な材である。柱材などの建築部材によく利用され、また机や紡織具などにも広く利用される。マキ属は暖地の山林内や緩傾斜の適潤場所を好み、温帯下部の暖温帯から亜熱帯に分布する。極めて温暖な気候下の常緑針葉樹で、温暖な九州ないし東海に多い樹木と言える。アワブキ属は、柱材に利用されている。材は強さ中庸で比較的大きな材がとれるので、杭や建築部材に利用されることが多いが、他の樹木と比べると利用率は少ない。アワブキ属は落葉ないし常緑の小高木から高木である。スギは、ヤス、容器、鞘、机足?に利用されている。スギは加工工作が容易な上、大きな材がとれる良材で、建築材はもとより板材や小さな器具類に至るまで幅広く用いられる。温帯に広く分布し、特に温帯中間域の積雪地帯で純林を形成する針葉樹である。肥沃で湿潤な土壌を好み。ムクロジは、扉、容器、形代に利用されている。肌目はやや緻密で、木理はやや粗く、やや軽軟で脆弱な材と言える。ムクロジが建築材や容器などに利用される例は見られるが、比較的少ない。日常のよい適潤地を好み、温帯下部の暖温帯から亜熱帯に分布する落葉広葉樹である。ヒサカキ属は、柱材などに利用されている。概して強さ中庸の材で、杭や農具柄などに利用されることがあるが、建築部材としての利用は比較的少ない。ヒサカキ属は林内、尾根筋、海岸等に自生する常緑の低木～小高木である。コナラ属アカガシ亜属は、白、杵に利用されている。コナラ属アカガシ亜属は堅硬な材であり、広く用いられるが、西南日本では弥生時代以降、特に農耕具を中心に用いられる傾向にある。杵に用いられる例は全国的に見られる。しかし、白には長期間乾燥させておいてもひび割れのできないケヤキ、トチノキやアカマツが利用される傾向が多く、コナラ属アカガシ亜属は極めて珍しい。コナラ属アカガシ亜属は、一般にカシと総称されるが、イチイガシ、アラカシなど多くの種があり、温帯下部の暖温帯、西南日本に分布する照葉樹林を形成する主要高木である。ヤブツバキは、ツチノコ、机足?に利用されている。強靱で耐朽性が高く堅硬な良材だが、切削・加工は困難である。樋、杵、斧柄などに利用されることが多い。ヤブツバキは海岸から河川の沿岸に多く分布する常緑高木で、温帯下部の暖温帯に分布する照葉樹林の構成要素である。サカキは、杭、組合せ具に利用されている。強靱で堅硬な材である。サカキは古くから九州では見られ、杭、農具柄などに広く利用されている。常緑高木で照葉樹林の構成要素である。タブノキは、杭に利用されている。タブノキは強さ耐朽性ともに中庸の材で、九州では杭の利用が最も多く見られる。タブノキは、沿海に多く、温帯下部の暖温帯に分布し、照葉樹林内の構成要素である。サクラ属は、柱材(ほぞ)に利用されている。耐久性や保存性の高い材で、切削・加工の難度は中庸で、概して堅硬な材と言える。同定例としては柱や礎板などの建築部材が

比較的多く、他に杭、柱、椽、下駄などにも見られる。サクラ属は温帯に分布し、やや乾燥した斜面等に生育する。タイミンタチバナは、柱に利用されている。重硬な材であり、耐朽性や保存性は高いが、反り、振れなどの狂いが生じやすいが件などの同定例が各地で見られる。タイミンタチバナは、暖温帯に生育する常緑の大低木または高木で、愛知県以西の太平洋岸ではスタジイとともに海岸林を形成することがある。

同定された樹木はすべて温帯から温帯下部の暖温帯である西南日本に分布する樹木ばかりであった。また、クスノキ、ヒサカキ属、ヤブツバキ、タブノキ、タイミンタチバナは海岸沿いに分布する。選材には器種に適した樹木もあるが、スタジイ、アワブキ属、ムクロジなどの比較的使用されない樹木や、白にコナラ属アカガシ亜属を選定するなどの特異な例が見られた。これは、気候的要因により大木が得られたからと考えられる。これらの樹木は遺跡周辺の植生も反映しており、地域的な用材で近隣からもたらされたと考えられる。

参考文献

- 伊東隆夫・山田昌久(2012)木の考古学。雄山閣, p.449.
 佐伯浩・原田浩(1985)針葉樹材の細胞。木材の構造。文永堂出版, p.20-48.
 佐伯浩・原田浩(1985)広葉樹材の細胞。木材の構造。文永堂出版, p.49-100.
 島地謙・伊東隆夫(1988)日本の遺跡出土木製品総覧。雄山閣, p.296.
 山田昌久(1993)日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成。植生史研究特別第1号。植生史研究会, p.242.

II. 放射性炭素年代測定

1. はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素(14C)の濃度が、放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約6万年前までの年代測定が可能である。

ここでは、元岡・桑原遺跡51次調査で出土した木製品を対象として、遺構構築年代に関する資料を得る目的で、加速器質量分析法による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

測定試料は、SP428より出土した木材(クスノキ)、SP439より出土した木材(スタジイ)、R52より出土した木材(マキ属)の計3点である。測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製 1.5SDH)で測定した。得られた14C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、14C年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料及び処理

試料名	試料の詳細	種類	前処理・調整	測定法
試料16	SP428(291)	木材(クスノキ)	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
試料18	SP439(293)	木材(スタジイ)	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS
試料36	R52(321)	木材(マキ属)	超音波洗浄, 酸-アルカリ-酸洗浄	AMS

※AMS (Accelerator Mass Spectrometry) は加速器質量分析法

3. 測定結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}C$)、同位体分別効果の補正を行った暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した14C年代、14C年代を暦年代に較正した年代範囲を示す。また、図1には暦年較正結果を示す。暦年較正に用いた年代値は年代

値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

表2 測定結果

試料名	測定% (PED)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (年BP)	^{14}C 年代 (年BP)	暦年代 (西暦)	
					1 σ (68.2%確率)	2 σ (95.4%確率)
試料16	28243	-26.25 \pm 0.14	1587 \pm 18	1585 \pm 20	cal AD 423-434 (9.9%)	cal AD 420-537 (95.4%)
					cal AD 454-470 (11.9%)	
					cal AD 487-534 (46.4%)	
試料18	28244	-26.91 \pm 0.15	1547 \pm 18	1545 \pm 20	cal AD 433-489 (51.9%)	cal AD 427-564 (95.4%)
					cal AD 532-549 (16.3%)	
試料36	28245	-24.94 \pm 0.15	1553 \pm 18	1555 \pm 20	cal AD 432-490 (56.3%)	cal AD 427-554 (95.4%)
					cal AD 531-544 (11.9%)	

BP: Before Physics (Present), AD: 紀元

14C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。14C年代 (年BP) の算出には、14Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した14C年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の14C年代がその14C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された14C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い (14Cの半減期5730 \pm 40年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

14C年代の暦年較正にはOxCal4.2 (較正曲線データ: IntCal13) を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された14C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は14C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

4. 所見

元岡・桑原遺跡51次調査の遺構構築年代に関する資料を得る目的で、加速器質量分析法 (AMS法) により放射性炭素年代測定を行った。その結果、SP428より出土した木材は、1585 \pm 20年BP (2 σ の暦年代でAD 420 ~ 537年)、SP439より出土した木材は、1545 \pm 20年BP (2 σ の暦年代でAD 427 ~ 564年)、R52より出土した木材は、1555 \pm 20年BP (2 σ の暦年代でAD 427 ~ 554年) の年代値であった。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, p.355-363.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」, p.3-20. 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Halidason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55 (4), 1869-1887.

※本項の掲載にあたり、調査担当者が遺構、遺物番号等の追加・修正を行った。

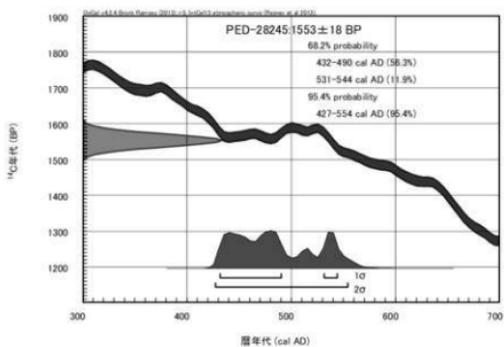
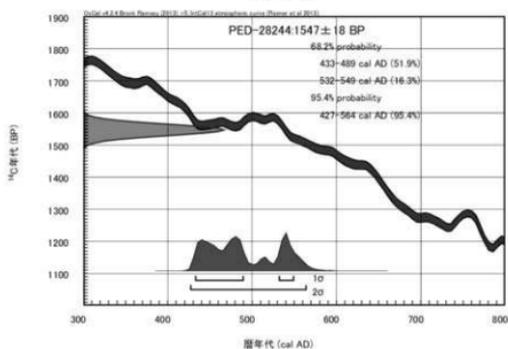
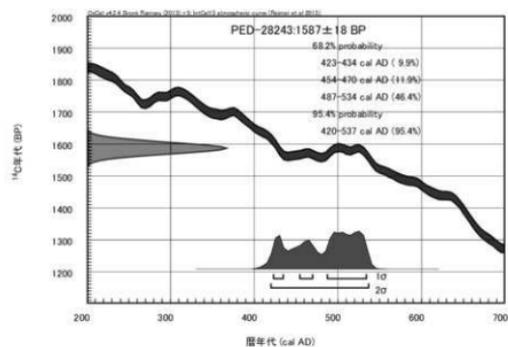
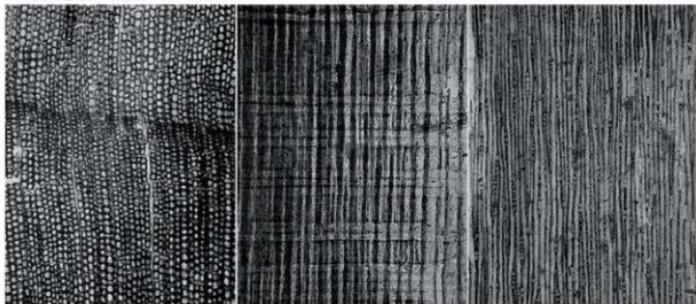


圖 1 曆年較正結果

元岡・桑原遺跡51次調査の木材 I



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
マキ属 遺構名R52 柱材 (321)



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
マキ属 遺構名R85 柱材 (301)

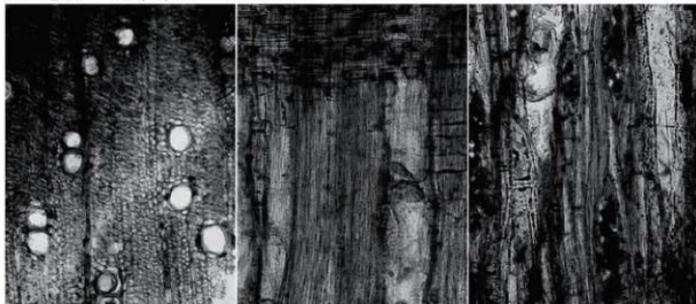


横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 放射断面 0.1mm
マキ属 遺構名R86 柱材(303)

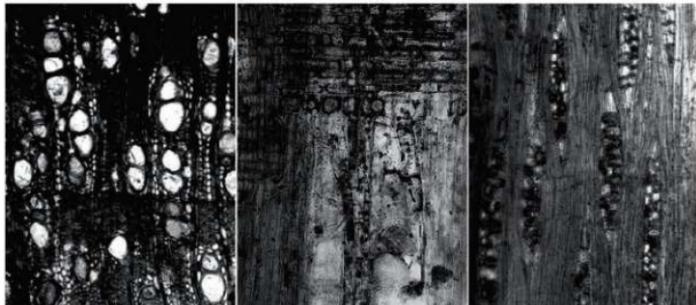
元岡・桑原遺跡52次調査の木材 II



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
スギ 遺構名R27 容器 (371)

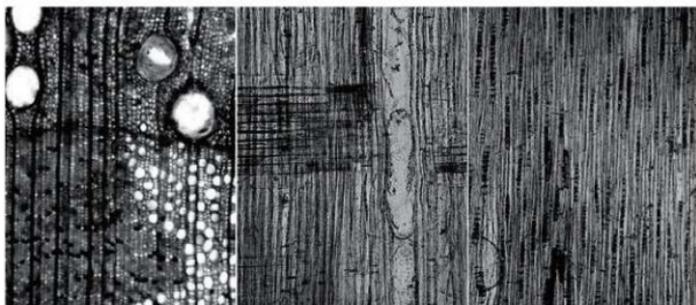


横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
クスノキ 遺構名R18 鏡 (369)

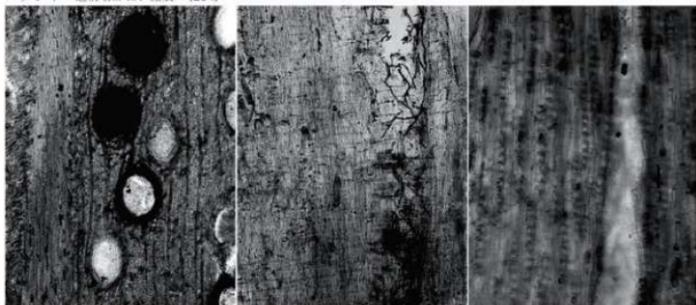


横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
くすのき たたり (390)

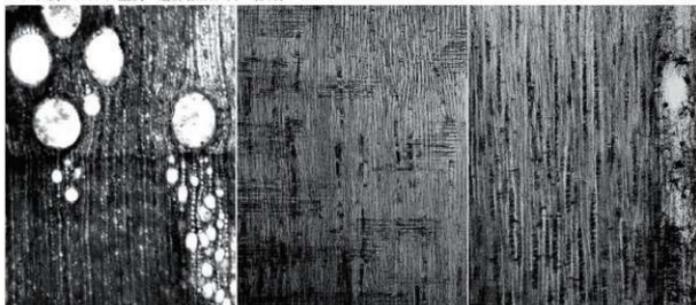
元岡・桑原遺跡51次調査の木材 Ⅲ



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
スダジイ 遺構名SP434 柱根 (294)

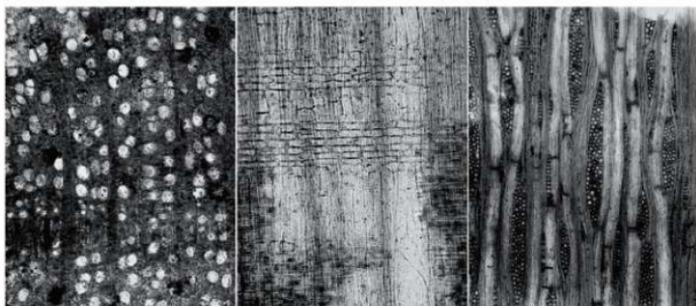


横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
コナラ属アカガシ亜属 遺構名R119 臼 (313)

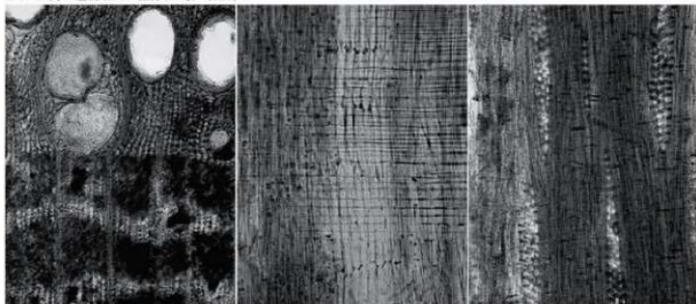


横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
スダジイ 遺構名R54 柱材 (324)

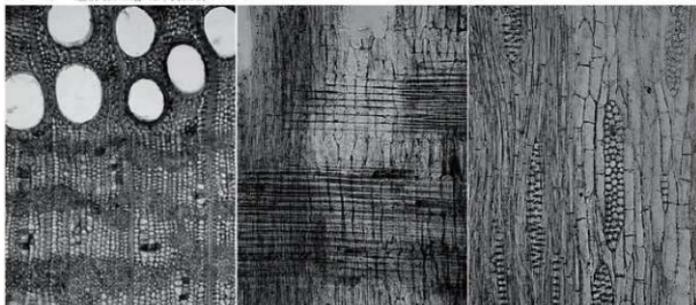
元岡・桑原遺跡51次調査の木材 IV



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
 サクラ属 遺構名R33 柱材(はぞ) (326)

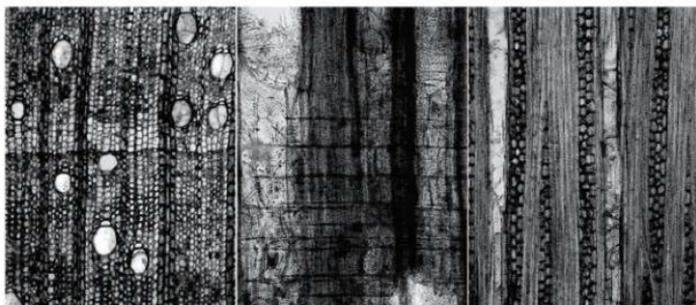


横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
 ムクロジ 遺構名IVb層 形代(363)

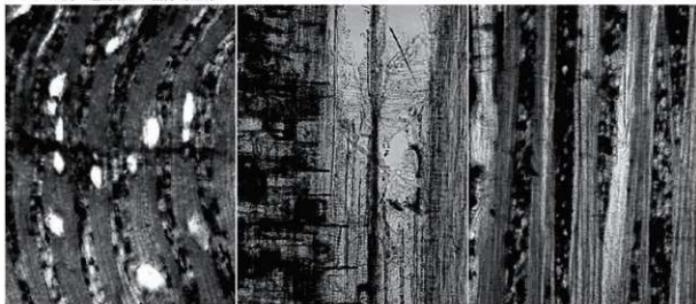


横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
 ムクロジ 遺構名R11 扉 (338)

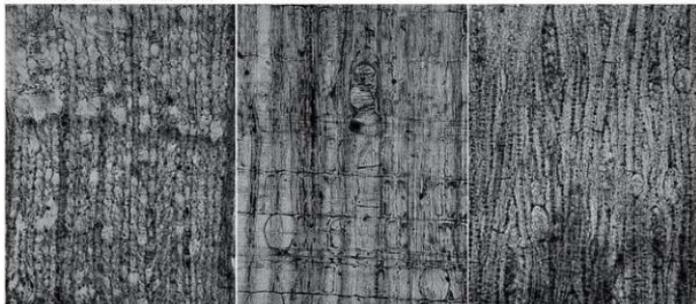
元岡・桑原遺跡51次調査の木材 V



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
アワブキ属 遺構名B53 柱材 (320)

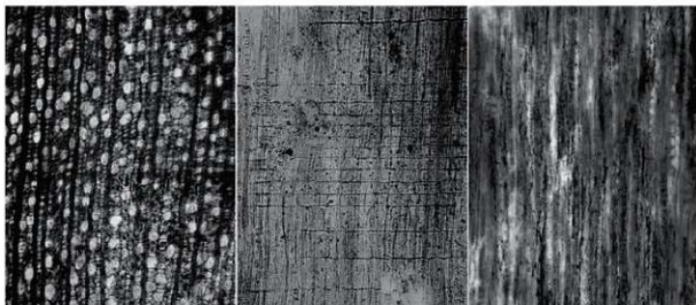


横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
アワブキ属 遺構名B87 柱材 (302)



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
ヤブツバキ 網織 (380)

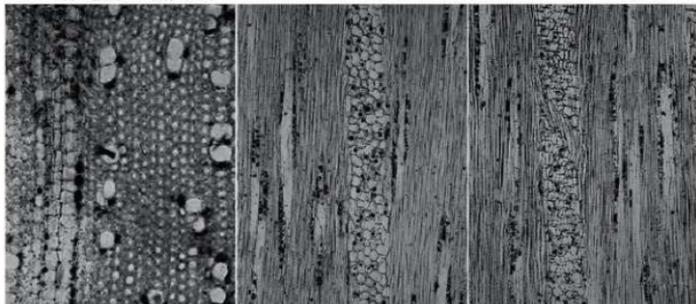
元岡・桑原遺跡51次調査の木材 VI



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
サカキ 遺構名SM413 R104 杭 (315)



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
ヒサカキ属 遺構名E31 柱材 (325)



横断面 0.1mm 放射断面 0.1mm 接線断面 0.1mm
タイミンチバナ 継 (312)

3. おわりに

元岡・桑原遺跡群第49・51次調査では旧石器時代から中世に至る遺構・遺物が出土した。今回は未報告であった旧石器・縄文時代の遺構・遺物、各時代の遺物について追加報告を行った。遺構・遺物の変遷については前報告の最後にふれたが、第63図に時代ごとの遺構を大まかに示した。以下、図をたどりがなら報告を補いたい。

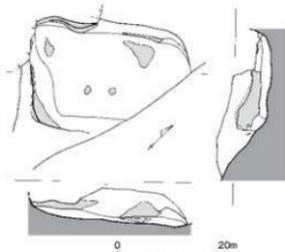
旧石器時代から弥生時代では遺物とわずかながら遺構、包含層を確認した。遺構はいずれも削平が少ない箇所であり、失われたものも多いと考えられる。特に河川が大きく屈曲する3-2区には東側からの丘陵斜面が広がっていたと考えられる。縄文時代では、SK168から出土した口唇部刻目と胴部沈線を持つ土器3-6、12は周辺で類例が見られず時期が決め難い。391の局部磨製石鏃などが伴う早期前半をひとつの可能性として考えている。SK169の条痕土器は後期で、つまみ型石器128、剥片鏃の可能性ある149などが伴うと考えられる。弥生時代は須玖式土器がわずかに見られるが、大半が後期前半から終末である。6区にも一定の出土があり、上流にも遺構があったものと考えられる。

古墳時代では6世紀後半から7世紀初頭に竪穴住居、土坑などが築かれ、この谷の活発な利用が始まる。また河川032のⅣ層出土遺物の多くはこの時期である。古代Ⅰとした図には7世紀初頭から7世紀後半と考えられる掘立柱建物を示した。その多くは総柱建物、一間一間、一間二間などの倉庫と考えられる。切合いや主軸方向、遺物から3時期程度の重なりが想定されるが、時期が決め難く図示していない。出土遺物からは7世紀初頭から前半までに収まるものが多い。Ⅲ区には大型の建物が並び、中心的な施設であったことが想定されるが、時期は不確定である。またSB420、430の柱材、河川032出土の木製品321は放射性炭素年代測定で420年代から537～554年の暦年代を得ている。遺物が多くなる6世紀後半と矛盾はないがやや古い値である。SB420、430を含む建物群には竪穴住居群に伴うものがあると想定される。

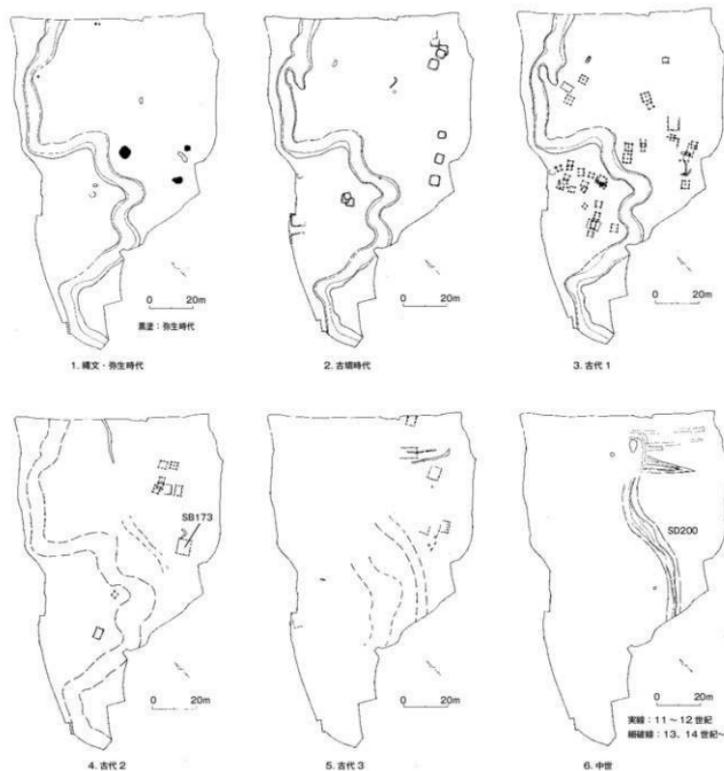
古代Ⅱとした図には、出土遺物、切り合い等から7世紀末から8世紀初頭と考えられる遺構を示した。Ⅲ区のSB173・174は調査時には竪穴住居に切られると判断したが、複数の後出する出土須恵器から不確定ながらこの時期に示した。河川はⅢ層下部まではすでに埋まり、河川部分は浅い谷状が残っていると想定される。Ⅰ区には用水路状の溝が走り、水田が営まれた可能性がある。5-3区では遺構面の上に8世紀代の遺物を含む包含層が見られ、低い斜面が埋まりつつある状況が見られる。

古代Ⅲとした図は9世紀から10世紀と考えられる遺構を示した。Ⅲ区では包含層上で検出した土坑、ピット、Ⅱ区では鍛冶炉などがある。Ⅰ区の掘立柱建物は土師器碗などの出土遺物からこの時期に示した。谷は水平堆積を示すⅡ層が対応し、さらに埋没が進んでいると考えられる。4区では鉄滓の項で触れたようにHI5・6グリッドⅡ層上で鉄滓の広がりを確認している。上流の24次調査地点出土の8世紀後半の製鉄炉の影響が考えられよう。

中世では調査区の北側を流れる河川は埋まり、やや南側に人工的に掘削されたと考えられる水路SD200などが走る。この水路は、Ⅰ区の溝の存在から8世紀初めの段階で一部築かれていた可能性がある。Ⅰ区で



第62図 焼土坑実測図(1/40)



第63図 遺構変遷図

は谷に直交する溝SD028などが見られ、覆土には鉄滓が目立つ。その後、13世紀以降にはSD200に続くと考えられる溝、谷と直交する溝がみられる。古代末から中世においても、少量ではあるが陶磁器が出土し、周辺に何らかの施設があった可能性がある。

以上、49・51次調査地点の変遷を概観し、特に6世紀後半から7世紀代に集中する建物群を再確認した。18次調査(1102集)で指摘される遺跡の画期と一致し、その背景について検討する必要がある。

最後に、第62図示した遺構は金屎古墳が乗る尾根上で作業中に確認した焼土坑である。位置は第1図に×印で示した。標高約48m、尾根の南東よりに位置する。壁と床の一部が赤変する。



1. SK106 (南東から)



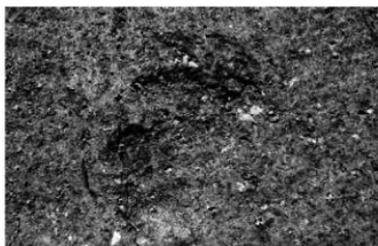
2. SK168 土器出土状況 (北から)



3. SK168 (北から)



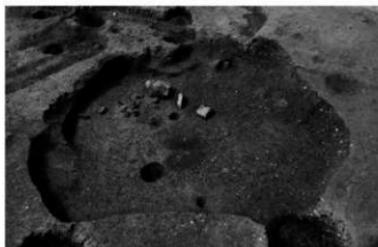
4. 包含層 169 遺物出土状況 (南西から)



5. SX1183 土器出土状況



6. SX636 (北西から)

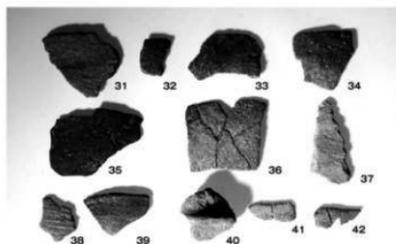
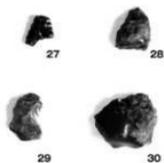
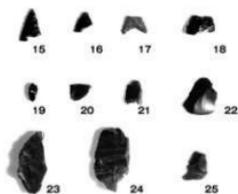
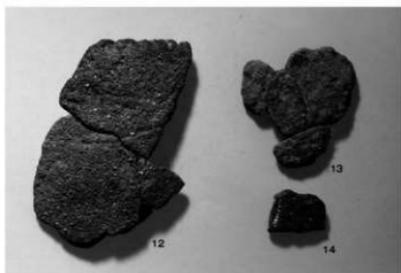
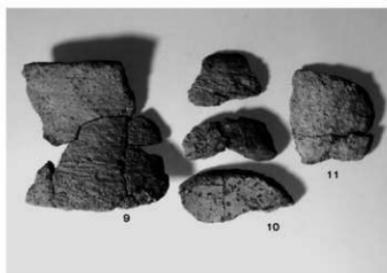
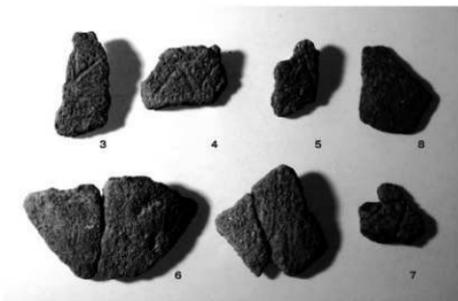
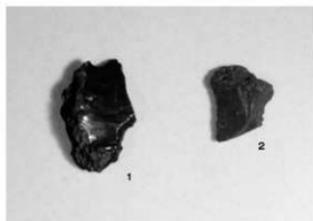


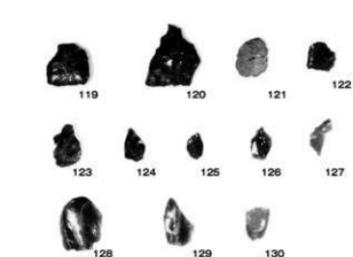
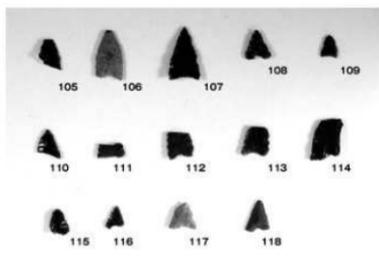
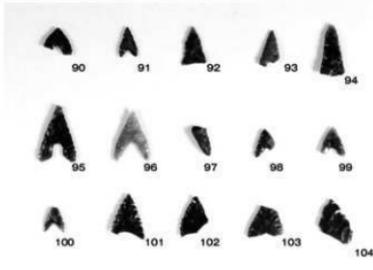
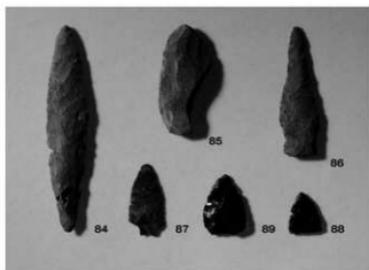
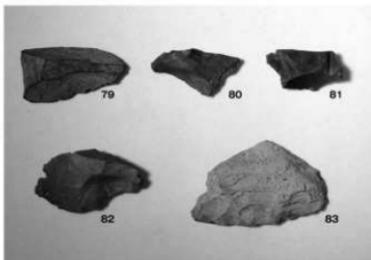
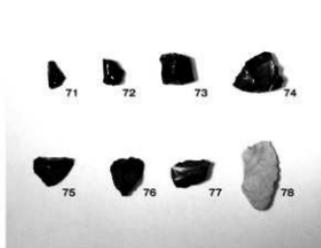
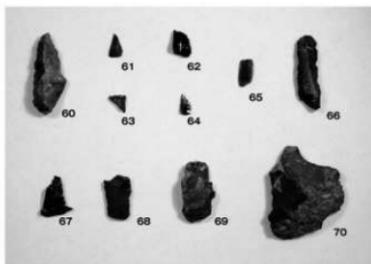
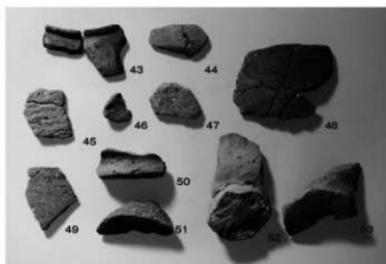
7. SK635 (南東から)



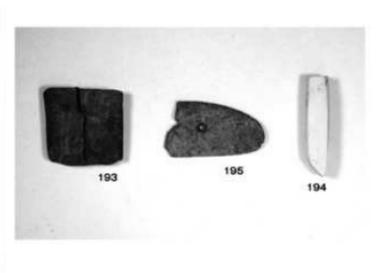
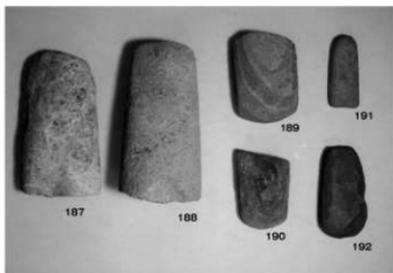
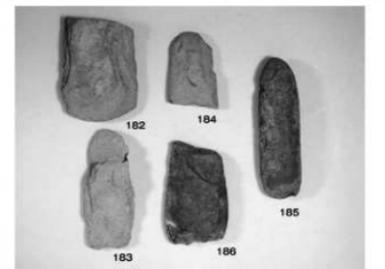
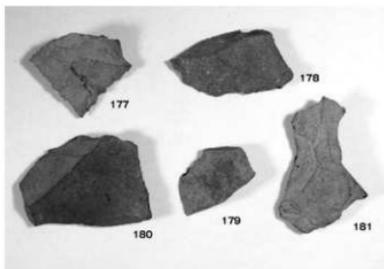
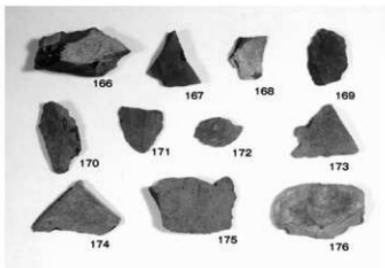
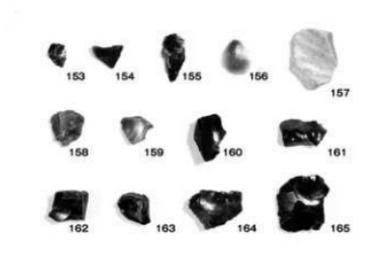
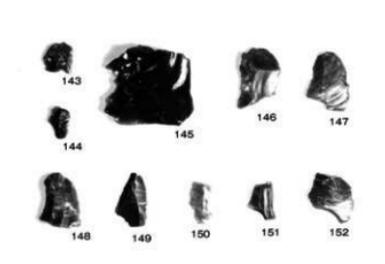
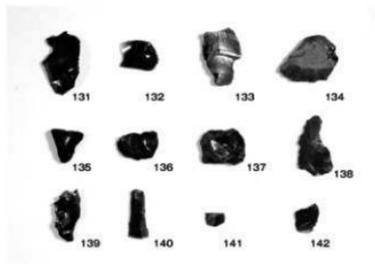
7. SK635 遺物出土状況

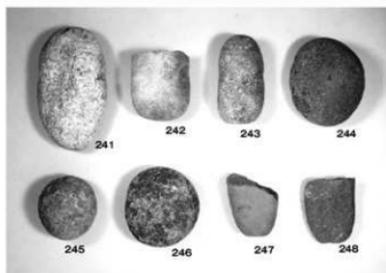
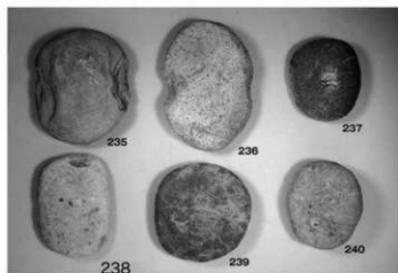
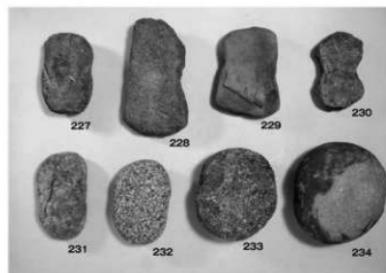
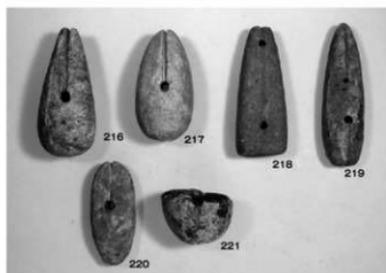
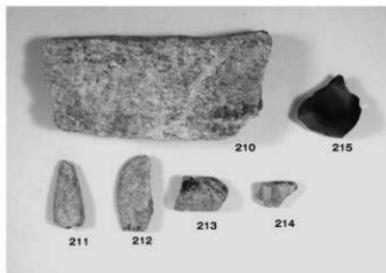
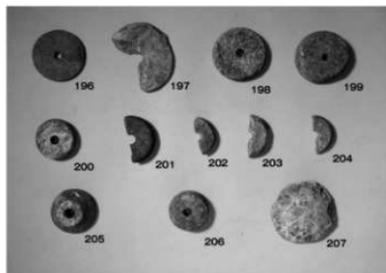
图版2



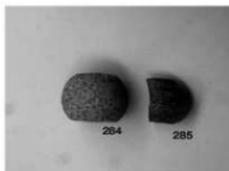
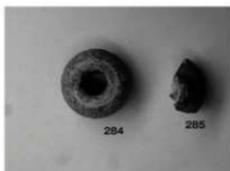
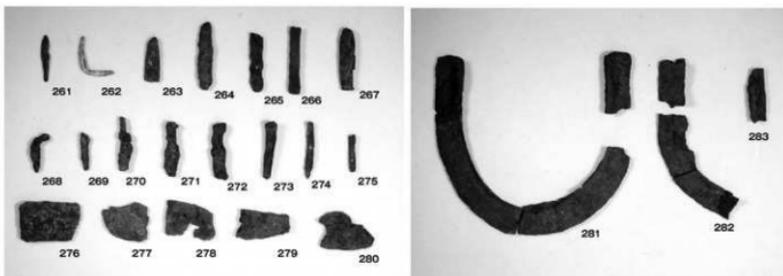
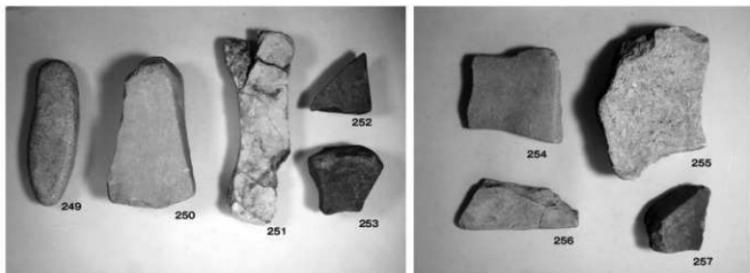


图版 4





图版6





1. SX413 (南東から)



3. SX413 杭 (南から)



3. SX417 (南西から)

図版8



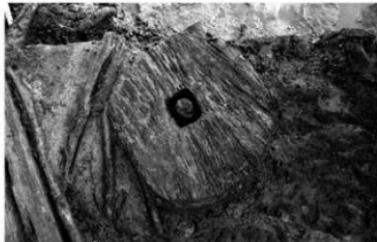
301 (上), 302 (下) (北東から)



304 (左上), 305 (上), 306 (下) (北から)



307 (中央), 308 (下), 309 (上) (北西から)



311, 312 (中央杭状) (南西から)



313



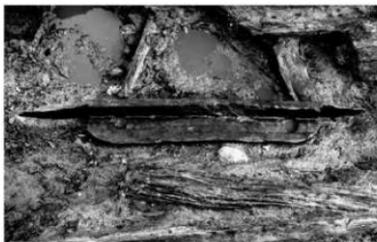
320 (下), 321 (上) (南東から)



321 (左下), 320 (右上) 北西から



321 に接して杭が打たれる (西から)



322 (北東から)



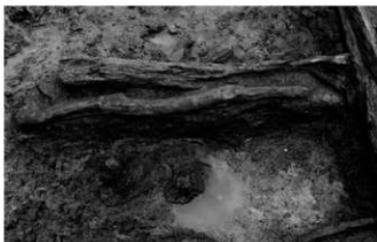
324 (東から)



326 (北東から)



326 (北東から)



331 (下)



334 (南から)



335 (西から)

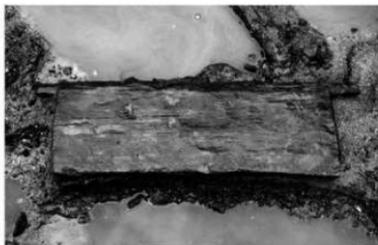


337 (西から)

図版 10



338 (北西から)



339 (北から)



339 に刻まれた傷



340 (西から)



340



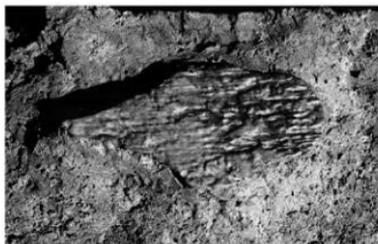
342 (北から)



343 (西から)



348 (南から)



349 (南西から)



351



352



364



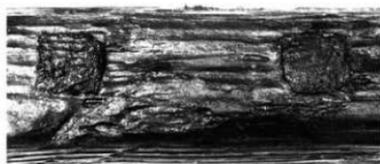
366 (西から)



368 (西から)



367



367

図版 12



369



370



371



373



376 (西から)



377 (北西から)



389 (西から)



395

Ⅲ 第57次調査の報告

1. 調査の概要

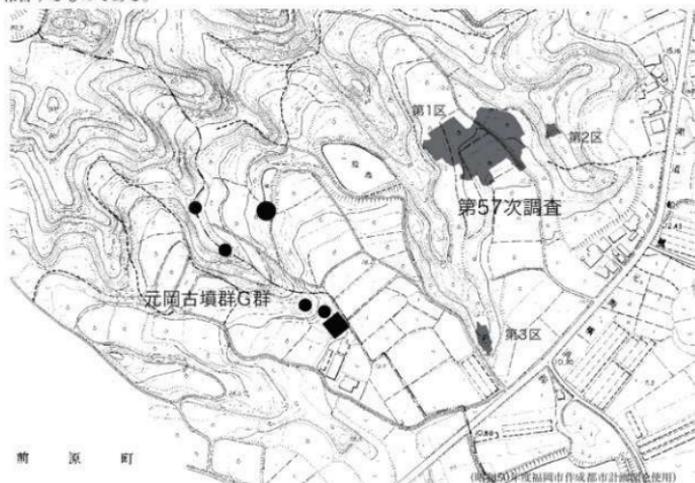
(1) 調査の経緯

57次調査地点がある地区は、平成8（1996）年の試掘調査で遺跡の存在が明らかとなっており、その後、当該地を含む移転用地南側部分については九州大学が福岡市土地開発公社より再取得した後に福岡市教育委員会と九州大学で協定書を締結し、平成15（2003）年から平成23（2011）年にかけて発掘調査を実施した。

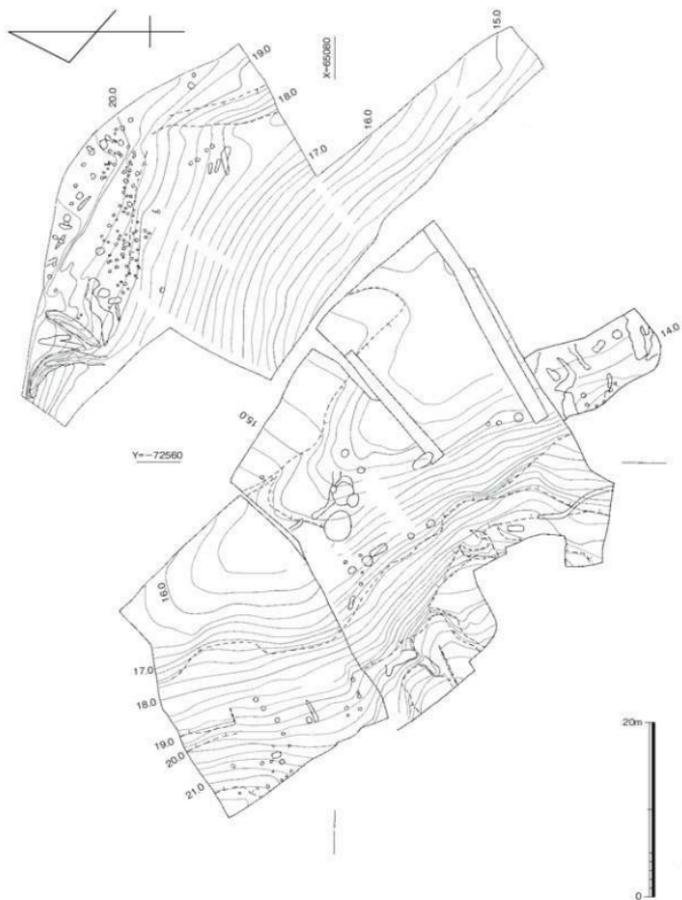
57次調査が位置する谷部は全体に遺構、遺物が濃密に遺存することから、道路建設及び造成工事により遺跡に影響を与える範囲について調査対象とした。なお調査は遺跡に影響が及ぶ部分に限定して実施され、57次調査区の北側および南側では造成高が遺構面に影響が及ばないため、調査範囲から外している。また、57次調査区内においても、造成高以下に堆積している遺物包含層は調査対象から外して現地保存する方針で進めており、これらの遺構・遺物は遺存していることを明記しておく。

調査は平成23（2011）年4月12日より開始し、平成24年3月までに第1区Ⅰ・Ⅱ区、2区の調査を実施した。平成24年度は第1区Ⅲ・Ⅳ区、第3区の調査を進め、平成25年度に第1区Ⅴ・Ⅵ区の調査を実施して、平成25（2013）年9月6日に調査を終了した。

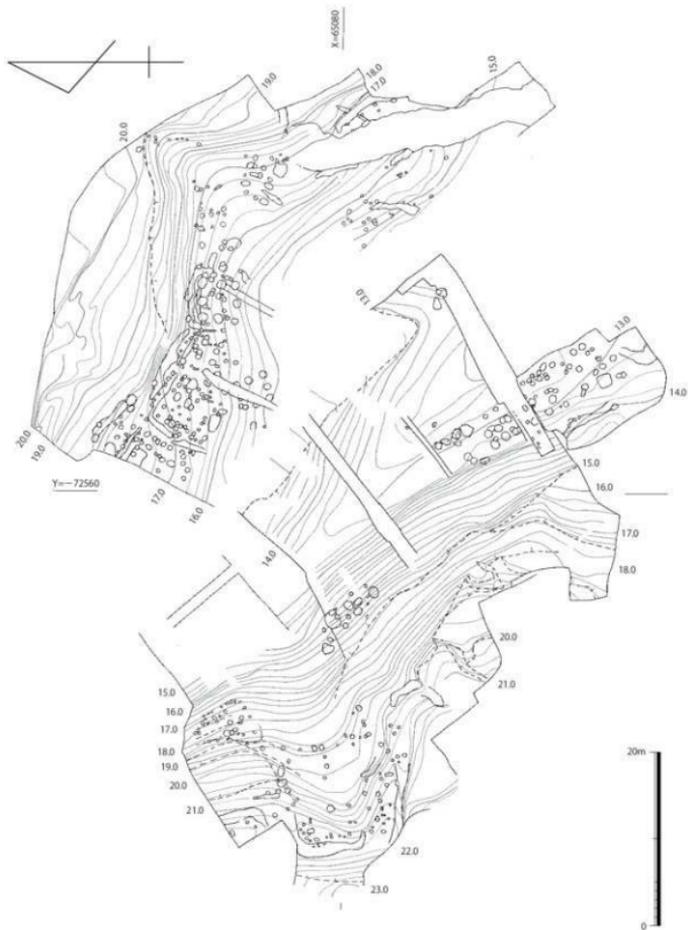
その後、遺物・記録類の整理作業を行い、平成29年3月に57次調査のうち、第1区の谷部包含層について報告を行った。〔元岡・桑原遺跡群28〕福岡市埋蔵文化財調査報告書第1328集〕本書はそれに続くもので、第1区の遺構と石器・木器・鉄滓について報告し、さらに第2区・第3区について報告するものである。



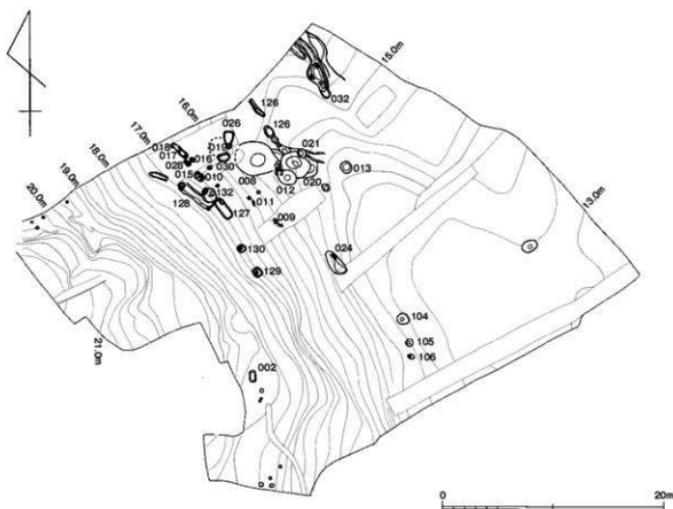
第1図 調査地点位置図(1/4000)



第2図 57次調査1区第1面全体図 (1/500)



第3図 57次調査1区第2面全体図(1/500)



第4図 I・II区第1面遺構分布図(1/400)

(2) 各区の概要

57次調査は第1～3区の調査区に分かれている。

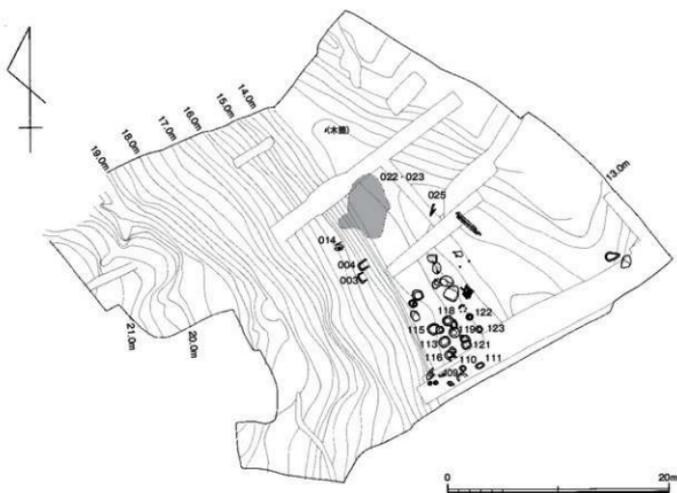
第1区は谷部分に設定された調査区で、前述の32次調査の結果を後継し、32次調査の確認と、さらに下層の確認を目的として実施された。

第1区はI～V区に分けられ、I・II区では古墳時代～中世の包含層を検出し、2面の遺構面を確認している。調査区西側の斜面部分では製鉄炉、鍛冶炉が位置し、大量の鉄滓が谷に流れ込んで包含層から出土している。鍛冶炉は製鉄炉に先行する7世紀後半～8世紀以降に築造され、製鉄炉は8世紀後半に築造されている。中世の遺構は土壙墓が斜面上部で検出されている。谷部包含層からは土器・鉄滓の他、木器が出土している。

III区では4面の遺構面を想定して調査を実施し、結果的に3面の遺構面を確認した。第1面では中世の建物、欄列などが西側谷部の最奥部で確認できた。第2・3面では古代の鍛冶炉や柱穴等の遺構を検出した。最下面では古墳後期の遺物が出土したが、明確な遺構は検出できなかった。

IV区は谷東側斜面部分にあたり、I～III区での調査結果を踏まえ、東側斜面での遺構・包含層の確認を目的に拡張した調査区である。IV区では調査の結果、小規模な谷が形成されているのを確認した。谷に堆積した包含層からは古墳時代中期から古代までの土器が出土しており、斜面中段に古墳時代の堅穴住居と、古代の大型建物を検出した。中世の土壙墓と焼土坑も出土している。

V区はI区の南側に設定し、I区で検出した遺構群の延長を確認する目的で調査を行ったところ、古墳時代から古代にかけての遺構群を確認した。調査区の一部は44次調査区と重複する。



第5図 I・II区第2面遺構分布図(1/400)

第2区は1区東側の丘陵尾根部の頂部の標高32mの地点に位置する。第1区調査中に尾根頂部付近を人力で試掘したところ、遺構を確認したため、調査区を設定し、調査を実施した。第2区では中世墓とみられる土坑やピットを確認した。全体に削平が進み、また出土遺物が少ないこともあり、遺跡の性格を判断することは難しい。

第3区は谷の西側の尾根の先端部頂部を調査し、中世の堀切と柱穴を検出した。堀切は幅10mで尾根を横断しており、断面は2段掘り状で、下段の堀は上面幅2.5mのV字形を呈する。堀切北側でピットや小規模の溝を検出した。

なお、調査は第1区I・II区と第2区を長家伸が担当し、第1区III～V区と第3区を大塚紀宜が担当した。

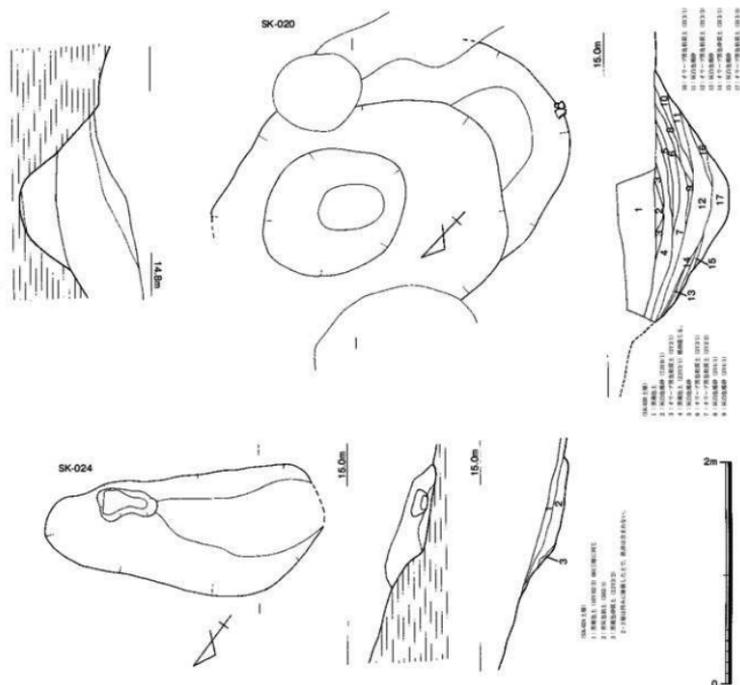
2. 1区の調査

(1) I・II区の調査

1) 土坑

SK-008 (第6図)

谷部の第1面で検出された楕円形の大型の土坑。谷部中軸のやや西側で検出された。土坑壁面は30～45度の緩い傾斜で、底面はレンズ状に丸くなる。遺構内の覆土は水成堆積による黒色～黒褐色のシルト・砂質土を主とし、自然堆積である。水位が高いため、覆土は軟弱でもろい。



第7図 I・II区出土土坑実測図2 (1/40)

井戸等の掘り方は確認できず、遺構の機能・用途等は不明だが、流路に近いことから貯水遺構などの機能も想定可能である。

出土遺物(第9図)6～7は黒色土器。6は両黒土器の底部破片で、内外面とも摩擦進む。高台は短く開く。7は両黒土器の碗底部破片。内外面とも幅広の横ミガキ痕跡が残る。

SK-012 (第6図)

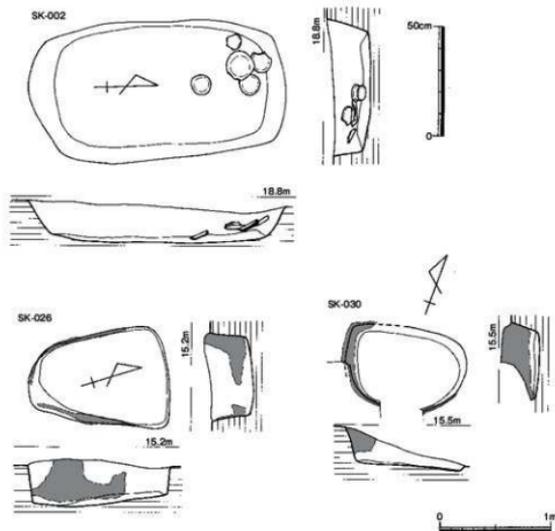
谷部第1面で検出された楕円形の土坑。008の南東側で検出され、礫石を多く含む溝状遺構を間に挟む。谷部001の①層を除去した時点で検出された。断面形はやや深めの鉢形を呈する。

覆土は上層が暗灰色～黒色土、下層は上層土に小粒状の木くずが混入し、全体に軟弱である。

SK-008と同様、流路に近い位置にあることから、水を利用した施設だった可能性が高い。

SK-013 (第6図)

谷部第1面で検出された円形の土坑。SK-012と同様、谷部001の①層を除去した時点で検出された。平面形はほぼ円形で、断面形は箱掘り形で、床面はほぼ平坦な円形を呈する。



第8図 I・II区出土土壌墓・焼土坑実測図1 (1/20・1/40)

遺構内からは木製品が覆土中位から出土し、遺構床面にはやや大きめの板石材が確認された。出土遺物(第65図)261は鋸形木製品。全長約60cmで、頭部は槌状を呈する。柄部は緩く屈曲し、自然の枝の形状をとどめている。その他、須恵器・土師器の破片が出土している。

SK-020 (第7図)

谷部第1面で検出された土坑で、SK-008の東側に隣接し、遺構南側をSK-012に切られる。また遺構北側で中世の滑石製品が出土した小型の円形土坑SK-021に切られる。

遺構の平面形は円形～楕円形とみられるが、西側の上端ラインが不明瞭で、正確な形状や規模は不明である。推定で長径2.6～2.8m、短径2.4m、遺構面からの深さは1.0mで、遺構の断面形は浅い鉢状を呈する。

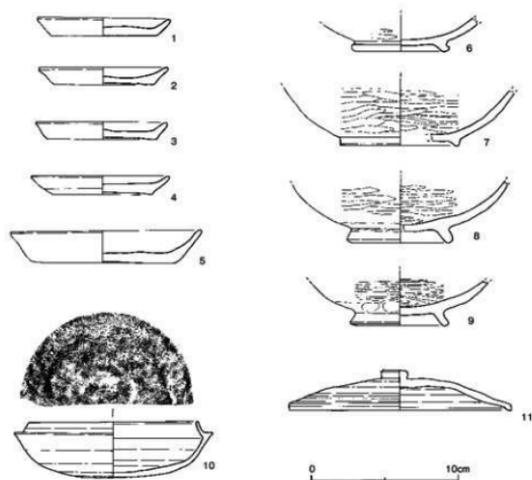
覆土は灰白色粗砂と黒色系粘質土の互層で、流水と沈殿を繰り返して埋没したことが伺える。覆土全体が保水性が高く、軟弱で崩れやすい。

床面上で長さ30cmのやや大型の石材が確認されたが、人為的に置かれたものかどうかは明らかではない。

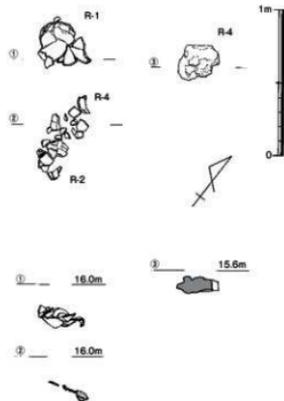
出土遺物(第9図)8・9は両黒土器の碗破片。内外面とも横方向のミガキ痕が残る。

SK-024 (第7図)

谷部西側斜面上に位置する細楕円形の土坑。遺構南側は削平されている。遺構面からの深さは浅く、20～30cmの深さにとどまる。遺構床面は平坦で、また遺構の谷側での上端と底面との比高差は非



第9図 I・II区土墳墓・焼土坑出土遺物実測図(1/3)



第10図 SX-011実測図(1/30)

常に低い。

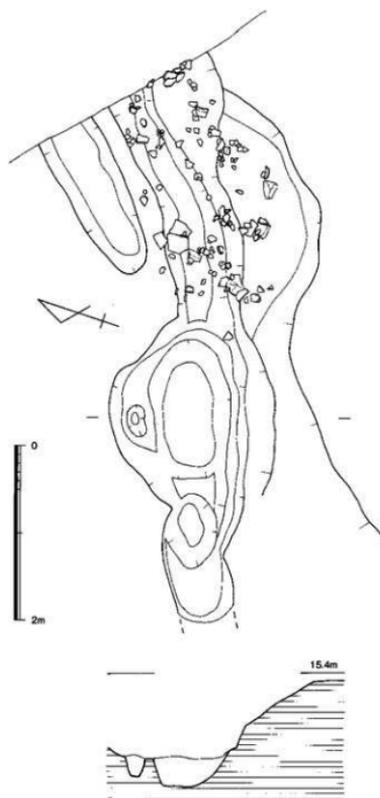
遺構西側で炉 SK-004 を切っており、炉より後出することは確実であるが、遺構覆土からは鉄滓等の関連遺物はほとんど含まれず、SK-004 の排滓坑などの機能は考えられない。遺構の位置や形状から、斜面を段造成した時の痕跡とみられる。谷の両側斜面には傾斜方向に直交する溝状遺構や段状遺構がみられ、SK-024 もこれらの遺構と同種のものである可能性がある。

2) 土墳墓

SR-002 (第8図)

谷部西側斜面の最上段に位置する土墳墓。遺構面からの深さが15cmしかなく、大きく削平を受けていることが推定される。

遺構は平面形が隅丸長方形で、特に南側の小口部分は円弧を描くように丸みを帯びる。全長1.2m、最大幅65cmで、床面の長さは95cm、幅55cmを測る。遺構側面は床面から大きく開いて立ち上がり、床面は平坦に作られる。



第11図 SX-032実測図(1/50)

によるものである。床面はほぼ水平で、平坦面をなしている。遺構西側から南側にかけての側面が特に広範囲に被熱している。

覆土はオリブ灰色(2.5GY4/1)で、炭化物はほとんど含まれないが、鉄滓が覆土中に入混している。この鉄滓は、近接するSX-019の鉄滓堆積層からの混入の可能性がある。

遺構覆土は鈍い黄褐色土で、地山花崗岩の風化土に近い。覆土の状況からは、木棺の痕跡はない。

遺構北側の床面直上で土師器の坏・皿5点が確認され、配置や遺物の状態から副葬遺物はほぼ埋葬時の位置を留めているとみられる。

出土遺物 1～4は土師器皿。いずれも胎土は橙色で軟質、風化が進み、表面の摩滅が進む。底部はいずれも回転糸切りである。5は土師器坏で底部は回転糸切り。

3) 焼土坑

SK-026 (第8図)

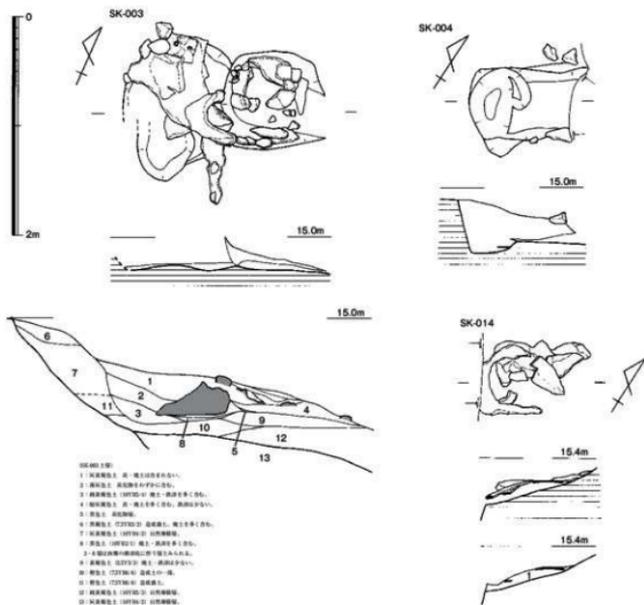
谷部西側斜面で検出された焼土坑。平面形は三角形を呈し、全長1.3m、最大幅95cmを測る。遺構面からの深さは最大50cmで、遺存状況は悪くない。遺構上部は青灰色土と粗砂が皿状に互層をなして堆積しており、流水により埋没したことを示している。最下部の床面直上には炭層が堆積する。

遺構側面の一部は被熱して赤変し、硬化した部分が見られる。被熱部分は遺構の南側側面に多くみられる。

SK-030 (第8図)

谷部西側斜面で確認された焼土坑。SK-026の西側の斜面上位に位置する。調査時のトレンチ掘削により遺構の一部が破壊されたが、遺構の全体は確認できる。

平面形は三角形に近い不整形で、遺構東側は円形に近い形状である。遺構面からの深さは西側で40cm、東側で10cm以下で、これは東に傾斜した斜面上に作られたこと



第12図 I・II区出土製錬炉・鍛冶炉実測図1(1/40)

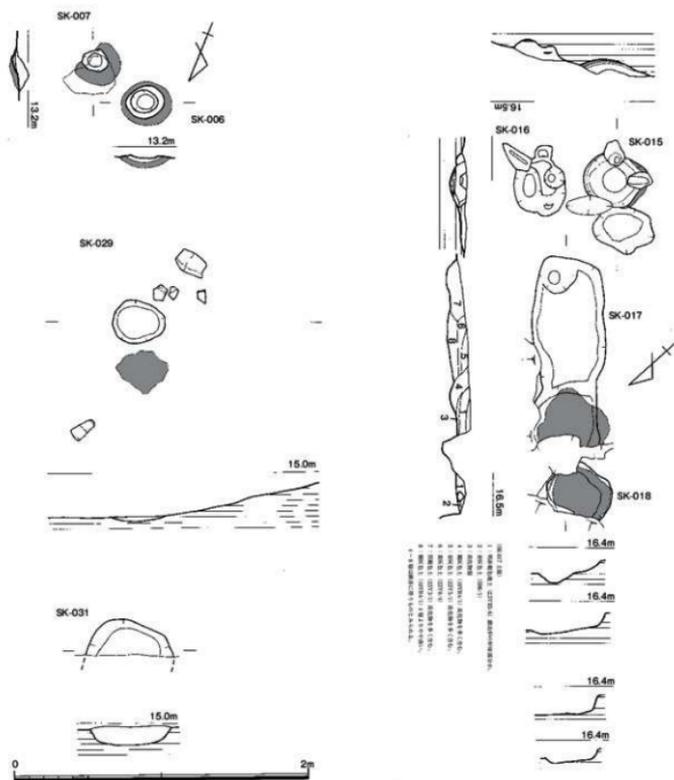
4) 土器埋置遺構

SX-011 (第10図)

2区の斜面2トレンチ内で土器と鉄滓が個体ごとに配置された状態で検出された。これが人為的な所為によるものかどうかは不確実だが、ここでは埋置遺構として扱う。

南北1.5m、東西1mの範囲で、須恵器甕1点、土師器甕、須恵器坏、鉄滓が確認されている。須恵器甕は本来はほぼ完形で、正置されていたとみられる。設置するための掘り込みは見られないが、人為的に埋置されたものと考えられる。土師器甕と須恵器坏は隣接して検出され、隣接して埋置されたとみられるが、いずれも小片に破砕され、詳細な埋置状態は分からない。鉄滓はこれらの土器と同位置で検出されたが、土器とは直接関係ないものとみられる。

出土遺物 土師器甕は、図示可能な状態まで接合することができなかった。10は須恵器坏。受け部は薄く、内傾して立ち上がる。体部はやや深めである。底部外面は回転ヘラケズリ、外面上部と内面は回転横ナデ。内面にヘラ記号が書かれる。

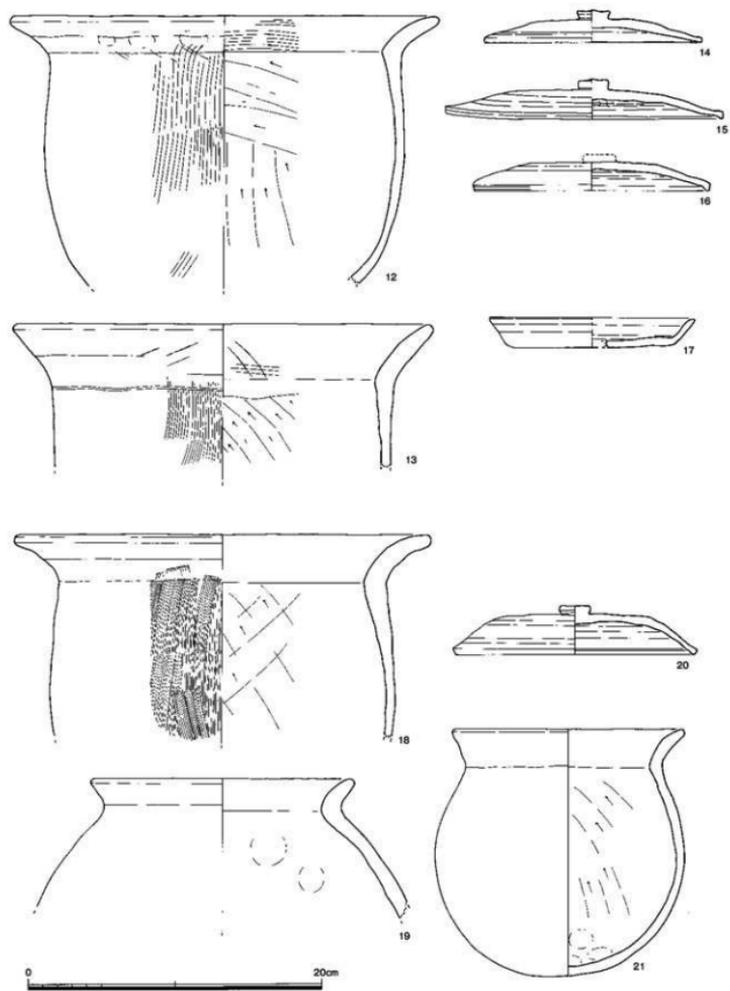


第13図 I・II区出土鍛冶炉実測図2(1/30)

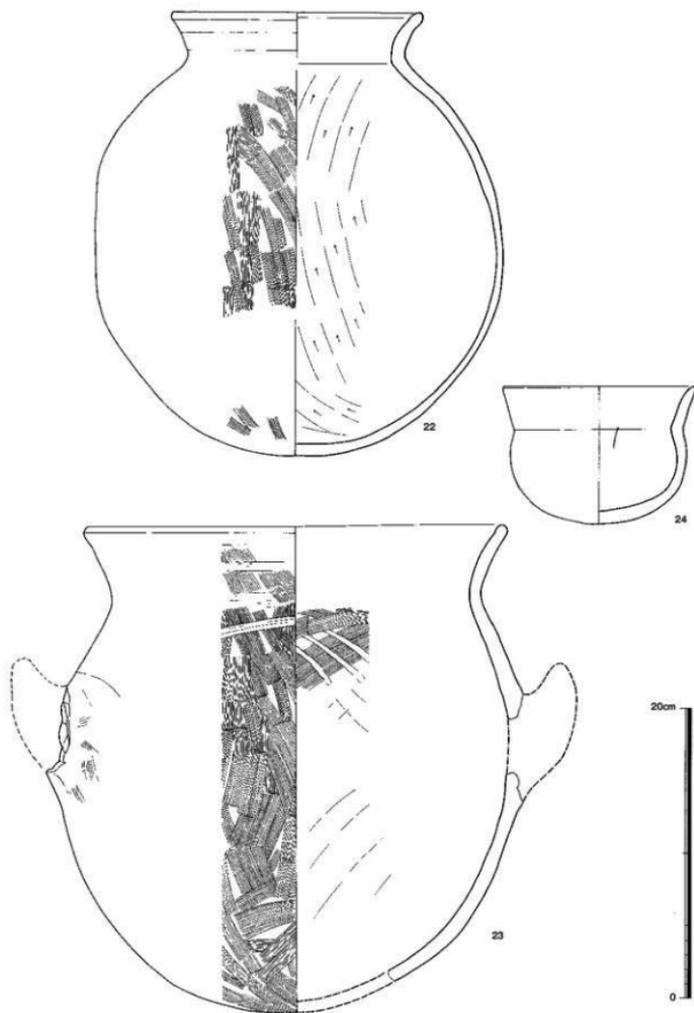
5) 流路

SX-032 (第11図)

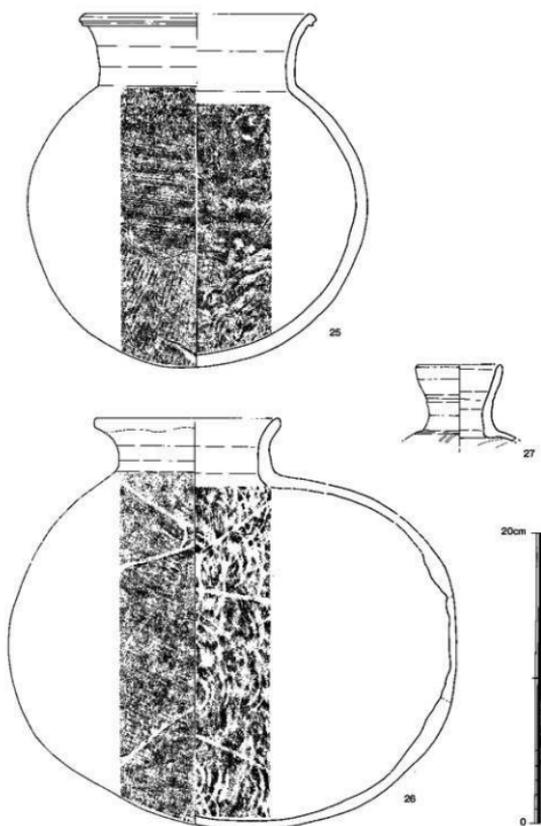
谷部中央で確認された自然流路で、谷部001の中のある時期に流路となっていたものとみられる。遺構内に土器がまぎれ込んで出土しており、両側の谷から流れ込んだ遺物が堆積したものとみられる。流路の一部が深く楕円形に凹んでいる箇所があり、人為的な掘り込みの可能性もある。遺物は、001 包含層として一括して取り上げている。



第14图 SK-027·SK-029出土遺物実測図(1/3)



第15図 SX-022出土遺物実測図1(1/3)



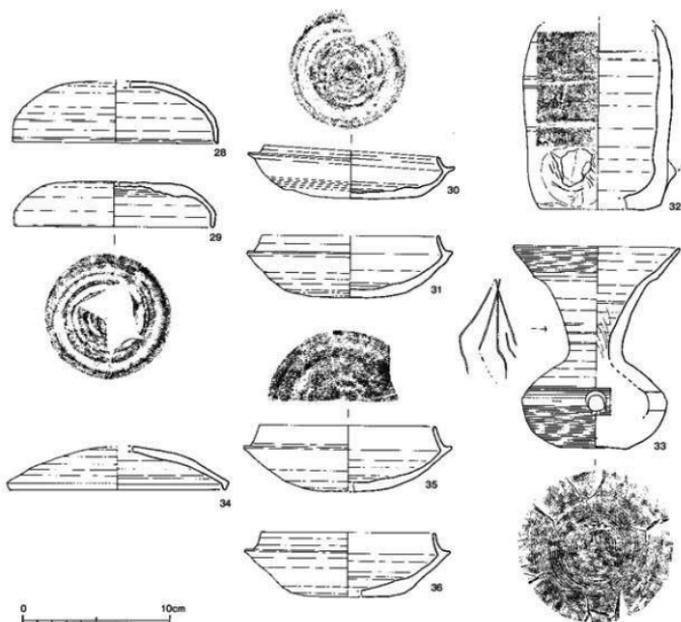
第16図 SX-022出土遺物実測図2(1/3)

6) 製錬炉・鍛冶炉(第12・13図)

SK-003(第12図)

調査区西側斜面で検出された製錬炉。調査当初は小型の炉本体のみとみていたが、炉の西側に排滓坑があり、大型の炉壁がほぼ作業時の形態をとどめて倒壊している状況が確認できた。

炉は掘り方から60cm×50cmの箱型炉と推定できる。炉内部には鉄滓や炭化物が堆積する。炉の東側の斜面下方に排滓坑があったと想定されたが、その痕跡は全く残っておらず、削平されたが、斜面ごと崩落したものとみられる。



第17図 SX-Q22出土遺物実測図3(1/3)

東側の排滓坑は、直径1.0mの略円形の排滓坑と大型の炉壁が確認できた。排滓坑は作業時の深さが30cmと推定され、土坑内からは炭化物や鉄滓が出土した。炉壁には通風孔が15cmの間隔で2箇所確認でき、外側から四角錐状に壁を切り込み、内側は円筒状になっている形状が確認できた。その他、コーナー部分とみられる湾曲した炉壁も確認されて、作業時に引き倒したままの状態で埋没したことが想定される。炉壁は被熱が弱く、軟質の粘土状態だったためバインダーで強引に固めて取り上げたが、固化できる状況ではない。

出土鉄滓については別章で後述する。

SK-004 (第12図)

調査区西側斜面で検出された製錬炉で、遺構東側は斜面で削られる。検出状態で長さ90cm、幅60cmを測り、掘り方の全長は1.0～1.2m程度だったとみられる。掘り方西側は一段深く掘られ、排滓坑の可能性があり、炉の長さは50～60cmと推定できる。遺構覆土は焼土・鉄滓を多く含み、床面に造成層中の炭化物堆積層が見られたことから、斜面上方で作業された炉の排土で埋め上げた可能性もある。

SK-014 (第12図)

西側斜面で検出された製錬炉とみられる遺構で、遺構下部に掘り込みはなく、斜面上に炉壁塊が集中した状態で検出された。炉壁は長さ1.0m、幅70cmの範囲に集中し、暗褐色～明褐色の粘土状の被熱が弱い部分と、黒色に硬化した部分がみられる。炉壁下部は焼土を含む暗褐色粘土が堆積し、序う方で操業された炉の炉壁が斜面下方に崩落したものと推定される。

SK-006 (第13図)

調査区谷部で検出された鍛冶炉。炉本体の径は16～19cmで、その周囲に径25cm程度の黒褐色の炉壁があり、その周囲の径30cmの範囲まで被熱し、灰褐色を呈する。炉内には鍛冶滓は遺存していない。また周囲に排滓坑や金床等の施設も検出されていない。

SK-007 (第13図)

調査区谷部で検出された鍛冶炉で、SK-006と30cmの間隔で隣接する。中央部の壁体は径15～17cmで褐灰色(5YR6/1)を呈する。炉の周囲は径30cmの範囲で赤褐色に被熱し、炉直上に鈍赤褐色の焼土塊が堆積する。

SK-015～018 (第13図)

調査区西側斜面で検出された鍛冶炉群。SK-015は径35cmの円形で、炉内壁面は被熱還元により黒色に硬化し、周囲に被熱して赤変した部分がみられる。炉の一部の炉壁と被熱底が切れる幅9cmの部分があり、羽口を挿入した部分とみられる。炉の北西側に長40cmの楕円形の掘り込み(SK-028)があり、SK-015の排滓坑とみられる。

SK-016はSK-015と15cmの間隔で隣接し、掘り方径は36～40cm、深さ10cmで、不規則な形状を呈する。覆土は地山土に炭化物・鉄滓が混在して堆積し、SK-015の排滓坑の可能性もある。

SK-017は幅40cmの不整形に赤変した部分を鍛冶炉と見なしたもので、堆積土層2層の赤褐色焼土を炉壁とする。中央部はわずかに還元面があり、鈍い黄色を呈する。

SK-018はSK-017の北側に隣接し、径40cmの略方形の鍛冶炉。炉の掘り込みは削平されたこととみられ、炉底が露出する。

017・018付近の幅50cmの溝状遺構は、排滓に伴うものとみられる。

SK-029 (第13図)

土器散布地SK-027の南側の暗緑褐色砂質土上面で黒色土を含む長36cmの掘り方と羽口、土師器の散布がみられ、鍛冶炉としてみなす。掘り方は焼土・硬化面、赤変はみられず、覆土に鉄滓は含まれない。掘り方南側に炭化物が分布する幅35cmの不整形の範囲がみられる。

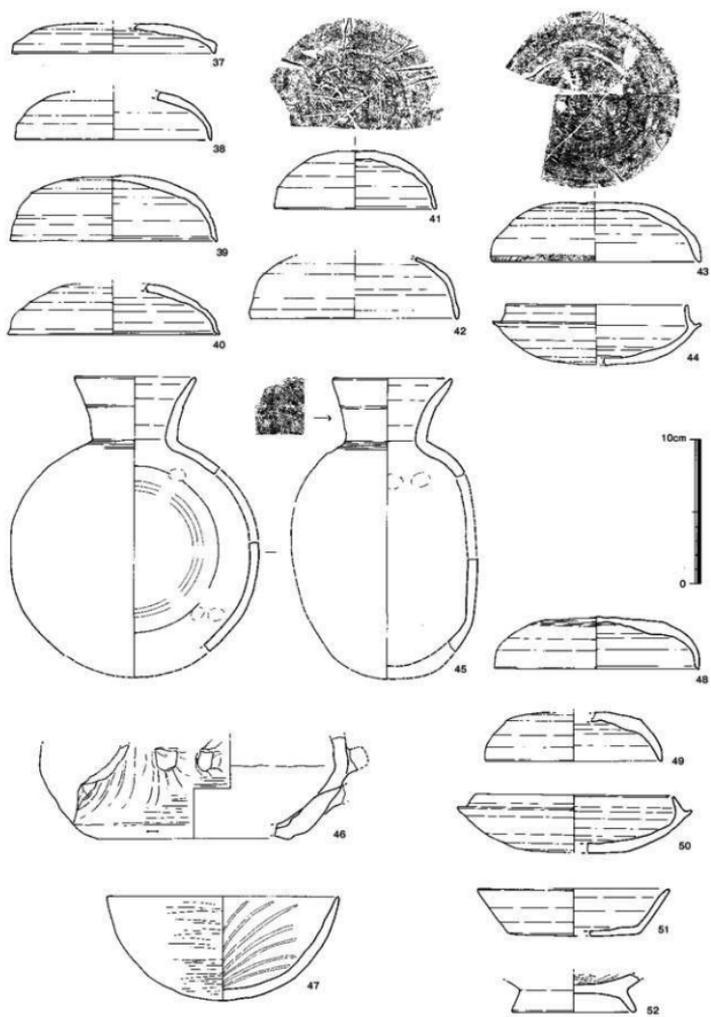
出土遺物(第14図)18は土師器壺。001⑥層出土破片と接合する。屈曲部は緩く外湾し、口縁部にかけて強く外湾して開く。体部の張りは弱い。外面は細かい縦方向ハケ目、内面は縦方向のケズリ。19は土師器壺で、胴部は丸く張り、口縁部は太く短く外反する。内外面とも摩滅著しい。20は須恵器坏壺。体部は高く、摘みは平たいボタン形を呈する。端部は横ナデで面取りされる。天井部は回転ヘラケズリ、周縁部と内面は回転横ナデ。外面周縁部は黒色に変色し、内面もほぼ全面黒色に変色する。

SK-031 (第13図)

径60cmの鍛冶炉。遺構北側は掘り下げ時に掘削しており、本来は隅丸長方形だった可能性もある。覆土上層では鉄滓・羽口破片を含み、覆土下層には炭層が厚さ5cmで堆積している。壁面に赤変した部分はなく、被熱した痕跡は確認できない。

SX-022・023

西側斜面の製錬炉SK-003・004の下に位置する鉄滓溜り。鉄滓集中部分の北側をSX-022、南側を



第 18 图 SX-022 出土遗物实测图 4 (1/3)

SX-023 と認識して掘削したが、結果的に一連の滓溜りと確認された。

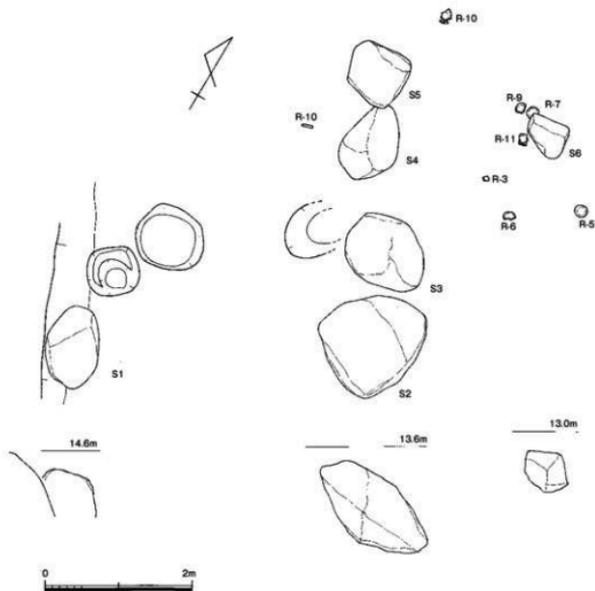
鉄滓溜りは斜面と谷部の境界付近に堆積し、南北幅 6m、東西幅 5m の範囲に広がり、鉄滓堆積層の厚さは標高 13.6m ~ 14.2m の 60cm に及ぶ。鉄滓は河川堆積層と混在し、多くの焼土や土器を巻き込む。

出土遺物(第 15 ~ 18 図)22 は土師器壺。022 西側包含層(茶褐色土)からの出土。体部は丸く膨らむ。23 は土師器甕。把手は接合面のみ確認できる。底部の孔の形状は不明である。24 は土師器小型丸底壺。体部はやや扁平で、口縁部は直線的に開く。内外面とも摩滅が進む。

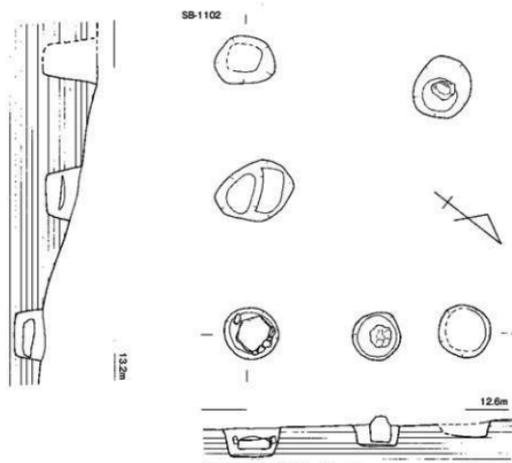
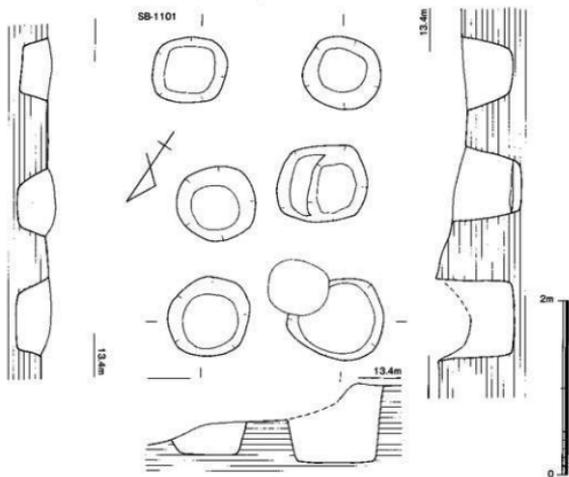
25 は須恵器壺。外面上部は横方向のカキ目、下部は縦方向のタタキ痕跡が残る。26 は横瓶で、図上で復元する。体部は楕円球で、頸部は細く外湾する。内面には当て具痕跡が残る。27 は提瓶の口縁部破片とみられる。頸部中央に沈線が 1 条廻る。

28 ~ 33 は 022 西側包含層茶褐色土から出土した須恵器。28 は体部は丸く、口縁部は直立して端部は段を付ける。29 は内面に当て具痕跡が残る。30 は体部外面にカキ目状の調整痕が残り、内面に当て具痕跡が残る。32 は把手坏瓶の胴部破片。把手接合部は粘土紐を絞って接合したような形状がみられる。外面はカキ目と波状文がつく。33 は 022 西包含層とⅣ区 065 西包含層 1 面下出土破片が接合した須恵器甕。頸部外面と底部にヘラ記号が書かれる。

34 ~ 36 は 022 西側包含層からの出土。34 は須恵器蓋で、摘みがついていたとみられる。35 は内面にヘラ記号の一部が確認できる。36 は 022 包含層灰色土から出土したものである。



第 19 図 I・II 区巨石遺構実測図 (1/60)



第20图 I·II区掘立柱建物实测图(1/50)

37～46は022・023下層暗褐色粘土からの出土。37は体部はやや丸く、端部は面取りされる。39は口縁端部は段がつき、体部外面に沈線が1条廻る。外面に自然軸が付着する。40は天井部と体部の境界に幅広に幅広の沈線が付く。41は小型で、天井部にヘラ記号と短線状の工具痕が付けられる。43は口縁端部外面に刻目が付けられ、天井部にヘラ記号が付く。44は須恵器坏身。

45は須恵器提瓶で体部は欠損部が多いが、カキ目痕跡が確認できる。46は須恵器の把手付鉢の破片。体部が張る形のものともみられるが、全体形は不明。

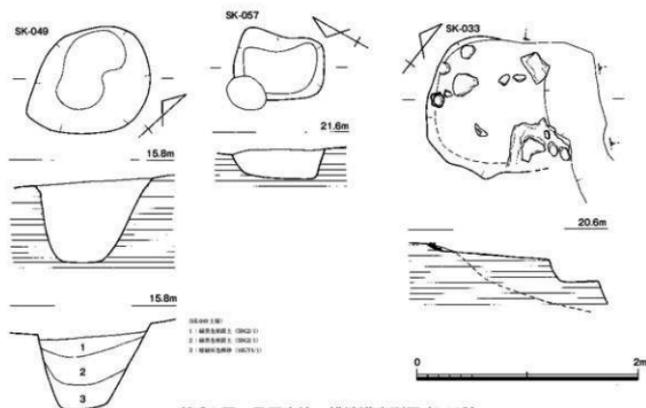
47～52は022・023下層灰色砂層からの出土。47は土師器鉢。内面に暗文が見られ、外面は横方向のヘラミガキ。内外面とも摩耗が進む。48は須恵器坏蓋で、上面にカキ目状の調整がみられる。49は小型で、全体に厚手である。51は坏で、古代に属する。底部は平底で、回転ヘラケズリ、体部は直線的に開く。52は内黒土器の塊。内面はヘラミガキで、高台は長く開く。

022・023出土遺物は時期的に大きく開き、下層から上層まで遺物の時期差を確認することができない。このことから各遺物の時期に堆積したのではなく、谷部西側斜面上の各時期の遺物が流入して堆積したものと考えられ、遺物の時期と堆積時期に大きく差があることが明らかである。022・023に堆積する鉄滓に伴う製鉄炉の時期も、共存する遺物から年代を明らかにすることは困難であると考ええる。

7) 巨石遺構 (第19図)

西側斜面と谷部との境界付近で、幅1～1.5mの巨石が5m四方にわたって集中する。うち4石は谷の方向に沿ってほぼ一列に並ぶ。人為的に配置した可能性は低く、これらの石は谷奥や西側斜面上方から転がってこの場所に集まったとみられる。石の周囲からは古代の土器が出土しており、石陰で祭祀を行ったことが考えられる。

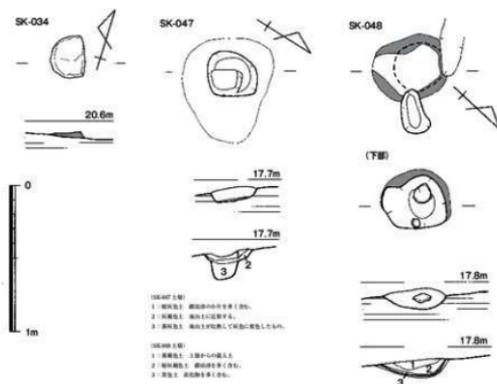
8) 掘立柱建物



第21図 III区土坑・排水溝実測図 (1/40)



第22图 III区遺構配置図(1/200)



第23図 Ⅲ区鍛冶炉実測図1(1/30)

SB-1101 (第20図)

第2面で確認された1×2間の掘立柱建物。標高128～133mの谷部埋土上面で確認された。桁行3.0m、梁行1.6mで、柱穴は円形または隅丸方形で、規模は径80cm～1.2mの大型の掘り方を持つ。柱痕が残るものはない。鍛冶炉SK-006・007と重複する位置に建てられる。

出土遺物(第14図)21はSP-113出土の土師器甕で、ほぼ完形に復元可能。体部は丸く、頸部は屈曲して外湾しながら開く。内外

面とも摩滅が著しい。

SB-1102 (第20図)

第2面で確認された2×2間の掘立柱建物で、SB-1101と重複する。標高126～130の谷部埋土上面で確認された。桁行3.0m、梁行2.5mと推定される。南東側の柱SP-123の掘り方下部には礎石が確認され、SP-114とSP-122では柱材が確認された。柱材は径が25～30cmである。

9) その他の遺物(第9・14図)

11は鉄滓・焼土の集積遺構SX-019から出土した須恵器环蓋。12～17はSK-029の北側の土器散布部分SX-027出土。12は土師器甕。体部は下影れ形で、外面には縦方向の粗いハケ、内面はケズリ。13は土師器甕口縁部。屈曲部外面に沈線が1条廻る。外面は縦方向ハケ目、内面はケズリ。

14は須恵器环蓋。摘みは平たい宝珠形で、外面は摩滅が進む。16は全体に円盤状を呈し、内面は黒色に変色し、捺痕が残る。17は須恵器皿。浅く、体部は外側に低く開く。内面見込みに黒色の墨のようなものが付着していた痕跡がある。内外面とも回転横ナデ。

(2) Ⅲ区の調査

1) 土坑・排滓坑

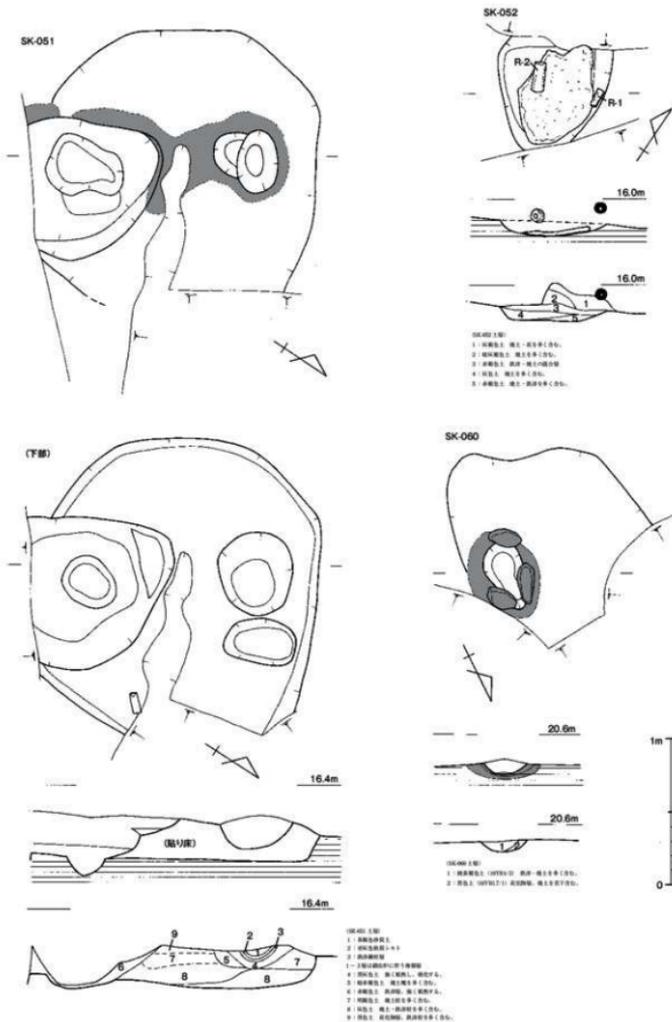
SK-049 (第21図)

谷部のほぼ中央部で検出した円形土坑。谷部内の標高15.7mで検出される。平面形は略円形で径1.0～1.2m、断面形は逆台形で、底面は幅80cmでほぼ平坦である。

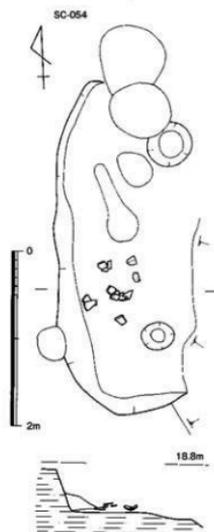
遺構覆土は上層が緑黒色粘質土、下層は暗緑色粗砂で、いずれも水成堆積によるものである。谷部包含層の中では比較的上層で検出されており、遺構の時期は中世まで下る可能性が高い。

SK-057 (第21図)

西側谷部の北側斜面上方に位置する土坑。平面形は隅丸方形で、西側隅を小型のピットに切られる。



第24图 III区鍛冶炉実測图2(1/30)



第25図 III区竪穴住居
実測図(1/50)

炉床は円盤状に遺存しており、幅30cm、長さ22cm、厚さ30cmで、強く比熱して硬化し、赤色を呈する。この炉床の外側には被熱した痕跡はなく、周囲は全て削られ、本来の遺構面は遺存していないと考えられる。

SK-047 (第23図)

調査区西側の斜面上方に位置する鍛冶炉。炉本体は平面形が径30～35cmの略円形で、遺構面からの深さが10cmの鉢形を呈する。遺構内は2段掘り状になっているが、これは別のピットが切り合っているものである。遺構壁面と床面は還元焼成により薄灰色に変色し、硬化する。遺構覆土は鍛冶滓を多く含み、もろい。

この鍛冶炉本体の外側、径65～70cmの不整形の範囲に掘り込みがみられる。これは炉が一度大きく土坑状に掘り込まれ、人為的に埋め戻して炉床が築かれた工程が想定される。この掘り方の南側上端に赤褐色に変色した被熱部分があり、炉床下部を築造する際に周囲を焼き締めた可能性も考えられる。炉床下部の覆土は灰褐色を呈し、赤褐色焼土と炭化物が混入する。

SK-048 (第23図)

調査区西側の斜面上方に位置する鍛冶炉。西側壁の一部を欠くが、掘り方の長径50cm、短径45cmの不整形円形を呈する。遺構面からの深さは13cmを測る。

遺構壁面は強く被熱を受け、暗赤褐色に変色する。また炉中央部の炉床直上には厚さ1cmの炭化物層が堆積する。遺構下部南側で赤変部分が切れる部分が入り、この部分に羽口を設置したとみられ

遺構の規模は、全長83cm、全幅67cmで、遺構床面はほぼ平坦で、南側にやや傾斜する。壁面は北側で緩く、南側で角度を持って立ち上がる。遺構覆土は暗褐色土で、地山花崗岩の風化土が主である。

遺構の形状からみて土墳墓の可能性が高いと考えられる。

SK-033 (第21図)

西側谷部上方に位置する土坑で、遺構内から鉄滓や焼土が出土していることから、排滓坑とみられる。西側に鍛冶炉SK-060が位置するが、この鍛冶炉の排滓坑とは断定できない。

遺構東側が失われているが、全長は約1.5mと見られる。

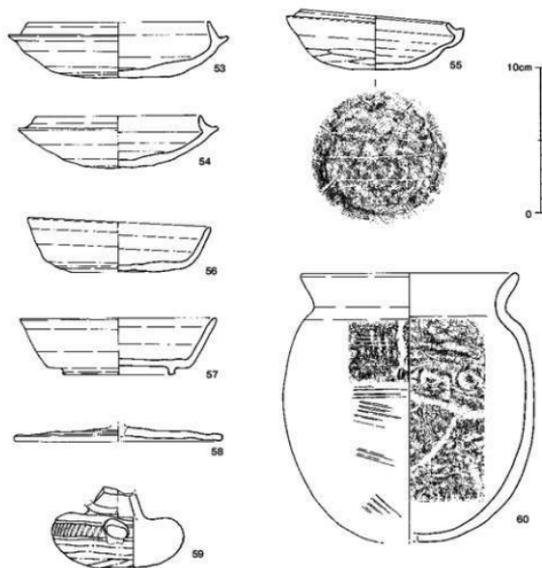
遺構覆土には焼土・鉄滓・炭化物が多く含まれ、大型の焼土塊も遺構内にあることから、近隣に製錬炉があったものと考えられる。出土遺物(第26図)53は体部は浅く、受け部は直線的に内傾する。54は体部は浅く、受け部は短く厚く立ち上がる。55はSK-033下層から出土した須恵器環で、やや小型。立ち上がり部分は湾曲するように作られる。底部は手持ちヘラケズリで、ヘラ記号が付く。

図示した遺物は古墳時代に属する須恵器だが、これらの遺物は尾根上部にあった遺構から流れ込んだものと推定され、遺構の時期はさらに下るものと考えられ、古代の炉に伴うと考えられる。

2) 鍛冶炉

SK-034 (第23図)

調査区西側の斜面上方で検出した鍛冶炉で、周辺が削平されて炉床塊だけが地山上に張り付いて遺存した状態で検出された。



第26図 Ⅲ区出土土器実測図(1/3)

埋め込んで貼り床を造成し、その上に鍛冶炉を築造している。

炉床は1ヶ所確認されており、炉床は掘り方の北側で遺存しており、長径45cm、短径25cmの楕円形を呈し、遺構面からの深さは10cmで全体に碗形を呈する。炉の周囲は幅60～70cmにわたって赤変しており、広範囲にわたって被熱が及んでいるとみられる。炉の内部は全体に非常に強く比熱し、黒灰色に硬化している。

炉の南東側には幅1m、深さ30cmの排滓坑が確認された。壁面には鉄滓が凝集した層が確認され、壁面の一部は強く比熱して赤変している。

出土遺物(第26図) 56は掘り方の東側で出土した須恵器杯。平底で、高台はない。

SK-052(第24図)

SK-051が位置する造成段上にあり、SK-051の南側に隣接する。炉はSK-051の排滓坑の埋没後に上層を掘り込んで築造されており、SK-051より後出する。

炉は南北両側が削られているが、径80cm程度の掘り方に径50～70cmの炉床をもつ規模とみられる。遺構面からの深さは10cmである。炉の上部には焼土が高さ10cmで堆積し、遺構覆土は鉄滓・焼土を多く含む。遺構最下部には、焼土が強く比熱し、硬化した面が遺存する。

遺構内から羽口が2点、良好な遺存状態で出土した。この炉に伴うものと考えられる。

SK-060(第24図)

る。遺構覆土から、15cm四方の焼土塊が出土しており、炉床の一部が崩落したものとみられる。

SK-051(第24図)

Ⅱ区とⅢ区の境界付近の標高18m付近に造成段がつくられており、掘立柱建物を想定させる大型の柱穴や鍛冶炉がつくられている。SK-051はこの造成段に作られている。

SK-051は一辺2.0～2.3mの隅丸方形の大型の掘り方の内側に鍛冶炉が作られ、外側の大型の掘り方は遺構面から20cm程度箱形に掘り下げ、地山土に焼土を混ぜ込んだ土を

西側谷部南側斜面の上方で検出された鍛冶炉で、SK-033の西側上段に隣接する。炉は本体が長径65cm、短径50cmの楕円形で、その周囲に幅1.2mの範囲で盛土を行っている。この造成は炉の下部構造の貼り床を作るものではなく平坦面を作るためのもので、造成土に焼土等は混入していない。

炉の周囲は幅10cmにわたって赤色に被熱しており、炉壁破片の一部が炉の縁で確認されている。炉の内部は還元焼成によって全体に黒変して硬化しており、炉床に接している部分は被熱して赤変している。炉内覆土には鉄滓、焼土が多く含まれ、床面直上には炭化物層が堆積する。

3) 竪穴住居

SC-054 (第25図)

谷部西側斜面の中位で検出された竪穴住居で、東側は斜面で流されており、遺存しない。住居は南北幅3.8m、遺構面からの深さ50cmで、東西幅は1.6mまで確認できる。床面上に柱穴を2基確認できた。遺構覆土は明褐色土で地山土に近似しており、斜面上方からの流入土とみられる。出土遺物(第26図)60は土師器甕。全体に摩滅が進む。胴部は丸く、口は大きく開き、口縁部は短く外湾する。外面は平行文のタタキ痕が残り、内面にも円形の当て具痕が残る。

遺物の時期から、古代の竪穴住居とみられる。

4) その他の遺構・遺物

57はSD-055出土の須恵器坏。高台は短く直立する。体部は直線的に開く。58はSD-059出土の須恵器坏蓋。摘み部分が欠くが、本来は摘みがあったとみられる。全体に浅い凹盤状を呈する。

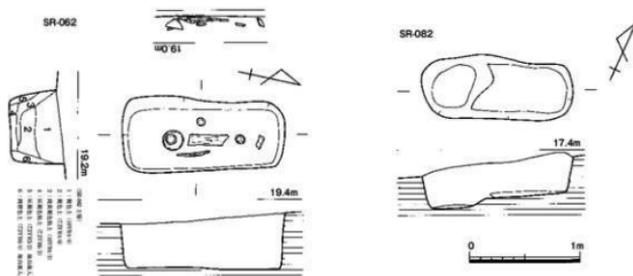
59は谷部で確認された木株(図版3(7))の根元から出土した題。木株は正位置で検出されており、出土位置からみて、人為的に木株の下に置かれていたものとみられる。体部は歪み、頸部が胴部に沈み込むような形になっている。底部はヘラケズリ後ナデ、胴部中央に刻目が付く。この木株の一部は取り上げて保管しており、今後分析等を実施することも可能である。(図版12)

(3) IV区の調査

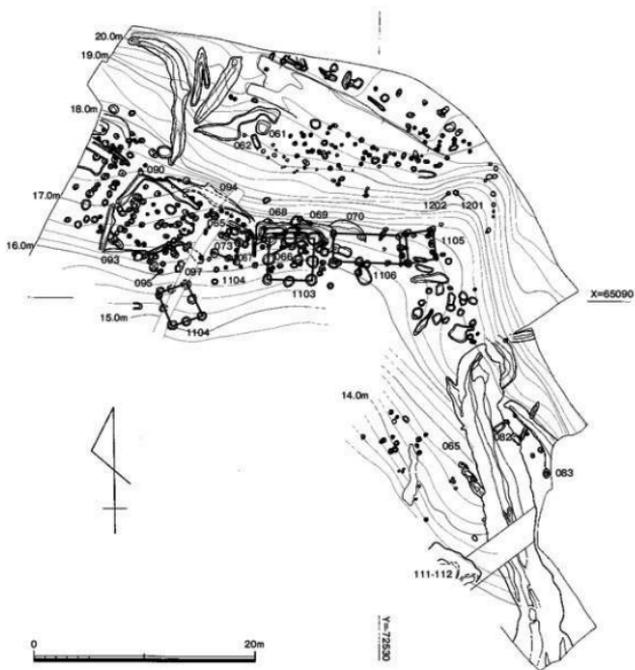
1) 土壌墓

SR-062 (第27図)

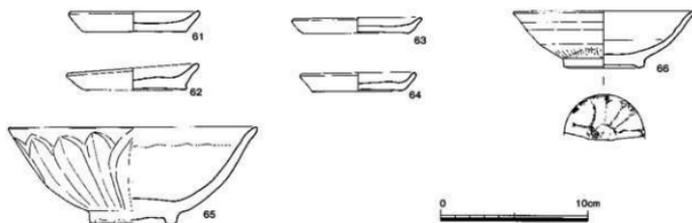
IV区北側の斜面中段で検出された木棺墓。主軸は南北向き、全長1.5m、幅70cmの隅丸長方形



第27図 IV区出土土壌墓実測図(1/40)



第28图 IV区遺構配置図(1/400)



第29図 IV区土壌墓出土遺物実測図(1/3)

を呈する。床面は長さ1.35m、幅55cmで、ほぼ平坦な面である。床面上面には棺材とみられる板材が残り、青磁碗1点と土師器皿4点が正位置で検出された。

遺構覆土からは、木棺が腐朽した後に上層から土砂が流入した状況が確認できる。

出土遺物(第29図)61～64は土師器皿。ほぼ同型同大で、いずれも底部は回転糸切り。65は青磁碗で、完形。龍泉窯系の鎔蓮弁文碗で、浅黄橙色の胎土に明オリブ灰色の軸が厚く掛かっている。外面は高台外面まで軸が掛かる。口縁端部は軸が擦れて剥落しており、内外面に細かい擦れがみられるなど、かなり使い込んだ感を受ける。

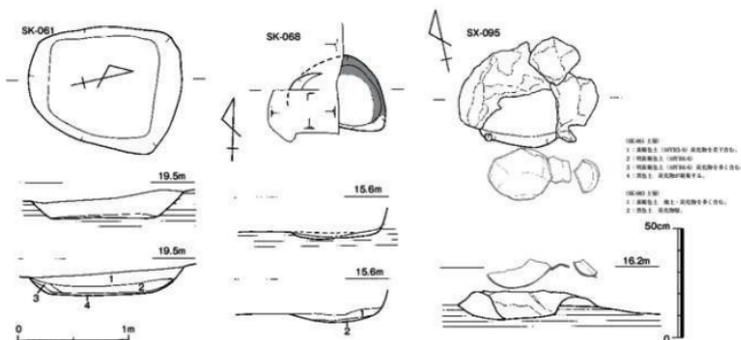
SR-0B2 (第27図)

調査区南側のSD-065上層で検出された土壌墓で、SD-065が埋没した後に造墓されたものである。平面形は隅丸長方形を呈し、西側の小口は丸みを帯び、全体に整った形状ではない。

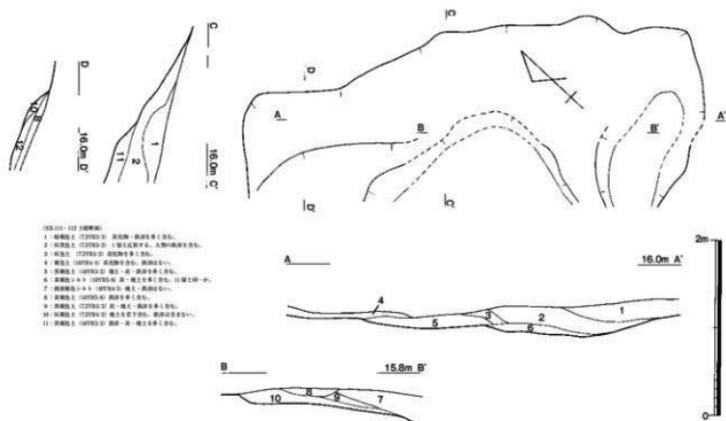
遺構内は2段階り状を呈し、西側の床面が10cmほど低い。

遺構の主軸は斜面の傾斜方向に沿っている。遺構内からは白磁碗が1点完形で出土したが、木棺の痕跡を示すものは出土していない。

出土遺物(第29図)66は白磁碗。やや小型で、高台は厚く低い。軸は灰白色で、外面は高台の際まで掛かる。高台内底部に文様状の黒変部があるが、人為的なものかどうか明らかでない。



第30図 IV区出土炉・焼土坑実測図(1/40)



第31図 IV区出土排滓坑111・112実測図(1/50)

2) 炉・焼土坑・排滓坑

SK-061 (第30図)

IV区北側の斜面中段で検出された焼土坑で、SR-062と隣接する。

平面形は台形で、遺構主軸は斜面の傾斜方向に沿う。全長1.4m、最大幅1.1m、南側幅0.7mを測り、遺構面から床面までの深さは20cmである。壁面や床面に強く被熱した部分はみられない。

遺構覆土は地山からの流入土が大半で、最下層の床面直上に黒色炭化物層が薄く堆積する。

遺構の遺存状況からみて、大きく削平されている。遺構に伴う遺物は出土していない。

SK-083 (第30図)

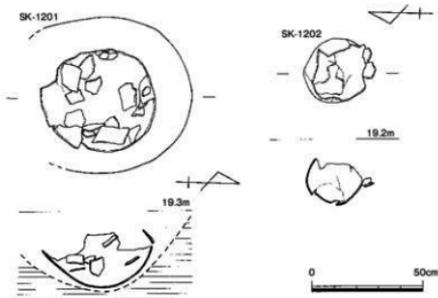
IV区南側部分、SD-065の東側に位置する。大きく削平を受け、さらに調査の際に遺構南西側を掘り過ぎている。平面形は三角形に近い形と考えられる。

遺構の覆土は黄褐色の地山流入土で、炭化物を多く含み、最下層の床面上には炭化物層が薄く堆積する。床面は被熱して赤変する。遺構内からの出土遺物はない。

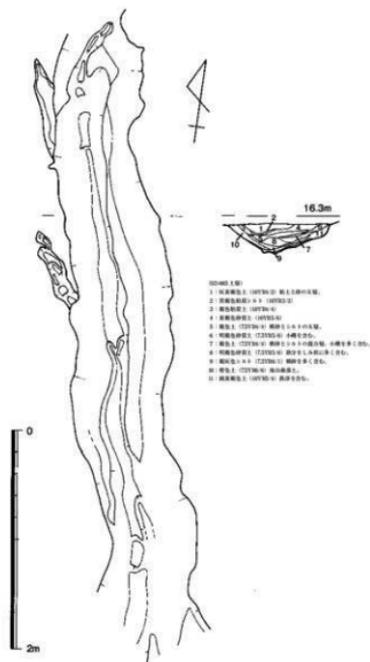
SX-095 (第30図)

IV区北側斜面の中段で検出したカマドで、本来は竈穴住居に伴うものとみられるが、住居自体は削平され、遺存していない。

カマドは幅63cm、奥行き40cmを測る。カマド天井部は落ちてお



第32図 IV区出土土器埋置遺構実測図(1/20)



第33図 SD-065実測図(1/200)

ない。

遺構覆土は地山土からなる流入土に炭化物・鉄滓を多く含む層で、土層の堆積状況を見ると、いずれの層も上層から流れ込んだ様相を呈する。

遺構内からは、鉄滓や焼土の他、須恵器・土師器の小片が出土している。いずれも小片で、図示できるものはない。遺構の機能としては、製錬炉にともなう排滓坑の可能性が最も高いが、該当する製錬炉は斜面上方からは検出されておらず、SD-065の掘削により失われたことも考えられる。

3) 土器埋納遺構

SX-1201 (第32図)

調査区東側の、斜面落ち際に検出した土器埋納遺構。掘り方の平面形は円形で、その中央に須恵器甕が1個やや傾いた状態で据えられた状態で検出された。

遺構は谷部の埋め土上に掘られているため、覆土と地山の境界が不明瞭なため、南側の上端ラインを確定させられず、遺構床面も確定させられなかった。

り、袖、奥壁下部が焼土塊として残る。袖の壁体は幅20cmで、10cmほどの高さで遺存している。カマド中央部の掘り込みは、幅50cm、奥行き40cm、深さは5cmほどの皿状になっており、炭化物が堆積している。

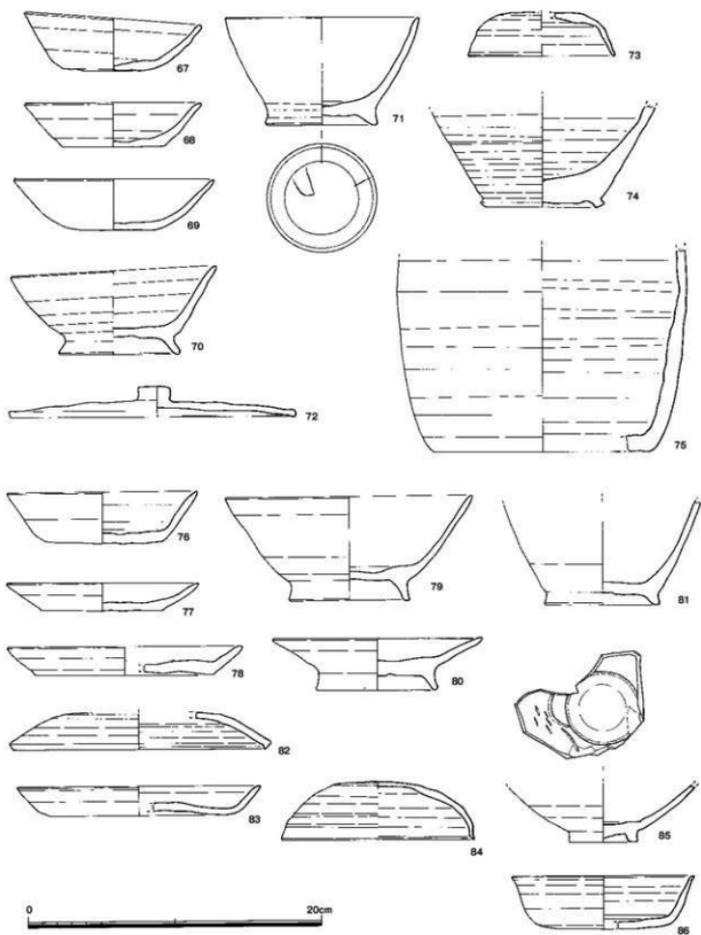
カマドの焼土塊の上に土器が横倒しの状態で検出され、カマド廃棄の祭祀の状況と考えられる。

出土遺物(第41図)93は須恵器坏身。内面見込みに凹弧状の当て具が残る。94は土師器壺。胴部下部を欠くが、下膨れの形状を呈するとみられる。頸部は外湾し、口縁端部外面をナデて面取りする。外面は縦方向のタタキ、内面は摩滅が進み、調整不明。95は土師器甕。胴部は楕円球形で、外面に煤が付着する。

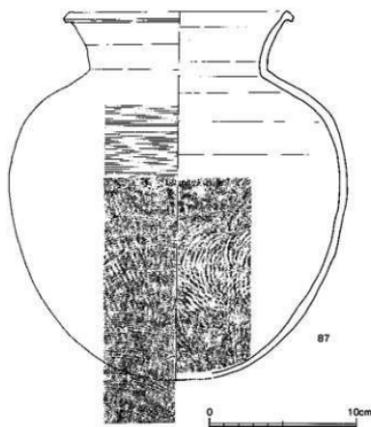
SX-111・112 (第31図)

調査区南側の、SD-065の西側斜面下部に位置する。遺構の西側は調査区外に及ぶ。当初は2つの鉄滓散布遺構として認識していたが、結果として1基の排滓坑として連続することが確認された。

平面形は不整形で、人為的に整形された痕跡はほとんど伺えないが、本来方形だった遺構が流水等の影響で変形したことも考えられる。遺構規模は幅2.1mを測る。遺構内部は凹凸が著しく、平坦な面は見られ



第34图 SD-065出土遺物実測図1(1/3)



第35図 SD-065出土遺物実測図2(1/3)

を南側に向ける状態で埋置されており、土器の傾きは隣接するSX-1201とは反対方向に向けられる。土器の上部は削平により失われており、一部が土器内に落ち込んでいる。このことからSX-1201と同様に、土器が破損した時点で土器内部に空間があったことが考えられる。

SX-1201・SX-1202については、Ⅳ区中央を北西に延びる谷の谷頭に位置することから、この場所で祭祀を行ったことが想定され、祭祀に伴う機能としてSX-1201・SX-1202が設置されたと考えられる。出土遺物(第38図)91は土師器甕で、凡そ完形で復元可能である。胴部は長胴形で、やや下膨れ気味である。頸部は緩く外湾し、胴部は長胴形で、下膨れである。底部の一部を欠くが、丸底とみられる。胎土は鈍橙色を呈する。

4) 溝状遺構(第33図)

SD-065(第33図)

調査区南側で、南北方向の溝状の遺構を確認した。溝の方向が斜面の方向を横切るように直線的に延びていることと、溝底が南方向に一定方向に傾斜し、排水を意識した形態であることなどの点から、人為的に掘削された溝と判断した。

溝の深さは北側端部では20～30cm程度だが、南側では東側上端からの比高差は2m近くになる。北側と南側の床面の標高差は約3.5mで、かなりの傾斜角である。

溝はほぼ南北方向に引き、地形に左右されず非常に直線的に掘られていることから、ある区画に沿った溝の可能性がある。また調査範囲の南端部で溝が西方向に曲がる様相がみられ、この箇所が区画の区切り部分であることも想定される。

遺構覆土は粗砂・シルトを主体とし、溝上方の地山の流入土による自然堆積であることが分かる。また最下層には鉄滓が含まれ、溝の時期が古代である可能性が高く、また溝の東側上方に製鉄炉があっ

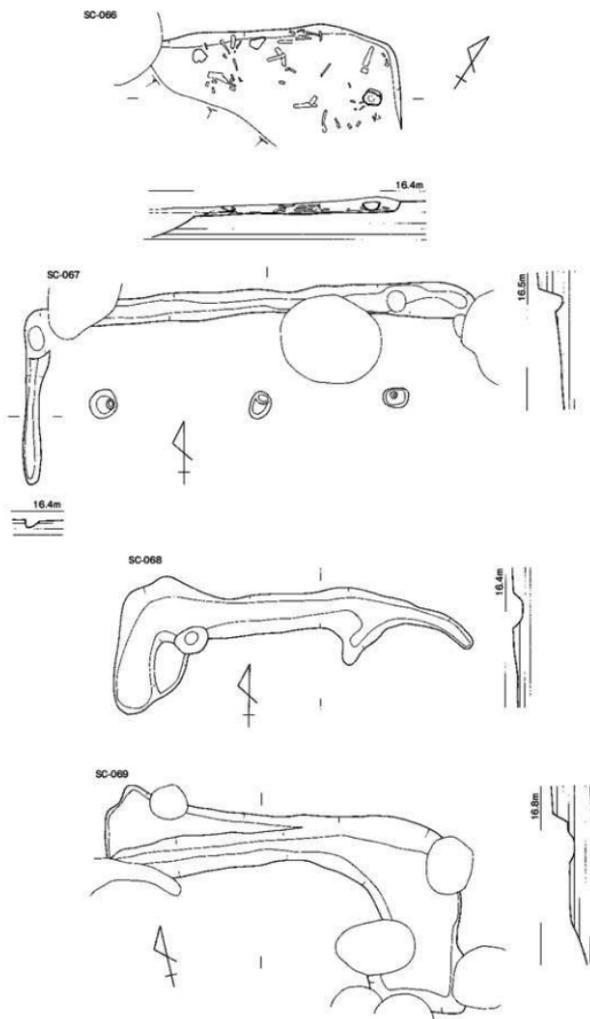
遺構は上半分が削平されており、甕の上部の破片が内部に落ち込んだ状態で出土している。この状況から、削平を受けるなどで甕が破損した時点で甕の内部には土が入っておらず、空間があったことが考えられる。遺構内からはこの甕以外の遺物は出土していない。

出土遺物(第42図)107は須恵器甕。器高46.0cmの中型の甕で、胴部は球形を呈する。胴部から口縁部にかけて全体に凹凸がみられ、特に胎土内に焼け影れが随所に見られる。また底部に板石が付着しており、焼成時に付着したものとみられる。

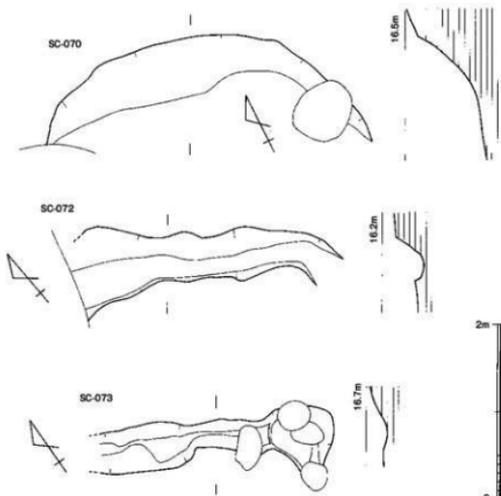
SX-1202(第32図)

調査区東側の、斜面落ち際に検出した土器埋納遺構で、SX-1201の西側に隣接する。

遺構は土師器甕が埋置されている状況は確認できたが、その外側にあるはずの遺構掘り方は確認できなかった。土師器甕は口



第36图 IV区出土竖穴住居实测图1(1/50)



第37図 IV区出土竈穴住居実測図2 (1/50)

ラ記号が偶然的な傷かは判然としなない。72は須恵器環蓋で、全体に平板形を呈する。内外面とも摩滅が著しく、調整は不明。

73は須恵器環蓋。径10.0cmで小型の部類に属する。天井部は平坦で、回転ヘラケズりで仕上げる。74は須恵器長頸壺の底部とみられる。底部は厚く作られ、短く開く高台が付けられる。高台の畳付に板状の痕跡が残る。内外面とも回転横ナデで仕上げられる。

北側下層茶褐色土

76は土師器環。胎土は精緻で軟質であるため、内外面ともに摩滅が著しい。77は土師器皿。底部は平底を呈し、ヘラ切りで仕上げられ、板状圧痕が残る。78は土師器皿で復元径15.8cmと大型の部類。底部は回転ヘラ切りで、内外面とも摩滅が進む。

79は土師器壺。高台は径が大きく、高く直立する。内外面とも摩滅が進み、器面調整は不明。80は土師器高台付皿。高台は径が大きく、短く開く。胎土は精緻で軟質。内外面とも風化が進む。

81は土師器鉢とみられ、71と同型のものとして推定される。高台は径が大きく、低い。体部はわずかに内湾しながら立ち上がる。胎土は軟質で、器面の摩滅が進む。

明褐色造成立

82は須恵器環蓋。天井部を欠き、摘みの有無は不明。天井部は平坦で、体部は直線的に開き、端部は面取りしわずかに垂下する。83は土師器皿で大型。底部は回転ヘラ切りで、粗い仕上がりである。

その他

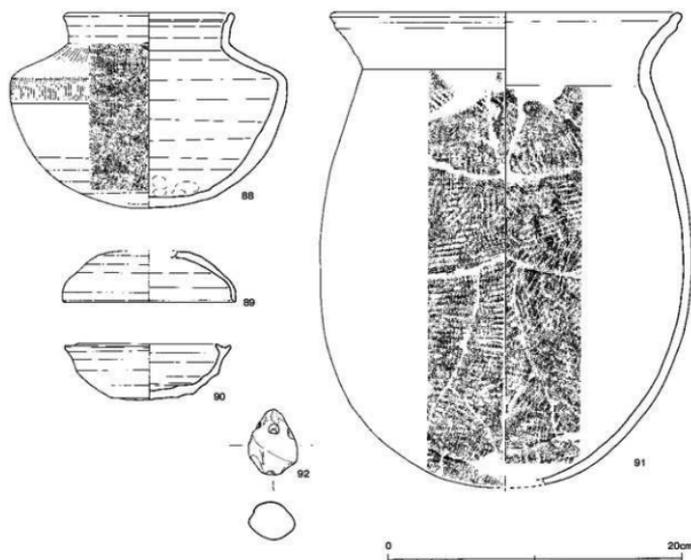
84は須恵器環蓋。天井から体部にかけて丸みを持つ。85は白磁碗。内面に片切り彫りで文様が彫られる。釉色は灰白色で、内面全面と外面下部まで施釉される。高台は径が小さく、低い。胎土は暗灰

た可能性も考えられる。出土遺物(第34・35図)溝内部からは土器等が多数出土しており、周辺の遺構に伴う遺物が流れ込んだものとみられる。以下、層位ごとに出土遺物を見ていく。

北上層黒色土

67～69は土師器環。底部は平底に近い。68は平底で、内外面とも摩滅が著しい。69はやや丸みを持つ平底で、全体に薄手で内外面とも摩滅が著しい。

70・71は土師器碗。70は胎土は精緻で、焼成も良好で硬質である。71は体部が深いもので鉢形に近い形状を呈する。高台内側に細い線刺がみられるが、ヘラ



第38図 IV区竪穴住居・埋納遺構出土遺物実測図(1/3)

黄色である。86は須恵器環。底部は平底で、回転ヘラ切りで粗い仕上げである。

層位によって遺物の時期が明瞭に分けられることはなく、古墳時代～古代の遺物が混然として堆積したものと考えられる。

5) 竪穴住居・住居関連遺構

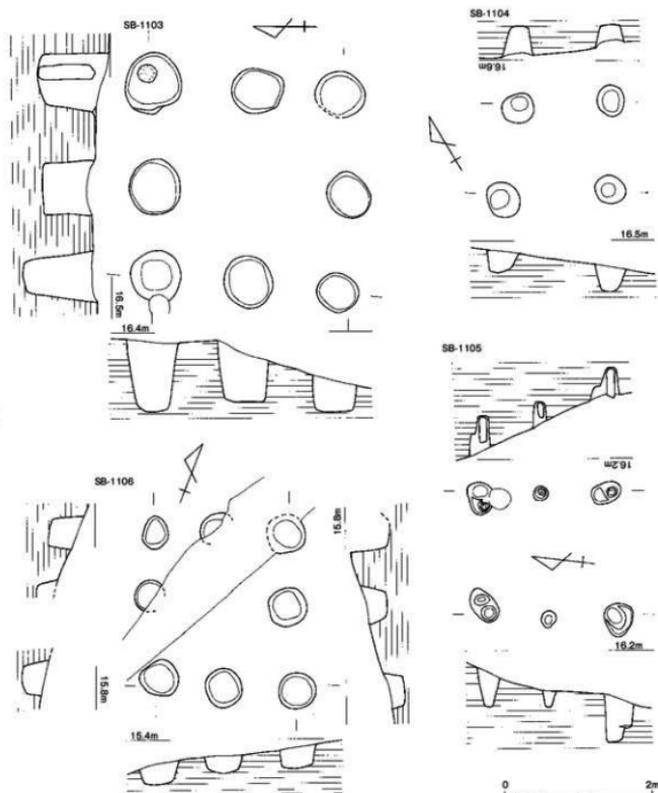
SC-066 (第36図)

IV区北側斜面中段で確認された竪穴住居。住居南側は削られて、さらに遺構西側も別の遺構に切られているため、遺構全体の規模は不明。遺構面から床面の深さは10cm以下で、全体に削平を受けている。遺構内部には、炭化材のほか、焼土塊等が多数みられ、住居建物が焼失したことが想定される。大型の部材は見られず、住居構造を考察できる程度の資料は得られていない。さらに、住居に伴う柱穴も確定できない。

出土遺物(第38図) 88は須恵器短頸壺。頸部は短く外反し、口縁端部内側に段が付く。外面に縦方向のタタキ痕が残りに、ナデヤカキ目で消している。

SC-067 (第36図)

IV区北側斜面中段で確認された竪穴住居。全体に大きく削平を受け、住居北側部分のみ確認できた。建物の規模は東西幅が5.0m程度と推定される。壁際には壁溝が幅20～30cm、深さ5～10cmで掘られており、北西隅は一段深いピット状の掘り込みとなっている。



第39図 IV区出土掘立柱建物実測図1(1/60)

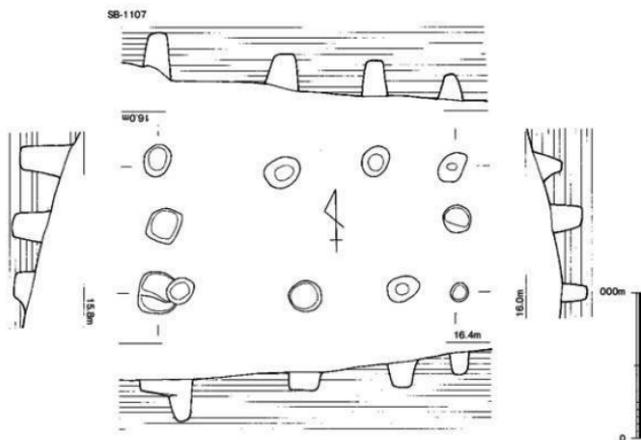
床面は北側の遺構面から20cmほど掘り込まれ、平坦面を呈する。床面上に住居北側壁に平行して径20～30cm、深さ約20cmのピットが3基平行し、これが住居に伴うものと考えられる。

出土遺物(第38図)89は須恵器坏蓋。天井部を欠くが、やや丸みを持つ形とみられ、体部が直線的に開き、口縁部が直立する器形とみられる。

SC-068(第36図)

IV区北側斜面の中段で検出された竪穴住居の壁溝とみられる遺構より、竪穴住居を想定した。溝は幅20～50cm、深さ10cmで、遺構の西側で幅広くなっている。この溝から1辺約4mほどの規模の隅丸方形の竪穴住居が想定可能である。

床面とみられる範囲で、この住居に伴う柱穴は確定できない。



第40図 IV区出土掘立柱建物実測図2(1/60)

SC-069 (第36図)

IV区北側斜面中段で検出された竪穴住居で、南側は削平されて失われている。住居の規模は東西幅4.0mで、遺構面からの深さは北側壁付近で約15cmである。遺構の周囲に溝が掘られており、住居の壁溝と見られるが、遺構東側で幅が80cmになるため、本来の形状はとどめていないと考えられる。遺構床面は平坦面を呈するが、床面が遺存する範囲は幅60cm程度である。

壁溝の西側に、三角形に張り出した部分があり、別の竪穴住居が切り合っている可能性もある。

SC-070 (第37図)

IV区北側斜面中段で斜面を円弧状に削って平坦面を切土造成した痕跡が検出され、竪穴住居群が集中する段の造成に関連する遺構として取り上げる。切土幅は3.6mで、斜面上から造成面までの高さは70cmである。斜面上方を切り出した土砂を斜面下方に盛土し、平坦面を造成して竪穴住居や掘立柱建物を築造するための造成痕とみられる。

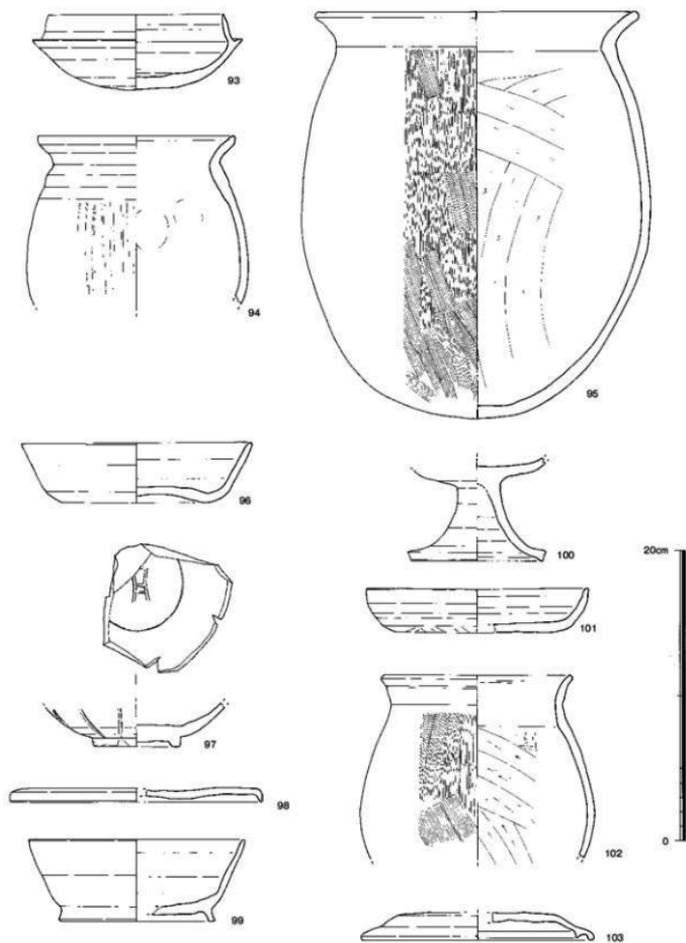
SC-072 (第37図)

IV区北側斜面中段で検出した溝状遺構で、造成段の斜面際で直線状に延びる。溝の幅は50cm～75cmで、溝の床面の幅は20～40cmである。住居の壁溝か、あるいは段造成に伴う遺構とみられる。

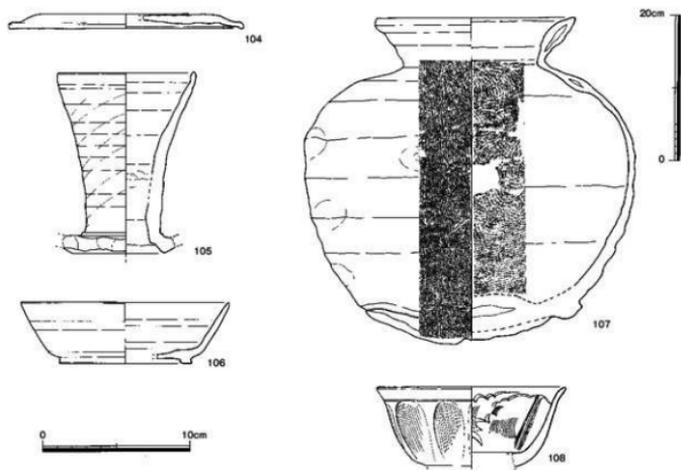
SC-073 (第37図)

IV区北側斜面中段で溝状遺構を検出し、竪穴住居の壁溝とみなした。溝は他の柱穴に切られて遺存状況は極めて悪いが、幅20～50cm、深さ5cm程度を測る。溝の北側の住居外側と住居床面との比高差は10cm程度で、非常に浅い。住居の埋土から、須恵器が出土している。

出土土器(第38図)90は須恵器坏身。やや小型で、体部は丸く、受け部の立ち上がりは短く低い。底部はヘラ切り離して、粗雑な仕上げである。体部から内面は回転横ナデで仕上げる。



第41图 IV区出土土器实测图1(1/3)



第42図 IV区出土土器実測図2 (1/3・107は1/6)

6) 掘立柱建物

SB-1103 (第39図)

IV区北側斜面中段のほぼ中央で検出した2×2間の掘立柱建物。建物軸線はほぼ南北に向き、梁行2.8m、桁行2.5～2.6mのほぼ正方形を呈する。柱穴は円形で、径60～70cm、遺構面からの深さは1m前後を測るが、建物南側の柱穴は、斜面に削られて遺構面からの深さが浅くなっている。いずれの柱穴も柱穴底面の深さはほぼ一定である。

北西隅の柱穴からは柱根が確認されており、検出時で径20cm、長さ80cmを確認した。

建物の規模、柱穴の径が他の建物よりも大きく、この地点の建物群の中心的な建物とみられる。

SB-1104 (第39図)

IV区北側斜面中段の中央西側で検出した掘立柱建物。SB-1103と隣接するが、建物軸線の方向は異なり、両者の間に造成や建物建築の区画線の境界が存在するようである。

建物は1×1間分を確認し、梁行1.5m、桁行1.2mで、さらに北西側に建物が増える可能性もある。

SB-1105 (第39図)

IV区北側斜面中段東端で検出した1×2間の掘立柱建物。梁行1.7m、桁行1.7mとほぼ正方形を呈し、1×1間建物の梁行の間に補助柱を建てたようなプランである。

柱穴の径は20～30cmと、他の建物に比べて小型である。建物西側の柱穴では柱根が確認でき、径10cm程度の柱が建てられていたことが確認できた。

SB-1106 (第39図)

I区北側斜面のやや下方で確認された掘立柱建物で、他の建物よりも一段下った場所に位置する。建物の軸線も、他の掘立柱建物とは異なっている。

梁行1.9m、桁行2.0～2.1mで、平面プランはほぼ正方形である。柱穴径は40～50cmを測る。柱穴の遺構面からの深さは20～50cmで、本来はさらに高い造成盛土の上に作られていた建物が、斜面の削平により削られたものと想定される。

SB-1107 (第40図)

1区北側斜面の東側で確認された3間×2間の掘立柱建物で、SB-1003の東側に隣接し、遺構軸線も一致する。SB-1005とも接しており、これらの建物が一連のつながりを持って築造されたことが想定される。

建物は桁行4.0m、梁行1.6～1.7mで、細長い長方形プランを呈する。柱穴径は30～40cmで、遺構面からの柱穴の深さは15cm～70cmと幅がある。これは遺構面が斜面によって削られたことによるもので、柱穴底の標高はほぼ揃っている。

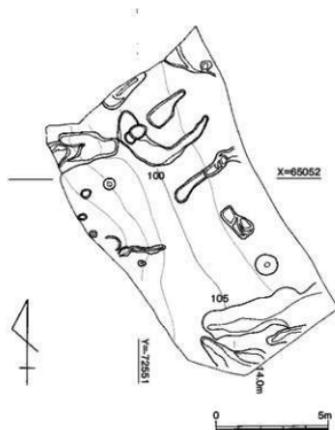
7) その他の遺物 (第41図)

96はSX-110出土の須恵器杯。底部は平底で、ヘラ切り離しの痕跡がみられ、凹凸がみられる。

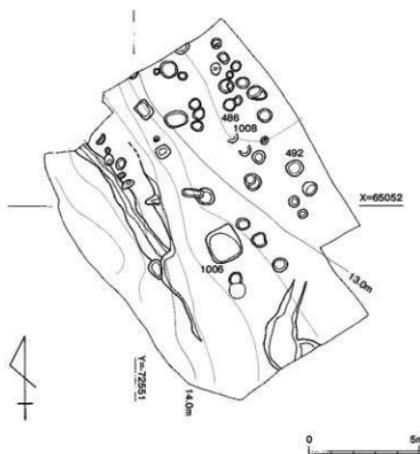
97は椀乱(SX-225)出土の青磁碗の底部破片。外面には蓮弁が付く。内面には陽刻で文字(「月」?)が書かれる。軸色はオリーブ色で光沢があり、外面は高台外面まで、内面は全面に施釉される。

98・99はSX-235出土の須恵器。98は坏蓋で中央部が欠損するが、摘みの痕跡は残る。全体に円盤状を呈し、周縁端部は下方に垂下する。99は坏身で、高台が付く。

100・101はSX-265出土。100は須恵器高坏。脚部はラッパ形に外湾しながら開き、端部は面取りして下端部は



第43図 V区第1面遺構配置図(1/200)



第44図 V区第2面遺構配置図(1/200)

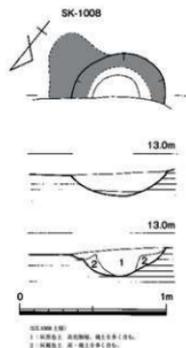
垂下する。101は土師器皿。底部は不定方向のケズリ。

102はSX-270出土の土師器壺。胴部下部を欠くが、楕円球形の胴部とみられ、頸部は緩く湾曲して開き、端部は面取りして整える。外面は二次焼成を受けたとみられ、赤変、黒変した箇所がある。

103はSX-301出土の須恵器坏蓋。中央部を欠くが、摘みの痕跡は残る。天井部は平坦で、体部は低く開き、端部は丸く収める。受け部は断面三角形突帯状に低く作られる。

104はSP-316出土の須恵器坏蓋。中央部を欠き、摘みの痕跡は残っていない。天井部はヘラ切りで、雑な仕上げで凹凸が残る。105はSP-327出土の長頸壺の頸部破片。頸部はラッパ状に緩く外湾して開き、口縁直下に浅い凹線が1条廻る。頸部と胴部の境界は強く屈曲する。

106はSP-370出土の須恵器坏。高台はごく低い。108はⅣ区南側遺構面でも出土した青磁碗破片。龍泉窯系青磁で、外面に髹描きで花文、内面には髹描文が施される。釉はオリーブ灰色で、透明度が高く、内外面とも厚く施釉される。



第45図 V区出土銀冶炉実測図(1/30)

(4) V区の調査

1) 銀冶炉

SK-1008 (第45図)

第2面の調査区はほぼ中央で検出された円形の炉で、遺構北西側はトレンチにより失われている。トレンチ掘り下げ時には炉の存在には気付かず、遺構検出した際に炭化物が散布する状況を認識して精査したところ、炉であることが判明した。

炉の掘り方の径は65cmで、遺構面からの深さは15cm、遺構の断面形は半球状を呈する。遺構の東側には炭化物が幅30cmにわたって分布している。

炉の側壁は、上端付近に被熱し、変色した部分が見られるが、炉の内部で強い被熱を受けた範囲はない。また遺構覆土は、炭化物、焼土を多く含む。

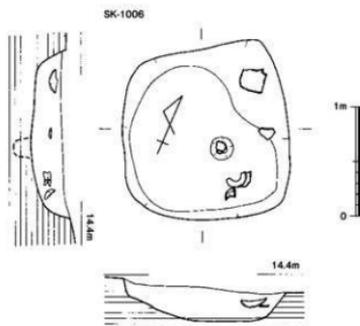
遺構内から鉄滓は出土していないが、遺構の位置や立地状況からみて、Ⅰ・Ⅱ区SK-006・007の銀冶炉に類する遺構と考えられる。

2) 土坑

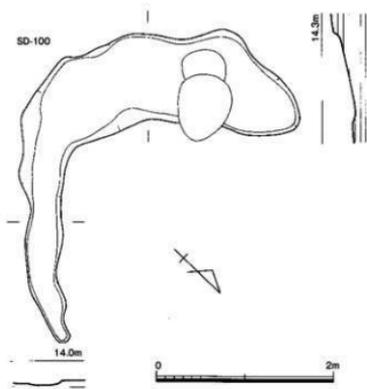
SK-1006 (第46図)

第2面の調査区南側で確認された方形の土坑。平面形は隅丸方形で、南北1.6m、東西1.5mの規模で、正方形に近い形状である。遺構面からの深さは30cmで、床面はほぼ平坦面を呈する。

遺構壁面は遺構の南西側で角度を持って



第46図 V区出土土坑実測図(1/40)



第47図 V区出土溝状遺構実測図(1/50)

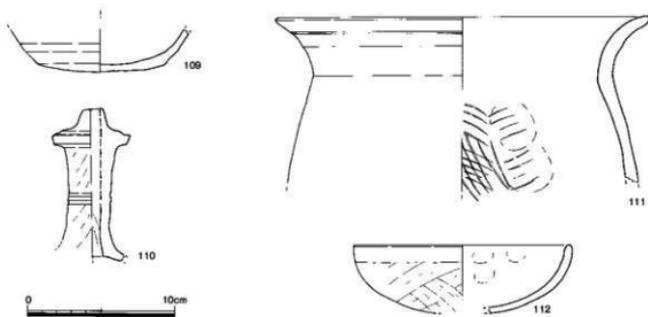
ごく浅い。

溝の位置や形状から、IV区の北側斜面中段の斜面際に位置する幅広の溝状遺構に類似するものとみられ、I・II区の掘立柱建物・柱穴群に伴うものと考えられる。

出土遺物(第48図)109は土師器杯の底部破片。底部はレンズ状に膨らむ。胎土は軟質で、内外面とも摩滅が進む。110は器台形土器で、径1cmの孔が上下に貫く。胎土は精緻で、鈍い橙色を呈する。

4) その他の遺物(第48図)

111は土師器甕。頸部は外湾して開き、胴部は肩が張らない長胴形になるとみられる。内外面とも



第48図 V区出土土器実測図(1/3)

立ち上がり、遺構の北西側ではごく緩く傾斜して開く。このため、遺構床面の形状は三角形に近い形状を呈する。

遺構床面にピットが1基掘られている。径は20cm。床面からの深さは15cmで、床面のほぼ中央に位置する。

遺構内からは土器の破片が出土しており、古墳時代から古代の土器が含まれる。

3) 溝状遺構

SD-100(第47図)

第1面の北側で確認された溝状遺構。平面形はくの字になり、中央で直角に折れ曲がる。溝幅は西側で1m、東側で45cmを測り、斜面際に位置する西側部分の溝幅が広いことが見て取れる。遺構面から床面までの深さは10cm以下で、

摩耗が進むが、内面に当て具痕が残っているのが確認できる。

112は土師器塚で、SP-486とSP-492出土の破片が接合したものの。胎土は浅黄褐色を呈し、外面はケズリ、内面はナデ。

3. 2区の調査

(1) 概要

2区は1区第IV区の東側尾根の頂部に位置する。IV区東側尾根は後世の開発によってかなり削られていることが明らかになっている。特に尾根東側部分は戦後の開発によって大きく削られており、また尾根の南側部分についても明治期の地図では県道付近まで尾根が延びている状況が描かれている。このため、調査時点では尾根部分は非常に幅が狭くなっており、尾根線上はごく狭い平坦面しか遺存していない。

調査範囲は尾根頂部の南北8m、東西7mの平坦部に設定した。この地点は標高32mを測り、北側で尾根に連続する他は、東、南、西側で切り立った崖になっており、周囲の造成の結果取り残された部分になっている。明治期の地図では、この南側に延びていた尾根にさらに標高が高い地点があることが確認でき、今回の調査区は本来は尾根頂部ではなく、尾根線上の平坦面と考えるべきであろう。

遺構面は現地表面から20cmの深さで花崗岩板に達した面で設定し、この面で遺構を検出した。検出した遺構は、土壇墓2基である。周辺の尾根線や尾根頂部では古墳が確認されているが、今回の地点では古墳に関係するものは出土していない。

調査は平成25年2月から3月に、第1区の調査と併行して実施されたものである。

(2) 出土遺構

1) 土壇墓

SK-01 (第50図)

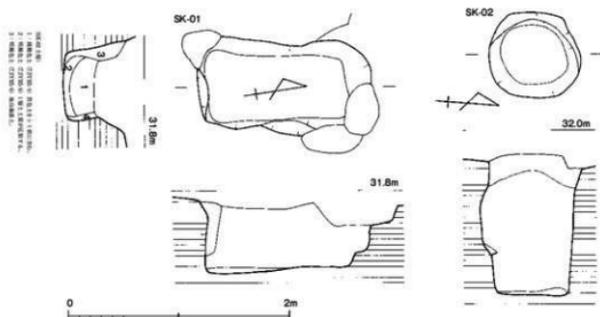
調査区東側で検出した土壇墓で、木棺は遺存していないが木棺墓の可能性もある。

平面形は隅丸長方形で、全長1.6m、幅80cm、遺構面からの深さ70cmを測る。床面はほぼ平坦で、南側が北側よりも若干低く傾斜している。壁面は四辺ともほぼ直立し、一部はオーバーハング気味に立ち上がる。

覆土は地山の花崗岩バイラン土の風化土を主に含む。土層断面の観察からは、幅50cmの木棺があった可能性がみられ、木棺の腐朽・崩落後に明褐色土が流入した可能性が高い。



第49図 2区全体図(1/100)



第50図 2区遺構実測図(1/40)

遺構内からは副葬品を含め、遺物は出土していない。そのため遺構の時期を確定させることはできないが、遺構の形状、立地から中世～近世の墓葬とみられる。

SK-02 (第50図)

調査区北側で検出した土壇墓とみられる遺構。木棺は遺存していないが、早桶による木棺葬だったことも想定可能である。

平面形は円形で、直径80～85cm、遺構面からの深さは1.2mを測り、遺構全体は円筒形を呈する。遺構床面はほぼ平坦で、壁面はほぼ直立し、南側壁面の一部は10cmほど奥に掘り込まれているが、これは掘削時に人が上るための足場として掘られたことも考えられる。遺構西側部分では上端部が少し崩れていることが確認できる。

遺構内からは遺物が出土しておらず、遺構の時期を確定させることは困難である。また、遺構の機能や用途についても判断することが難しいが、遺構の形状や立地からみて、元岡・桑原遺跡群の他の調査区で検出されている近世の土壇墓と遺構の形状や規模、立地が極めて近いため、bkSk-02についても近世の土壇墓と考えられる。

また、SK-01とSK-02が近接しているが、遺物がない上に遺構の形状も大きく異なることから、両者の関係について考察することも難しくなっている。また、この尾根が近世の墓域として成立していたかどうかについても、この2基の墓葬からだけでは判断できない。

4. 3区の調査

(1) 概要

3区は、峰古墳から南に延び、57次調査1区の西側を通る尾根の先端部分にあたり、標高20mの地点に位置する。尾根の幅は狭く、頂部には広い部分でも幅10mほどの平坦面しか遺存していない。

この尾根には既に大規模な造成が行われており、特に尾根の東側は戦後の開墾により削られ、あるいは段造成を受けたりするなど、大規模な地形の改変が行われている。また3区と1区の間には作業場を設けるために尾根を大きく削るなどの工事が行われており（その平坦面は発掘調査時には調査事

務所として利用された)、調査前の時点では遺構の遺存状況は極めて悪いと推定された。

調査に先立ち、県道に面した尾根の最先端部を精査したところ、弥生土器とみられる土器の破片を確認し、尾根上に甕棺墓が存在する可能性が高いとみられたため、尾根先端部の頂部の中で比較的広い平坦面がある部分について調査区を設定し、調査を実施した。

調査は平成24年4月から5月中旬に行った。調査の結果、堀切状遺構1条と、溝、土坑、ピット等を確認した。溝は後世の開墾に伴うものである可能性が高く、土坑はいずれも深さが浅く、仮設的な施設の基礎の可能性もあるが、建物跡等を確認することはできなかった。

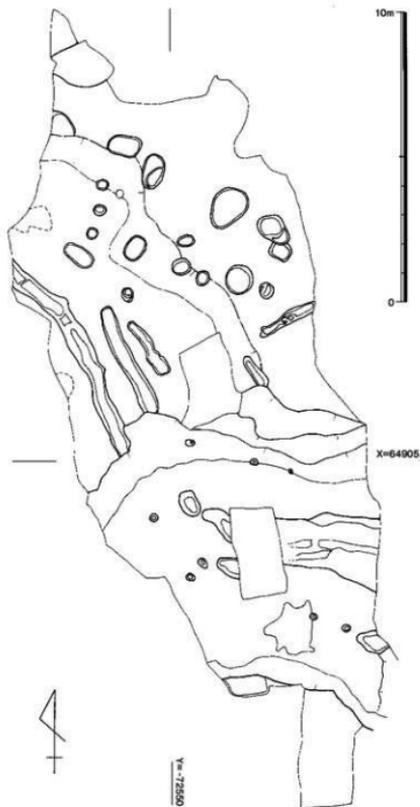
(2) 出土遺構

1) 堀切状遺構

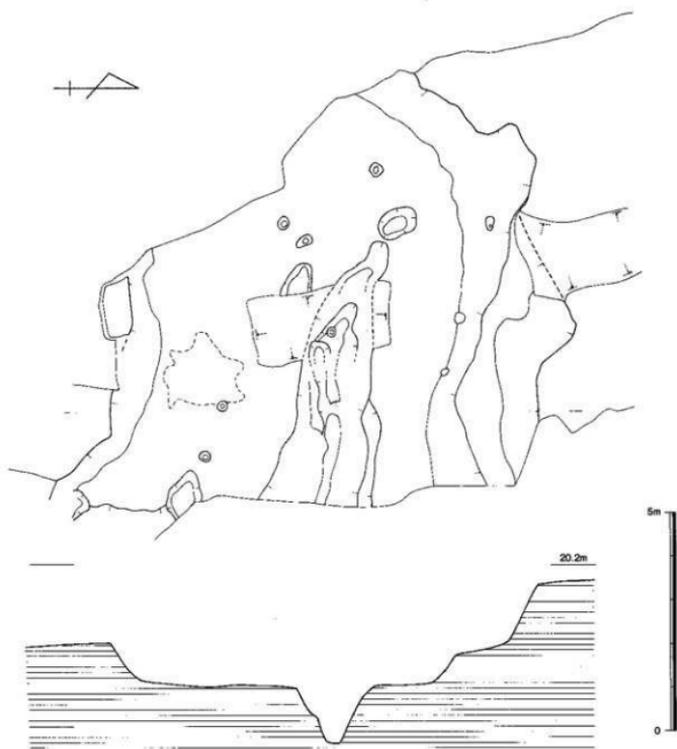
調査区南側の尾根先端部に近い箇所に、尾根を横断する方向の箱型の堀切状遺構を確認した。現況で堀状に凹んでいた地点について、内部に堆積していた厚い流入土層を除去したところ、断面が箱形の堀切と、その中央部に東に流れるV字形の溝状遺構を検出した。

箱型の堀切状遺構は、遺構の上端幅が10m、北側遺構面から堀底までの深さが2.4m、南側遺構面から堀底までの深さは80cmを測る。堀は緩く湾曲するように見えるが、遺存幅が狭く、この湾曲が意図したものかどうかは不明である。堀切壁面と堀底はいずれも花崗岩の風化岩盤が露出しており、掘削するために多大な労力を費やしたことが伺える。

堀切床面は平坦な面を呈し、西側は東側よりも70cmほど高くなっており、西から東にごく緩く傾斜している。溝の床面には小型のピットがみられ、溝の東側中央部には西から東に流れ落ちるV字状の溝状遺構が見られる。このV字状遺構は先端部から東端までの溝底の比高差が1.6mあり、かなり急な流れだったとみられる。溝の形状から見て、自然流路の可能性の他、西側谷部から丘陵頂部へ



第51図 3区全体図(1/150)



第52図 3区堀切状遺構実測図(1/100)

の登り道の可能性も考えられる。

堀切内からの遺物の出土量は非常に少なく、時期幅も弥生時代～中世後半まで長期にわたる。V字状溝の検出面直上から15～16世紀の青磁破片が出土している。小片で図示困難なものではあるが、時期比定の参考にならう。

5. 57次調査出土石器

57次調査区内からは、谷部包含層(001)をはじめ、001から東側に派生するⅣ区谷部の包含層、さらにSD-065をはじめとする各遺構から多数の石器・石製品が出土している。

57次調査では縄文、弥生時代の土器はほとんど出土しておらず、遺構も確認されていないため、これらの石器は全て古墳時代～古代のものとみられ、砥石、磨石、敲石、台石等は鉄器製作の際に使用されたものと考えられる。時期的に上がる石器として、113・227の石包丁が弥生時代に属するもの、253・254の石鎌が縄文時代のものと思われる程度で、古い時代の石器はほとんどみられない。

谷部包含層(001)からの出土石器のうち磨石・敲石、台石、砥石等は西側斜面の鍛冶活動に関係するとみられる。Ⅱ-7区周辺からは紡錘車が集中して出土していることが注目される。紡錘車はⅣ区でもみられ、Ⅳ区で確認された竪穴住居群とⅡ区が比較的近接していることから、古墳時代後期の集落で使われた石器が流れ込んだとみられる。

SK-008からは磨石・敲石が出土し、埋没時期を考える手がかりとなる。また、石棺材とみられる板石も出土しており、流れ込んだ土砂の中に、古墳や小石室の部材があったことを示す。多量の製錬滓が堆積していたSX-022・023からは砥石や磨石・敲石がほとんど出土しておらず、製錬活動とこれらの石器の相関が弱いことが考えられる。

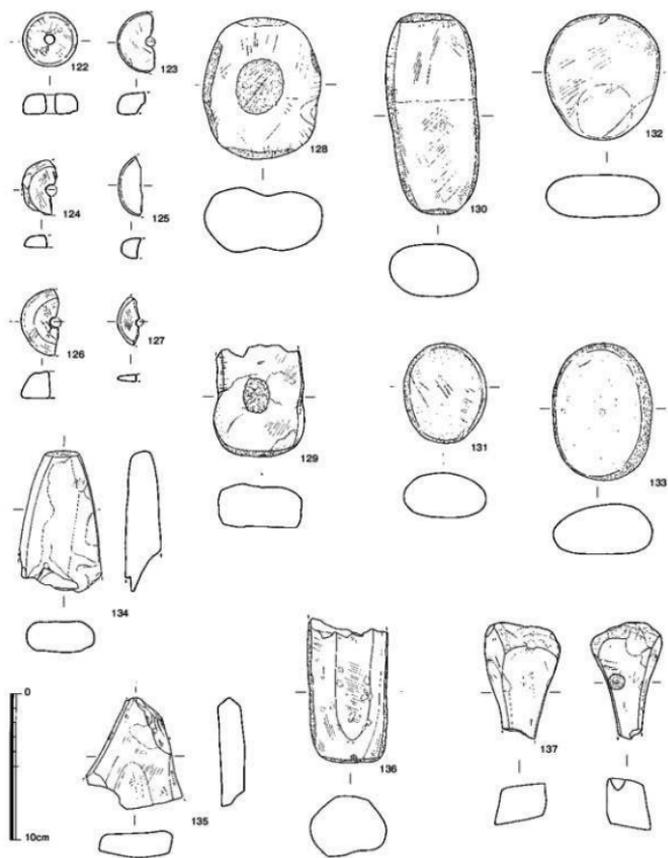
Ⅲ区では、磨石・敲石、台石等が谷部包含層(001)の他、西側谷包含層でもみられ、西側斜面での鍛冶活動が西側谷部南側まで広がっていたとみられ、鍛冶炉の分布範囲と同様に広範囲での鍛冶活動が想定される。

Ⅳ区の中央部を北東から南西に下る谷部の包含層からは、各層から磨石・敲石等の鍛冶活動に関連する石器・石製品が出土しており、斜面の崩壊、流入によって長期にわたり鍛冶関係の遺物が谷部に流入、堆積したものと考えられる。Ⅳ区からは、鍛冶活動関連の石器に加えて、紡錘車や火打ち石等の生活に関連する石器が見られることが特徴的である。

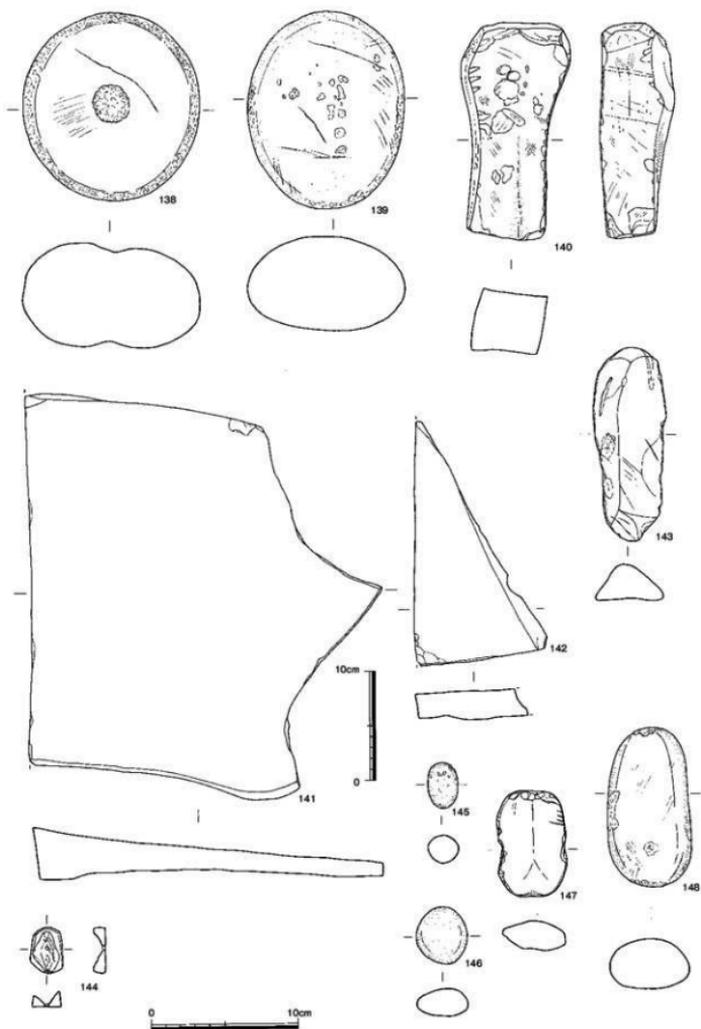
253・254は打製石鎌で縄文時代のものである。57次調査と尾根を挟んで西側に位置する58次調査では縄文早期～前期の遺構・遺物が確認されていることから、関連が疑われる。



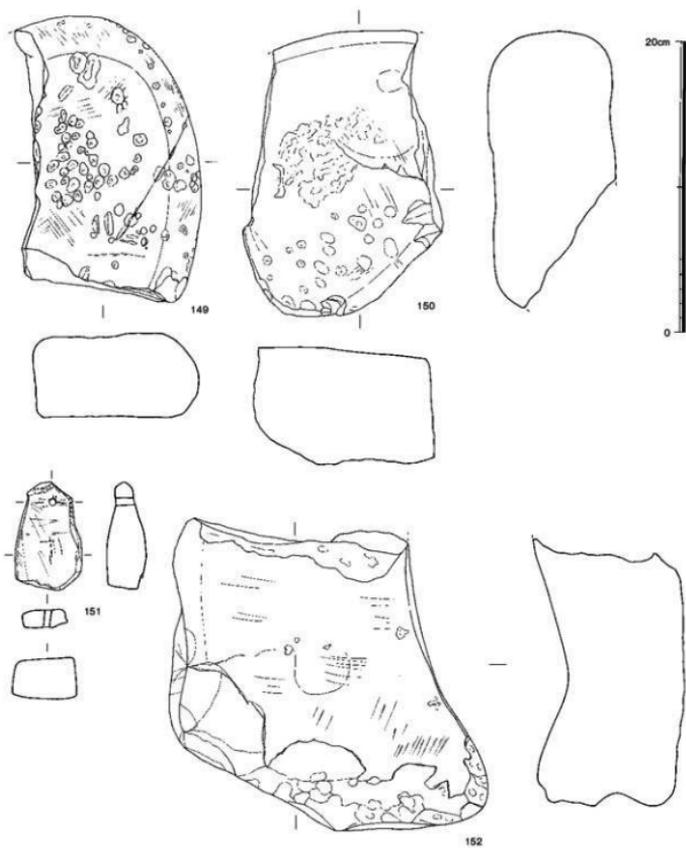
第53图 I区谷部(001)包含層出土石器1(1/3)



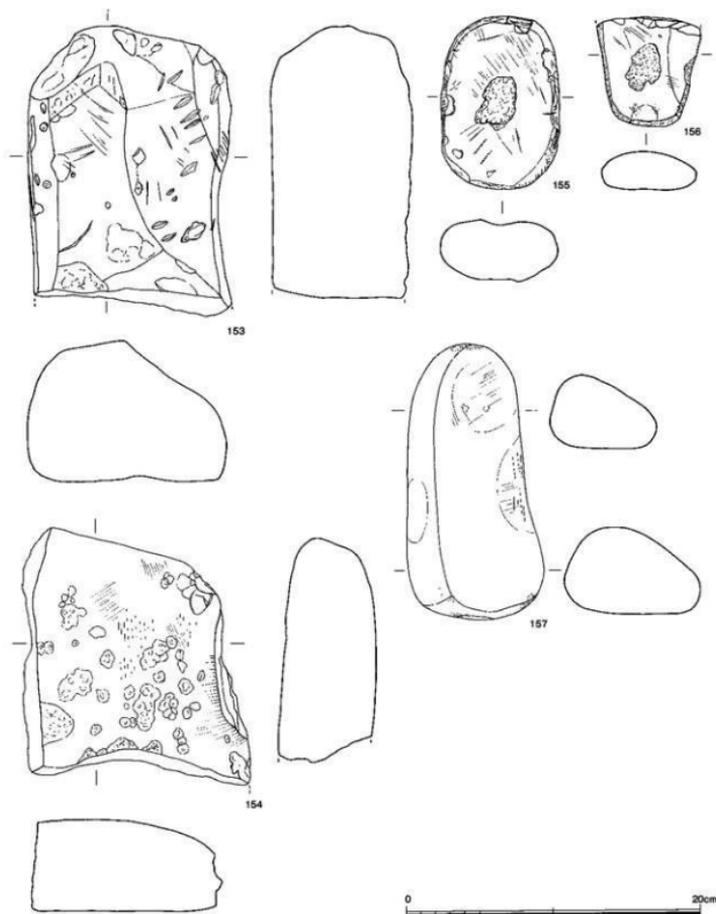
第54图 I区谷部(001)包含层出土石器2(1/3)



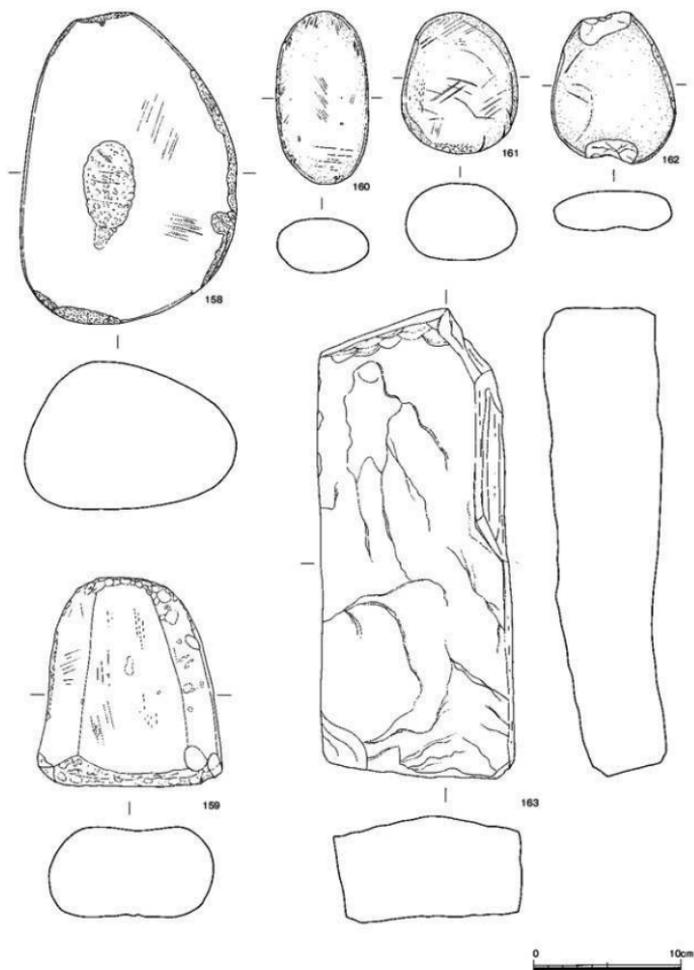
第55图 II区遺構出土石器(1/3)



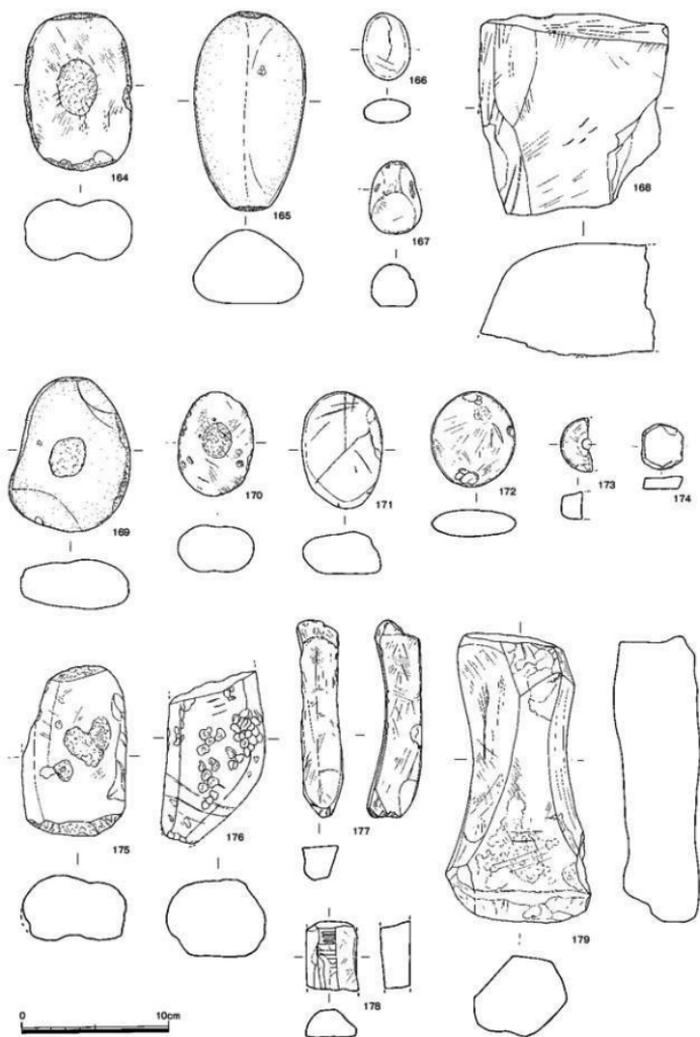
第56图 Ⅲ区谷部(O01)包含层出土石器1(1/3)



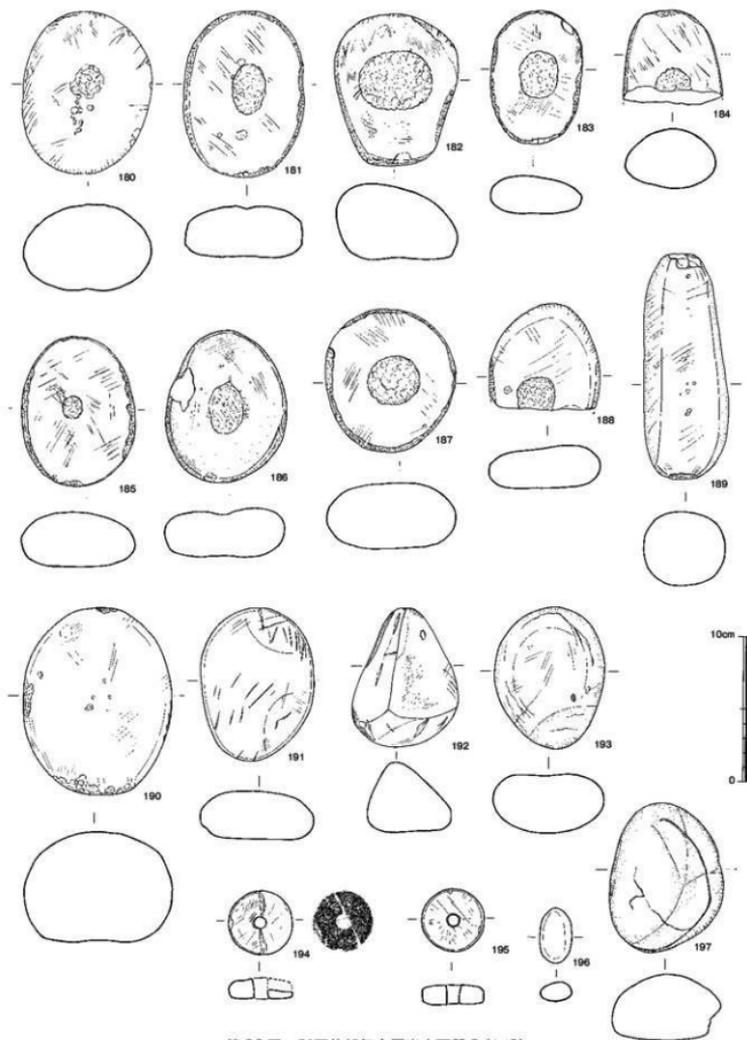
第57图 Ⅲ区谷部(001)包含層出土石器2(1/3)



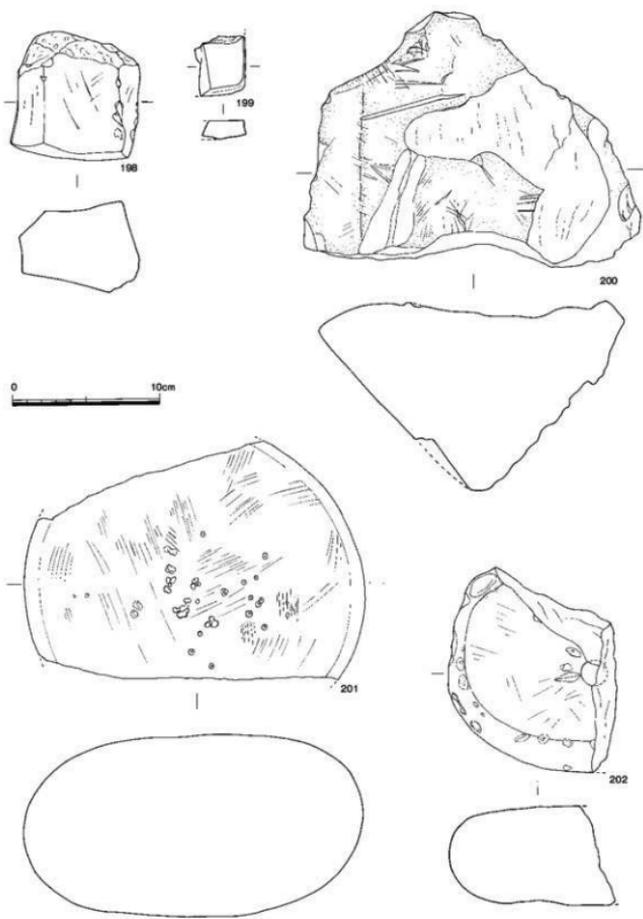
第58图 III区西侧谷出土石器(1/3)



第59图 IV区谷部包含层出土石器 1 (1/3)



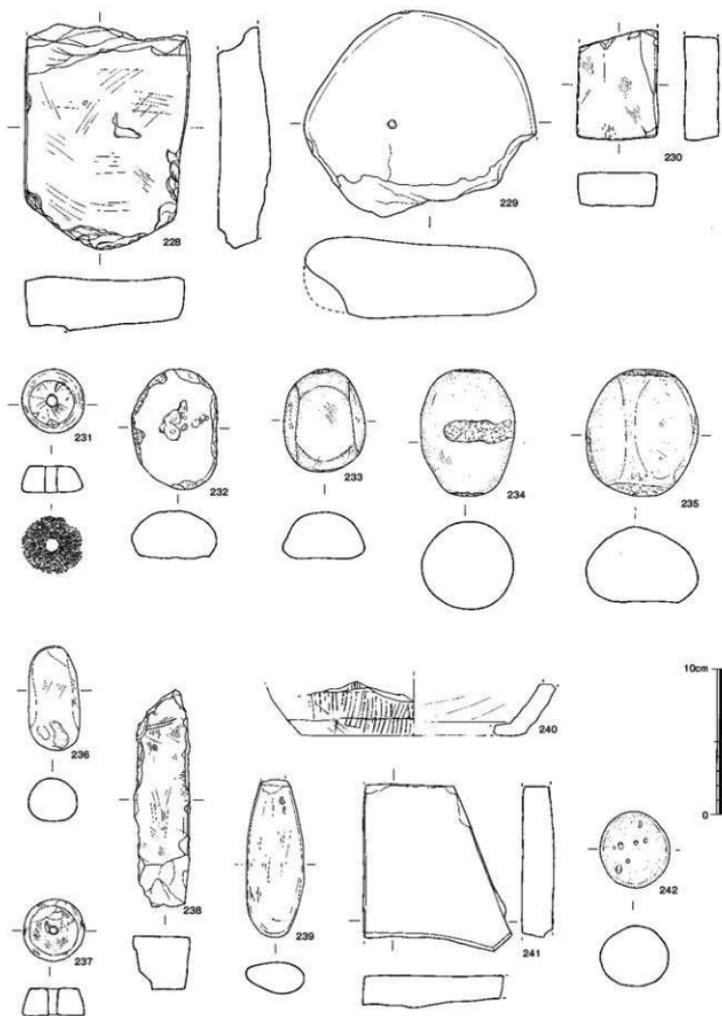
第60图 IV区谷部包含层出土石器2(1/3)



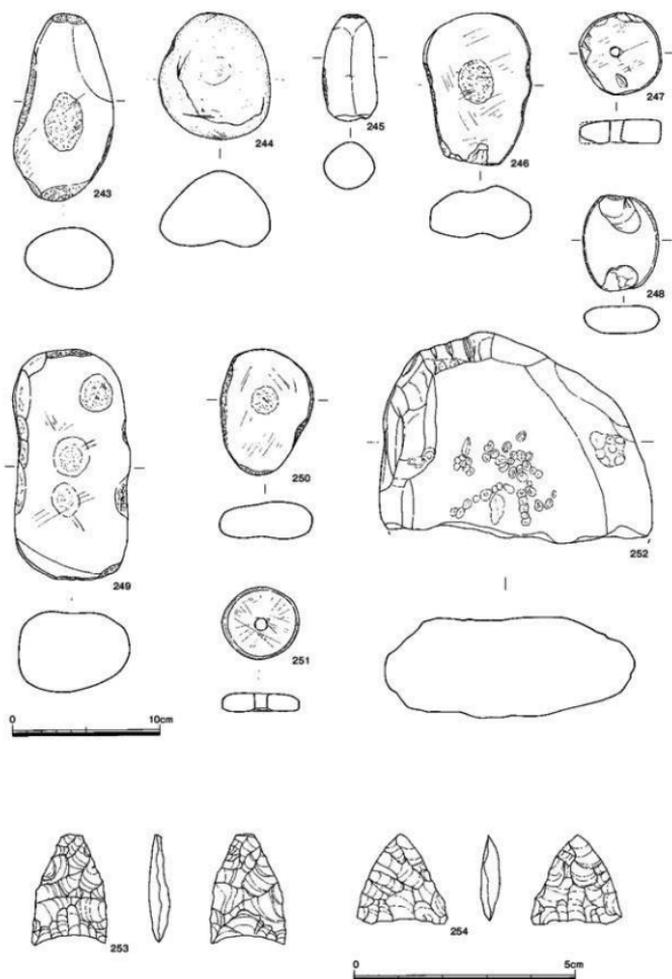
第61图 IV区谷部包含层出土石器3(1/3)



第62图 IV区谷部包含层出土石器4(1/3)



第63图 IV区遺構出土石器(1/3)



第64图 57次出土石器(1/3·1/1)

調査区 211	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	石製品	8.4	3.4	2.65	144
調査区 212	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	銅釘	9.1	3.9	3.1	663
調査区 213	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	瓦葺	11.9	12	4	663(図録⑩)
調査区 214	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	石製品	2.4	3.1	2.7	81
調査区 215	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	石製品	2.1	3.1	2.7	201
調査区 216	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	石製品	3	3.1	1.9	18
調査区 217	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	石製品	2.9	3.1	2.9	201
調査区 218	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	石製品	2.3	2.7	1.7	131
調査区 219	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	銅釘	2.7	2.1	3	7
調査区 220	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	石製品	1.6	1.6	1.3	12
調査区 221	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	石製品	2	1.4	1.2	8
調査区 222	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	灰石瓦	2.4	2.7	1.1	11
調査区 223	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	銅釘	2.2	1.2	1.9	7
調査区 224	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・西側黒色土)	銅線管	4.3	4.3	1.46	18.8
調査区 225	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	銅線管	4	4	1.92	18.5
調査区 227	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	石瓦	9.9	9.1	9.7	481(図録⑩)
調査区 228	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・西側黒色土)	瓦葺	19.9	11.2	3.8	1000
調査区 229	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	銅釘	14.1	15.7	3.9	1950
調査区 230	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	銅釘	19	19	2.9	194
調査区 231	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	銅線管	4.2	4.2	0.7	34.2
調査区 232	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	黒石・黒石	8.9	1.6	2.9	220
調査区 233	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	黒石・黒石	7	1.5	2.2	181
調査区 234	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	黒石・黒石	8.7	8.4	6.1	322
調査区 235	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	黒石・黒石	8.7	1.6	6.9	480
調査区 236	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	黒石・黒石	11	3.9	2.9	118
調査区 237	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	銅線管	4.3	4.3	1.9	38.0
調査区 238	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	銅釘	19.8	3.7	3.7	260
調査区 239	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	銅釘	19.9	3.9	2.1	148
調査区 241	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	銅釘	11.8	10.1	2.2	41.1
調査区 242	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	銅釘	9.1	4.7	4.1	141
調査区 243	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	黒石・黒石	19.9	8.4	4.1	318
調査区 244	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	黒石・黒石	8.9	1.9	3.7	480
調査区 245	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	銅釘	19	19	3.9	321
調査区 246	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	黒石・黒石	10.4	7.4	3.6	440
調査区 247	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	銅線管	3.76	3.76	1.76	86.3
調査区 248	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	銅釘	4.6	3.1	1.9	191
調査区 249	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	黒石・黒石	19.8	8	5.4	1190
調査区 250	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	黒石・黒石	19.9	9.1	2.9	264
調査区 251	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	銅線管	5.2	3.2	1.91	61.9(図録⑩)
調査区 252	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	石瓦	14.5	19.9	4.6	2490(図録⑩)
調査区 253	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	銅線管	7.92	1.96	1.99	1.9
調査区 254	1区	伊予金部瓦葺物 (3階下・黒色土)	銅釘	2	2.02	0.4	1.7

6. 57次調査出土木器

57次調査区の谷部包含層は保水性が高く、包含層内から木器・木製品や有機物が多数検出されている。谷部中央に位置する遺構覆土からも木器・木製品が出土している。

I区SK-008の覆土上層からは板状の製品が出土している。用途は不明な点が多いが、多くの傷が付いているものや、257のように杓子形の製品があるなど、祭祀等に使用されたとみられる製品が多い。時期的に若干下る可能性もある。

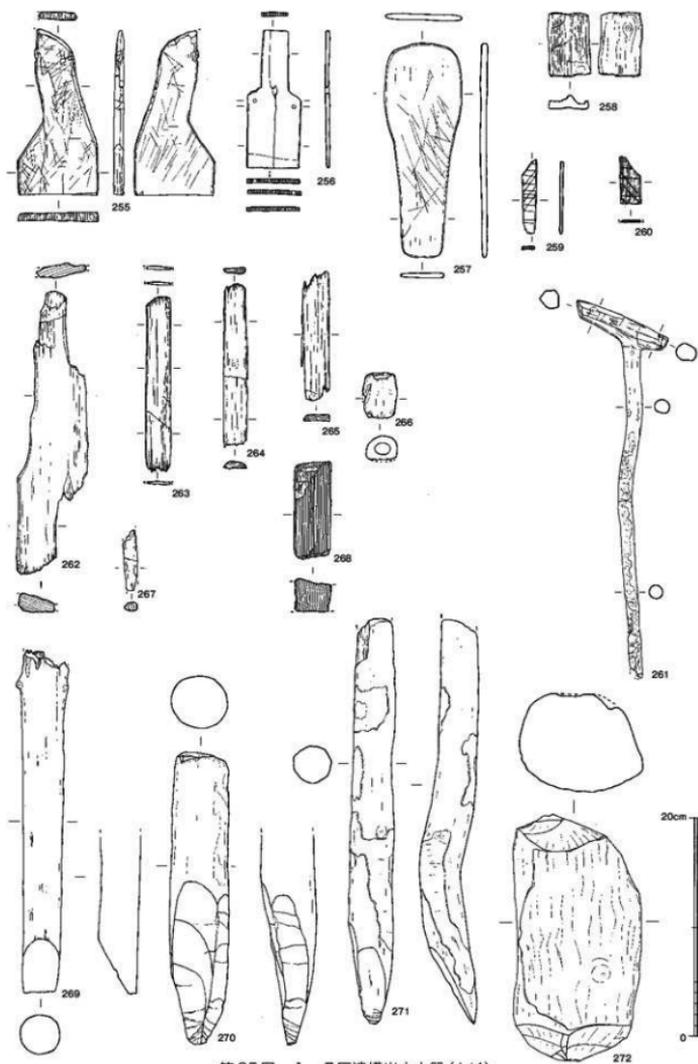
SK-013出土の261は斧の柄。柄が長く、大型の斧として使用されていたとみられる。SK-013は谷部中央にある円形の土坑で、貯水施設の機能も考えられる。

SK-025からは杭の先端部とみられる棒状木製品が出土している。いずれも、先端部が人為的に削られて尖っており、杭として制作されたものとみられる。杭径は4～5cmで、櫛などに使用されたものとみられる。

273～277は谷部包含層から出土した大型の柱材。I-1・I-3区で出土しており、この地点で確認された掘立柱建物(SB-1101・1102)との関連が考えられる。長さは1.5m～3mに及ぶものもあり、柱材の他に梁・桁材として使用されたことも考えられる。273は両端部に加工痕が残っており、残存長約3mが建物の規模だったことも考えられる。277はホゾ穴が2ヶ所開けられている他、端部は直角に短く折れ、他の部材との連結を考慮した形状である。276も端部が細く削られ、他の部材と連結して長い柱材として使用されたことが確実である。

278・279は曲物の底板で、時期的に下る可能性が高い。284・285は槌、286～288は杵で、生活道具である。

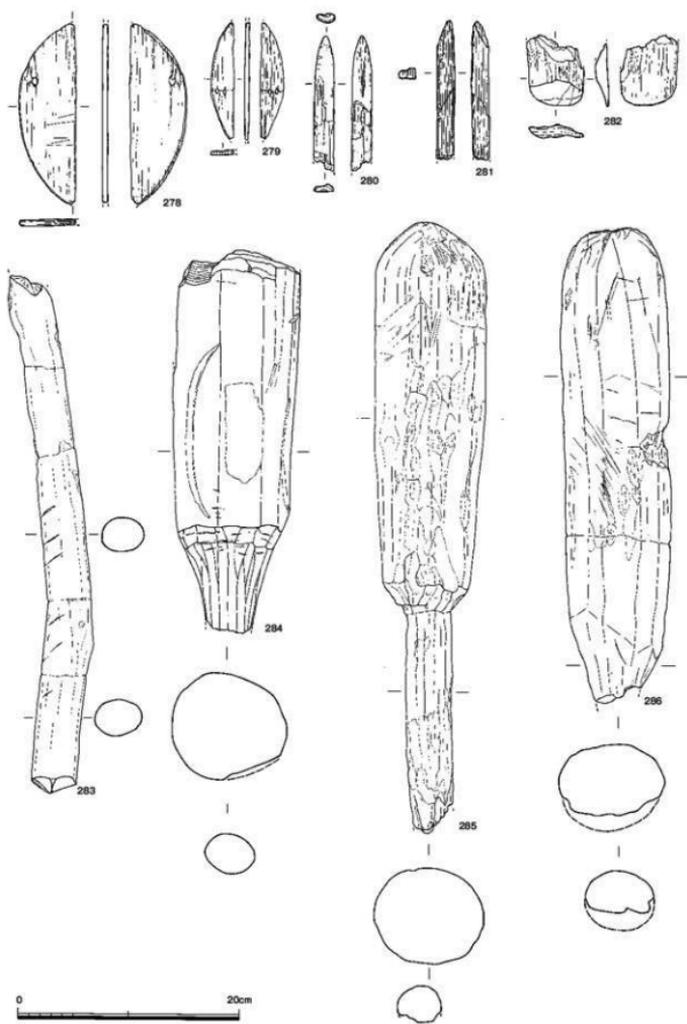
302は槽。ほぼ完形で、平面形は長方形を呈する。深さは浅く、皿形に近い。全体に整形した痕跡が認められる。



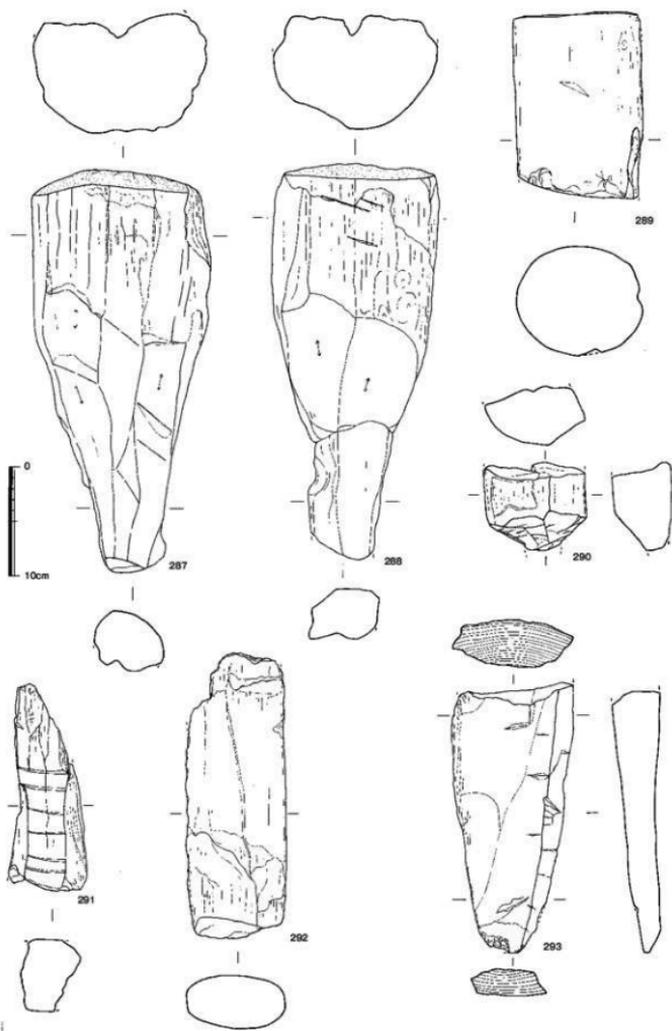
第65图 I·II区遺構出土木器(1/4)



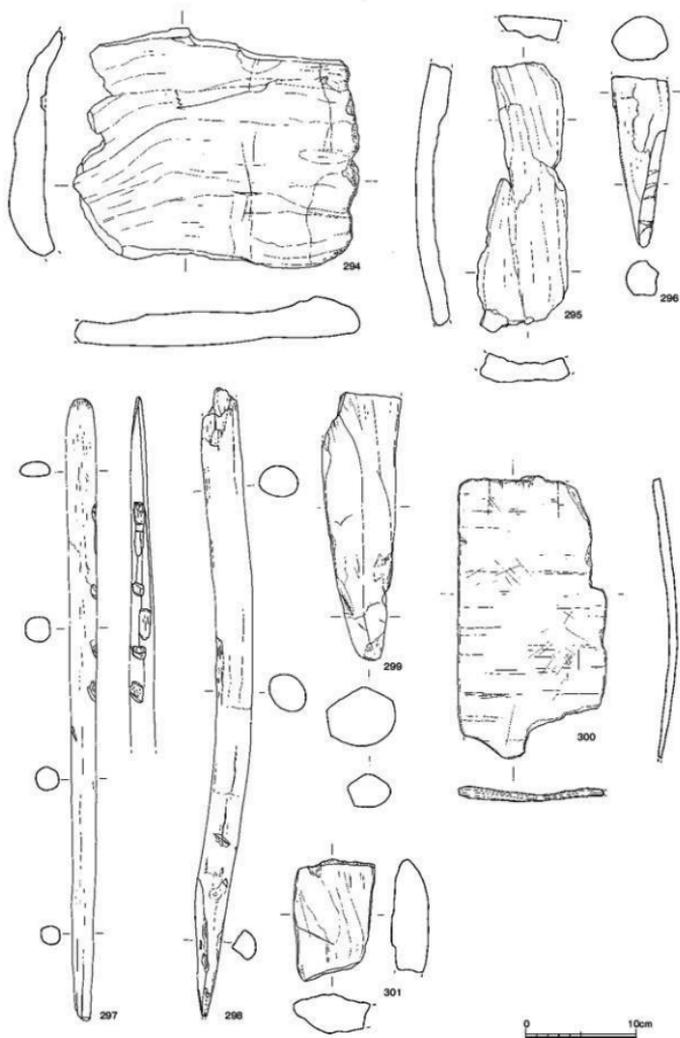
第66图 I·II区谷部(001)出土木器1(1/12)



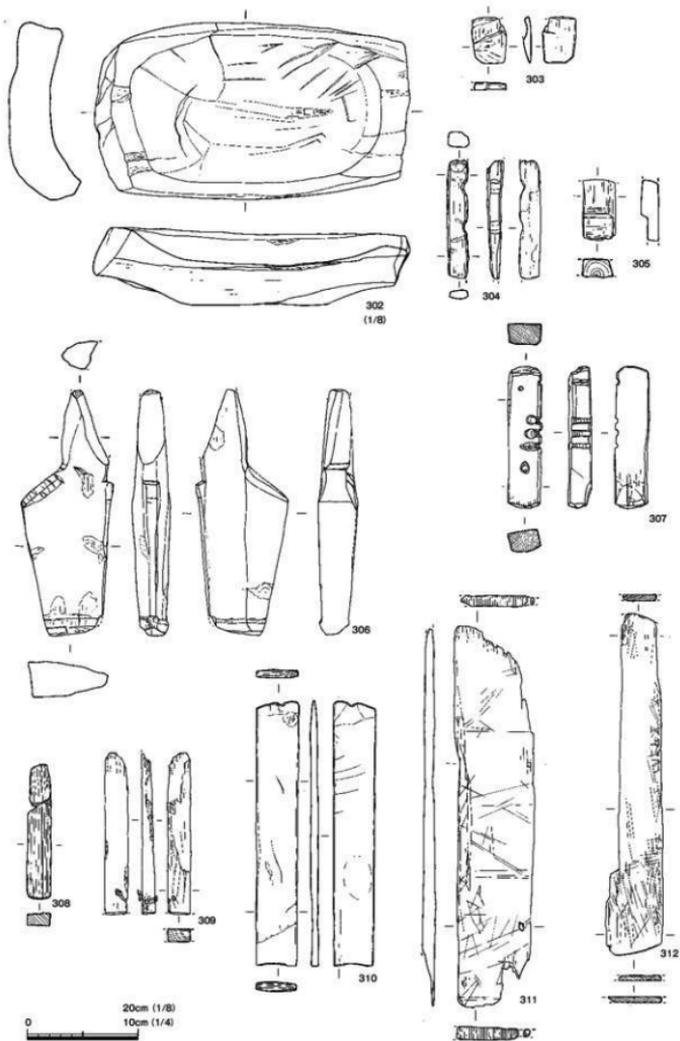
第67图 I·II区谷部(001)出土木器2(1/4)



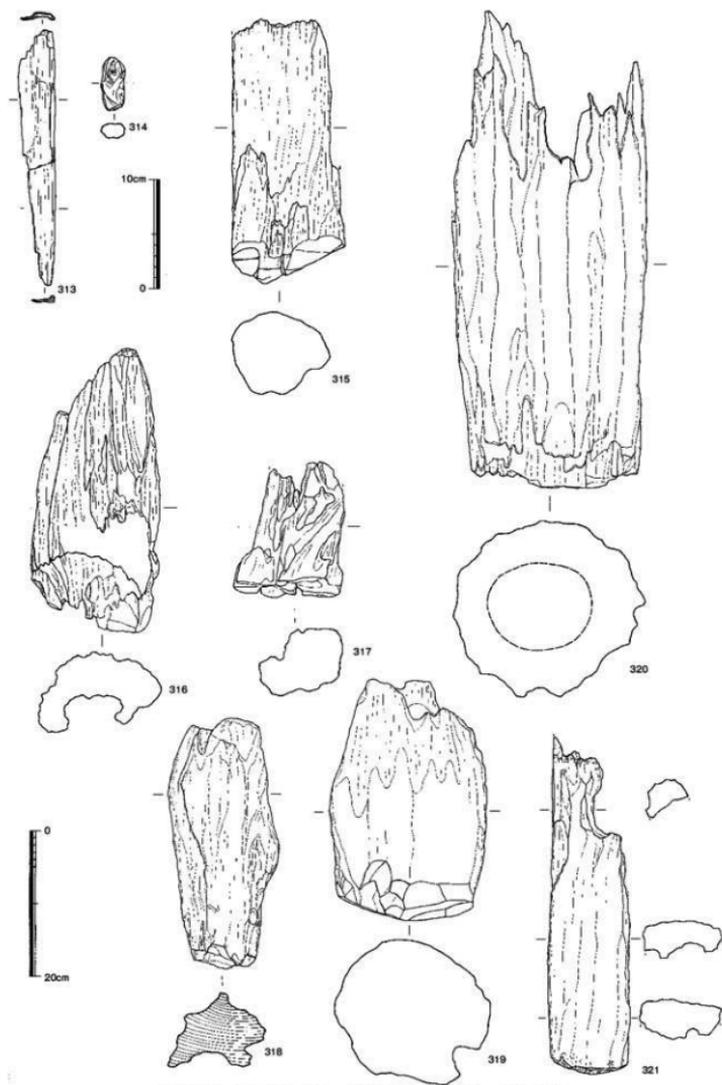
第68图 I·II区谷部(001)出土木器3(1/4)



第69图 I·II区谷部(001)出土木器4(1/4)



第70図 I・II区谷部(001)出土木器5(1/4・302は1/8)



第71図 IV区出土木器・木製品(314は1/4・他は1/6)

表2 57次出土木器一覽

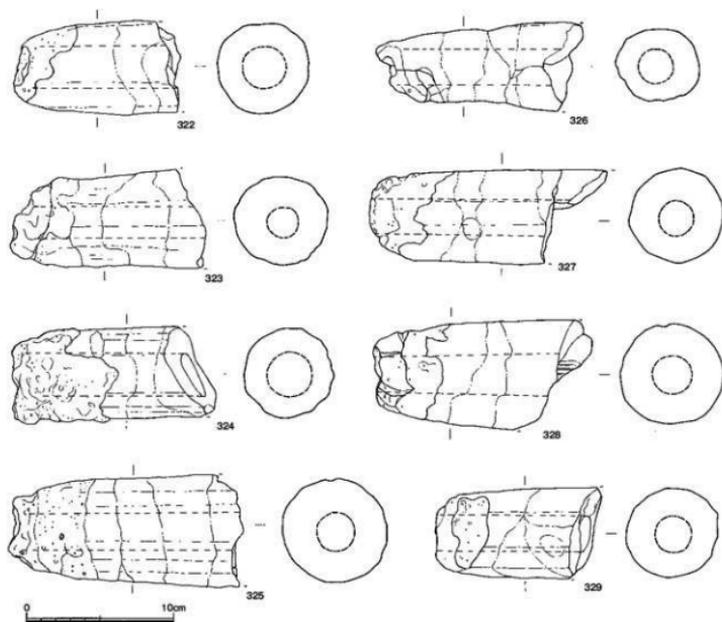
図	番号	長さ(cm)	直径(cm)	重量(g)	素材	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	備考
第65号	255	1区	5K-008 上層 (埋藏深:30cm)	15.2	木製品(用漆未用)	15.2	7.8		横筋溝?
第65号	256	1区	5K-008 上層 (埋藏深:30cm)	12.7	板状木製品	12.7	4.9	0.4	
第65号	257	1区	5K-008 上層 (埋藏深:30cm)	18.2	漆器蓋?	18.2	7.0	0.6	
第65号	258	1区	5K-008 上層 (埋藏深:30cm)	5.8	木製品(用漆未用)	5.8	3.7	0.2	
第65号	259	1区	5K-008 上層 (埋藏深:30cm)	6.8	木製品(用漆未用)	6.8	1.3	0.3	
第65号	260	1区	5K-008(130cm)	4.4	木製品(用漆未用)	4.4	1.9	0.2	
第65号	261	1区	5K-013 3層	8.3	木製品(用漆未用)	8.3	3.1	0.4	
第65号	262	1区	5K-022-023下層 灰色粘土層	26.1	木製品(用漆未用)	26.1	6.0	1.6	図版11
第65号	263	1区	5K-022-023下層 灰色粘土層	16.2	板状木製品	16.2	2.3	0.3	
第65号	264	1区	5K-022-023下層 灰色粘土層	15.1	木製品(用漆未用)	15.1	2.1	0.6	
第65号	265	1区	5K-022-023下層 灰色粘土層	12.0	木製品(用漆未用)	12.0	2.5	0.6	284号同一類体か?
第65号	266	1区	5K-022 灰色粘土層	42	木製品(用漆未用)	42	3.2	2.2	
第65号	267	1区	5K-022-023下層 灰色粘土層	5.2	木製品(用漆未用)	5.2	1.2		漆器木製品
第65号	268	1区	5K-022-023下層 灰色粘土層	8.1	木製品(用漆未用)	8.1	3.3	3.1	
第65号	269	1区	5K-025 2層	31.6	漆器木製品	31.6	4.1		
第65号	270	1区	5K-025 3層	26.8	漆器木製品	26.8	5.4		
第65号	271	1区	5K-025 3層	37.3	漆器木製品	37.3	4.0		
第65号	272	1区	5K-025	22.7	木製品(用漆未用)	22.7	11.4	9.3	
第65号	273	1区	全部区画費(001) 1-3区7層02	288.8	14.6	10.0			横筋材?の欠けた真鍮製の穴。
第65号	274	1区	全部区画費(001) 1-1区7層下段	209.2	14.5				図版11
第65号	275	1区	全部区画費(001) 1-3区7層下段	149.9	10.0				横筋溝あり
第65号	276	1区	全部区画費(001) 1-3区7層下段	224.0	15.0				横筋あり
第65号	277	1区	全部区画費(001) 1層 04	223.7	14.5	11.3			横筋材?
第65号	278	1区	全部区画費(001) 1-4区3法層	16.6	5.2	0.6			
第65号	279	1区	全部区画費(001) 1-5区 3法層	10.3	2.1	0.5			
第65号	280	1区	全部区画費(001) 1-5区 3法層	12.4	1.8	0.9			
第65号	281	1区	全部区画費(001) 1-7-2区3法層	17.9	1.4	1.2			
第65号	282	1区	全部区画費(001) 1-5区 3法層	8.5	3.0	1.2			
第65号	283	1区	全部区画費(001) 1-1区7層下段	47.6	4.4	3.4			
第65号	284	1区	全部区画費(001) 1-1区7層下段	35.4	11.1	10.8			図版12
第65号	285	1区	全部区画費(001) 1-3区7層下段	56.0	10.1	6.6			図版12
第65号	286	1区	全部区画費(001) 1-1区7層下段	43.6	9.7	6.5			図版12
第65号	287	1区	全部区画費(001) 1-1区7層下段	36.6	16.0	10.5			図版12
第65号	288	1区	全部区画費(001) 1-1区7層下段	36.4	15.0	10.5			287号同一類体か?
第65号	289	1区	全部区画費(001) 1-1区7層下段	17.2	11.6	10.0			
第65号	290	1区	全部区画費(001) 1-1区7層下段	8.1	9.2	3.4			
第65号	291	1区	全部区画費(001) 1-1区7層下段	19.1	7.9	6.5			
第65号	292	1区	全部区画費(001) 1-1区7層下段	26.4	9.1	5.5			
第65号	293	1区	全部区画費(001) 1-1区7層下段	25.0	11.1	4.3			柱・瓦葺の可能性あり
第65号	294	1区	全部区画費(001) 1-1区7層下段	26.6	22.4	3.6			横?
第65号	295	1区	全部区画費(001) 1-1区7層下段	24.2	8.2	3.3			釘跡の可能性あり
第65号	296	1区	全部区画費(001) 1-1区7層下段	15.8	6.2	4.1			
第65号	297	1区	全部区画費(001) 1-5区3法層	37.2	2.7	2.4			
第65号	298	1区	全部区画費(001) 1-1区7層下段	58.0	3.5	3.4			
第65号	299	1区	全部区画費(001) 3区7層	24.8	6.2	3.7			
第65号	300	1区	全部区画費(001) 3区7層	23.8	13.5	1.0			
第65号	301	1区	全部区画費(001) 1-1区7層下段	11.2	7.1	3.5			
第65号	302	1区	全部区画費(001) 1-3区7層01	37.8	23.6	6.0			図版12
第70号	303	1区	全部区画費(001) 1-7-4区 25-1法層	4.2	3.0	0.7			
第70号	304	1区	全部区画費(001) 1-7-2区 32層	10.8	1.9	1.4			
第70号	305	1区	全部区画費(001) 1-3区7層下段	5.6	3.0	1.6			
第70号	306	1区	全部区画費(001) 1-3区7層下段	22.6	6.4	3.3			図版12
第70号	307	1区	全部区画費(001) 1-7-2区 32層	12.0	3.0	1.9			図版12
第70号	308	1区	全部区画費(001) 1-3区(埋藏深:20cm) 埋藏土	12.5	2.2	1.4			
第70号	309	1区	全部区画費(001) 1-3区(東側下層真砂粘土)	149.0	2.1	1.2			312号同一類体、文字多動あり。
第70号	310	1区	全部区画費(001) 1-7-2区 32層	24.4	3.7	1.0			
第70号	311	1区	全部区画費(001) 1-3区(埋藏深:20cm) 埋藏土	33.2	7.2	1.2			
第70号	312	1区	全部区画費(001) 1-3区(東側下層真砂粘土)	61.9	10.3	1.1			
第71号	313	1区	5P-052 中-8	22.5	3.3	0.6			
第71号	314	1区	5P-052	4.8	2.1	1.3			
第71号	315	1区	5P-386	35.9	15.6	11.5			図版12
第71号	316	1区	5P-287	29.0	16.6	7.6			図版12
第71号	317	1区	5P-386	19.1	15.0	11.0			図版12
第71号	318	1区	5P-120	34.7	15.2	8.5			図版12
第71号	319	1区	5P-122	33.2	21.5				図版12
第71号	320	1区	5P-281	66.4	26.3				内部は空室。
第71号	321	1区	5P-114	93.9	22.5	11.4			四角一長方形

304・307は火錆白とみられる。火を受けて黒変した痕跡などは認められない。306は農具か建築材の一部とみられる。全体に加工痕がみられ、本来は複雑な形状を呈していたとみられる。311・312は板状の工具で、多くの鋭い傷がみられる。

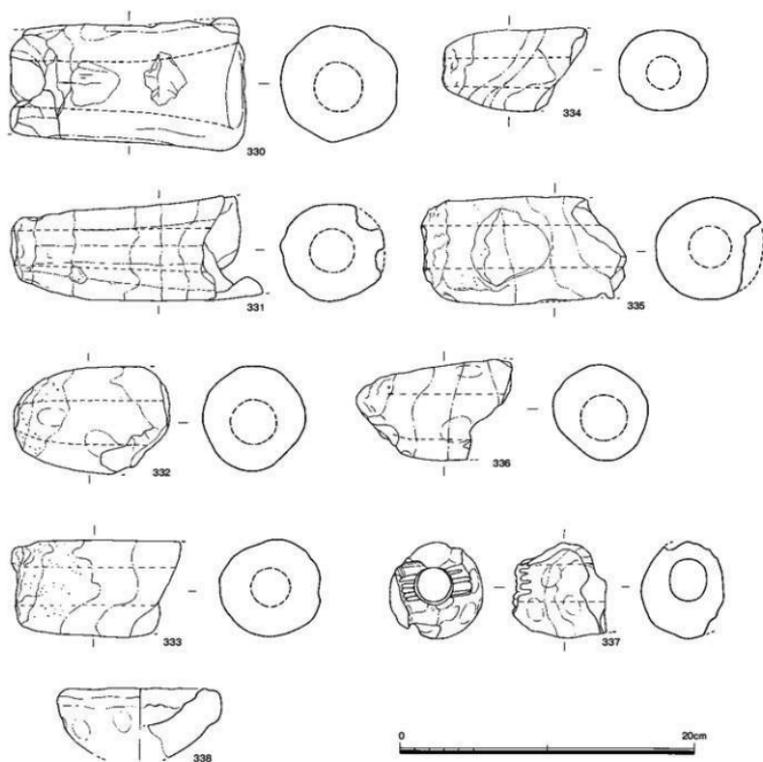
313は中世の木棺墓SR-062の木棺の側板。遺存状況は悪い。底板も遺構内で確認されたが、依存状態が悪く、脆弱で取り上げることはできなかった。314は同じSR-062の墓壙内から出土した棒状木製品の一部。

315～321は掘立柱建物の柱根。315は端部を面取りして平坦に仕上げている。柱径は16cmで、やや細めである。316は遺存状態が悪く、断面形が大きく抉れているが、本来は径が20cm以上の柱材だったとみられる。317は周囲が剥落して本来の形状は全くとどめていない。

320は内部が腐って中空になっている。周囲の面も本来の形状はとどめていないが、径27cm以上の大型の柱材だったことがわかる。318も周囲の面が剥落し、柱の径や形状は不明である。319は柱材の端部とみられ、周囲の遺存面は削った痕跡が残る。径は20cm以上だったとみられる。321は板状に遺存する柱材で、本来の断面形は四角形だったことが想定され、一辺15cm程の角柱だったとみられる。



第72図 調査区出土羽口1 (1/3)

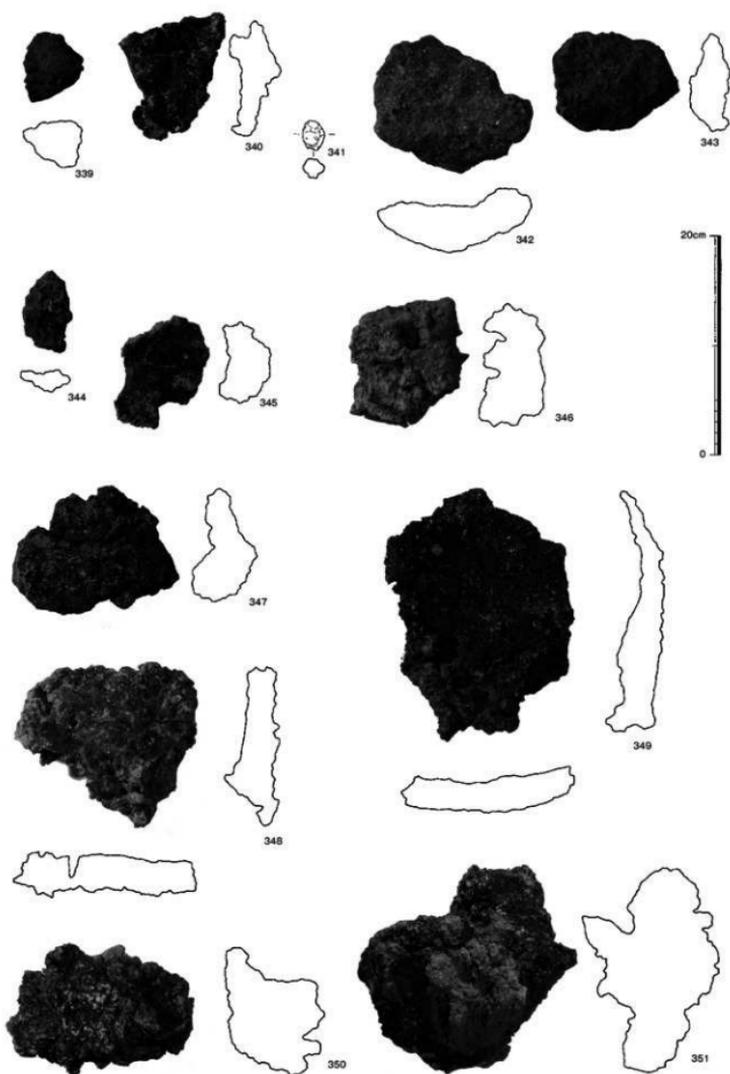


第73図 調査区出土羽口2 (1/3)

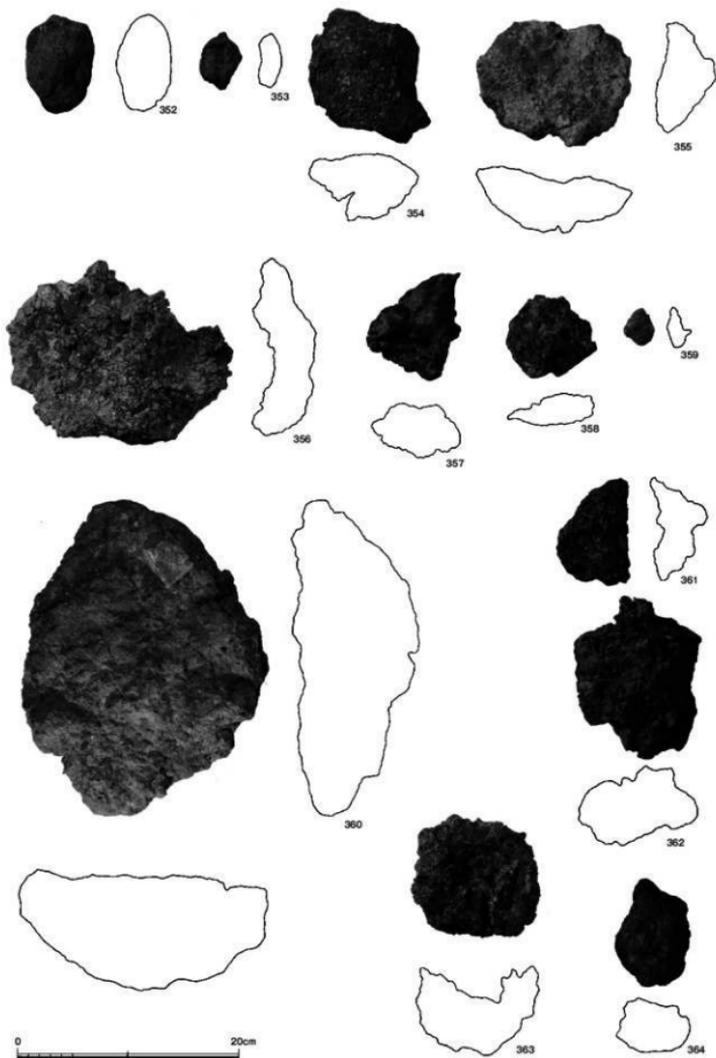
7. 57次調査出土製鉄・鍛冶関連遺物

57次第1区調査区内からはバンケース約400箱分の鉄滓が出土した。ただし特定の炉や排滓坑から出土した鉄滓は少なく、谷部に堆積した包含層や鉄滓溜まり、溝状遺構への流れ込みなどで確認された鉄滓が大半を占める。そのため、特定の炉の鉄滓を確定し、炉の操業状況を検討することは非常に困難である。そのため、今回は出土した鉄滓を各地点・遺構ごとに報告し、大まかな傾向を検討するにとどめたい。

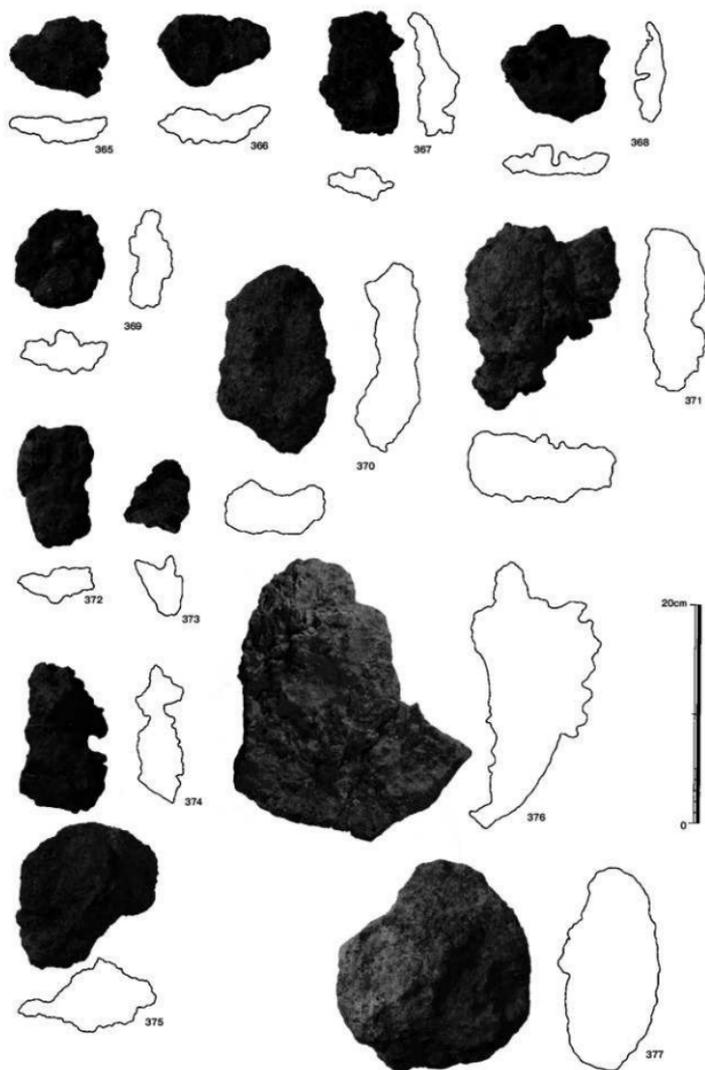
谷部包含層(001)からは製錬炉関連の炉壁や炉底塊、鍛冶炉関係の鍛冶祭等が出土し、谷に面する斜面で製錬・鍛冶などの多彩な活動を行っていたことが伺える。谷部に位置するSK-008等の遺構からも鉄滓が出土し、埋没過程で鉄滓を含む斜面の土砂が流入したことを示す。



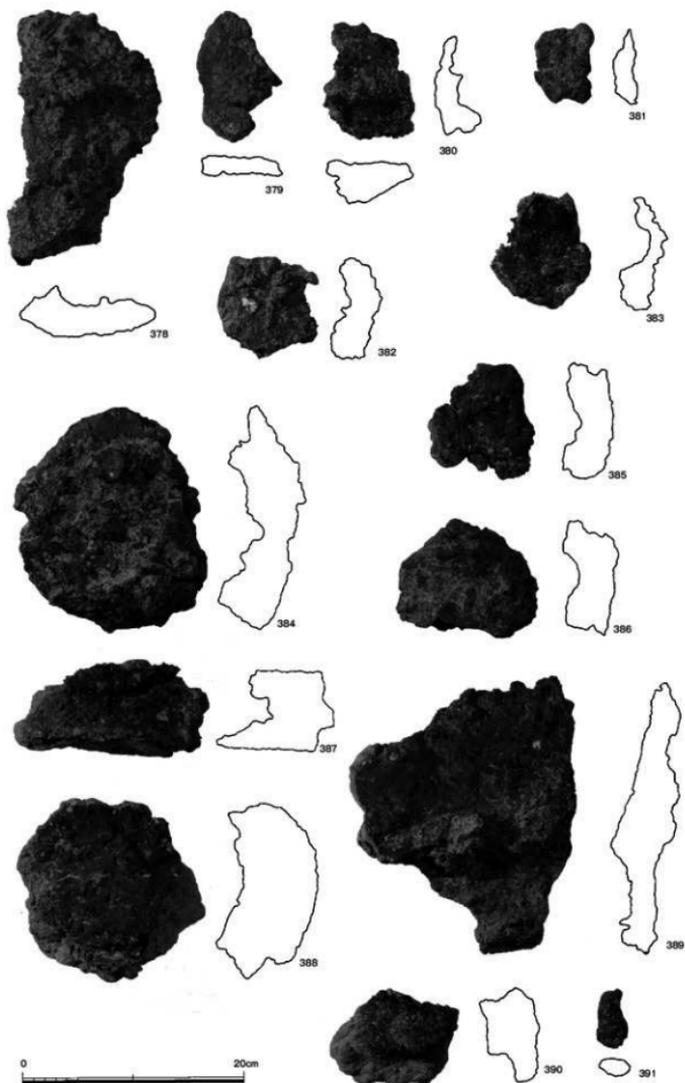
第74図 調査区出土鉄滓1(1/4)



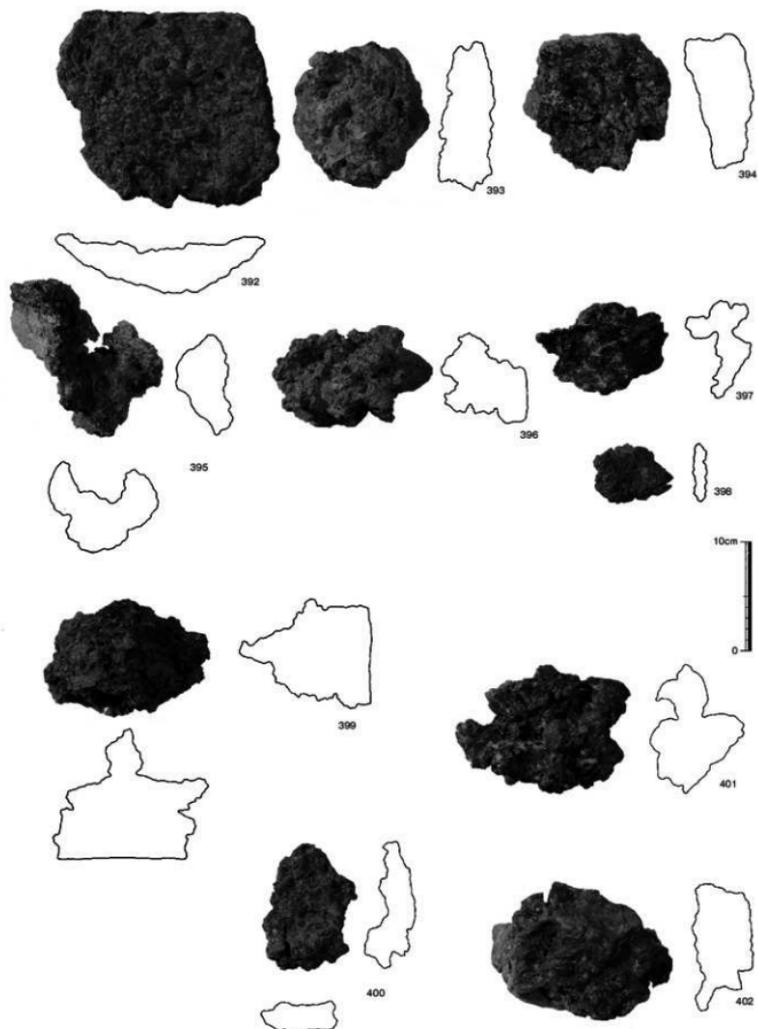
第75図 調査区出土鉄滓2(1/4)



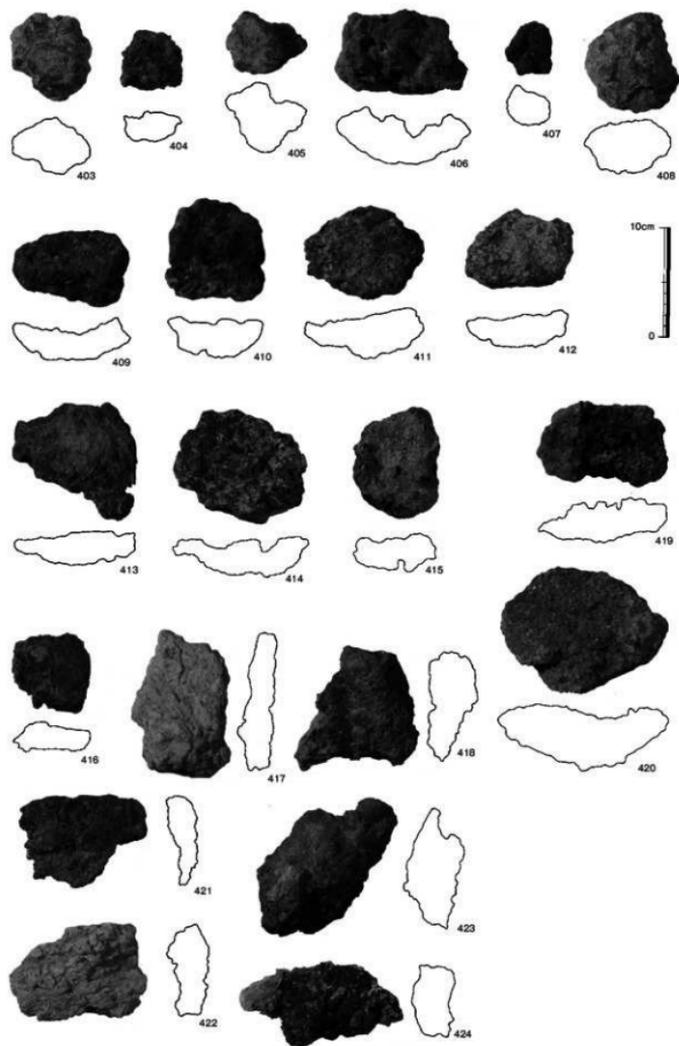
第76図 調査区出土鉄滓3(1/4)



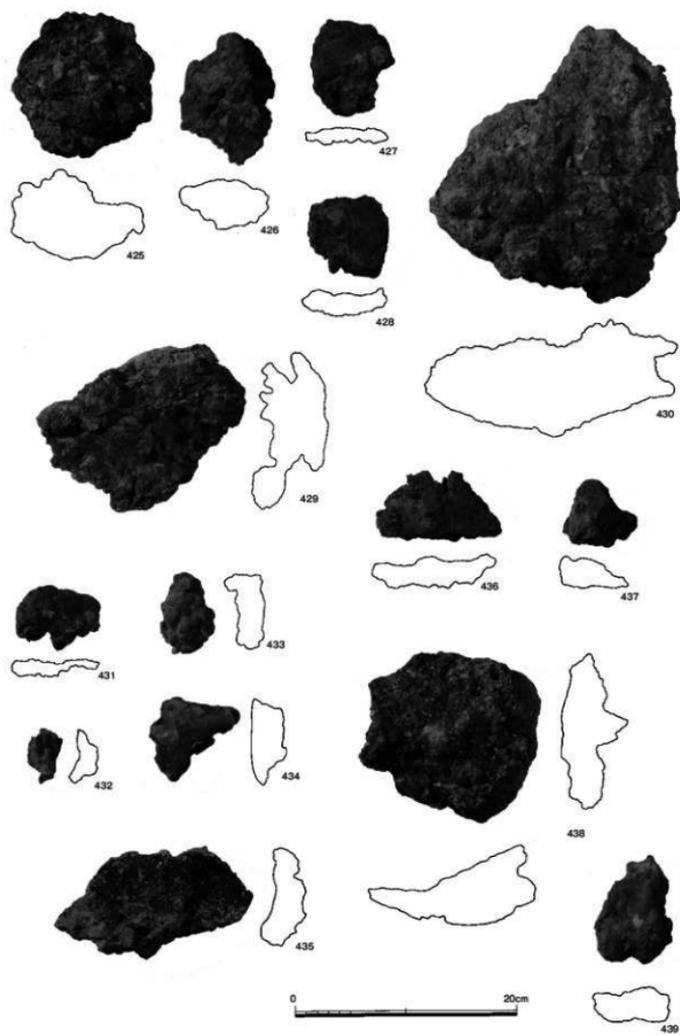
第77図 調査区出土鉄滓4(1/4)



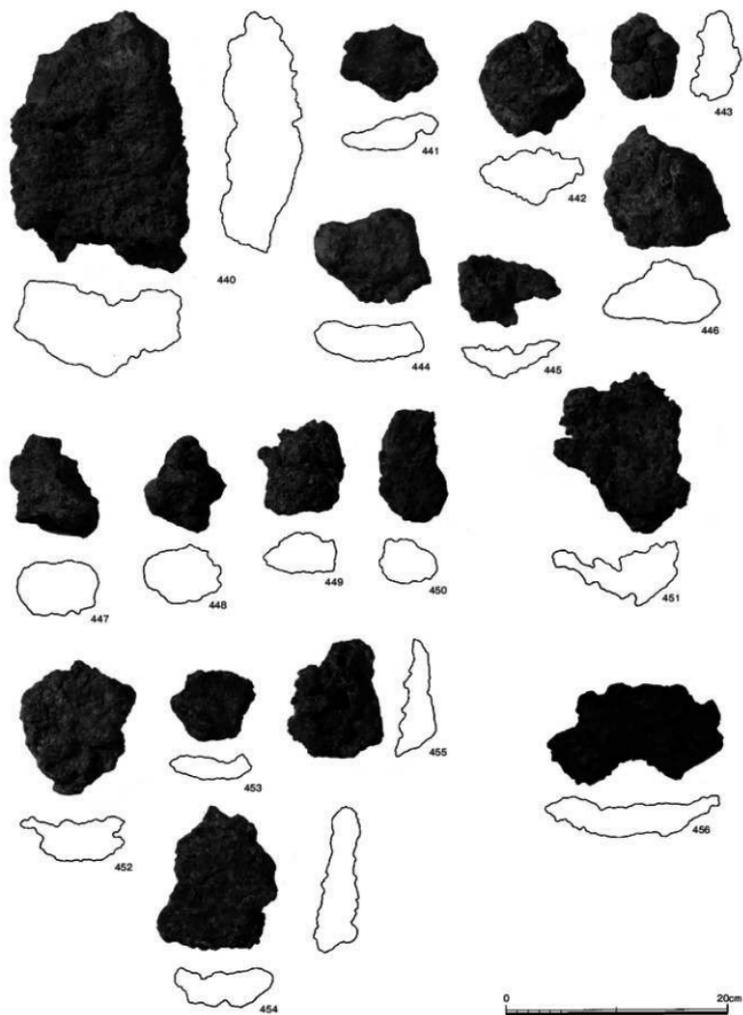
第78図 調査区出土鉄滓5 (1/4)



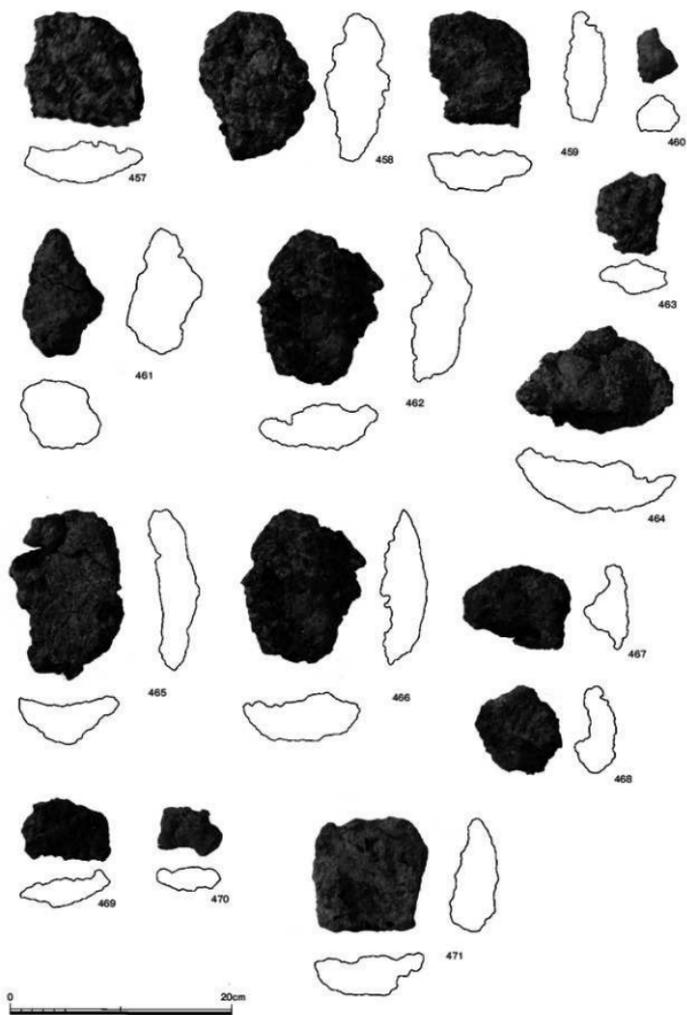
第79图 調査区出土鉄滓6(1/4)



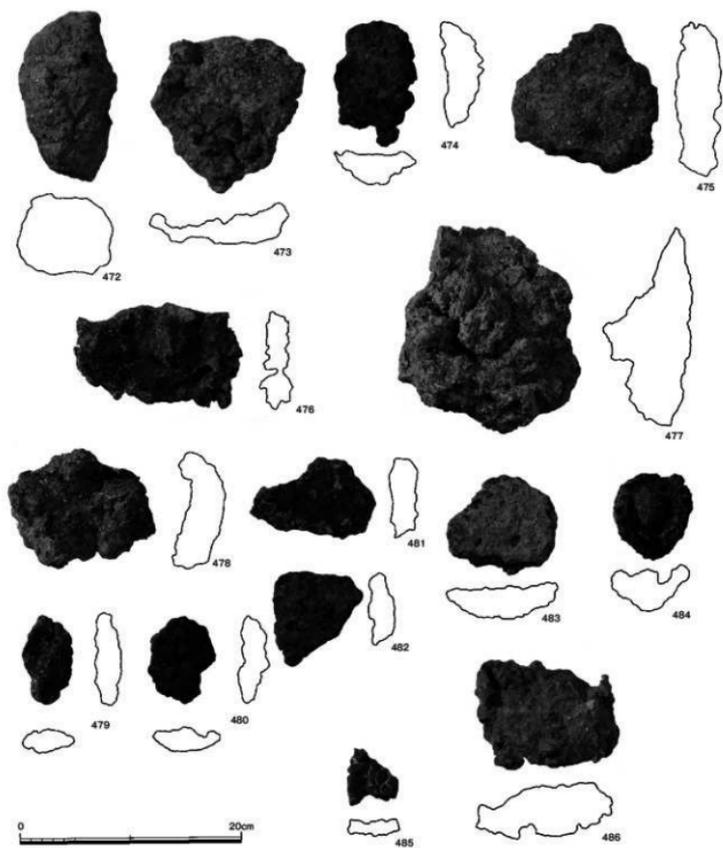
第80图 調査区出土铁滓7(1/4)



第B1図 調査区出土鉄滓B (1/4)



第82図 調査区出土鉄滓9(1/4)

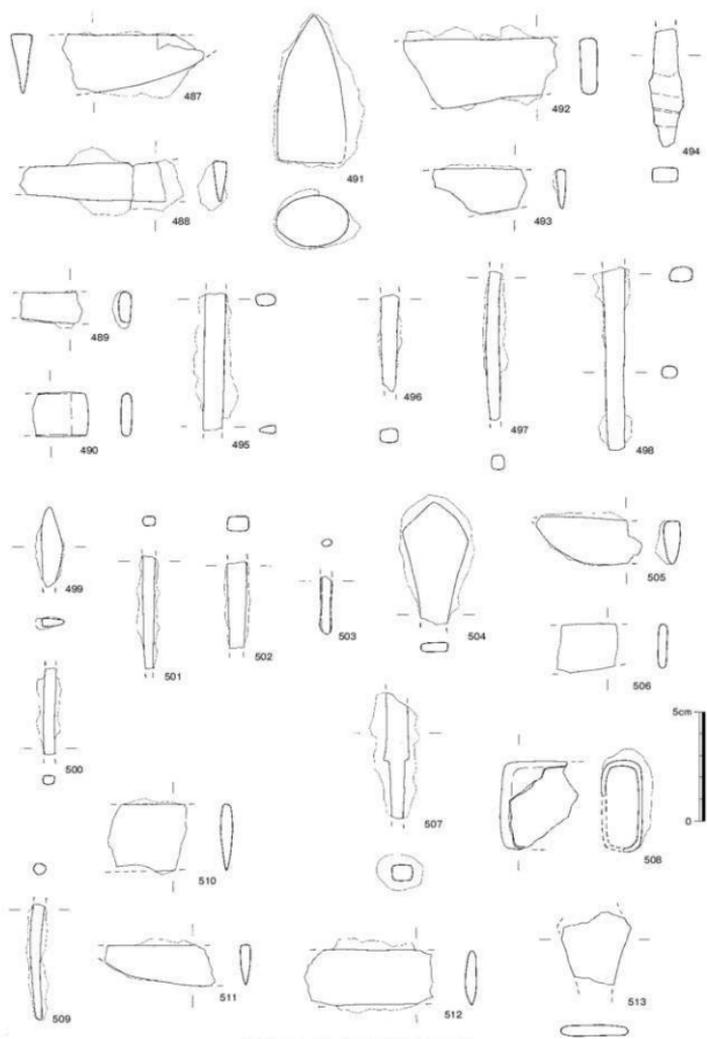


第83図 調査区出土鉄滓10(1/4)

表3 57次出土鉄洋一覽

図	発号	区	出土遺構	種類	寸法(cm)	重量(g)
第72図	322	I区	SK-008 R-1	竪口	長11.3×幅2	—
第72図	323	I区	SK-009 R-2	竪口	長13.1×幅0.8	—
第72図	324	I区	SK-022西面倉庫(灰黄色土)	竪口	長13.8×幅0.2	—
第72図	325	I区	SK-029 R-1	竪口	長16.0×幅0.2	—
第72図	326	III区	SK-050	竪口	長14.1×幅0.1	—
第72図	327	III区	SK-052	竪口	長16.1×幅0.6	—
第72図	328	III区	SK-050	竪口	長14.9×幅2.9	—
第72図	329	III区	SK-051	竪口	長11.3×幅0.5	—
第73図	330	I区	谷部倉庫(001)Ⅰ-3区1節△レンチ(青銅)	竪口	長16.0×幅0.3	—
第73図	331	I区	谷部倉庫(001)Ⅰ-3区1節△レンチ2層	竪口	長17.0×幅2	—
第73図	332	I区	谷部倉庫(001)Ⅰ-7区1層	竪口	長10.5×幅2.4	—
第73図	333	I区	谷部倉庫(001)Ⅰ-2区3/4層	竪口	長11.5×幅0.6	—
第73図	334	I区	谷部倉庫(001)Ⅰ-2区南端△レンチ	竪口	長0.8×幅0.3	—
第73図	335	IV区	谷部倉庫(001)Ⅱ下西面下層	竪口	長13.9×幅2.4	—
第73図	336	I区	谷部倉庫(001)Ⅰ-7区6層	竪口	長10.5×幅0.5	—
第73図	337	I区	谷部倉庫(001)Ⅰ-7区25-26層	竪口	長6.4×幅0.6	—
第74図	339	I区	Ⅰ區△レンチ	埋土塊	口徑11.2 高さ	—
第74図	340	I区	谷部倉庫(001)Ⅰ層	伊壁	7.1×5.1×高3	242
第74図	341	I区	谷部倉庫(001)Ⅰ-1区7層	縄文系遺物	10.7×8.0×高4	357
第74図	342	I区	谷部倉庫(001)Ⅰ-3区2層	伊壁	2.7×2.0×1.8	8
第74図	343	I区	谷部倉庫(001)Ⅰ-2区1層	伊壁	12.5×14.3×2.7	770
第74図	344	II区	谷部倉庫(001)Ⅱ-5区1層伊直下	伊壁	9.5×12.1×3.5	221
第74図	345	II区	谷部倉庫(001)Ⅱ-5区1層	伊壁	8.0×4.9×2.0	79
第74図	346	II区	谷部倉庫(001)Ⅱ-5区1層	伊壁	9.2×10.4×4.8	253
第74図	347	II区	谷部倉庫(001)Ⅱ-5区1層	伊壁	11.9×11.3×5.9	788
第74図	348	II区	谷部倉庫(001)Ⅱ-5区3/4層	伊壁	11.6×14.5×3.5	790
第74図	349	II区	谷部倉庫(001)Ⅱ-5区3/4層	伊壁	14.6×17.0×4.6	850
第74図	350	II区	谷部倉庫(001)Ⅱ-5区3/4層	伊壁	23.0×16.9×5.1	1250
第74図	351	II区	谷部倉庫(001)Ⅱ-5区3/4層	伊壁	13.5×16.5×10.5	892
第75図	352	II区	谷部倉庫(001)Ⅱ-7区9~14層	伊壁	10.5×15.9×2.9	2150
第75図	353	II区	谷部倉庫(001)Ⅱ-7区9~14層	縄文系遺物	5.3×6.3×高2	360
第75図	354	II区	谷部倉庫(001)Ⅱ-7区9~14層	縄文系遺物	5.3×9×高2	52
第75図	355	II区	谷部倉庫(001)Ⅱ-7区9~14層	伊壁+伊壁	11.0×12.4×2.0	1050
第75図	356	II区	谷部倉庫(001)Ⅱ-7区9~14層	伊壁	11.7×14.5×3	982
第75図	357	II区	谷部倉庫(001)Ⅱ-7区9~14層	伊壁	16.9×21.0×5.3	1700
第75図	358	II区	谷部倉庫(001)Ⅱ-7区9~14層	伊壁	10.1×8.9×5.3	317
第75図	359	II区	谷部倉庫(001)Ⅱ-7区9~14層	伊壁	8.4×8.5×3.4	170
第75図	360	II区	谷部倉庫(001)Ⅱ東側南西角柱土	縄文系遺物	3.7×2.9×2.1	17
第75図	361	II区	谷部倉庫(001)Ⅱ-7区32層	伊壁	20.8×24.3×12.2	8400
第75図	362	II区	SK-008 土層(掘出深-30cm)	伊壁	9.8×7.0×4.5	322
第75図	363	II区	SK-008 土層(掘出深-30cm)	伊壁塊	14.7×12.0×6.1	1150
第75図	364	II区	SK-008 土層(掘出深-30cm)	伊壁	10.5×12.0×8.4	942
第76図	365	II区	SK-009	伊内土	10.0×7.3×9.9	450
第76図	366	II区	SK-009	伊壁	7.3×9.2×2.2	183
第76図	367	II区	SK-019	伊壁	6.8×10.2×3.9	284
第76図	368	II区	SK-019	伊壁	11.5×7.7×3.9	264
第76図	369	II区	SK-019	伊壁	9.4×10.2×2.7	274
第76図	370	II区	SK-019	伊壁	9.5×8.8×4.1	288
第76図	371	II区	SK-019	伊壁	17.7×10.6×5.3	1200
第76図	372	II区	SK-019	伊壁	17.3×14.3×6.4	1350
第76図	373	II区	SK-019	伊壁	11.5×8.9×4.1	382
第76図	374	II区	SK-011 R-4	伊壁	7.7×8.5×4.2	166
第76図	375	II区	SK-011 R-4	伊壁	13.4×7.9×4.8	682
第76図	376	II区	SK-017下層(溝ノ目)	伊壁	10.9×12.5×7.7	858
第76図	378	II区	SK-011 R-4	伊壁	25.0×22.8×12.1	4650
第77図	379	II区	SK-022 1グリッド	伊壁塊	9.6×7.4×10.0	3900
第77図	380	II区	SK-022 1グリッド	伊壁塊	23.8×15.0×6.5	1900
第77図	381	II区	SK-022 1グリッド	伊壁塊	12.8×8.0×2.3	171
第77図	382	II区	SK-022 1グリッド	伊壁塊	10.8×9.0×4.0	237
第77図	383	II区	SK-022 2グリッド	伊壁塊	7.4×5.8×2.0	338
第77図	384	II区	SK-022 2グリッド	伊壁塊	9.6×9.5×4.2	354
第77図	385	II区	SK-022 2グリッド	伊壁塊	11.0×9.5×4.0	281
第77図	386	II区	SK-022 2グリッド	伊壁塊	21.0×17.5×6.0	2750
第77図	387	II区	SK-022 2グリッド	伊壁塊	11.6×9.1×4.5	588
第77図	388	II区	SK-022 2グリッド	伊壁塊	10.4×13.3×5.2	810
第77図	389	II区	SK-022 2グリッド	伊壁塊(通風孔付)	8.9×17.7×8.8	794
第77図	390	II区	SK-022 2グリッド	伊壁塊	16.8×17.0×7.9	1540
第77図	391	II区	SK-022 2グリッド	伊壁塊	25.5×20.5×8.8	1800
第77図	392	II区	SK-022 2グリッド	伊壁塊	9.3×12.5×4.2	331
第77図	393	II区	SK-022 2グリッド	伊壁塊	5.6×3.0×1.6	34
第77図	394	II区	SK-022 2グリッド	伊壁塊	18.8×20.7×4.7	2200
第77図	395	II区	SK-022 2グリッド	伊壁塊	14.0×12.7×5.4	616
第77図	396	II区	SK-022 2グリッド	伊壁塊	13.5×13.7×5.5	682
第77図	397	II区	SK-022 2グリッド	伊壁塊	10.2×11.4×14.7	650
第77図	398	II区	SK-022 2グリッド	伊壁塊	9.6×14.9×9.2	564
第77図	399	II区	SK-022 2グリッド	伊壁塊	8.9×11.1×4.6	304
第77図	400	II区	SK-022 2グリッド	伊壁塊	5.9×7.7×1.5	88
第77図	401	II区	SK-022 2グリッド	伊壁塊	10.8×15.4×12.2	812
第77図	402	II区	SK-022 2グリッド	伊壁塊	12.0×8.5×3.8	287
第77図	403	II区	SK-022 2グリッド	伊壁塊	11.8×16.0×7.8	872
第77図	404	II区	SK-022 2グリッド	伊壁塊	12.8×16.2×6.4	678

第79号	402	IV区	SD-065(北側下層部茶褐色土)	掘削液	10.1×7.5×5.2	383
第79号	404	IV区	SD-065(北側下層部茶褐色土)	掘削液	6.1×6.3×3.0	177
第79号	405	IV区	SD-065(北側上層部茶褐色土)	掘削液	5.9×7.3×6.4	267
第79号	406	IV区	SD-065(北側上層部茶褐色土)	掘削液	7.9×12.4×8.8	475
第79号	407	IV区	SD-065(北側上層部茶褐色土)	鉄塊系遺物	5.3×4.4×3.7	71
第79号	408	IV区	SD-065(北側上層部茶褐色土)	伊壁	9.2×8.6×4.8	582
第79号	409	IV区	SD-065(東側広域区画下層)	掘削液	7.5×11.0×2.9	302
第79号	410	IV区	SD-065(東側広域区画下層)	掘削液	9.4×9.9×4.0	400
第79号	411	IV区	SD-065(西側面倉庫1(1階下))	掘削液	8.2×11.1×3.6	412
第79号	412	IV区	SD-065(西側面倉庫1(1階下))	掘削液	7.8×10.1×3.1	320
第79号	413	IV区	SD-065	掘削液	11.8×11.3×1.1	308
第79号	414	IV区	SD-065	掘削液	11.2×12.4×4.8	479
第79号	415	IV区	SD-065	掘削液	10.6×8.3×3.7	334
第79号	416	IV区	SX-110 A2	伊壁(未構成砂鉄付着)	7.8×7.3×2.8	148
第79号	417	IV区	SX-110 A2	伊壁	13.7×9.4×3.6	287
第79号	418	IV区	SX-110 A2	伊壁(未構成砂鉄付着)	12.2×11.4×4.7	560
第79号	419	IV区	SX-078	掘削液	8.4×12.1×3.7	406
第79号	420	IV区	SX-078	掘削液	11.5×15.8×5.7	1050
第79号	421	IV区	SX-110 A2	伊壁	8.8×12.1×2.9	271
第79号	422	IV区	SX-110 A2	伊壁	9.4×12.8×3.7	257
第79号	423	IV区	SX-110 A2	伊壁(遺物係)	11.9×14.4×5.1	720
第79号	424	IV区	SX-110 A2	伊壁	7.1×14.8×5.4	242
第80号	425	IV区	SX-110 A3	伊内壁	12.2×13.0×8.1	1350
第80号	426	IV区	SX-110 A3	伊壁(遺物係)	12.4×8.4×4.9	431
第80号	427	IV区	SX-110 A3	伊壁(未構成砂鉄付着)	9.1×7.8×2.0	134
第80号	428	IV区	SX-110 A3	伊壁(未構成砂鉄付着)	9.4×8.0×2.7	190
第80号	429	IV区	SX-110 B1	伊壁	14.4×19.0×7.7	849
第80号	430	IV区	SX-110 B1	伊壁	22.9×23.3×8.2	5700
第80号	431	IV区	SX-110 B2	砂鉄塊積層	6.2×8.0×2.1	89
第80号	432	IV区	SX-110 B2	流動土	5.2×3.5×2.0	27
第80号	433	IV区	SX-110 B2	伊内流動土	7.7×5.3×4.4	151
第80号	434	IV区	SX-110 B2	伊内流動土	8.0×8.3×3.0	230
第80号	435	IV区	SX-110 B3	伊壁	10.4×18.6×4.3	534
第80号	436	IV区	SX-110 B-1	砂鉄塊積層	6.8×11.6×3.0	100
第80号	437	IV区	SX-110 B-1	砂鉄塊積層	6.3×6.6×3.1	97
第80号	438	IV区	SX-110 B2	伊内壁	10.8×7.3×3.6	233
第80号	439	IV区	SX-110 B2	伊壁	15.4×16.1×7.0	1300
第81号	440	IV区	SX-111 1区(ベルト)	掘削液	23.9×16.7×7.9	3750
第81号	441	IV区	SX-111 3区	掘削液	7.2×9.2×3.3	231
第81号	442	IV区	SX-111 3区	伊内壁	10.8×9.8×3.1	434
第81号	443	IV区	SX-111 3区	鉄塊系遺物	8.5×6.3×4.1	224
第81号	444	IV区	SX-111 3区	伊壁	9.3×11.0×3.6	560
第81号	445	IV区	SX-111 4区(ベルト)	掘削液	7.7×9.5×3.3	210
第81号	446	IV区	SX-111 4区(ベルト)	伊壁	11.8×11.0×7.4	1050
第81号	447	IV区	SX-112 3区	伊壁	9.8×8.3×5.5	415
第81号	448	IV区	SX-112 3区	掘削液	9.0×7.8×5.4	375
第81号	449	IV区	SX-112 3区	伊壁	9.2×8.3×4.9	275
第81号	450	IV区	SX-112 3区	伊内壁	10.8×8.2×4.8	381
第81号	451	IV区	SX-112 3区	伊内壁	15.2×12.4×5.1	652
第81号	452	IV区	01-レンヂ	掘削液	13.0×10.8×4.0	582
第81号	453	IV区	01-レンヂ南側(下層部)	掘削液	7.0×8.0×2.6	194
第81号	454	IV区	01-レンヂ南側(下層部)	掘削液	13.8×11.1×3.8	422
第81号	455	IV区	01-レンヂ南側(下層部)	掘削液	11.2×8.8×3.7	321
第81号	456	I区	SP-107	掘削液	9.9×16.0×3.0	499
第82号	457	IV区	谷部倉庫1(1階下茶褐色土)	掘削液	11.2×11.4×4.8	588
第82号	458	IV区	谷部倉庫1(1階下茶褐色土)	掘削液	13.3×10.9×4.1	854
第82号	459	IV区	谷部倉庫1(1階下茶褐色土)	掘削液	10.9×9.4×4.0	596
第82号	460	IV区	谷部倉庫1(1階下茶褐色土)	鉄塊系遺物	5.2×3.9×3.4	73
第82号	461	IV区	谷部倉庫1(1階下暗褐色土)	掘削液	11.6×7.4×8.3	650
第82号	462	IV区	谷部倉庫1(1階下暗褐色土)	掘削液	14.2×11.7×4.8	749
第82号	463	IV区	谷部倉庫2(1階下D1-レンヂ北)	掘削液	9.2×6.1×3.0	185
第82号	464	IV区	谷部倉庫2(1階下D1-レンヂ北)	掘削液	9.8×14.6×4.8	768
第82号	465	IV区	谷部倉庫2(1階下暗褐色土)	掘削液	12.5×10.9×4.0	724
第82号	466	IV区	谷部倉庫3(1階下茶褐色土)	掘削液	14.8×12.0×4.6	796
第82号	467	IV区	谷部倉庫3(1階下茶褐色土)	掘削液	8.5×10.2×4.7	340
第82号	468	IV区	谷部倉庫3(1階下茶褐色土)	掘削液	8.1×8.2×3.9	260
第82号	469	IV区	谷部倉庫3(1階下茶褐色土)	掘削液	6.1×8.6×2.5	135
第82号	470	IV区	谷部倉庫3(1階下茶褐色土)	流動土	4.3×6.1×2.7	87
第83号	471	II区	組庫11-レンヂ	掘削液	11.4×11.0×3.0	600
第83号	472	II区	組庫11-レンヂ	伊壁	15.8×8.8×6.1	1008
第83号	473	II区	組庫11-レンヂ	掘削液	14.9×14.2×4.3	778
第83号	474	II区	組庫21-レンヂ	掘削液	11.7×7.7×4.2	290
第83号	475	II区	組庫21-レンヂ	伊壁	14.1×13.8×5.1	1250
第83号	476	II区	組庫21-レンヂ	伊壁	9.9×15.2×5.0	585
第83号	477	II区	組庫21-レンヂ	伊壁	19.7×17.0×8.8	1850
第83号	478	II区	組庫31-レンヂ	伊壁	11.0×13.9×5.3	679
第83号	479	II区	組庫31-レンヂ	掘削液	8.5×5.1×2.3	104
第83号	480	II区	組庫31-レンヂ	掘削液	8.4×8.4×2.2	124
第83号	481	II区	組庫31-レンヂ	伊壁	7.3×11.8×3.1	278
第83号	482	II区	組庫31-レンヂ	掘削液	9.2×8.4×2.6	182
第83号	483	II区	組庫31-レンヂ	掘削液	9.4×10.3×1.1	330
第83号	484	II区	組庫31-レンヂ	掘削液	8.1×7.2×3.9	234
第83号	485	II区	組庫31-レンヂ	流動土	5.5×4.7×2.1	57
第83号	486	II区	西側面倉庫	伊壁	10.3×13.1×4.8	748



第84图 调查区出土铁器(1/2)

SX-022・023からは製錬活動を示す炉壁・炉底塊が大量に出土した。このSX-022・023の西側斜面上部にはSK-003・SK-014等の製錬炉が確認されているが、この他にも斜面には製錬炉が築かれていた可能性が高く、この地点から排出された鉄滓が谷部に流入して堆積したのがSX-022・023の鉄滓溜まりとみられる。

Ⅳ区の溝SD-065の覆土からも鉄滓が出土しており、そのほとんどが鍛冶滓や椀型滓であるSD-065の東側斜面上部は大きく削平され、遺構は確認できないが、SD-065の埋没以前に東側斜面上部に鍛冶炉が築造され、鍛冶活動が行われていたことが伺える。製錬滓が見られないことから、製錬炉はなかったものと考えられる。また、大量の土器が出土したⅣ区谷部包含層からも鍛冶関連の鉄滓しか出土していないことから、谷部の西側斜面上に製錬炉・鍛冶炉が混在している状況と比較して、東側斜面では鍛冶炉に限定された活動が行われていたことがわかる。

その一方で、SD-065の西側に隣接したSX-111・112からは製錬関連の炉壁や流動滓が大量に出土している。この鉄滓に対応する製錬炉は確認できていないが、周囲の状況、特にSD-065との位置関係からみて、SX-111・112の東側斜面上部のSD-065付近に製錬炉が存在した可能性は非常に高いと思われる。製錬炉が操業し、SX-111・112に製錬滓が排出後、炉の操業停止、SD-065の掘削という展開が想定される。SX-111・112の鉄滓の出土量から見て、大規模な製錬活動は行われなかったと考えられる。

8. 57次調査出土鉄器

57次調査区からの鉄器の出土量は多くない。これは谷部包含層の保水性が高く、金属遺物の遺存に適していなかったことによるものとみられる。鉄器の多くは谷の東西斜面の遺構内や包含層から出土している。また、遺構の時期に伴う鉄器は少なく、尾根に想定される古墳の遺物が斜面に流出したものとみられる。

487・488は鉄刀。487は切先部分のみで先端を欠くが、刃部幅3cmほどの刀とみられる。488は関から柄の部分。491は石突とみられるが、錯がひどく確定できない。489は刀子の柄、490は鉋の刃状の形状を呈する。492は刀の柄とみられる。493は刀子。

494～504は鉄鎌。いずれも小片で、全体形が分かる良好な資料はない。494は基部で木皮が残る。499は鎌身とみられる。三角形で、関は不明瞭である。504は圭頭鎌の鎌身。関ははっきりしない。

505は鉄刀。刃幅は2cmと推定され、刃厚が厚い。506は刀の柄とみられる。

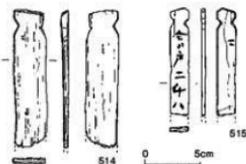
508は精尻金具とみられる。510～512は鉄刀。510は鉄刀の刀身破片。他の鉄刀に比べ、薄めに作られる。511は刀子。512は鉄刀の刀身とみられるが、柄部の可能性もある。

513は鉄鎌で504と同形大とみられる。

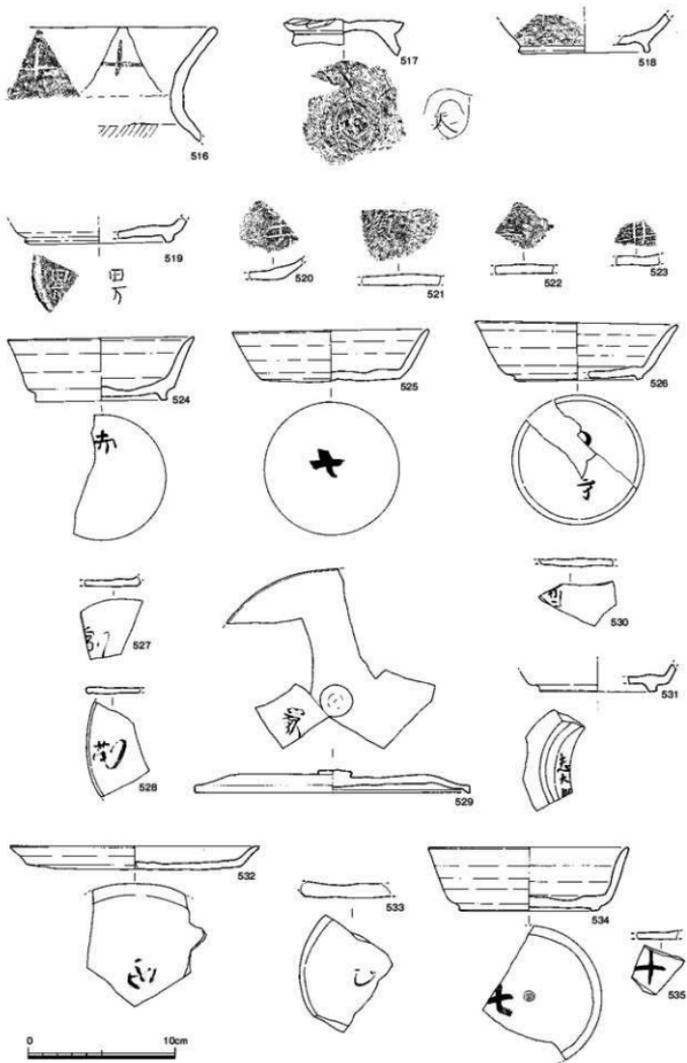
9. 57次調査出土木筒・刻書土器・墨書土器

514・515はⅠ区谷部包含層(001)から出土した木筒で、ほぼ同地点から出土した。いずれも荷札木筒で、514は両面とも墨痕が確認できなかった。515は片面に「金□戸二升八」の文字が判読可能である。もう片面は墨痕は認められるが、判読不能。

516～523は刻書土器。517は高台内面に「人」か「大」の字を



第85図 調査区出土木筒(1/3)



第86図 調査区出土墨書土器・刻書土器(1/3)

刻む。519は「田万」の字が確認でき、地名か人名とみられる。521は「願」と刻まれている。522は「三」と読めるが、ヘラ記号の可能性もある。

524～535は墨書土器。524は「赤」の1文字が書かれる。人名か地名の一部か。526は「□寺」か。527は「副」、528は「敬」の崩し字か。529は判読不能。531は「志大□」と書かれており、人名の可能性が高い。533は「乙」、534は「七」の文字が確認できる。

10. まとめ

57次調査は西隣りの谷部で行われた42・52次調査の結果とはかなり様相を異にする状況が確認された。具体的には以下のような相違が認められる。

・42次・52次調査では、弥生時代中期後半～後期にかけての土器が大量に出土した。一方、57次調査からは、同じ弥生時代中期後半から後期にかけての土器は全くみられない。

・42次・52次調査区では古墳時代後期以降の遺物はほとんど見られない。一方、57次調査では古墳時代後期から古代にかけての土器が大量に出土し、この時期に属すると見られる建物群も確認されている。

・42・52次調査区内からは製鉄・鍛冶関連の遺構は確認されておらず、鉄滓等の関連遺物はほとんど出土していない。これに対し57次調査では多くの製鉄・鍛冶遺構と大量の鉄滓が出土している。

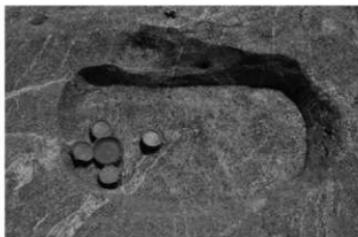
つまり、1本の尾根を挟んで東西の谷で以降の存在時期が全く分かれ、両方の谷に同時期に集落が作られるなどの活動が行われていたことは認められない。この両者の谷の関係は、元岡丘陵南部での遺跡の消長を考える際に検討すべき課題となるだろう。

その他、57次調査の特徴として古代の大型の掘立柱建物の存在、そして製鉄・鍛冶遺構の存在が挙げられる。これらの古代の遺構群は斜面を切土により造成して作られたもので、大規模な土木工事を伴っていることから、地域的な施設ではなく公的な機能を有した施設が建造されたことが考えられる。特に、IV区の掘立柱建物が主軸を東西方向に置いて並んでいることが注目され、これらの建物が官衙に準じる機能を有していたことも想定できる。

また、57次調査区の地形と遺構配置を検討すると、IV区の東西棟の掘立柱建物群を北辺とし、IV区谷部の谷奥を北東隅とし、SD-065を東辺とする1辺約100m方形の区画を見ることができる。この区画が谷の中に人為的に設定されたこととすれば、その時期は掘立柱建物が作られた頃、おそらく7世紀後半から8世紀にかけてとみられる。この区画の中で、掘立柱建物は北辺のほぼ中央に位置し非常に計画的な造成と建物建築が行われたことも考えられる。この掘立柱建物は、丘陵の南側から谷の入り口を通して見ることができ。逆に建物内から南側を眺望することもできたとみられる。

これらの点を考慮すると、57次調査区が位置するこの谷は、古代に何らかの公的施設が置かれ、製鉄、鍛冶活動を行っていたことが考えられるのである。

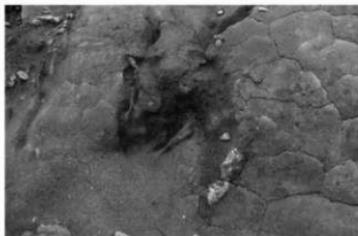
ただしこの谷で行われていた製鉄・鍛冶活動を考える際に、確認された製鉄炉の数が非常に少ないこと、また谷部から出土した鉄滓の量がパンケース約400箱程度と元岡・桑原遺跡群の他の調査区で出土した鉄滓の量よりもはるかに少ないことは考慮されるべきである。ここで行われていた製鉄・鍛冶活動が小規模なものだったことは間違いなく、またI区の製鉄炉がSK-003の排滓坑に不自然に倒壊していた炉壁を見ると、この谷での製鉄作業は決して順調なものではなかったと考えられる。今後、出土した鉄滓の検討を行うことがあれば、より詳細なことが明らかになると思われる。



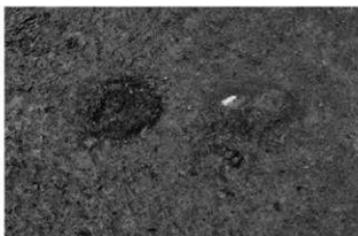
(1) SR-002 (西から)



(2) SK-003 炉壁出土状況 (西から)



(3) SK-004 (東から)



(4) SK-006・007 (南から)



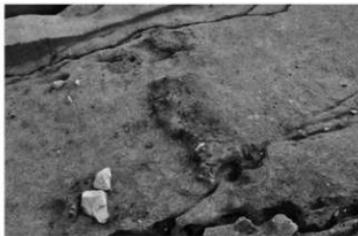
(4) SK-012 (北東から)



(6) SK-013 (南から)



(7) SK-014 (北から)



(8) SK-015~018 (北から)

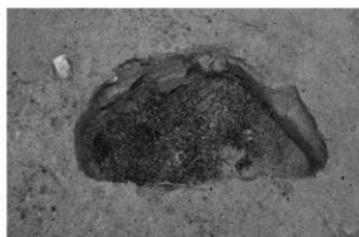
図版 2



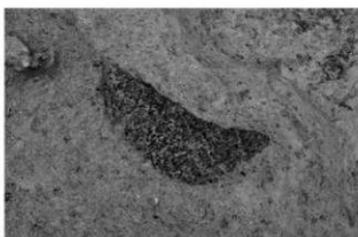
(1) SK-020 (北から)



(2) SX-022・023 (東から)



(3) SK-026 (北から)



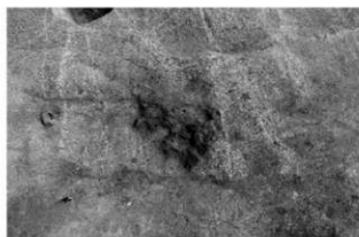
(4) SK-031 (南から)



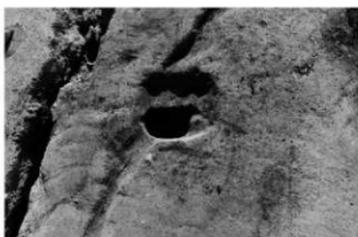
(5) SK-033 (北東から)



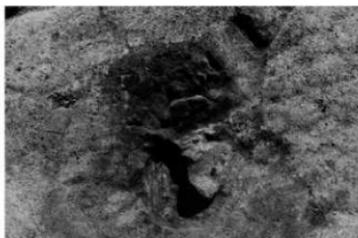
(6) I区巨石遺構 (北から)



(7) SK-034 (北から)



(8) SK-047 (東から)



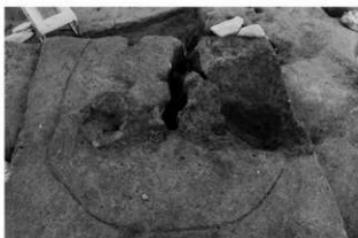
(1) SK-048 (東から)



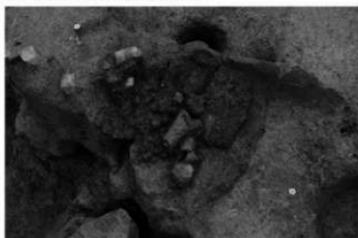
(2) SK-049 (南から)



(3) SK-051 検出状況 (南東から)



(4) SK-051 完掘状況 (西から)



(5) SK-052 (北から)



(6) SK-054 (南から)



(7) III区谷部出土木株 (東から)



(8) SK-061 (南から)

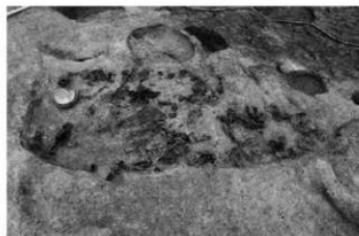
図版 4



(1) SR-062 (東から)



(2) SD-065 (南から)



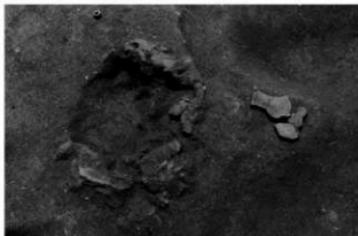
(3) SC-066 炭化物出土状況 (北から)



(4) SK-068 (南から)



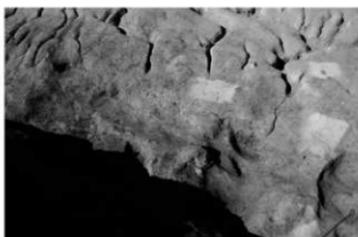
(5) SK-082 (南から)



(6) SK-095 下部 (東から)



(7) SX-095 土器出土状況 (南から)



(8) SK-111・112 (南西から)



(1) IV区全景 (西から)



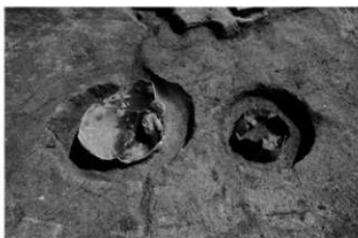
(2) SB-1103 (南から)



(3) SB-1106 (西から)

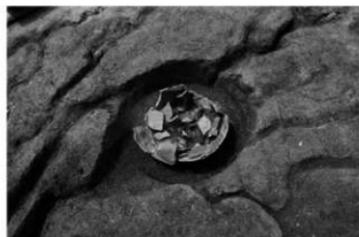


(4) SB-1105 (東から)



(5) SX-1201・1202 (北から)

図版 6



(1) SX-1201 (南から)



(2) V区2面全景 (南から)



(3) 2区全景 (北から)



(4) SK-01 (東から)



(5) SK-02 (東から)



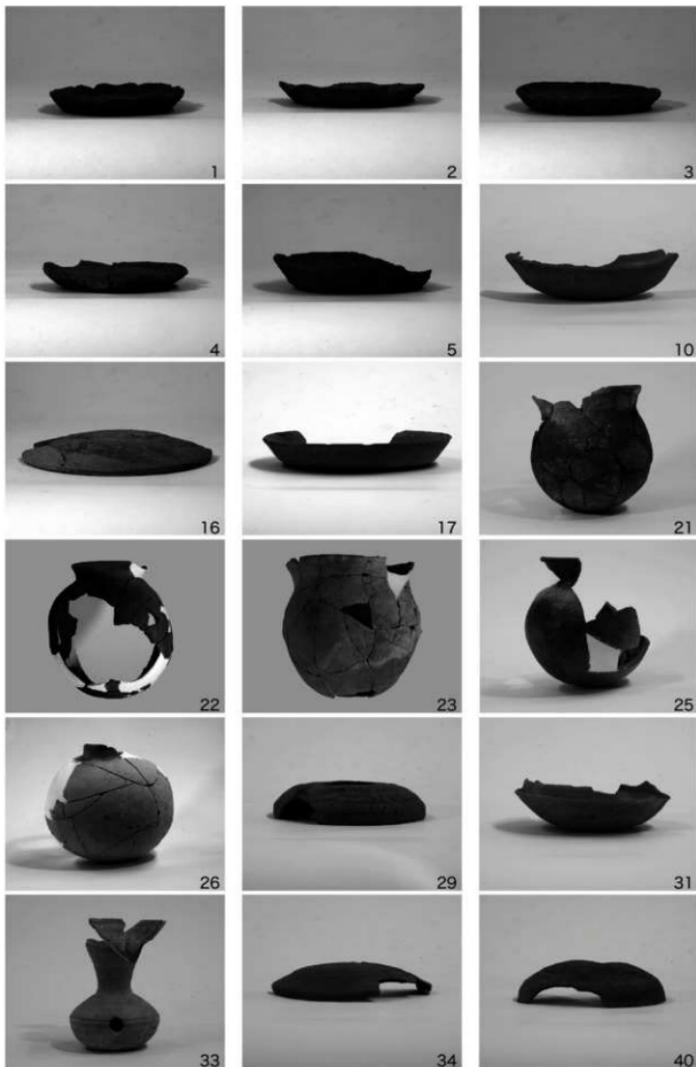
(6) 3区全景 (北から)

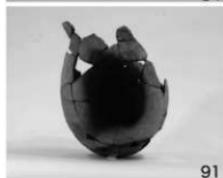


(7) 堀切状遺構 (北から)



(8) 堀切状遺構底部 (西から)







518



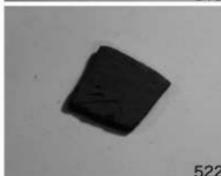
519



520



521



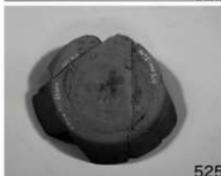
522



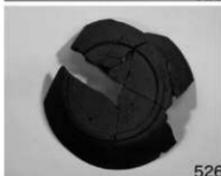
523



524



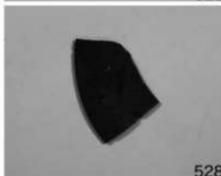
525



526



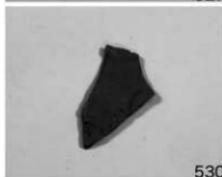
527



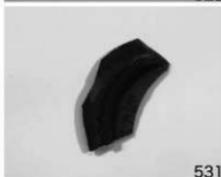
528



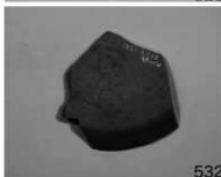
529



530



531



532



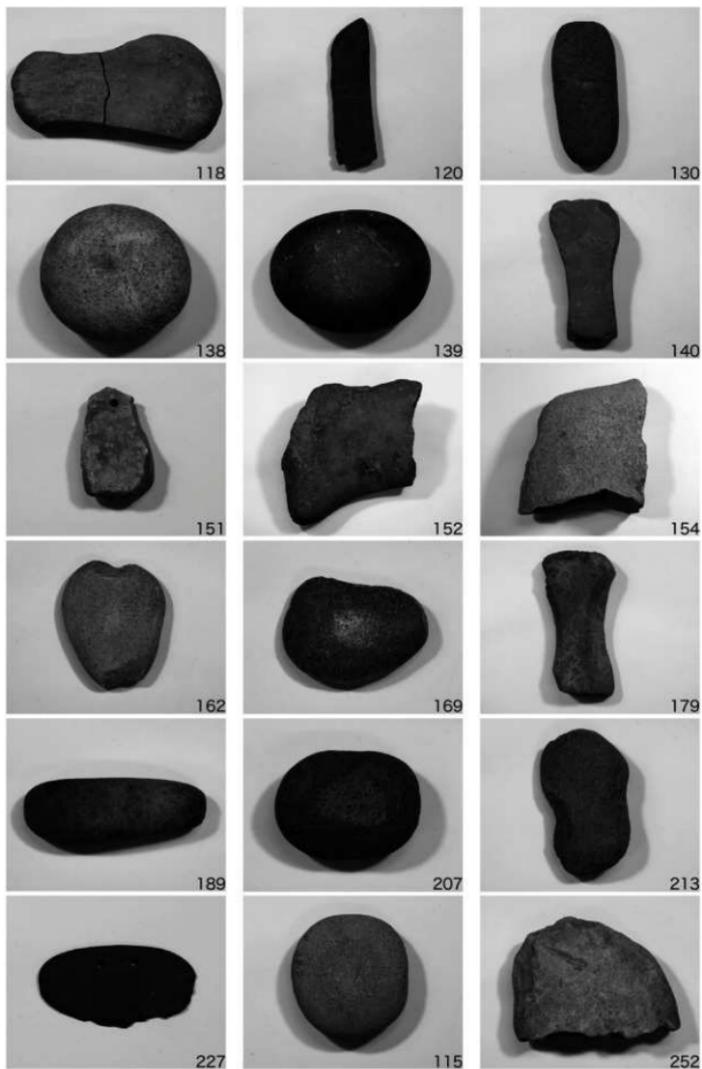
533

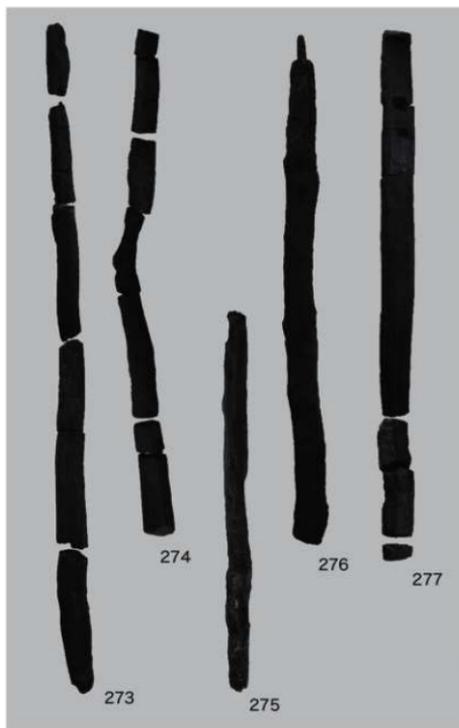


534



535





255



256



257

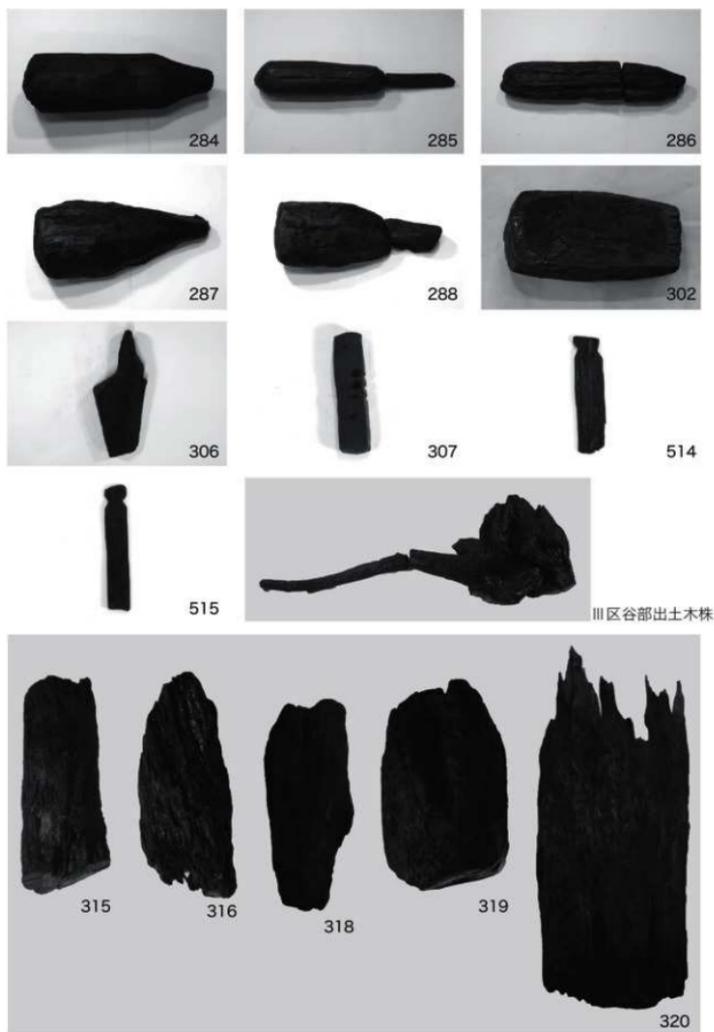


261



272

圖版 12



IV 第62次調査の報告

1. 調査の概要

62次調査区は31次・41次調査地点の北側に位置し、東西方向に延びる狭い尾根と、南に傾斜する斜面から構成される。調査区西側部分は大きく削平され、旧地形をうかがうことは困難である。

調査区東側の斜面は果樹園の造成により段造成がなされる。尾根部分は調査区中央で人為的に切り通され、東西2つの範囲に分かれる。尾根北側は造成で切り落とされ、崖面になっている。

調査は平成25年9月1日から11月1日まで実施した。調査面積は1374.4㎡である。

2. 調査の報告

(1) 調査区西半部の調査

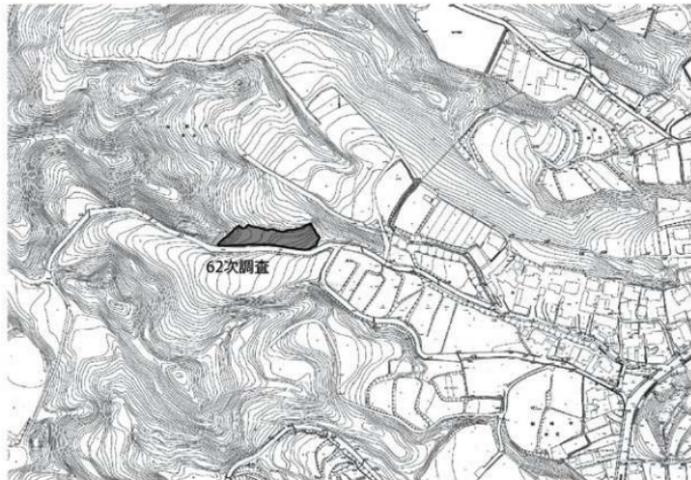
調査区西半部は現況では平坦に造成されており、試掘調査及び表土除去の結果、この部分については現在の地表面から3m下まで土取り工事によって削られ、その後埋め戻されていることが判明した。この範囲については遺構は遺存していない。なお、造成時の盛り土の中から1980年代初頭の清涼飲料水の瓶（スプライト1リットル瓶）が出土し、盛り土工事の年代を特定することが可能である。

このため、調査区西半部については造成工事の状況の確認を以て調査を終了した。

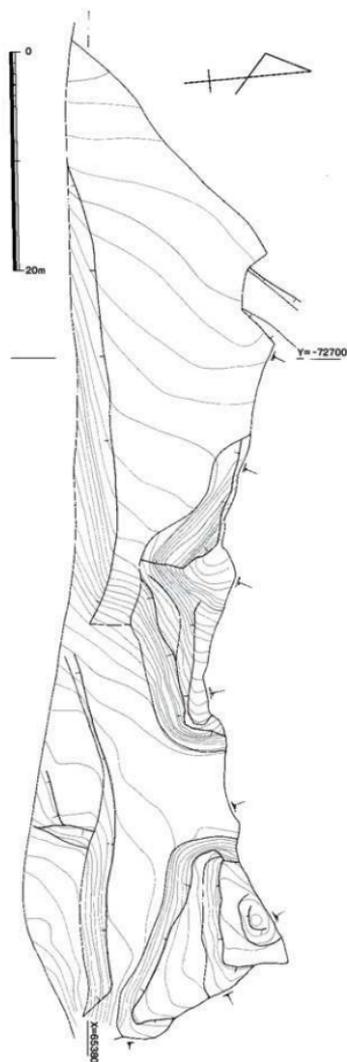
(2) 調査区東半部の調査

1) 概要

調査区南東部の斜面部分については、表土を除去したところ果樹園の造成以前の古い造成痕跡が確認された。この造成痕は階段状に緩く段状に作られており、遺構は確認できない。表土中の遺物から



第1図 62次調査区位置図(1/4000)



第2図 62次調査区全体図(1/400)

近世～現代の間の造成とみられ、果樹園以前に畑地として利用されていたことが考えられる。

尾根部分では、表土を除去したところ、中世の竪穴土坑 11 基と溝状遺構を確認した。

2) 出土遺構

SK-02 (第4図)

円形の土坑で、径1.1m、遺構面からの深さ60cmを測る。床面は平坦で、壁はやや聞き気味に立ち上がる。土壌墓の可能性も考えられる。

SK-03 (第4図)

尾根の南側斜面で検出した土坑で、検出時の平面形は円形を呈するが、土坑の南側を大きく削られており、本来の遺構の形状には不明な点が多い。斜面上端からの遺構の深さは1.3mを測り、本来は更に深かったものとみられる。遺構内からの出土遺物はなく、中世の竪穴土坑とみられる。

SK-04 (第4図)

尾根の南側斜面で検出した遺構、床面は1.4m、奥行き1.0mで、奥に幅20cmの一段高い段が作られる。斜面上端から床面までの深さは2.0mを測る。遺構内からの出土遺物はなく、中世の竪穴土坑とみられる。

SK-05 (第4図)

尾根の南側斜面にあり、床面の幅は1.5m、奥行き80cmで、斜面側の壁面に段を持つ溝が2ヶ所付く。斜面上端から床面までの深さは1.5m程度で、壁面は他の土坑よりもやや緩く傾斜する。遺構内からの出土遺物はない。

SK-06 (第4図)

尾根の南側斜面で検出され、床面の幅は1mとやや小型である。床面南側は斜面で切られ、奥行きの規模は不明である。斜面上端からの深さもやや浅めで、遺構が大きく来られていることが想定できる。出土遺物はない。

SK-07 (第4図)

尾根の斜面部分で検出されたが、床面の大半が斜面で削られ、遺構の形状は不明である。遺存状況で幅1.7mが確認でき、本来はかなり大型の土坑だったことが想定できる。斜面上端からの深さは70cmを測る。出土遺物はない。

SK-08 (第5図)

東側尾根頂部の平坦部で検出された円形の土坑。近世の溝状遺構と重複し、溝状遺構よりも先行する。径は1.0mで、検出面からの深さは50cmである。床面は平坦で、壁面はほぼ直立する。遺構内からの出土遺物はなく、堅穴土坑と土壌墓の2つの可能性を考えておきたい。

SK-09 (第5図)

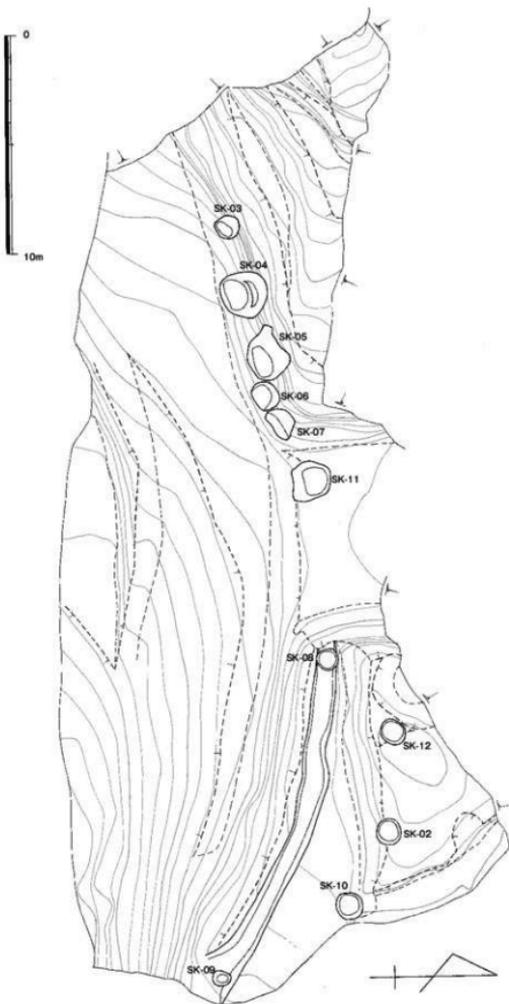
東側調査区の東端で検出された土坑で、近世の溝状遺構よりも先行する。遺構の平面形は略円形で、径は70～80cm、遺構の深さは50cmほどである。遺構の床面は平面ではなく、壁面もかなり開き気味に立ち上がる点で、他の土坑とは異なる。遺構内からの出土遺物はない。

SK-10 (第5図)

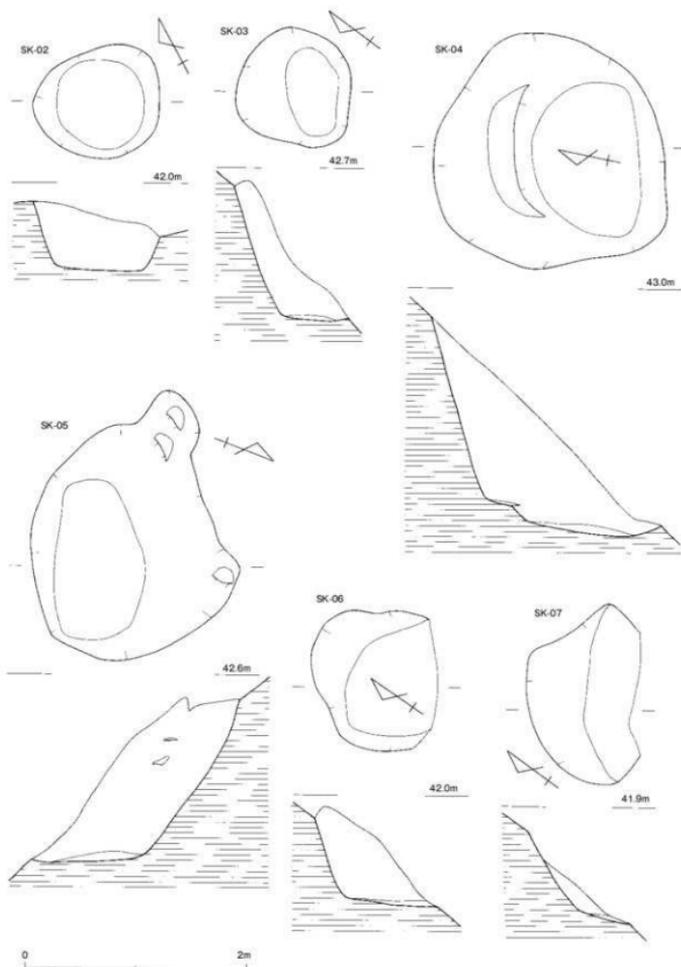
円形の土坑で、径は1.2m、深さは70cmを測る。床面は平坦で、壁面は直立する。遺構内からの出土遺物はなく、堅穴土坑と土壌墓の2つの可能性を考えておきたい。

SK-11 (第5図)

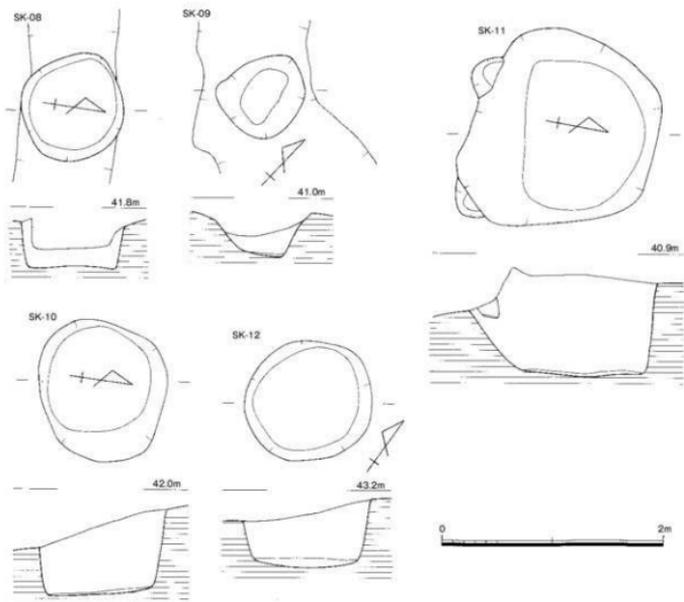
尾根が(おそらく人為的に削って)途切れている箇所で見出された土坑で、本来は尾根の斜面に位置していたとみられ



第3図 62次東半部遺構配置図(1/200)



第4図 62次遺構実測図1 (1/40)



第5図 62次遺構実測図2(1/40)

る。他の土坑よりも床面の標高が1m以上低く、この場所がもともと標高の低い部分だったことが考えられる。全長1.8m、幅1.7mで、南側に2ヶ所張り出し部が付く。SK-05と形状や規模が近く、同時期に同じ機能を持つものとして築造されたことが考えられる。

SK-12 (第4図)

円形の土坑で、径1.1～1.2m、深さ60cmを測る。床面は平坦で、壁面は直立する。遺構内からの出土遺物はなく、堅穴土坑と土壘墓の2つの可能性を考えておきたい。

3. まとめ

調査前は、隣接する31次・41次の調査結果に関連する瓦窯、あるいは製鉄遺構の存在を想定していたが、これらの調査に関連する遺構・遺物は確認できなかった。62次調査区と31次・41次調査区との間には市道があるが開発対象から外れているため、今回調査をおこなうことができなかった。62次調査の状況から、尾根の斜面下端部が市道の下に位置する可能性が高いことが判明したことにより、市道の下に重要な遺構が遺存していることを踏まえておく必要があろう。



(1) 62次調査区現況 (西から)



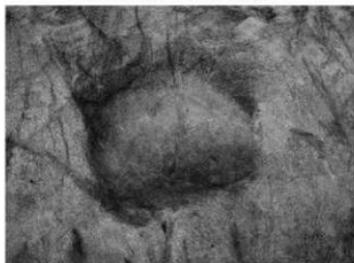
(2) 調査区東半部 (西から)



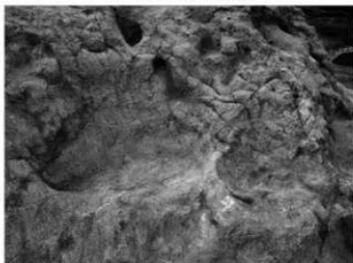
(3) 調査区東半部 (東から)



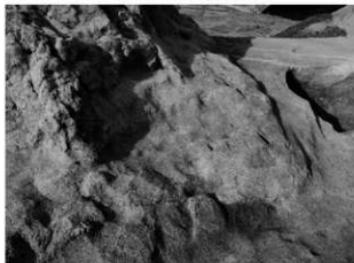
(4) SK-02 (北から)



(5) SK-04 (南から)



(6) SK-05・06 (南から)



(7) SK-07 (南から)



(8) SK-11 (南から)

V 第65次調査の報告

1. 調査の概要と層序

元岡・桑原遺跡群第65次調査区(第1～3図)は、元岡・桑原遺跡群の中央西側に位置しており、北方向に開口する谷部にあたる。近隣の調査では山を挟んだ南側で第63次、第66次調査が行われている。

元岡・桑原遺跡群第65次調査地区は農学部の圃場整備が計画され、試掘によって埋蔵文化財の有無の確認がおこなわれた。確認調査の結果、弥生時代～古代の包含層がGL-100cmから存在することが確認されたため、平成26年6月2日～12月26日まで約7か月間の発掘調査を行った。

元岡・桑原遺跡群第65次調査区は、平成26年6月2日から山頂の表土剥ぎを人力によって行った。6月3日にはレベル移動、座標移動を行った後、本格的な調査を開始した。6月10日から山頂の表土剥ぎと並行して平板のコンタ入れを行った。また、それと並行して山裾の表土剥ぎを重機によって開始した。本来なら山の中腹部に先に表土を重機によって剥がなければならなかったが、廃土の関係上、山裾から表土剥ぎを行った。6月23日から人力による山裾の掘削を開始した。10月8日に空撮による全景写真撮影を行い、その後10月9日からベルトの掘削、残る図面を仕上げた。10月14日から中腹部の調査を本格化させ、レベル移動、座標移動等をおこなった。10月15日から人力による掘削を開始した。10月27日に平板でコンタ入れを開始し、12月15日に空撮によって全景写真撮影を行った。その後残る写真撮影を行い、12月22日に埋め戻しを終了した。

第65次調査区は、花崗岩風化層が地山にあたる。調査区の標高は25～56mを測り、かなりの標高差がみられた。遺構の残りとしては良くなかったが、炭を焼いたと考えられる土坑が3基みつかったほか、包含層上層から古代の遺物、また下層からは鉄斧など、弥生時代の遺物が検出されている。

第65次調査区の土層図(第4、5図)は南北方向に縦1本(中軸土層)、中軸土層に直行するように東西方向に横4本設定した。

現況は荒地であった。ミカン畑によるものか段状に開削されていた。縦土層図で説明すると、重機で表土を剥いだあとの層序は1層～5層、9層～15層、18層～21層は上層、6層～8層、16層、17層、22層～35層は中層、35層から65層は下層である。全体図1では上層・中層を、また全体図2では下層を示した。上層は主に古代の遺物が出土し、下層では弥生時代の遺物が出土した。SK003、SK010、SK011は古代の遺物を包含している1層から出土した。SK004は横断土層2の7層から出土している。また、小型丸底壺、玄武岩製の磨製石斧などは縦断土層の8層から検出された。

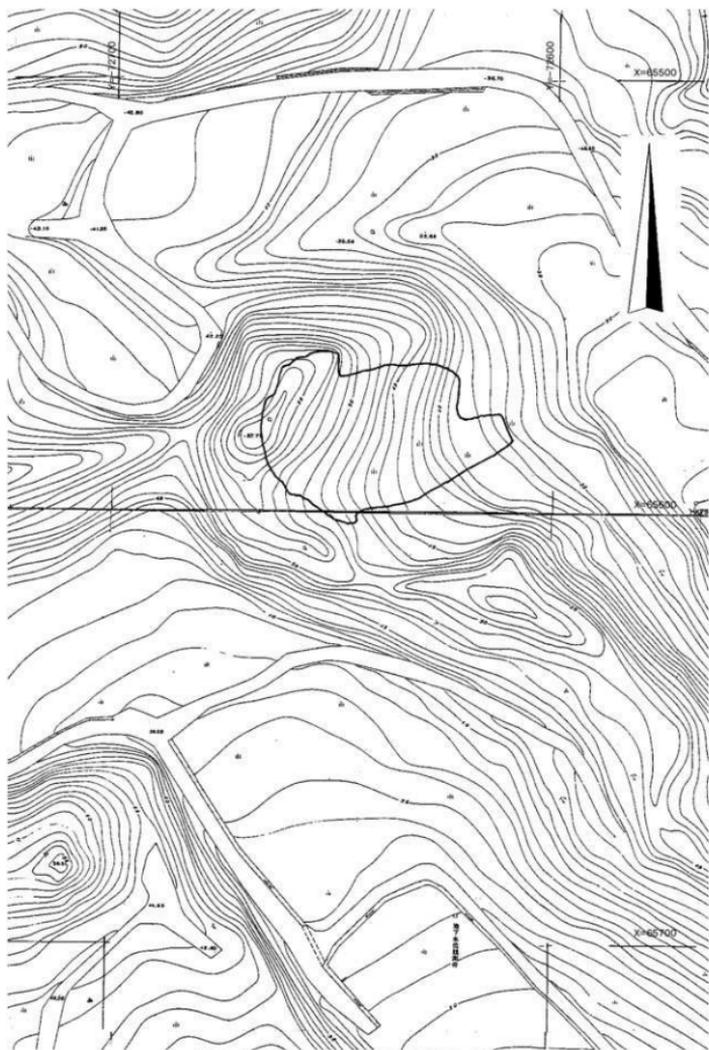
出土遺物は大変少なくパンケース8箱であった。

2. 遺構と遺物

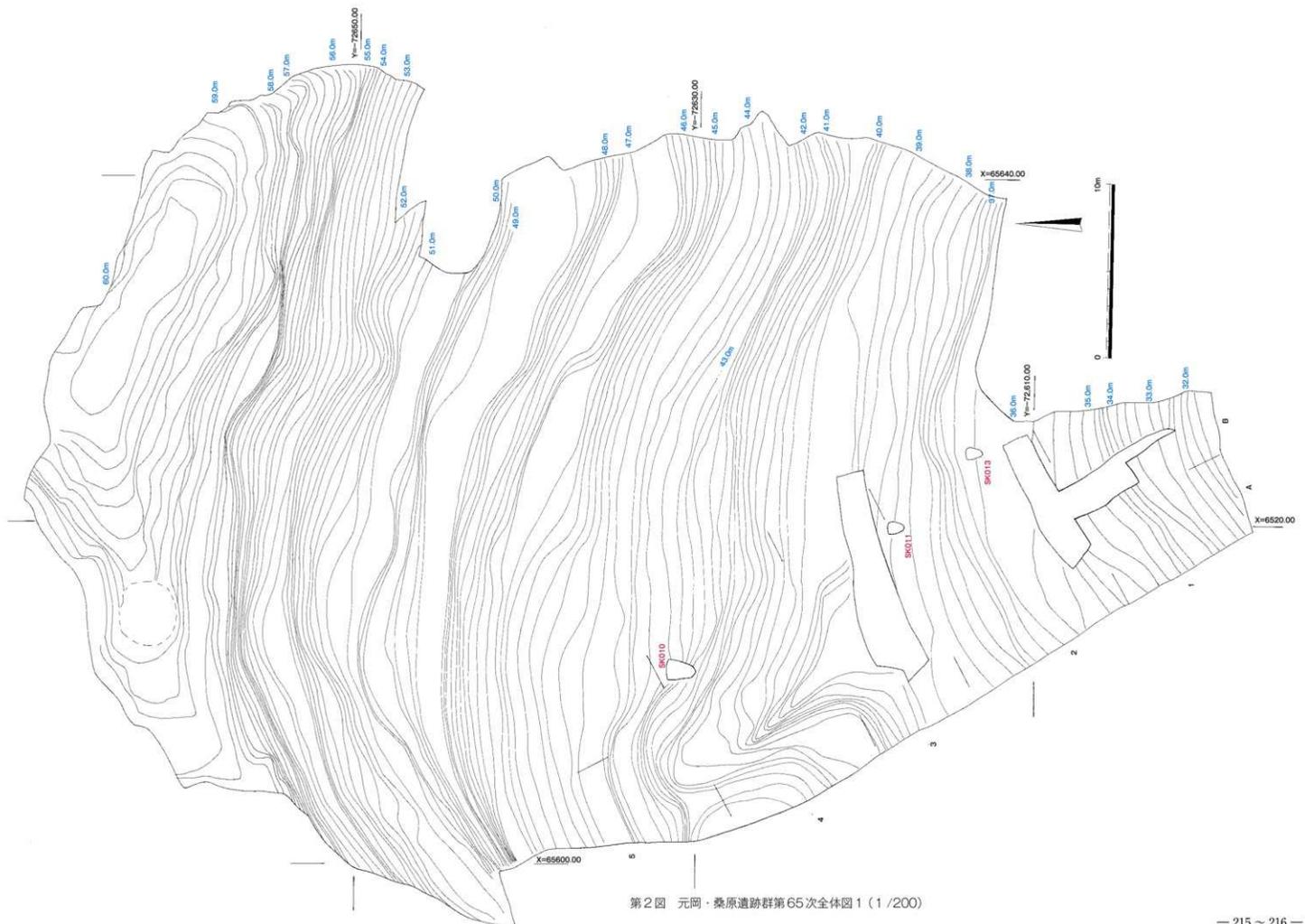
以下、遺構種別ごとに報告を行う。本調査区は世界測地系によって、測量を行い、図化をおこなった。土坑(SK)

今回の元岡・桑原遺跡群第65次調査では3基の焼土坑と1基の土坑が検出された。焼土坑からは土器は検出されていないが、検出された層位から古代の焼土坑である。

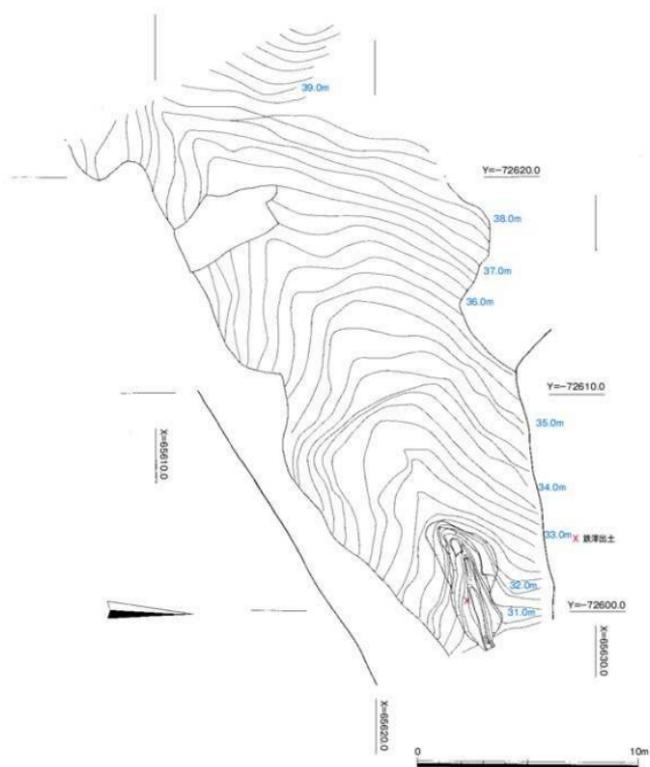
SK003(第2、6図)2-Bで検出された。長さ0.98m、幅0.74m、深さ0.2mである。平面形は南向に向かって狭くなる。



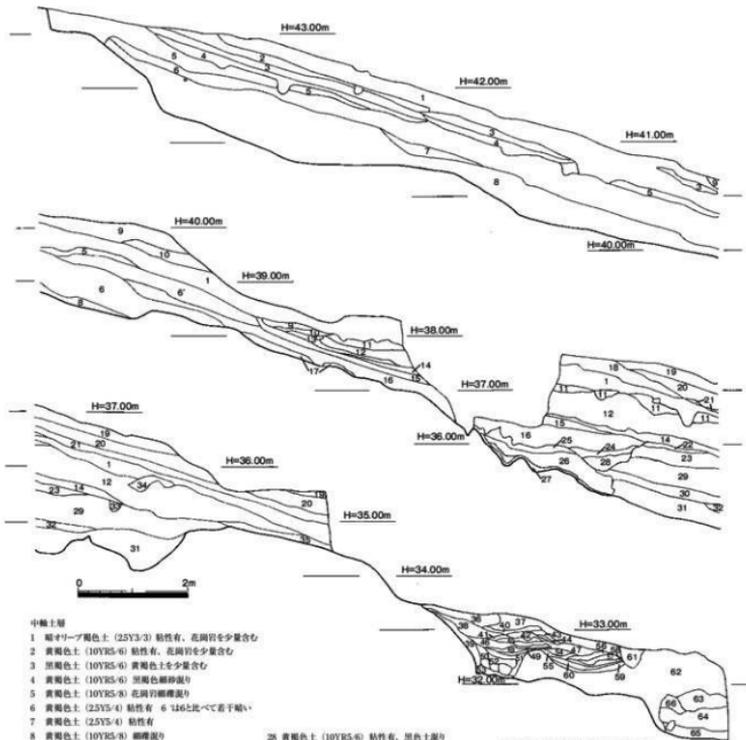
第1図 元岡・桑原遺跡群第65次調査位置図



第2図 元岡・桑原遺跡群第65次全体図1 (1/200)



第3図 元岡・桑原遺跡群第65次全体図2(1/200)



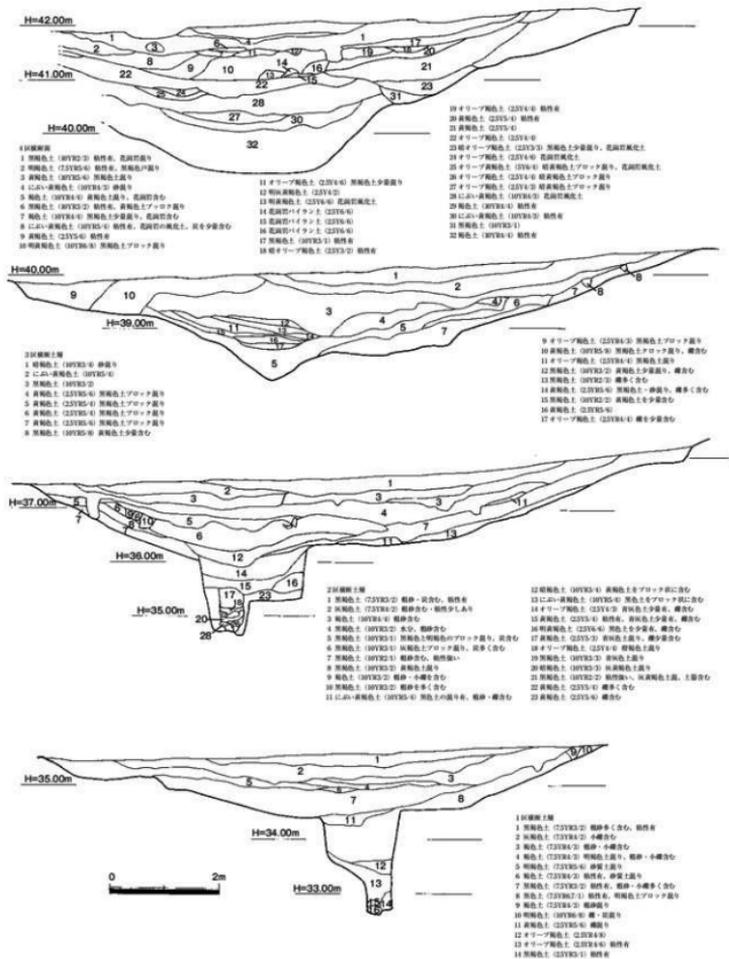
中継土層

- 1 緑オリーブ褐色土 (25Y3/3) 粘性强、花崗岩少量含む
- 2 黄褐色土 (10YR5/6) 粘性强、花崗岩少量含む
- 3 黒褐色土 (10YR5/6) 黄褐色土少量含む
- 4 黄褐色土 (10YR5/6) 黒褐色粘り層
- 5 黄褐色土 (10YR5/8) 花崗岩細砂層
- 6 黄褐色土 (2.5Y5/4) 粘性强、6/16と比べて若干粘い
- 7 黄褐色土 (2.5Y5/4) 粘性强
- 8 黄褐色土 (10YR5/8) 細砂層
- 9 黒褐色土 (10YR2/3) 礫層
- 10 灰褐色土 (7.5YR4/2)
- 11 黄褐色土 (10YR5/6) 黒褐色土少量含む
- 12 緑黄褐色土 (10YR4/3) 黄褐色土フック層
- 13 黒褐色土 (10YR2/1) 黄褐色土フック層
- 14 黒色土 (10YR4/0) 黒色土ブロック層
- 15 黄褐色土 (10YR2/1) 粘性强
- 16 黄褐色土 (10YR6/6) 黄褐色土少量層
- 17 黒褐色土 (10YR2/1)
- 18 灰褐色土 (7.5YR4/2)
- 19 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性强
- 20 灰褐色土 (7.5YR4/2) 粘性强、黒色土層
- 21 褐色土 (10YR4/2) 粘り多含む
- 22 黄褐色土 (2.5YR7/8)
- 23 オリーブ褐色土 (2.5Y4/3) 礫多含む
- 24 黒褐色土 (2.5YR3/1) 粘性强、青灰褐色ブロック層
- 25 黒色土 (10YR2/1) 粘性强、黄褐色土ブロック層
- 26 オリーブ褐色土 (2.5Y4/3) 黒褐色土層
- 27 黒色土 (5Y2/1)

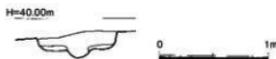
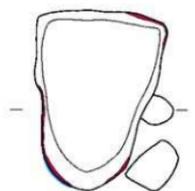
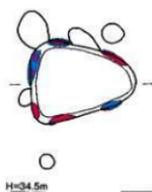
- 28 黄褐色土 (10YR5/6) 粘性强、黒色土層
- 29 オリーブ褐色土 (2.5Y4/3) 灰少量含む
- 30 黄褐色土 (2.5Y5/4)
- 31 黄褐色土 (2.5Y5/6) 粘性强、青灰褐色土少量含む
- 32 緑オリーブ褐色土 (2.5Y3/3)
- 33 黒褐色土 (2.5Y3/1)
- 34 黒色土 (10YR1/1) 灰褐色土層
- 35 黄褐色土 (10YR3/3) 粘性强、粘り含む
- 36 黒褐色土 (2.5Y3/2) 黄褐色粘り多含む
- 37 黄褐色土 (2.5Y5/6) 礫層
- 38 黄褐色土 (2.5Y5/6) 黒褐色土層
- 39 オリーブ褐色土 (2.5Y2/4)
- 40 灰褐色土 (2.5Y3/2) 黄褐色層
- 41 黒褐色土 (2.5Y3/1) 花崗岩風化土層
- 42 黄褐色土 (2.5Y5/6) 花崗岩風化土層
- 43 黄褐色土 (2.5Y5/6) 黒褐色土層
- 44 黄褐色土 (2.5Y5/6) 黒褐色土層
- 45 黒色土 (2.5Y2/1) 黒褐色土層
- 46 オリーブ褐色土 (2.5Y2/6) 黒褐色土層
- 47 黄褐色土 (2.5Y2/6) 花崗岩風化土層

- 48 黒色土 (2.5Y2/1) 花崗岩風化土層
- 49 緑オリーブ褐色土 (2.5Y4/3) 明黄褐色土層
- 50 緑黄褐色土 (10YR4/3) 粘性强
- 51 黒色土 (2.5Y2/1) 花崗岩風化土層
- 52 黄褐色土 (2.5Y5/6) 花崗岩風化土層
- 53 黒色土 (2.5Y2/1) 花崗岩風化土層
- 54 黄褐色土 (2.5Y5/6) 粘性强
- 55 オリーブ褐色土 (2.5Y4/6)
- 56 黄褐色土 (2.5Y5/6) 黒褐色土少量層
- 57 緑黄褐色土 (2.5Y5/4) 黒褐色少量層
- 58 黄褐色土 (10YR2/3) 花崗岩風化土層
- 59 黄褐色土 (2.5Y5/6) 花崗岩風化土層
- 60 黄褐色土 (10YR3/3) 花崗岩風化土層
- 61 褐色土 (10YR4/4) 粘性强
- 62 黄褐色土 (2.5Y5/6) 花崗岩風化土層
- 63 黄褐色土 (2.5Y5/6) 花崗岩風化土層
- 64 灰褐色土 (2.5Y3/1) 粘性强
- 65 黄褐色土 (2.5Y5/6) 粘性强
- 66 緑黄褐色土 (10YR4/3) 黄褐色土層

第4図 元岡・桑原遺跡第65次縦段土層図(1/80)



第5図 元岡・桑原遺跡群第65次横段土層図(上から4・3・2・1、1/80)



SK003

- 1 灰褐色土 (7SYR4/2) 粘性有、炭・磁砂多く含む
- 2 褐色土 (7SYR4/3) 赤褐色粘土混り、炭・磁砂含む
- 3 黒褐色土 (7SYR3/2) 黒山土に混り、磁砂多く含む、炭ごくわずかに含む

SK010

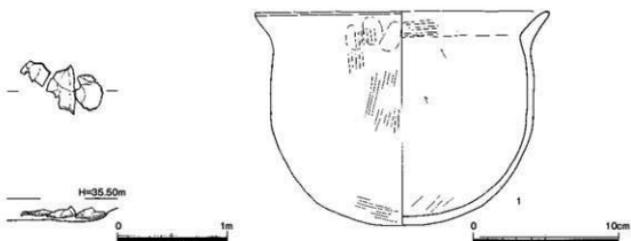
- 1 灰褐色土 (7SYR4/2) 粘性有、炭多く含む
- 2 赤土 (7SYR2/1) 粘性有、炭多く含む
- 3 褐色土 (7SYR4/3) 礫の崩落土か

SK011

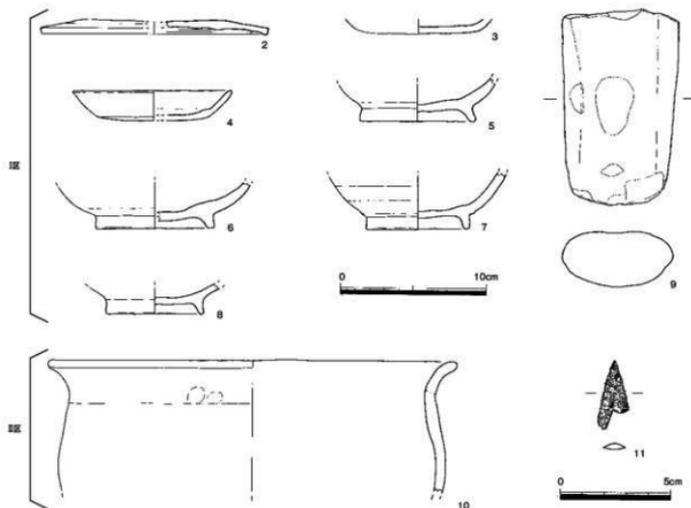
- 1 灰褐色土 (7SYR3/2) 粘性有、炭多く含む
- 2 褐色土 (7SYR4/3) 粘性有



第6図 SK003・SK010・SK011 (1/40)



第7図 SK004実測図および出土遺物(1/3)



第8図 SX001出土遺物1(1/3、11は1/2)

SK010 (第2、6図) 4-Bで検出された。長さ1.65 m、幅1.15 m、深さ0.23 mである。平面形は南東方向に向かって狭くなる。

SK011 (第2、6図) 2、3-Bで検出された。長さ1 m、幅0.74 m、深さ0.18 m～0.23 mである。平面形は南方向に向かって狭くなる。

SK004 (第2、7図) 2-Bで検出された。長さ、幅は大雨の影響で流されたために不明である。出土遺物(図7) 1は土師器の甕である。口径20.1cm、高さ14.9cmである。外面は指押えの跡をナデ消す。内面は底部から頸部までヘラ削り、頸部から口縁端部までナデがみられる。

溝(SD)

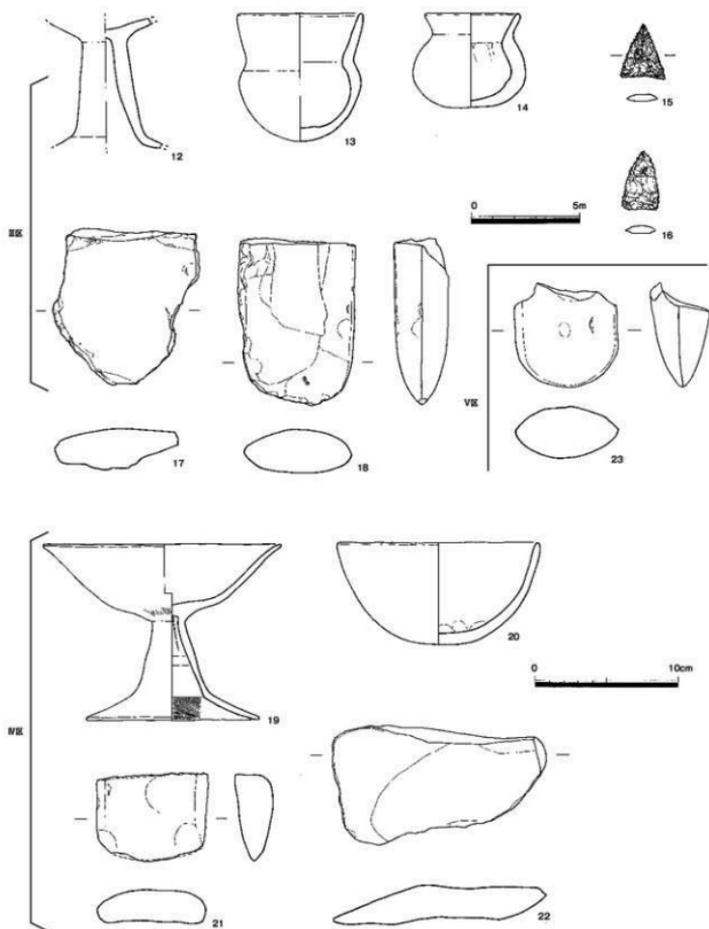
SD001 (第2、3、4図) は自然に堆積した溝で、主にSD001 上層は古代、SD001 下層は弥生時代の遺物がみられる。1区から5区に分割し記述する。

出土遺物(第8～1図) 1区。2は須恵器の坏蓋である。底径約15.4cmである。胎土は緻密で、内外面ともに明灰褐色である。3～8は土師器である。3は皿である。口径11.4cm、底径6.2cm、高さ2.5cmを測る。焼成は良好であり、胎土は緻密。色調は内外面ともに赤褐色を示す。ナデ調整がみられ、底部はヘラ切り。4は皿である。口径約10.8cm、底径7.6cm、高さ2.1cmである。焼成は良好で、外面は淡赤褐色、内面は赤褐色～茶褐色を示す。ナデ調整がみられる。5は碗で底径8.0cmである。内面は茶褐色、外面は明赤褐色である。6は碗である。底径7cmを測る。焼成は良好。色調は内外面ともに淡赤褐色である。胎土は緻密であるが、1mm程の底物を多く含む。7は碗である。底径7.0cmを測る。色調は内面が茶褐色、外面は淡赤褐色で焼成は良好である。8は碗である。底径約6.6cmである。色調は内外面共に明赤褐色で、胎土は緻密である。9は玄武岩の磨製石斧である。残存長13.2cm、最大幅7.5cm、厚さ3.7cmを測る。

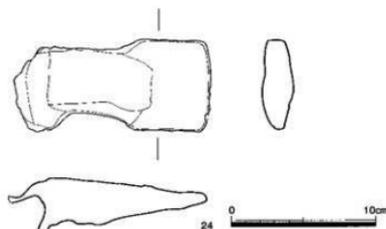
2区。10は2-Bで検出した。土師器の甕である。口径は約27.2cm、残存高9.0cmを測る。色調は内外面共ににぶい赤褐色である。11は2-Bで検出した打製石鏃で、鏃形鏃に分類される。最大長2.5cm、幅1.3cm、厚さ0.3cmである。

3区。12は3-Aで検出した土師器の高坏である。全面にナデ調整が確認でき、色調は内外面共に明赤褐色である。16は3区縦ベルトで検出した安山岩製の打製石鏃である。凹基式三角鏃で、長さ2.7cm、幅1.6cm、厚さ0.35cmを測る。13は土師器の小壺である。復元口径は8.6cm、高さ9.0cmである。調整は全面にナデ調整がみられる。色調は内外面共に明赤褐色、外面の底部はやや茶褐色である。14は3-Aで検出した小型丸底壺である。口径6.6cm、高さ6.6cmを測る。内外面共にナデ調整、内面の頸部から下は指おさえが確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに赤褐色である。15は3-A区で検出された打製石鏃である。凹基式三角鏃に分類され、長さ2.5cm、幅2.0cm、厚さ0.35cmを測る。17は3-A区で検出され、磨製石斧であると考えられる。18は3区の上層遺構検出時に検出された磨製石斧である。石材は玄武岩が使用され、長さ11.5cm、幅8.0cm、厚さ3.0cmを測る。

4区。19は4-Aで検出されは土師器の高坏である。1区から5区まで細片が分布しており、多く検出された4区で取り上げた。復元口径16.4cm、底径12cm、高さ12.5cmである。胎土は径2mm以下の石英、長石粒を含む。色調は浅黄褐色である。外面の調整は磨減しているが、一部細かいハケ目が確認できる。内面は底部と同じく細かいハケ目が確認できる。20は4-Aで検出された丸底坏である。口径14.0cm、高さ7.2cmを測る。内面底部には指おさえがみられる他は、内外面共にナデがみられる。色調は内外面共に明赤褐色である。21は4-Aで検出された、玄武岩製の磨製石斧である。残存長6.1cm、幅7.5cm、厚さ2.2cmを測る。22は4-Aで検出された石器である。長さ8.3cm、幅14.7cm、厚さ2.4cmを測る。上面には研磨痕が確認できる。



第9図 SX001出土遺物2(1/3、15・16は1/2)



第10図 SX001出土遺物3(1/3)

5区。23は5-A区で検出された、玄武岩製の磨製石斧である。残存長6.8cm、幅7.1cm、厚さ3.6cmを測る。鉄製品(第10図)1区最下層で検出された鉄斧である。下層は弥生土器が検出されている。長さ13.4cm、幅6.1cm、厚さ0.3~3.2cmを測る。斧部は一部欠けているが、有屑式である。また、袋穂部分は中子状になっており、屈曲し断面は円形である。日本では類例がなく、朝鮮半島に類例があるようである。

3. 小結

以上、元岡・桑原遺跡群第65次調査についてみてきた。遺構としては土坑が4基検出された。そのうち3基(SK003、010、011)は古代の層から検出された炭を焼くためのものであろうか。

SD001の下層から検出された鉄斧は、弥生時代の層から検出されたものである。表1では元岡・桑原遺跡群で検出された鉄斧である。6世紀中葉から7世紀中葉の古墳から出土したものが主で、第20次調査で検出された鉄斧は6世紀以前とされているが、古墳時代のもので、弥生時代の鉄斧ではないと考えられる。元岡・桑原遺跡群では縄文時代から古代、中世にかけての遺跡が良好に残されている。大陸との交流もあり、その中でもたらされた貴重なものと考えられるが、なぜ自然流路(SX001)のなかで検出されたのか不明である。

出土位置	時期				参考文献
桑原石ヶ元古墳群4号墳	6世紀中葉	鍛造品	袋穂部楕円	無屑式	「元岡・桑原遺跡群2」
桑原石ヶ元古墳群12号墳	6世紀中葉	鍛造品	袋穂部楕円	有屑式	「元岡・桑原遺跡群2」
桑原石ヶ元古墳群28号墳	7世紀中葉		袋穂部方形	有屑式	「元岡・桑原遺跡群2」
元岡古墳群E-2号墳	6世紀中葉	鍛造品	袋穂部楕円	無屑式	「元岡・桑原遺跡群5」
元岡古墳群E-2号墳	6世紀中葉	鍛造品	袋穂部楕円	有屑式	「元岡・桑原遺跡群5」
桑原古墳群A-3号墳	6世紀中葉		袋穂部楕円	有屑式	「元岡・桑原遺跡群5」
元岡古墳群N-6号墳			袋穂部楕円	無屑式	「元岡・桑原遺跡群5」
元岡古墳群N-8号墳	7世紀		袋穂部楕円	有屑式	「元岡・桑原遺跡群5」
元岡・桑原遺跡群第20次	6世紀以前?	鍛造品	袋穂部方形	無屑式	「元岡・桑原遺跡群13」

表1、元岡・桑原遺跡群鉄斧出土地点



1. 元岡・桑原遺跡群第65次全体写真1 (上空から)



2. 元岡・桑原遺跡群第65次全体写真2 (上空から)



3. 元岡・桑原遺跡群第65次全体写真3（上空から）



4. 元岡・桑原遺跡群第65次全体写真4（上空から）

5. 4・5区全景
(南東から)



6. 1区縦断面下層
(南から)



7. 2区横断面下層
(南東から)



図版4



8. 2区横断面上層
(南東から)



9. 3区横断面
(南東から)



10. SK010完
掘状況

11. SK011完
掘状况



12. 小型丸底壺
(13) 出土状况



13. 小型丸底壺
(14) 出土状况



图版6



報告書抄録

ふりがな	もとおか・くわばらいせきぐん 31						
書名	元岡・桑原遺跡群 31						
副書名	第49次・第51次・第57次・第62次・第65次調査の報告						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1356集						
編著者名	大塚紀宜(編)・池田祐司・清金良太						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号						
発行年月日	2018年3月26日						

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
もとおか・くわばらいせきぐん	ふくおかけんふくおかし	福岡県福岡市	40130	2782	33°36'07"	130°13'48"	2006.4.1~2007.3.22 (49次) 2,723㎡ (51次) 2007.8.29~2008.10.3 6,887㎡	大学移転
元岡・桑原遺跡群 第49・51次調査	福岡県福岡市 にしくおあさどもと							
	西区大字桑原土庫屋							
所収遺跡名	種別	主な遺構		主な遺物		特記事項		
元岡・桑原遺跡群 第49・51次調査	製鉄・ 集落	旧石器～古代		竪穴住居・掘立柱建物・ 土坑・溝・鍛冶炉・自 然流路		縄石・石鏃・土師器・赤土 土器・須恵器・土師器・黒色土 器・白磁・鉄器・鉄滓・ガラス製品		6世紀から7世紀の竪穴 住居・掘立柱建物群を 検出。
要約	本書では第49・51次調査のうち、これまで未報告だった旧石器・縄文時代の遺構・遺物、石器、土器について報告する。本調査では縄文時代の遺物が含まれる土坑、包含層を検出した。また旧石器～縄文時代にかけての石器が出土し、それらには旧石器～縄文草創期の石器も含まれる。河川から建築材や農具等の木器が出土した。							

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
もとおか・くわばらいせきぐん	ふくおかけんふくおかし	福岡県福岡市	40130	2782	33°35'15"	130°12'58"	2011.4.12 ～ 2013.9.6	6,700
元岡・桑原遺跡群 第57次調査	福岡県福岡市 にしくおあさどもと							
	西区大字元岡							
所収遺跡名	種別	主な遺構		主な遺物		特記事項		
元岡・桑原遺跡群 第57次調査	集落	古墳時代～奈良時代		自然流路・掘立柱建物・ 製鉄炉・鍛冶炉		須恵器・土師器・黒色土器・陶 磁器・石器・鉄器		谷部包含層に古墳時代 から古代の遺物が大量 に埋没する。
要約	第57次調査のうち、谷部や斜面の遺構について報告する。谷の両側の斜面には製鉄炉・鍛冶炉等の遺構が確認され、谷部には知らぬ流路した鉄滓が堆積している。I区谷部とIV区斜面には大型の掘立柱建物の柱穴が確認され、木簡や刺書・磨石土器が多数出土するなど、古代に公的な施設が存在した可能性も考えられる。							

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
もとおか・くわばらいせきぐん	ふくおかけんふくおかし	福岡県福岡市	40130	2782	33°35'25"	130°12'54"	2013.9.1 ～ 2013.11.11	1,374.4
元岡・桑原遺跡群 第62次調査	福岡県福岡市 にしくおあさどもと							
	西区大字元岡							
所収遺跡名	種別	主な遺構		主な遺物		特記事項		
元岡・桑原遺跡群 第62次調査	集落・ 墓	中世～近世		竪穴土坑・土塋墓		陶磁器		
要約	中世後期のものとみられる竪穴土坑を確認した。後世の造成や土取りによる地形の変更が大きく、遺構の遺存状況は悪いが、竪穴土坑は径1m以上、深さが2m以上と考えられるものも確認されている。							

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
もとおか・くわばらいせきぐん	ふくおかけんふくおかし	福岡県福岡市	40130	2782	33°35'29"	130°12'54"	2014.6.2 ～ 2014.12.26	2,451.2
元岡・桑原遺跡群 第65次調査	福岡県福岡市 にしくおあさどもと							
	西区大字元岡							
所収遺跡名	種別	主な遺構		主な遺物		特記事項		
元岡・桑原遺跡群 第65次調査	散布地	古墳～中世		自然流路・焼土坑		鉄器(鍛造鉄斧)・須恵器・ 土師器		
要約	調査は丘陵東部の谷に堆積した包含層及び斜面上の遺構に対して実施された。包含層からは古墳時代の鉄器が出土しているが、遺物量は少なく、人々の活動が継続的であったことを物語る。出土遺物は古墳時代から古代、中世までの時期に及び、散発的な活動の場として利用された地点だったことが確認された。							

元岡・桑原遺跡群31

—第49次・第51次・第57次・第62次・第65次調査の報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1356集
平成30(2018)年3月26日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1-8-1

印刷 エース印刷株式会社
福岡市中央区大濠1-6-9

